

千
駄
木
遺
跡

千 駄 木 遺 跡

平成23年度緊急雇用創出基金事業に係る
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

平成23年度緊急雇用創出基金事業に係る
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

二〇一二年

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2012

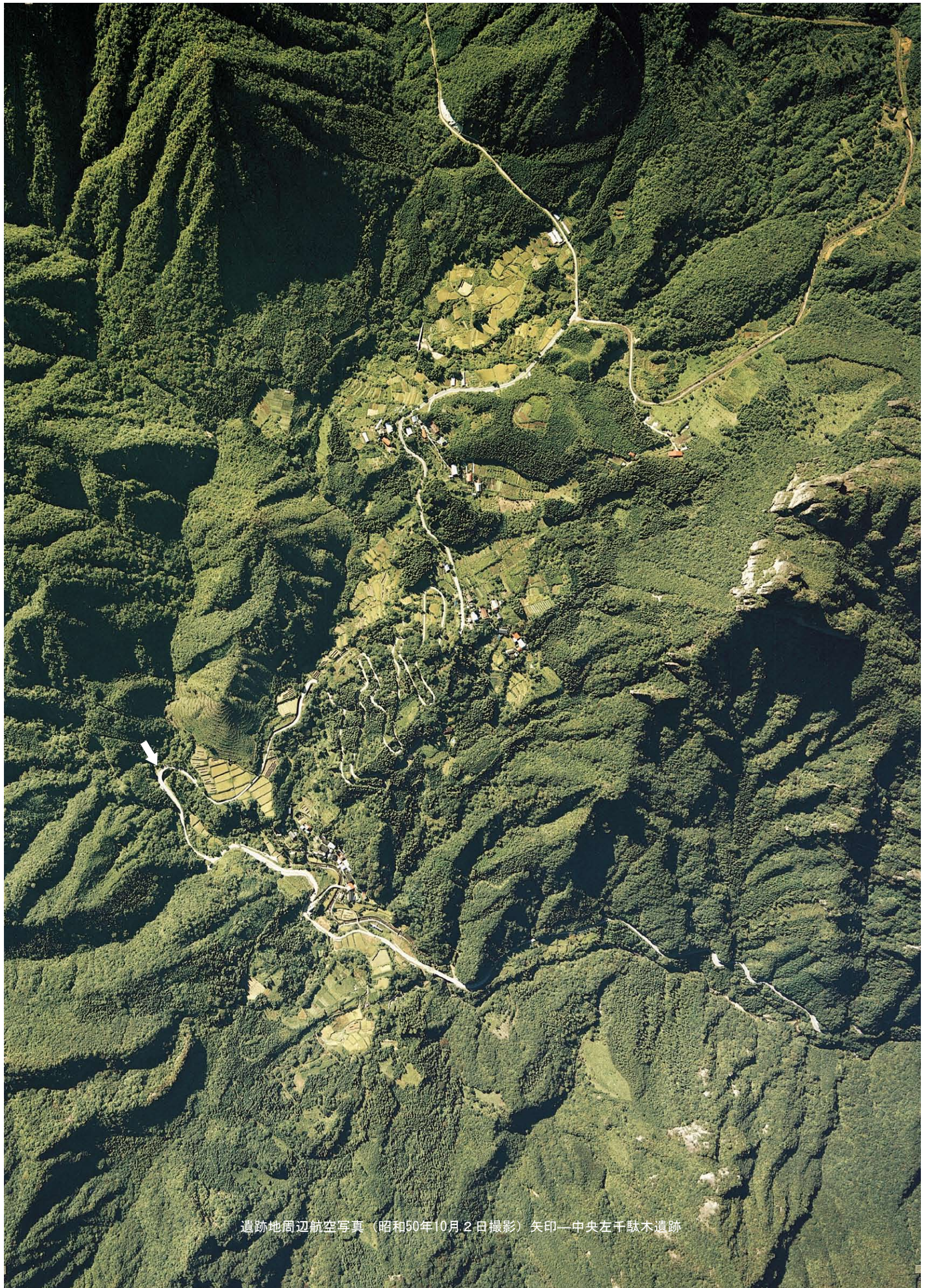
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

千 駄 木 遺 跡

平成23年度緊急雇用創出基金事業に係る
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2012

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡地周辺航空写真（昭和50年10月2日撮影）矢印—中央左千駄木遺跡



SH40貝輪(表面)×1

SH40貝輪(裏面)×1



SH83貝製垂飾具(表面)×2.5

SH83貝製垂飾具(裏面)×2.5

序

千駄木遺跡は群馬県内でも数少ない貴重な岩陰遺跡です。発掘調査が行われた時から注目を集め、発掘調査の終了後には、群馬県民の貴重な文化遺産として群馬県指定史跡になりました。また、調査成果の公表は、群馬県のみならず国内から洞窟・岩陰遺跡研究の基礎資料として切望されていたものでした。

今回、発掘調査報告書を作成することにより、千駄木遺跡が縄文時代から平安時代までの、長い期間にわたって岩陰を利用した営みがあったことなどが明らかになりました。その中には、タマキガイで作られた貝輪やアワビなど海の貝の他に、群馬県では絶滅したと考えられている清流域に生息したカワシンジュガイなども多数発見されています。

これらの調査成果は、歴史に新たな資料を提供することになるものと考えられます。この報告書が地域史を紐解く歴史の資料として、学校教育や郷土学習にも役立てて頂けるものと確信いたしております。

最後になりましたが、報告書の作成におきましては、群馬県教育委員会、安中市教育委員会、地元関係者の皆様からは種々のご指導とご協力を賜りました。今回、報告書を上梓することにあたり、これら関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成24年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一

例 言

1. 本書は、主要地方道(92)松井田軽井沢線改良事業に伴い発掘調査が実施された千駄木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡地の所在は以下のとおりである。
群馬県安中市松井田町西野牧16702-1に所在する。
3. 千駄木(せんだぎ)遺跡の発掘調査時の事業主体、調査担当者、調査期間は以下のとおりである。
事業主体 群馬県土木部
調査主体 群馬県教育委員会文化財保護課
調査担当者 巾 隆之 能登 健
調査期間 昭和47年(1972年)3月22日から5月25日
4. 本書作成のための整理作業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、群馬県教育委員会より、過年度公共開発関連出土品等整理事業の一環として、平成23年度緊急雇用創出基金事業として委託を受け、平成23年(2011年)4月1日から、平成24年(2012年)3月31日まで実施した。
5. 本書作成の担当者は次のとおりである
編集 木津博明 デジタル編集 齊田智彦
執筆 第1章・第2章 巾 隆之
第6章 第3節 第2項 能登 健
第6章 第4節 第1項 陶磁器類観察表 大西雅広(上席専門員)
第6章 第4節 第2項 土師器・須恵器観察表 神谷佳明(上席専門員)(胎土分類木津)
第6章 第4節 第3項 弥生土器 大木紳一郎(資料部資料第2課長)
第6章 第4節 第4項 縄文土器・縄文土器観察表 橋本 淳(主任調査研究員)
第6章 第4節 第5項 石器類・石器類観察表 岩崎泰一(上席専門員)
第7章 第1節 第1項 能登 健
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐) 保存処理 関 邦一(補佐) 他は木津
6. 出土石器の石材鑑定は、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
7. 出土遺物の鑑定分析は以下に委託した。
貝 類 真野勝友(下仁田自然学校・元筑波大学教授)
獣歯骨 宮崎重雄(元大間々高校教諭)
火山灰 株式会社火山灰考古学研究所
放射性同位体分析(A M S 加速器分析) 株式会社加速器分析研究所
8. 出土遺物及び発掘調査に係る資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
9. 発掘調査並びに整理作業にあたり、以下の諸機関、諸氏に御教示、ご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。
(敬称略)
群馬県教育委員会 安中市教育委員会 群馬県立歴史博物館
山崎克己(磐田市埋蔵文化財センター) 山口 明(長野市教育委員会) 平野進一(群馬県立歴史博物館)
飯島義男(群馬県立歴史博物館) 須田 茂(太田市教育委員会)

凡 例

1. グリッド・方位及び標高値については、第3章第1節調査方法を参照されたい。
2. 遺構図の縮尺は1／20とし、各図中に縮尺を示した。
3. 遺物図の縮尺は1／3を基本としているが、小形品は1／2・1／1で掲載した。各挿図中に縮尺を示した。
4. 遺物観察表中の胎土分類は以下の通りである。

A類 緻密な密度で可塑性の強い生地土を使用する。比重は重い。陶土質。

B類 粘土化したローム土を生地土とする。 B3類 暗色帯相当の粘土を生地土とする。

C類 水簸土、もしくは水簸に近い生地土。
5. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』（平成9年版）に準拠したが、「にぶい」は「鈍」で標記した。
6. 縄文土器の内、断面中に●を示したものは、胎土中に繊維混入を表す。

遺物出土状況図で●は土器類、◆は石器・剥片類、▲貝類、■は獣歯骨を表す。これ以外については各図中に示した。
7. 石器図面の線と拓本の表現は、以下のことを示す。

石斧刃部側の摩耗痕は縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕横位定規線で図示した。

磨石等礫石器類に用いた、縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。

台石は、打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、拓本を用いた。
8. テフラの呼称として、以下のものを使用した。

浅間A軽石層 略称A s - A 1783年(天明3年)

浅間B軽石層 略称A s - B 1108年(天仁元年)

浅間C軽石層 略称A s - C 4世紀初頭

浅間D軽石層 略称A s - D・(千駄木パミス)縄文時代中期
9. 本書中で使用した地図類は以下のとおりである。

第1・7図 調査当時の群馬県土木部が作成した計画図である。

第3図 群馬県土木部(安中土木事務所)の管理。平成23年2月28日に調整されている。安中土木事務所のご厚意で掲載使用させていただいた。

第5図 国土地理院発行 1：200,000 地勢図 NJ-54-36 長野 平成10年2月1日

第6図 国土地理院発行 1：25,000 地形図 NJ-54-36-7-1 平成9年10月1日

第7図 国土地理院発行 1：50,000 地形図 NJ-54-36-6 軽井沢 平成10年2月1日

第8図 国土地理院発行 1：50,000 地形図 NJ-54-36-7 御代田 平成10年3月1日

目次

序

例言・凡例

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2章 調査経過

第1節 発掘調査経過…………… 2

第3章 発掘調査と整理

第1節 調査方法

第1項 グリッド…………… 3

第2項 基本土層…………… 4

第3項 記録保存…………… 5

第2節 整理

第1項 整理作業…………… 5

第4章 自然環境と歴史的環境

第1節 自然環境

第1項 自然環境…………… 6

第2項 遺跡立地…………… 7

第2節 歴史的環境

第1項 歴史的環境…………… 9

第2項 周辺遺跡…………… 9

第5章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

第1項 発掘調査の概要…………… 16

第2項 岩陰部の概要…………… 16

第3項 岩陰外部の概要…………… 16

第6章 発見された遺構・遺物

第1節 遺構・遺物の概要

第1項 遺構の概要…………… 18

第2項 遺物の概要…………… 18

第2節 遺構の内容

第1項 縄文時代以降の遺構…………… 21

第2項 縄文時代の遺構…………… 21

第3節 遺物の内容

第1項 出土遺物層位の所見…………… 26

第2項 遺物の出土状況の傾向…………… 26

第4節 出土遺物

第1項 陶器…………… 31

第2項 土師器・須恵器・鉄滓…………… 31

第3項 弥生土器…………… 37

第4項 縄文土器…………… 40

第5項 石器…………… 73

第6項 骨角器…………… 79

第7章 理科学分析

第1節 分析の目的と結果

第1項 千駄木遺跡出土供試料遺物…………… 81

第2項 貝類の鑑定分析…………… 81

第3項 獣歯骨の鑑定分析…………… 81

第4項 火山灰の鑑定分析…………… 81

第5項 貝輪の年代測定分析…………… 81

第2節 理科学分析

第1項 出土貝類の鑑定分析…………… 82

第2項 出土獣歯骨の鑑定分析…………… 86

第3項 出土火山灰の鑑定分析…………… 103

第4項 出土貝輪の年代測定分析…………… 106

第8章 まとめ

第1節 成果と課題

第1項 第1号土坑をめぐる遺物群…………… 108

第2項 千駄木遺跡における時代・
時期別の空間利用について…………… 108

第2節 まとめ

第1項 西野牧小山平遺跡との関係…………… 110

第2項 人の往来と千駄木遺跡…………… 110

挿 図 目 次

第1図	工事施工計画図(1:1,000)	2	第27図	出土遺物実測図(6)(弥生土器2)	38
第2図	グリッド図(1:250)	3	第28図	出土遺物実測図(7)(縄文土器1)(第2号・第3号土坑)	42
第3図	グリッド配置図(1:1,000)	3	第29図	出土遺物実測図(8)(縄文土器2)(第1号集石)	43
第4図	基本土層図(1:60)	4	第30図	出土遺物実測図(9)(縄文土器3)(層位別出土遺物1)	44
第5図	遺跡位置図(国土地理院1:200,000長野)(Aは千駄木遺跡)	6	第31図	出土遺物実測図(10)(縄文土器4)(層位別出土遺物2)	45
第6図	遺跡地周辺地形図1(国土地理院2万5千分の1地形図「南軽井沢」(平成9年10月1日発行)使用)	7	第32図	出土遺物実測図(11)(縄文土器5)(層位別出土遺物3)	46
第7図	遺跡地周辺地形図2(1:2,000)	7	第33図	出土遺物実測図(12)(縄文土器6)(層位別出土遺物4)	47
第8図	周辺遺跡図(国土地理院5万分の1地形図「軽井沢」(平成10年2月1日発行)・「御代田」(平成10年3月1日発行)使用)	13	第34図	出土遺物実測図(13)(縄文土器7)(包含層1)	48
第9図	調査区全体図(1:100)	16	第35図	出土遺物実測図(14)(縄文土器8)(包含層2)	49
第10図	岩陰部東西土層断面実測図(1:60)	18	第36図	出土遺物実測図(15)(縄文土器9)(包含層3)	50
第11図	岩陰部南北土層断面実測図(1:60)	19	第37図	出土遺物実測図(16)(縄文土器10)(包含層3)	51
第12図	岩陰外部土層断面実測図(1:60)	20	第38図	出土遺物実測図(17)(縄文土器11)(包含層4)	52
第13図	第1号土坑推定図	21	第39図	出土遺物実測図(18)(縄文土器12)(包含層5)	53
第14図	第2・3号土坑実測図(1:20)	21	第40図	出土遺物実測図(19)(縄文土器13)(包含層6)	54
第15図	第4号土坑実測図(1:20)	22	第41図	出土遺物実測図(20)(縄文土器14)(包含層7)	55
第16図	第5～10号土坑実測図(1:20)	23	第42図	出土遺物実測図(21)(縄文土器15)(包含層8)	56
第17図	第1号集石実測図(1:20)	24	第43図	出土遺物実測図(22)(縄文土器16)(包含層9)	57
第18図	遺物分布図1(土師器)	27	第44図	出土遺物実測図(23)(縄文土器17)(包含層10)	58
第19図	遺物分布図2(土師器2・須恵器)	28	第45図	出土遺物実測図(24)(縄文土器18)(包含層11)	59
第20図	遺物分布図3(弥生土器)	29	第46図	出土遺物実測図(25)(縄文土器19)(包含層12)	60
第21図	遺物分布図4(貝類・獣歯骨)	30	第47図	出土遺物実測図(26)(縄文土器20)(包含層13)	61
第22図	出土遺物実測図(1)(陶器)	31	第48図	出土遺物実測図(27)(石器1)	73
第23図	出土遺物実測図(2)(土師器1)	32	第49図	出土遺物実測図(28)(石器2)	74
第24図	出土遺物実測図(3)(土師器2)	33	第50図	出土遺物実測図(29)(石器3)	75
第25図	出土遺物実測図(4)(土師器3・須恵器)	34	第51図	出土遺物実測図(29)(石器4)	76
第26図	出土遺物実測図(5)(弥生土器1)	37	第52図	出土遺物実測図(30)(骨角器)	80
			第53図	千駄木遺跡テフラ試料の重鉱物組成ダイヤグラム	105
			第54図	(参考)暦年較正年代グラフ	107

表 目 次

第1表	出土遺物数量一覧表	4	第26表	石器観察表(1)	77
第2表	周辺遺跡一覧表	14	第27表	石器観察表(2)	78
第3表	遺構名称改変一覧表	17	第28表	石器観察表(3)	79
第4表	グリッド別土師器・須恵器・弥生土器・貝類・獣歯骨出土量一覧表	26	第29表	骨角器遺観察表	80
第5表	縄文土器グリッド別出土量	30	第30表	確認された貝の種類と数量一覧表	82
第6表	陶磁器観察表	31	第31表	貝類一覧表(1)	83
第7表	土師器観察表(1)	34	第32表	貝類一覧表(2)	84
第8表	土師器観察表(2)	35	第33表	貝類一覧表(3)	85
第9表	土師器観察表(3)	36	第34表	獣歯骨一覧表(1)	91
第10表	須恵器観察表	36	第35表	獣歯骨一覧表(2)	92
第11表	鉄滓観察表	36	第36表	獣歯骨一覧表(3)	93
第12表	弥生土器観察表(1)	39	第37表	獣歯骨一覧表(4)	94
第13表	弥生土器観察表(2)	39	第38表	獣歯骨一覧表(5)	95
第14表	出土遺物一覧表	43	第39表	獣歯骨一覧表(6)	96
第15表	縄文土器観察表(1)	62	第40表	獣歯骨一覧表(7)	97
第16表	縄文土器観察表(2)	63	第41表	獣歯骨一覧表(8)	98
第17表	縄文土器観察表(3)	64	第42表	獣歯骨一覧表(9)	99
第18表	縄文土器観察表(4)	65	第43表	獣歯骨一覧表(10)	100
第19表	縄文土器観察表(5)	66	第44表	獣歯骨一覧表(11)	101
第20表	縄文土器観察表(6)	67	第45表	獣歯骨一覧表(12)	102
第21表	縄文土器観察表(7)	68	第46表	千駄木遺跡で採集された五料の茶屋本陣お西収蔵の獣骨	104
第22表	縄文土器観察表(8)	69	第47表	テフラ検出分析結果	104
第23表	縄文土器観察表(9)	70	第48表	火山ガラス・斜方輝石重鉱物組成分析結果	104
第24表	縄文土器観察表(10)	71	第49表	屈折率測定結果	105
第25表	縄文土器観察表(11)	72	第50表	貝輪測定結果(1)	107
			第51表	貝輪測定結果(2)	107

遺構写真図版

扉 高岩(大萱山)を望む 南から(平成23年12月9日撮影)

- PL.1 遺跡地周辺航空写真(1)(昭和46年5月26日)矢印←左端千駄木遺跡・左上方和美峠・右上方入山峠
- PL.2 遺跡地周辺航空写真(2)(昭和23年5月3日)矢印→右上方千駄木遺跡・左上方和美峠
- PL.3 遺跡地周辺航空写真(3)(昭和42年3月25日)矢印→下端千駄木遺跡
- PL.4 遺跡遠景(中央遺跡地 右奥垂直な崖が高岩(大萱山)) 南東から
- PL.5 遺跡遠景 東から(右奥小山)
遺跡近景 西から(右下千駄木川)
- PL.6 遺跡遠景 南東から
遺跡近景 北から(中央奥千駄木山)
- PL.7 土層断面B-B' 東から
土層断面B-B'右上半部分 東から
土層断面B-B'中央下半部分 矢印As-D層 東から
- PL.8 第2号土坑確認状況 南から
第2号土坑礫出土状況 西から
- PL.9 第2・3号土坑全景 西から
第4号土坑確認状況 西から
- PL.10 第4号土坑礫出土状況 西から
第4号土坑遺物出土状態 西から
- PL.11 第1号集石確認時状況 北から
第1号集石全景 西から
- PL.12 岩陰部地山面状況 東から
岩陰部地山面礫出土状況 南から
岩陰部地山面土坑出土状況 南から
第5～10号土坑(岩陰部地山面) 東から
- PL.13 岩陰部北側最上層遺物出土状況 東から
岩陰部北側上層遺物出土状況 東から
- PL.14 岩陰部南岩側上層遺物出土状況 北から
岩陰部南岩陰部分上層遺物出土状況 北から
- PL.15 岩陰部C-4・5グリッド表土下遺物出土状況 西から
岩陰部B-4・5グリッド遺物出土状況 西から
岩陰部B-4・5グリッド3層遺物出土状況 西から
岩陰部での狭い中での作業状況 西から
- PL.16 岩陰外部X-6グリッド遺物出土状況 北から
岩陰外部E-7グリッド遺物出土状況 南から
- PL.17 岩陰外部D-9グリッド3層遺物出土状況 北から
岩陰外部E-8グリッド3層遺物出土状況 北から
岩陰外部(東側部分)全景 西から
- PL.18 岩陰外部E-8グリッド南壁断面 北東から
岩陰外部E-8グリッド西壁断面 東から
岩陰外部D-8グリッド西壁断面 東から
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(1) 西から
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(2) 西から
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(3) 西から
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(4) 西から
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(5) 西から
- PL.19 岩陰部C-4グリッド弥生土器出土状況 西から
岩陰部C-5グリッド縄文土器出土状況(1) 西から
岩陰部B-5グリッド縄文土器出土状況(2) 西から
岩陰部C-6グリッド縄文土器出土状況(3) 西から
岩陰部貝輪出土状況 北から
岩陰部アワビ・カワシンジュガイ出土状況(南から)
岩陰部セクションベルト内獣骨出土状況 西から(カモシカ)
岩陰部セクションベルト内獣骨出土状況 南から(カモシカ)
- PL.20 岩陰部北岩東隅部作業状況 西から
岩陰部記録図作成作業状況 東から
- PL.21 岩陰部北岩際部作業状況 西から
岩陰部北岩周辺作業状況 東から
- PL.22 岩陰部東側外部写真記録撮影準備作業状況 南東から
岩陰部東側外部調査状況 西から
- PL.23 千駄木遺跡近況 東から(平成23年12月6日撮影)
千駄木遺跡の標柱と現況 東から(平成23年11月4日撮影)
- PL.24 北岩の雨垂れ部分 南東下から(平成23年12月9日撮影)
遺跡地眼下の千駄木川の状況 東から(平成23年12月6日撮影)
- PL.25 遺跡近況 西から(平成23年12月6日撮影)
遺跡地西側近景 千駄木川左岸の緩斜面部 東から
(平成23年12月6日撮影)
- PL.26 高岩(大萱山)の崩落状態 南から(平成23年12月9日撮影)
入山川沿いの転石と高岩(大萱山) 南東から
(平成23年12月6日撮影)
- PL.27 千駄木遺跡より入山川上流域に散在する高岩(大萱山)の転石 東から(平成23年12月6日撮影)
入山川流路内の高岩(大萱山)の転石 東から
(平成23年12月6日撮影)

遺物写真図版

- PL.28 出土遺物1(土師器・須恵器・弥生土器)
- PL.29 出土遺物2(縄文土器1)
- PL.30 出土遺物3(縄文土器2)
- PL.31 出土遺物4(縄文土器3)
- PL.32 出土遺物5(縄文土器4)
- PL.33 出土遺物6(縄文土器5)
- PL.34 出土遺物7(縄文土器6)
- PL.35 出土遺物8(縄文土器7)
- PL.36 出土遺物9(縄文土器8)
- PL.37 出土遺物10(縄文土器9)
- PL.38 出土遺物11(縄文土器10)
- PL.39 出土遺物12(縄文土器11・石器1)
- PL.40 出土遺物13(石器2)
- PL.41 出土遺物14(骨角器・貝類1)
- PL.42 出土遺物15(貝類2・獣歯骨1)
- PL.43 出土遺物16(獣歯骨2)
- PL.44 出土遺物17(獣歯骨3)

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

昭和47年12月、群馬県教育委員会文化財保護室に小林二三雄氏から、松井田町西野牧千駄木に所在する岩陰遺跡が道路拡幅に伴い消滅の恐れがある旨の報告がなされた。文化財保護室が安中土木事務所に問い合わせたところ、県道松井田軽井沢線(92号線)の岩陰付近が急カーブで、脇を流れる川に架かる橋も老朽化している。この道路は恩賀地区の生命線ともいえるものであり、道路改築工事が急務となっているため、翌年2月に工事着手の予定であることが判明した。文化財保護室では岩陰遺跡という希少性に鑑み、道路工事の設計を変更することで遺跡を保存するよう安中土木事務所に申し入れた。

しかし、技術的な面から設計変更による遺跡の現状保存は困難との回答を受けた。文化財保護室でも協議を重ねたが、記録保存の処置も止むを得ないと判断した。しかしながら、発掘体制をどのように構築するかが次の問題となった。

この時期、県の文化財行政は県教育委員会社会教育課が担当していた。当時は、いわゆる「日本列島改造論」の渦中にあり、公共事業や民間開発事業が盛んになりつつある状況になっていた。このため、県教育委員会社会教育課の中に文財保護室を設立し、専門機関としての構築を急いでいるところであった。また、翌年の4月を期して文化財保護室から文化財保護課に拡大し、更なる文化財行政の充実を図る計画となっていた。このため、かなり多くの教育委員会事務局員(文化財保護主事)を採用することが決定されていた。この新規採用予定者の中の能登・巾を事前に招聘し、3月下旬から発掘調査を実施することになった。この間、朝日新聞の群馬版に「消えてしまう岩陰遺跡」という報道がなされた。

発掘調査は、3月22日から開始された。調査が進行するに従い縄文時代から平安時代まで続く遺跡であり、特に縄文晩期から中期の土器をみると長野県の影響が強いことが判明し、大量の獣骨の出土とともに注目されるようになった。また、縄文中期の層中に浅間山起源の軽石

層が純堆積しており、従来地質学の分野で確認されていた「浅間D軽石」であることが判明した。考古学は勿論のこと、地質学上においても大変貴重な発見であることがわかった。4月下旬には文化庁記念物課調査官に視察をお願いするとともに、4月22日・23日には連続して朝日新聞上で遺跡の成果について報道がなされた。

このように、遺跡の重要性が指摘されるようになったため、群馬県文化財審議委員である尾崎群馬大学教授等が当時の県教育委員会近藤義雄文化財保護課長と同行して視察に訪れ、安中土木事務所・地元関係者等と遺跡の取り扱いについて協議が行われた。遺跡の重要性を指摘する文化財側の主張に対して、地元からは工事の進捗を促す要望が出されるなど、膠着状態が続いた。しかしその数日後、地元関係者側から「地元の文化財を大切に保存したい」とする要望が文化財保護課に伝えられ、6月4日付の朝日新聞で大きく取り上げられることとなった。県文化財保護課では、地元関係者の要望を受け再度安中工事事務所と保存についての協議を行った。その結果、道路工事の設計を変更し、遺跡を現状のまま保存することを決定した。

その後、県の文化財保護審議会において史跡としての価値について協議が行われることとなった。審議の結果、縄文中期から晩期にかけて出土した遺物が長野県との交流を示す良好な資料であること、浅間山噴火に伴う「浅間D軽石層」が唯一確認できる遺跡として重要である等の理由により、昭和50年9月5日付で県の史跡に指定された。

なお、原田恒弘「護るべきもの」『近藤義雄先生卒寿記念論文集』に当時の状況が記されているので参考にされたい。

第2章 調査経過

第1節 発掘調査経過

発掘調査は3月22日から始まった。まず、遺跡の現況写真撮影を行い、調査グリッドの設定、岩陰の平面図・断面図の作成を行った。

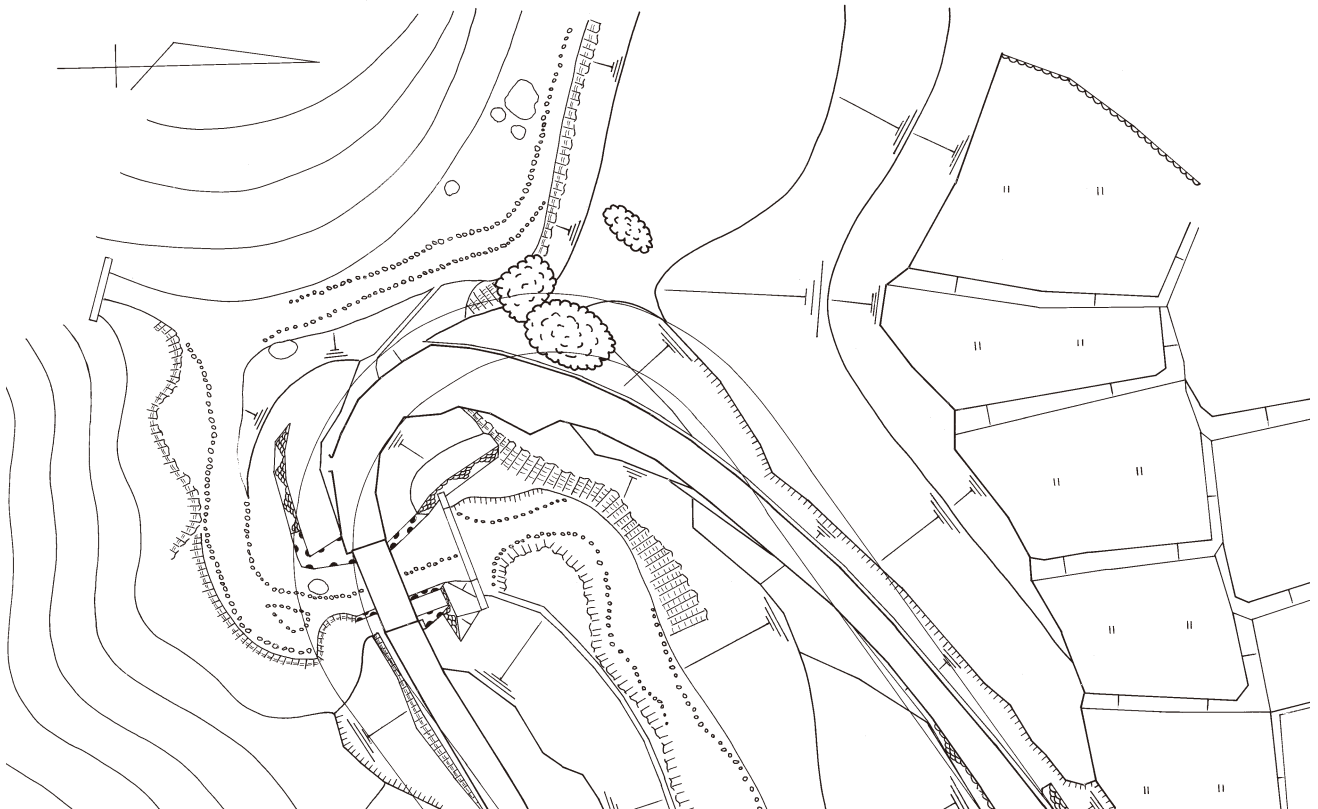
発掘調査は、岩陰部と落石部間の通路状の部分を中心となるが、岩陰前の岩と東側を走る県道及び南側の河川に挟まれた三角地域、更に岩陰北側と県道に挟まれた地域も調査対象となっている。発掘調査は落石の東側にあたるD8グリッドから開始した。3月中にはほぼ岩陰の東側の調査を終えた。

3月下旬、岩陰奥部にあたるB6グリッドから調査を開始し、順次東側のB4・5グリッド方面、西側のB6・7グリッド方面へと調査範囲を広げた。発掘調査は遺物の出土地点を点として平面図に記録し、各グリッド毎で種類別にNo.を付けて収納した。調査を進めると、3月31日には発掘調査を続けながら岩陰部の雨垂れ線などの測量を行い、昭和46年度の発掘調査を終わらせた。

昭和47年度の発掘調査は、4月9日から再開した。引き続き岩陰奥部の調査を続行するとともに、岩陰東側にあたるD・Eグリッドの土層断面図を作成し当該区の調査を終了させた。

4月下旬になると、岩陰中心部の調査もかなり下部まで掘り進めることができた。また、東側の岩陰奥部(B4・B5グリッド)ではほぼ地山層まで掘り下げが終了。南壁のセクションを実測し、落石側にあたるC4・C5グリッドの調査を着手した。

5月になり、岩陰の北側にあるX・Y-6・7グリッドの調査を着手した。この結果、前期の時期まで遡ることが判明した。一方B・C-6・7グリッドを中心とする岩陰部から3基の集石遺構が検出され、またB-7グリッドの岩陰奥部ではピットが並んで検出された。岩陰の中心部にあたるB・C-6・7グリッドの西壁セクション図を実測し、5月25日をもって全ての発掘調査を終了した。調査途中で遺跡の保存が提起され、地元関係者の熱意のもと保存されることとなった。



第1図 工事施工計画図(1:1,000)

第3章 発掘調査と整理

第1節 調査方法

第1項 グリッド

千駄木遺跡の発掘調査は、事業予定地内に一辺2m規模のグリッドを網羅して実施した。グリッドの設定は、調査対象地の状況に因り任意の基準で設定されている。この任意の基準は、遺跡の岩陰部分を通す方向(岩陰部の軸方向)と、これに直行する方向で設定されている。

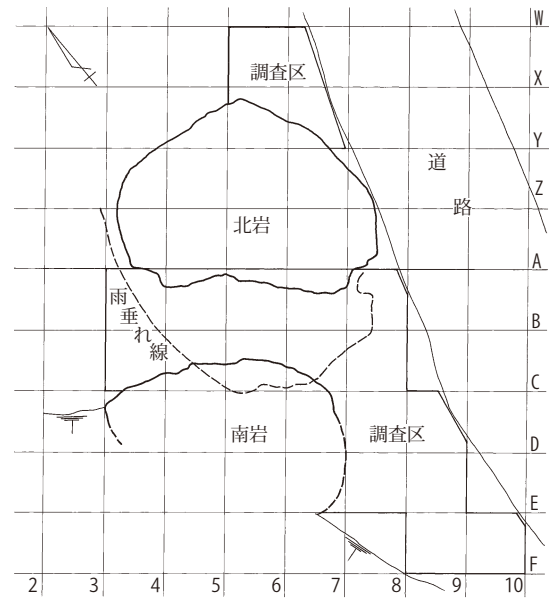
グリッドの名称は、岩陰部の軸方向にアルファベット、同直行軸側にアラビヤ数字を用い、交点の南東隅部をグリッドの呼称名称としている。

グリッドの方向角は、トランシットに備えられた磁針器で観測されている。岩陰部軸方向の直行方向で北 $-42^{\circ}38'$ -東が観測されているが、作成された記録保存図の各磁針器による方向角は、それぞれで異なるため、記録保存図に示された磁北を集成し、最も共通する方向角をして当該グリッドの方向角とした。この修正した方向

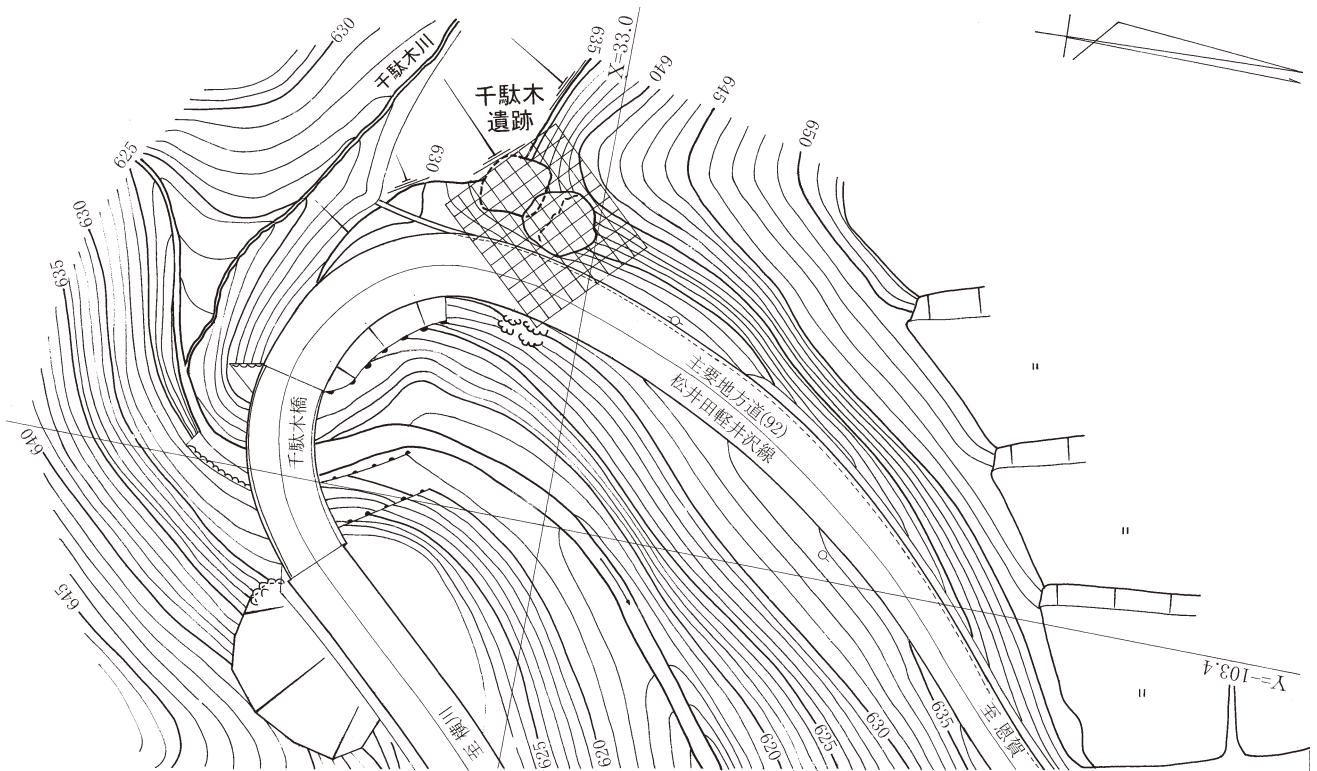
角は、北 -40° -東である。そして、この方向角をして掲載図の磁北とした。

また、磁北と真北との偏差角は概ね7度程である。

発掘調査段階で設定されたグリッド、任意の基準で



第2図 グリッド図(1:250)



第3図 グリッド配置図(1:1,000)

設定されている。このため、現在汎用されている「世界測地系」に重ね合わせる事はできない。このため、当該報告での便宜を図り、概略程度での「世界測地系」上の地形図に調査区を載せる目的で現地での測量調査を実施した。

そして、発掘調査段階では、水準測量の原点が工事に伴う仮ベンチからの測量であったため、併せて、水準測量を行い土層断面等の基準線標高値を算出した。以下に方法の概要を記す。

測量実施日：平成23年12月6・9日

平面測量：後方交会法の応用

使用機材：平板及びアリダード(偏心角無し)

使用地形図：群馬県管下主要地方道(92)

松井田軽井沢線(23/47・24/47)縮尺1:500

平成23年2月28日調整

上記図を複写して使用。

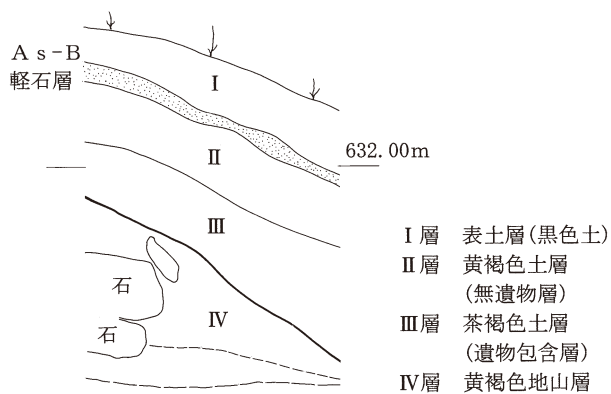
水準測量：上記地形図上の単点測量値を用い、発掘調査段階の工事施工仮ベンチマーク部位を観測し算出した。

第3図中に示した調査区は上記方法で合成した。

第2項 基本土層

発掘調査当時の記録図にはそれぞれの層序と出遺物について詳細な記録が書きとどめられている。この記述を整理して、基本土層の内容について以下に掲載する。

基本土層は、岩陰部西外側のB-3グリッド北面を基準としている。



第4図 基本土層図(1:60)

発掘範囲は屹立している巨岩とその全面に落下した転石の間であり、ほぼ東西にきわめて狭長な部分になっている。なおかつ、北西から南東にかけて大きく傾斜しているために基本層序は最も高位に設定されたB-3グ

リッドを基準に設定し、I~IV層に分層した。

I層 黒色を呈する表土層。この土層は落ち葉の腐食などによって生成されたものでフカフカした感じがするが、岩陰内部は現状で山道になっていたためにその部分は踏みしめられて固くなっている。

全体に浅間B層の軽石が混じっておりガリガリとする。下部の所々にこの軽石の純層があることから、この地層は浅間B層を混在させていることになる。よって、I層とII層の境は天仁元年(1108)の浅間山噴火の時期にあたるだろう。

なお、I層とII・III層は浅間B層によって堆積時期を画されるが、出土遺物は混在していた。本岩陰遺跡の発見は、このI層である表土層で採取された縄文土器片や四世紀のS字状口縁台付甕の破片がきっかけであった。

II層 黄褐色土層で無遺物層である。関東ロームや山砂が雨水などで洗われて再堆積したと思われる砂壤土性の土壌である。水分を含むとやや粘性を帯びる。

この層は発掘当初に基本土層を確定するために掘られた岩陰部最上部に設定されたB-3グリッドのみの検出であり、発掘の進捗によって他のグリッドからは検出されなかった。おそらくIII層の上部に当たるのだろう。

III層 茶褐色土層で多くの遺物を包含している。この土層はII層と酷似しており自然堆積によって漸次堆積したものであるが、包含されている遺物からみると常に人為が絡んでおり、その部分でやや黒ずんでいる。また、焚き火跡の灰が混入すると淡色がかってくる。II層は人為の関わらない自然堆積の部分なのであろう。

発掘時には色調や粒度の差異によってIII a・III b・III c・III d・III e・III fの6層に分層したが、報告書作成の整理時点でIII c層は軽石を多く含んでいたが発掘終末時には部分的に軽石純層が介在していることが分かり、浅間軽石層として独立させている。しかし、この層は後にAs-Dと認定した軽石を多く含んでいるが、上下の土層から出土する遺物の時期を画するまでには至っていない。この層の上位にあるべき時期の土器片が下位から出土する例が2・3例あった。おそらく、一部で攪拌を受けているのだろう。そのために出土遺物を層的に検証できるほどの鍵層にはなりえなかった。また、III e層とIII f層はB-5グリッドのみの確認であり分層の意味を持たずIII d層に包括した。

IV層 地山層。黄褐色を呈する砂礫層で、県道側に近づくにつれて部分的な水性堆積の様相がみられた。この地山は千駄木川や入山川などの河川堆積物で構成されているのであろう。すなわち千駄木岩陰遺跡の位置するところは小規模な河岸段丘である。

攪乱層 発掘区域の中は土層が順次堆積していたが二箇所で大規模な攪乱部分が見ついている。この攪乱は後世のものではなく岩陰使用時の人為的な利用に伴うものである。これらの攪乱層は上部でつながっているが土質の違いによって二つの攪乱層として説明したい。

第1攪乱層 岩陰内の中央部にあり、大量の灰が混在しているために淡色になっている。ここは岩陰内部の奥部にも当たることから常に焚き火をしていたところと推定されることから、当時から人為的な土層の攪乱が継続していたものと考えられよう。

上から分層しながら掘り進めたが、土質的には灰の多寡による色調の変化が分層の目安になったのみで、層位として分層する意味を持たないことがわかったために記録整理時に第1攪乱層として一括した。傾向として新旧の出土遺物は出土層位の上下差と一致していたが、下層から新期の遺物が出土したりしている。

この部分で火を焚く時に地面をやや窪めながら火床をつくっていたのだろう。土器の出土層位の攪乱はこの行為によってなされたものと思う。

第2攪乱層 発掘区域の南東部すなわち傾斜面の最下部にあたるところにも大きな攪乱層があった。一部に灰層が見られるが多くの土壌そのものの攪乱によって分層がむずかしくなっていた。

ここでも遺物の層位的な取り上げを目的にして分層を試みたが、結果としてその意味を持たなかった。この部分は落盤を思わせる岩片が集中していた。

第3項 記録保存

発掘調査段階での記録保存は以下のとおりである。

記録保存図

発掘調査区概念・グリッド配置図 1：200

遺物出土状況平面図 1：10及び1：20

土層断面図 1：20

記録写真

白黒ブローニー 6×9版及び6×6版

白黒35mm

ポジカラー 35mm

記録類

出土遺物は、1点毎にグリッド別の通し番号を付し、台帳に高さを記録、出土位置は各遺物出土状況図中に記録され収納されている。

記録保存の図面・写真は、上記により保存され、群馬県教育委員会により保管されている。

第2節 整理

第1項 整理作業

整理事業は、平成23年度の実施であり、発掘調査終了から32年の時間を隔ての実施となった。

整理事業では、グリッド別単独点毎の遺物の中から、岩陰内のB-5・C-5グリッドの東側セクションベルト内出土の遺物を層序毎に分別し、層序の時期考察に期した。

上記以外の土器類は、土器種毎に分類した。確認出来た土器種では、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・施釉陶器(近世以降)があった。出土量では、縄文土器が主体を成し、次いで土師器、弥生土器、須恵器、施釉陶器の順で出土・採集されている。また、縄文土器は、さらに形式別に分類し接合関係を確認した。

図化掲載した資料は、遺跡の実態を明瞭化するために、各土器種から特徴的な個体を抽出して実測し掲載した。

出土した遺物の内訳は第1表のとおりである。

写真類の整理では、カラーポジフィルムのマウント保存の劣化が認められたため、全てを交換した。

また、白黒ネガフィルムは掲載記録台帳の作成を行った。

第1表 出土遺物数量一覧表

	出土量	図化数	鑑定数
陶器	3	3	0
須恵器	20	8	0
土師器	544	47	0
弥生土器	136	46	0
縄文土器	4469	260	0
石器類	305	63	0
獣歯骨類	478	2	478
貝類	128	2	128
	6083	431	606

第4章 自然環境と歴史的環境

第1節 自然環境

第1項 自然環境

千駄木遺跡は県西部、長野県境に近い位置に当たり、安中市松井田町字西野牧16702-1に所在する。平成18年3月18日以前は、碓氷郡松井田町であったが、現在は安中市に吸収合併されている。

安中市は国道18号線が市域を通過する。調査の契機となった「主要地方道(29)松井田軽井沢線(以下「県道松井田軽井沢線」)改修工事」の当該道路は、国道18号線と同市松井田町横川の合流部分を起点としている。遺跡地部分は、起点距離6.3kmの位置に当たる。県道松井田軽井沢線は、国道18号から分岐後、入山川沿いを通り、和美峠を経て長野県軽井沢町の南側に達している。江戸時代の中山道の脇往還の一つである。

遺跡地は県西部域の山岳地帯、北西方向19.5kmには、浅間山(2,568m)が未だに火山活動を続けている。

遺跡地の東5km程には、上毛三山の1つに数えられる妙義山の山塊(金洞山・朝日岳・相馬岳・白雲山)が峰を連ねている。遺跡地の北側には、高岩(大萱山)標高1,050m以上)が岩面を露呈し天に向かい聳え、更に北側には稲村山(952.6m)、遠入沢を隔て碓氷川を眼下にする中尾山(940m)に続いている。遺跡地の南側では、西側には大山(1,120m)、遺跡正面に当たる南側には千駄木山(997m)、北東側には谷急山(1,162.1m)が聳え、その一支稜(1,072m)が遺跡地の東方まで延び、烏帽子岩(1,117m)、赤岩(1,100m)、丁須(1,057m)、御岳(963.2m)に連なり碓氷川に至っている。

これらの稜線は分水嶺を構成し、双方に挟まれた谷には、碓氷川の支流である入山川が貫流し、遺跡地の前面では入山川の支流である千駄木川が合流している。

千駄木川は、遺跡地西側の大山山中から発している。この入山川の上流域には、当該遺跡の岩陰を造り出す同類の巨岩が流路を塞ぐ状態で認められる。遺跡地から上流域では、入山川が6.4%、千駄木川が8%の勾配率で流路を保っている。

当該遺跡は、この山塊に囲まれ形成された擂鉢状の地

形の南端部分、擂鉢の底に当たる部分に立地している。

当該地、冬季では日の出から正午頃までは日光の日差しが受けるが、正午を過ぎる頃には千駄木山に日光を遮られ、寒気を一入に感じる状態になる。

遺跡地周辺の山塊は、新第3系前期中新世の富岡層群中の井戸沢層(1500万年～1600万年前頃)を基盤とし、頂上部付近は鮮新統・上部中新世に堆積した凝灰角礫岩層(700万年～800万年前頃)が載っている。何れも浸食が進み急峻な斜面に成っている。また、大山・八風山などは、中期中新世末期から後期中新世前期(1000万年前頃)にかけての貫入岩により形成されている。

遺跡地の巨岩は、周囲の山塊の上部に認められる凝灰角礫岩の転石に因っている。この凝灰角礫岩は、入山川上流域に散在する巨岩と同質であることと、地形の点から、高岩(大萱山)の上部に認められる凝灰角礫岩が、高岩(大萱山)の山体崩壊に伴う崩落に因る転石として、遺跡地に至ったものと推定される。この時期は特定できないが、北側の岩は、調査の結果、地山との関係から、遺跡が形成される以前であることが判明している。また、南側の岩は、縄文時代中期の包含層が岩の下部にも認められたことから、縄文時代中期以降の事であることが確実であり、何らかの現象によって、北側の巨岩側にあった巨岩が再度動いた事により、現在の位置におさまったことが推測される。

この南側巨岩の再度の移動を生じせしめた現象の原因は、浅間山の火山活動による影響が考えられている。この浅間山の遺跡地での火山活動の痕跡は、浅間山給源D軽石(As-D)をもたらせた一連の火山活動が、火山性地震を発生させ、この地震の影響により元来一つであった岩が崩壊し、一方が転石として南側に転がり込んだものと指摘されている(文献4)。

この一連の浅間山の火山活動により噴出された軽石がAs-Dであり、調査区内の土層断面に記録されている「千駄木パミス」と呼称されたものである。縄文時代中期頃の浅間山の火山活動を物語るものである。

第2項 遺跡立地

当該遺跡は、大山東端麓に存する小山(836m)の南東麓、千駄木川左岸に位置している。遺跡地の標高は631m程である。調査実施された部分は、巨岩に挟まれた岩陰部と巨岩の南東部分である。

この巨岩の西側、小山の南縁部分、千駄木川左岸沿には、緩斜面部が広がっている(第7図)。巨岩の東側は道路部分になるが、北側に向かい緩やかに上がり(勾配率約4%)、千駄木橋詰までの僅かな範囲が平坦な地形を呈している。

遺跡の主体を構成する岩陰は、二つの巨岩のオーバーハング部分の直下であり、遺跡は、周辺部分に広がっている。この岩陰内の巨岩の間隙は、小山の自然地形の勾配により、岩陰の西端側から急激に立ち上がっている。出土遺物には、この勾配部分からも多く出土していることから、遺跡の範囲は、巨岩の西側、千駄木川左岸の平坦な部分に広がると考えられる。また、巨岩の西側部分

の緩斜面部の地表面には、遺跡の巨岩と同質の巨岩の一部が露呈している。

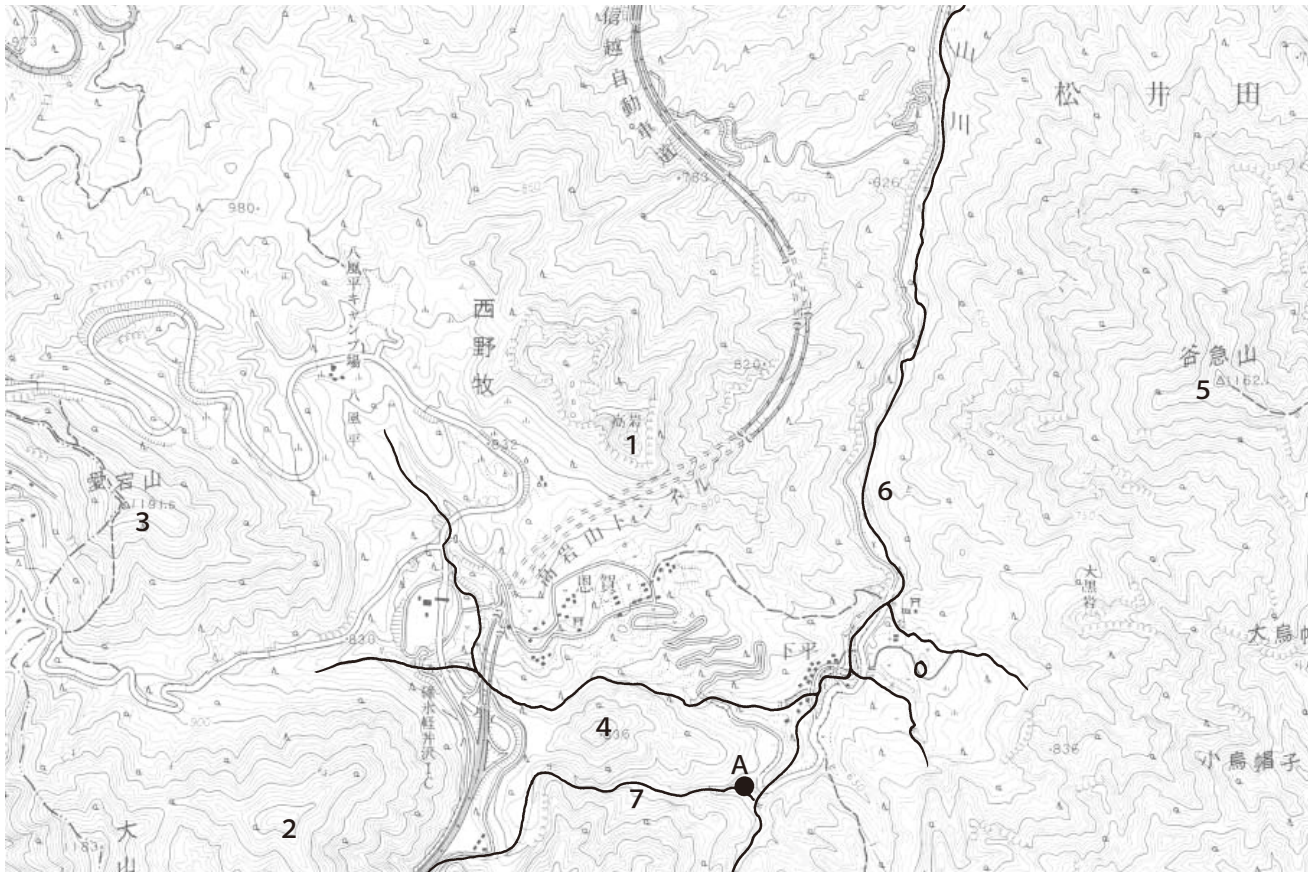
遺跡の主体部分を構成する巨岩は、地山基盤層が構成するのではなく、前述した転石巨岩が構成している。巨岩は北側・南側の二つの巨岩からなり、双方の巨岩が合従する状態により生ずる岩陰部分が主体をなしている。

発掘調査の結果、この岩陰部分から東側の道路部分に遺物の散布範囲が広がっていることが判明している。しかし、道路下は未調査であったため遺跡の東限は明らかになっていない。岩陰の東側は、南側を千駄木川により挟まれる限られた範囲の中で、その広がり、道路を含め南北20m、東西15m程である。遺跡の東側への広がり限界はこの範囲の中までと推定される。

推定される遺跡の広がり、巨岩を中心にして、南北30m、東西60m程の1,800m²~2,000m²程と考えられる。しかし、遺物の散布は、腐植土や落葉により被覆されているのか、現在は採集することが出来なかった。

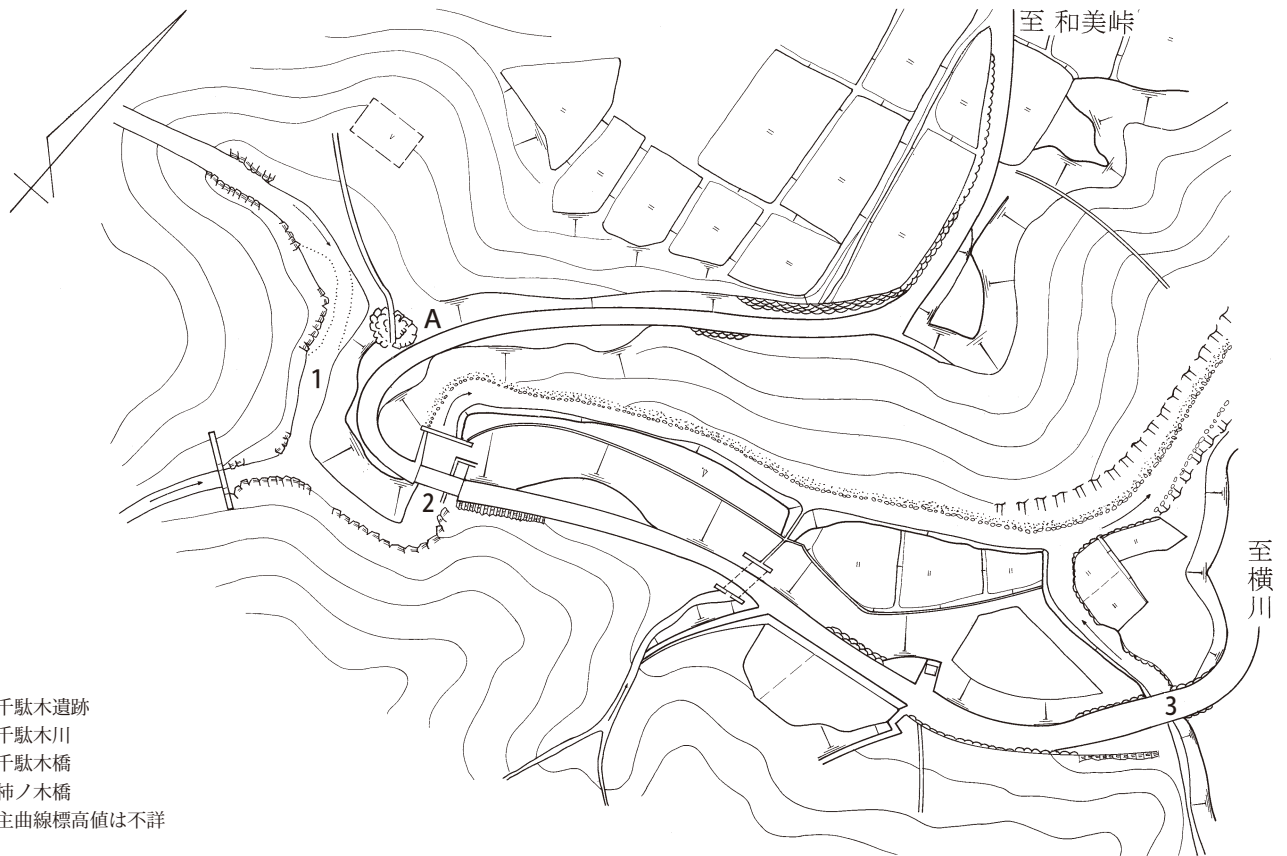


第5図 遺跡位置図(国土地理院 1:200,000長野) (Aは千駄木遺跡)



A 千駄木遺跡 1 高岩(大萱山) 2 大山 3 愛宕山 4 小山 5 谷急山 6 入山川 7 千駄木川

第6図 遺跡地周辺地形図1(国土地理院2万5千分の1地形図「南軽井沢」(平成9年10月1日発行)使用)



A 千駄木遺跡
1 千駄木川
2 千駄木橋
2 柿ノ木橋
※主曲線標高値は不詳

第7図 遺跡地周辺地形図2(1:2,000)

第2節 歴史的環境

第1項 歴史的環境

当遺跡が位置する県西部域は、急峻な山岳域を隔てて長野県東部域に接している。

この県境付近は古代より東山道等の経路、取分け峠越えの経路の通過する所が集中する所である。

現在では、関越自動車道路上越線(上信越自動車道路)(以下、「上信越道」と略記)の開通により群馬・長野両県の往来も至便になっている。この上信越道が遺跡地の北東側から南西側を通り、遺跡地の北西側900mに設けられた、碓氷軽井沢インターチェンジ建設に伴う西野牧小山平遺跡(恩賀遺跡)の発掘調査が実施されている。

遺跡地の所在する安中市松井田町は、平成18年(2006)に、碓氷郡松井田町と安中市の合併による行政区である。遺跡地は、この旧碓氷郡松井田町に該当する。

松井田町の行政区分は、昭和29年(1954)に、松井田町、白井町、坂本町、西横野村、九十九村、細野村の6町村が合併し成立している。この合併以前の松井田町は、明治22年(1889)町村制施行により、坂本駅・入山村・原村・北野牧村・峠町・西野牧村(恩賀村の1村のみ)の合併により成立している。これ以前では、明治8年(1875)に、甘楽郡本宿、大平、森平、坂詰、漆萱、根古屋、藤井、三瀬、芦平、市萱、矢川、黒川、恩賀村の12村が合併し西野牧村が成立している。この合併直前の当該遺跡の地区は恩賀村の一部であったことが分かり、明治22年の合併により、当該地区は甘楽郡から碓氷郡に変わっている。

この恩賀地区が甘楽郡から碓氷郡に編入された経緯には、地勢上の特性が推定されている(註1)。

この恩賀地区が明治22年に松井田町に合併される経緯の中に、文禄2年(1593)頃に恩賀地区と入山地区が碓氷関所(入山峠越え)・西牧関所(和美峠越え)(下仁田町)の2つの天領として、安中藩領から分断された経緯がある。文禄2年は、伊奈備中守、大久保石見守が横川村に関所を設けた年に当たり、同年、西牧関所も置かれ、関所に挟まれた地区が天領として、分断を余儀なくされた経緯の発端がこの頃にあるのであろう(註2)。

県境域には、幾つもの峠が知られている。北から熊

野神社の旧碓氷峠(1,188m・中山道)、碓氷峠(碓氷坂)(旧国道18号線)、矢ヶ崎峠(旧18号からの脇道)、入山峠(1,084m・東山道)、和美峠(984m・下仁田道・追分街道下仁田道＝中山道脇往還)、矢川峠(1,167m・下仁田道脇道)、内山峠(中山道脇往還)、星尾峠(現在廃道)、田口峠(県道93号下仁田白田線)が南北に連なっている。

当該遺跡を通る県道92号松井田・軽井沢線は、入山峠越えの東山道の脇道である。この経路は東山道から分岐し和美峠に至る道であるが、旧道は、遺跡地の東側700m程で、下平集落の入り口部分から恩賀集落に至り和美峠に至る経路である。入山峠越えに比べてやや通行に容易な経路である。

上述した峠越えの街道の中で、旧碓氷峠越え(中山道)・碓氷峠越え・入山峠越え(東山道)は、古代に遡る経路であることは周知のことであるが、他方、この3者以外は開通時期が不分明である。しかし、一部では中世までは遡れる経路もあるが、その実際は、更に遡ることが推測されるものの物的査証を欠いている。恐らく、全ての峠越えの経路は、原始の頃に遡る事を当該遺跡の存在が示唆している。

第2項 周辺遺跡

周辺遺跡は遺跡地周辺の地形が山岳地域に当たることから、周知の遺跡は非常に少ない。

以下、第2表に示した遺跡を時代毎に概観する。

縄文時代

縄文時代の遺跡として、最も至近の遺跡として遺跡地の千駄木川を隔てた西野牧向井山遺跡(2)が挙げられる。縄文時代中期の土器が採集されているようであるが、未調査遺跡のため詳細は不分明である。西野牧小山平遺跡(4)・西平・下恩賀遺跡(5)は、当遺跡の西方1km程の至近であるが、比高差は110m程ある。大山の東麓部分に立地している。両遺跡共急峻な地形の中のやや緩やかな地形部分を占地している。西野牧小山平遺跡は、上信越道の碓氷軽井沢インターチェンジの建設事業に伴い調査実施されている。この西野牧小山平遺跡では、大山を構成するひん岩(石英ひん岩)を利用し石棒を製作した遺跡である。土器類には、早期条痕文系、前期関山式・諸磯a式、中期五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E3式・曾利式(曾利系)等が出土している。遺跡を特徴付ける石棒

の製作時期は、加曾利E3式の時期と考えられている。また、出土した縄文土器の様相は当遺跡とほぼ同様である。

一方、西平・下恩賀遺跡は、西野牧小山平遺跡の北東500m程に位置する。調査が未実施なため詳細は不明である。しかし、遺跡地の恩賀地区には、西野牧小山平遺跡で製作されたと考えられる石棒が2点確認されていることから、両者の遺跡は密接な関係にあることを示唆している。また、遺跡地は、和美峠を抜ける峠越えの経路に当たる遺跡であるのと、高岩(大萱山)の南面の緩斜面部分の遺跡であることから、古代以降、馬・給水の地点、または、高岩(大萱山)を背景とする、精神文化に係る何らかの遺跡が存在することを憶測させる所でもある。

入山川流域では、北野牧高谷遺跡(10)(前期・後期)・北野牧吹反遺跡(8)(中期)・北野牧上ノ岩・岩ノ平遺跡(9)(中期・後期)・入山若宮芦田谷遺跡(13)(中期)等が周知されている。何れも未調査遺跡で内容は採集遺物での内容程度である。この中で、北野牧高谷遺跡・北野牧上ノ岩・岩ノ平遺跡での後期の遺物が採集されている。

入山仁田遺跡(16)、入山暮井遺跡(17)は当遺跡の北4.3kmに位置する。両遺跡は入山川の支流遠入川の左岸、中尾山の南麓に派生する尾根上で、沢を隔てて250m程離れた位置にあたる。この沢で隔てられているが、入山仁田遺跡の調査地点の標高は630m程で当遺跡とほぼ同程度の位置に当たるが、入山暮井遺跡の調査地点の標高は555m程である。両遺跡共に昭和46年に発掘調査が実施され、平成2年に報告書が刊行されている。

入山仁田遺跡では、縄文時代の住居跡9軒が発見されているが、住居跡としての形状を確実に露呈されたものは3乃至4軒である。このほかの住居跡は、炉跡等の一部の出土から住居跡の推定がされている。この9軒の住居跡の出土遺物は、後期称名寺式土器が主体である。調査区内の出土遺物には、早期後半条痕文系・中期五領ケ台式・阿玉台式・勝坂式(荒巻式・焼町式)・加曾利E式・曾利式、後期称名寺式・堀ノ内1式・加曾利B式の土器類が出土している。この出土遺物の内容は、当遺跡出土遺物ほぼ同様である。

入山暮井遺跡では、中期加曾利E式を伴う住居跡1軒、後期称名寺式を伴う住居跡1軒が出土している。このほか土坑類も発見されているが、遺跡内容が平安時代・室町時代と重層するため明確な数量把握が出来ていない。

調査区内の出土遺物には、早期後半条痕文系・中期阿玉台式・勝坂式(焼町式)・加曾利E1～E4式・曾利式、後期称名寺式・堀ノ内I式・同II式・加曾利B式・曾谷式平行に土器群が出土している。このほか後期後半の粗製土器が出土している。この出土遺物の内容は、入山仁田遺跡と重複し、当遺跡の出土遺物の内容に重複する点が認められる。この両遺跡の至近には、入山片地遺跡(14)・入山飯米場遺跡(15)・入山前畑遺跡(18)・入山疣石遺跡(No.19)が知られている。中期の遺物が採集されているが、未調査遺跡のため詳細は不明である。

北野牧遠入遺跡(7)は、採集資料により存在が知られている。地元の方の熱意でかろうじて資料が保存されていた。『松井田町誌』に依れば加曾利B式土器が採集されている内容が認められるが、添付された写真では、加曾利E式の深鉢底部と思われる。調査等未実施であるため詳細は不明である。なお、当該遺跡は周知の遺跡として認定されていない。

この両遺跡と遠入川を隔てた右岸には北野牧狐萱遺跡(12)が位置している。稲村山の緩斜面部に位置し、標高は515m・520mである。昭和63年に発掘調査が実施され、平成3年に報告書が刊行されている。調査は、トレンチに依る小規模な発掘である。このため、遺跡の詳細は不明な事が多い。調査では、集石が1か所で発見されただけで、出土遺物としては前期の土器片が1点出土だけである。この遺跡の意義として、遠入川対岸の入山仁田遺跡・入山暮井遺跡では未発見であった前期の土器が出土している点である。北野牧西遺跡(No.11)は、入山狐萱遺跡の下流300m程に位置している。中期の遺物が採集されているが、未調査遺跡のため詳細は不明である。

遠入川流域では左岸に立地する遺跡が多いが、まだ未調査遺跡が多く遺跡の実態が不明である。

横川大林遺跡(24)は、碓氷川右岸の丘陵地帯に位置し、標高は470m程である。上信越道の建設工事に伴い発掘調査が平成元年～平成3年まで実施され、延べ12,280m²が発掘調査されている。報告書は平成9年に刊行されている。遺跡は、早期東山式を伴う住居跡1軒と同期と判断された住居跡4軒、早期後半の土坑147基、集石6基、ファイヤーピット8基、石器製作跡1か所。早期末～前期初頭の住居跡2軒、中期加曾利E2・3式を伴う住居跡2軒、中期加曾利E3式土器の埋設土器1

基、前期～中期の土坑81基等が発見されている。

特筆されるのは、早期後半(撚糸文末～条痕文期)の石器製作跡の発見であろう。そして、これらの時期区分をさせる、自然堆積(層厚2cm程の二次堆積ローム土)被覆土層の発見により、早期と前期を層位区分された状態で調査成果が得られたことが、調査担当者の卓見でもであろう。

初鳥屋遺跡(20)は、矢川川右岸で、矢川川の2本の支流に挟まれた丘陵地帯に位置し、標高は580m程である。遺跡は発掘調査が未実施であるが、これまでに採集された資料により、石棒を制作した遺跡として知られている。石棒の製作跡とされる西野牧小山平遺跡(4)の南南西2.8kmの位置に当たる。当該遺跡の地域も中期中新世末期から後期中新世前期(1000万年前頃)にかけてのひん岩などの貫入岩の分布する地区であり、西野牧小山平遺跡で製作された石棒と同質のものであり、距離の面からも至近であることから、双方の遺跡には密接な関係が推定される。矢塚遺跡(21)は初鳥屋遺跡の南側300m程に位置しているが遺跡の詳細は不明である。

周知の遺跡として台帳登録のみされ、調査未実施に依り詳細は不明な遺跡として、小根山A遺跡(27)・小根山B遺跡(28)が挙げられる。至近の遺跡で霧積川左岸の丘陵上に位置している。また、当該地域は山間に当たるため、まだ、未発見遺跡の存在も想定される。

弥生時代

当該期の遺跡としては、前出入山暮井遺跡で中期前半の3点の土器片が出土したくらいしかない。この3点の土器は、何れも小破片であり型式名の比定にはやや無理がある。

概して、当該地区周辺での弥生時代の遺跡は非常に少ない。旧松井田町域では、中期の再葬墓群の人見遺跡が知られているに過ぎなく、丘陵を南側に隔てる甘楽地区の様相とは大きく異にしている。甘楽地区での当該時代の遺跡数が多く、前述の初鳥屋遺跡(12)と当該遺跡との距離関係からも明らかのように、3kmに満たない距離関係にある。そして、何よりも甘楽地区と長野県域で出土する土器様相の相似の背景には、内山峠を介する文化交流の存在を顕現した結果でもであろう。また、入山峠を介した旧松井田町地区の当該時代の遺跡実態は、上記の事を示唆し、後代になり入山峠を介しての文化交流に至る事は、更なる状況を顕現しているのであろう。

古墳時代

当該期の通有遺跡は未発見であるが、長野県との県境部、入山峠周辺での祭祀遺跡が古くから周知されている。入山峠祭祀遺跡(6)は、群馬県と長野県の県境に跨る遺跡であるが、主体部分は群馬県側に広がるとされている。標高1,034m程である。碓氷バイパスと旧道に挟まれた1,200㎡程の僅かな範囲と考えられている(文献10)。

これまでに、昭和30年山崎義男(文献7)、同43年に長野県教育委員会(文献8)、同44年に大場磐雄等(文献9)、同60年に松井田町教育委員会(文献10)により発掘調査が実施されている。また、須田茂は、山崎義男の調査で出土した遺物を図化し公にしている(文献11)。

これまでの発掘調査による成果では、多くの石製模造品と土師器類が出土している。長野県との県境付近の峠では、古代遺物の出土が知られているのはこの入山峠だけである。そして、この入山峠祭祀遺跡の存在が東山道経路を示す唯一の遺跡として考えられている。

しかし、古墳時代後期以降の遺物が皆無である事が注意される。

奈良・平安時代

前出の入山仁田遺跡では、平安時代(9世紀)の住居跡が3軒発見されている。この中で、2号住居跡(9世紀)からは碗形滓が1点出土し、住居跡床面中央部には、鍛冶炉を思わす遺構の発見がある。また、11号住居跡(9世紀中頃)からは灰釉陶器碗・小瓶を伴っている。調査区内の出土遺物の中で特筆されるのが灰釉陶器類の出土量の多さであろう。

入山暮井遺跡では、平安時代(10世紀末～11世紀初頭)の住居跡1軒が発見されている。

横川萩の反遺跡(25)は、霧積川右岸の丘陵上に位置する。標高は440m程である。掘調査は、上信越道の建設工事に伴い、平成元年～平成2年に発掘調査が実施されている。報告書は平成9年に刊行されている。当該遺跡地は広いものの、調査がトレンチ調査により実施されたため、遺跡の実態は不明な点が多い。発見された遺構として平安時代(10世紀前半)の住居跡1軒が発見されている。

原遺跡(26)は、霧積川と碓氷川に挟まれた丘陵上に位置している。遺跡地は坂本地区の一角に当たり、江戸時代には「坂本宿」として中山道の宿場町として栄えた所である。また、古代東山道の坂本駅の比定地とされている。

発掘調査は、上信越道の建設工事に伴い、昭和63年～平成元年に発掘調査が実施されている。報告書は平成9年に刊行されている。発掘調査では、平安時代(9世紀後半)住居跡5軒、布掘りを伴う5間×3間の庇乃至塀付掘立柱建物跡が発見されている。この掘立柱建物跡の身舎の前面に構築された庇乃至塀の見解は明定していないが、報告者は庇を考えている。当該遺跡は、この特殊とも言い得る掘立柱建物跡の存在と、調査地区が坂本駅比定地であることから、坂本駅に係る何らかの遺構として捉えられている。また、出土遺物では駅家・官衙の存在を示す特徴的な遺物の出土は無い。一方、住居跡から出土している土師器甕の中には、図化された個体に秋間型の個体が多いのが特徴である。秋間型の土師器甕の分布はまだ不分明であるため今後に期するところが大きい。

関長原(碓氷坂の関跡)(36)は、前述した横川萩の反遺跡(25)の北側200m程の位置に推定されている。この関跡は、昌泰2年(899)の太政官府(類聚三代格)により、「倭馬之党」対策に設けられ、天慶3年(940)に廃止(貞信公記)されるまでの40年間に設けられ、以後戦国期から江戸時代初期の間に「関長原」(関名ヶ原)(註3)と「横川」で移動を繰り返している。

当該期、遺跡地周辺で最も重要なのが東山道であろう。しかし、現在まで東山道の具体的な遺構・遺物は未発見である。現在、入山峠を越える経路が一般的に東山道とされている。この東山道経路は、碓氷川沿いから入山川・遠入川沿いを経て入山峠に至る経路で、現在は国道18号線碓氷バイパスの経路でもある。また、入山川沿いを遠入川沿いに迂回せず、入山川沿いを登れば当遺跡の間際まで到達する。更に千駄木川沿いに登れば当遺跡に達する。この双方は、和美峠に達し長野県に至っている。

入山川から分岐する遠入川沿いの経路は、入山川からの分岐より上流域は谷幅が狭いことから、谷幅の広い遠入川沿いの経路は荷駄等の経路としては適している。だが、人馬だけの往来には、和美峠を経て長野県側に到達する経路の方が楽な経路のように思える。また、和美峠の経路には、甘楽郡側から矢川川沿いに登る経路が合流しており、往来の目的・規模による経路の選択がなされたことが類推される。

鎌倉・室町・戦国時代

当該時代の具体的な遺跡は殆ど無く、古記録・古文書・

金石文が知られている。具体的な遺跡・遺構としては戦国期の城館跡が知られている程度である。

碓氷城(33)(愛宕山城)は、江戸時代初期に整備された中山道が丘陵上に至る部分の先端に築城されている。丘陵下には霧積川・碓氷川が流下している。規模は、東西110m、南北90m、形状は、菱形単廓の構造である。武田氏の古中山道経路の防衛上の城であろう。城峰城(35)(坂本城)は、碓氷川右岸の丘陵上に築城された一城別廓の構造で、規模は南北90m、東西50m程で、本丸・二の丸を堀切で分けている。安中氏の松井田城の支城と思われる。また、城峰城の北東側には、虚空蔵の砦(34)が構築されている。この砦は、城峰城の狼煙台と考えられている。東山道・古中山道の監視と防備が主目的と思われる。

中山道経路に大道寺堀切(38)がある。大道寺政繁が天正18年(1590)に前田軍の侵攻を防ぐため、古中山道の遮断を目的として構築されたことが考えられている。

この時期、前出関長原(碓氷坂の関跡)に「関守」が置かれていたことが窺える。「(前略)大永二年(1522)に甲斐国なる武田家の軍勢押来るを其時関守荻野弥助小岩源蔵と云者さへ止める事不叶終に破られて(後略)」(安中志)から、東山道経路の安中氏の防衛上の要であったことが窺知される。このほか、「(前略)正応二年己卯年(1289)初めて鎌倉執権北条家(後略)」、「(前略)文禄元年壬辰(1592)伊奈備中守源大久保石見守藤原此横川村に御関所を経営す(後略)」、「(前略)慶長十九年甲寅(1614)井伊兵部少輔直勝(後略)」(いずれも安中志)が見られ、いずれも関長原に関を設けさせ、横川村・原村の者に守らせた記述が認められる。何れも東山道・古中山道の防備の要、要害の地としての備えであろう。

一方、碓氷峠の熊野神社には正応5年(1292)銘の梵鐘が伝えられている。銘文には「(前略)右志者為松井田一結衆十二人現当悉地成就也」が読み取れ、中山道経路の峠越えの熊野神社に寄進されている事からすれば、鎌倉時代後半には中山道の経路は既に存在していたことが窺知され、入山峠・和美峠には認められない宗教施設(祭祀施設)の存在が古中山道の存在を大きくする。そして、現在推定されている東山道は、入山峠での祭祀遺跡の存在を専らの物証とし、以後の物証に欠く状況下では、関長原(碓氷坂の関)の位置が重要な位置を占めるであろう。

う。今後の調査、発掘調査の成果による資料の後補が待たれる。

江戸時代

この時代も前代同様に具体的な遺跡は殆ど無く、古記録・古文書・金石文が知られている。

この時代、整備された中山道・碓氷(横川)関所など、諸街道往来の監察の一環の中、特に関東に入る碓氷関所は徳川幕府の生命線でもあった筈である。

中山道は、その経路が前代には確実に存在し(古中山道)、第2代将軍徳川秀忠、第3代将軍徳川家光の上洛に伴い整備が完成されたとしている。

碓氷関所跡(24)・横川の茶屋本陣跡(23)をはじめ、街道沿いの堂峰番所(32)・芴石茶屋跡(37)・山中茶屋跡(39)・笹沢施行所跡(40)などいづれも中山道に係る遺跡である。しかし、その設置時期は詳らかではないが、重要性を如何なく表す遺跡であろう。

また、峠越えの麓に当たる坂本宿もこの頃寛永2年(1625)に、整備・完成している。そして、経路上軽井沢宿までの間に上記茶屋・人馬の施行所が置かれている。

古代東山道もただ駅と道だけが存するのではなく、経路上には、何らかの施設の設置も在ったことは上記中山道の遺跡が示唆的である。こと峠越えの当該遺跡地区では、峠の麓・峠越え・中間に必要な施設と相対するのが麓に当たる下平地区、中間に当たる恩賀地区の存在意義があったものと推測させる。

註及び参考文献

参考文献は、第2表 周辺遺跡一覧表下に一覧させてある。

- 1 佐藤義一 1985 「第3章 第6節 碓氷関所」『松井田町誌』松井田町誌編さん委員会
- 2 遺跡地の至近、下平地区小林家に伝わる古文書『覚抜書』に、碓氷関所の協関所として設置された西牧関所の設置経過が年代別に記されている。残念なことに7つの項目が残るが、途中で破損し後半は消滅している。
記録中に「(前略) 宝永三戌(1706)九月 (後略)」があることから、18世紀初頭の頃の文書と判断される。
文書の全文は註1 前掲書に書き下されている。
- 3 『安中志』に横川村条「(前略) 古道ハ八町斗北成ければ、正応二己卯年初めて鎌倉執権北条家より其統関長原関長原とハ関をすえられたるより関名ヶ原と云たる成へきを今ハ関長原と書けりに関をすえられたるを星移り世変わりに絶へハ立りけるを (後略)」とあり、関長原(碓氷坂の関跡)が関名ヶ原と呼ばれていたことが分かる。ただ、何れも「原」が付くことから、関所が設けられていない時などは野原の状態になっていたことが窺える。
『安中志』は、安中藩第15台藩主板倉勝明が編纂した、安中藩領域の地誌である。安中藩領37村の村毎に記されている。現存は、2冊の写本が知られている。これまでに公刊された資料は次のものがある。

中島芳太郎 1898 『校正安中志』
群馬県文化事業振興会 1967 『群馬県史料集 第1巻 風土記篇一』
安中市 2001 『安中市史 第5巻 近世資料編 別冊付録 風土記編』
などに所収されている。



第8図 周辺遺跡図(国土院5万分の1地形図「軽井沢」(平成10年2月1日発行)・「御代田」(平成10年3月1日発行)使用)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	市町村 番号	遺跡名	現況	時代	文献	調査履歴及び概要
1	U129	千駄木遺跡	保存地域	縄文・弥生・古墳	2～5	昭和47年松井田町教育委員会・群馬県教育委員会
2	U128	西野牧向井山遺跡	宅地・畑	縄文・古墳・奈良	1	
3	U130	西平・下恩賀遺跡	山林	縄文	無し	
4	U131	西野牧小山平遺跡	道路	縄文	1・6	昭和62年～63年松井田町遺跡調査会
5	U131	小山平遺跡	山林	縄文	※	
6	U122	入山峠祭祀遺跡	山林	弥生・古墳・平安	7～11	昭和32・43・44・60年
7		北野牧遠入遺跡	不詳	縄文	15	
8	U160	北野牧吹反遺跡	荒蕪地	縄文	2	
9	U125	北野牧上ノ岩・岩ノ平遺跡	宅地・畑	縄文・古墳	1	
10	U127	北野牧高谷遺跡	山林	縄文・古墳	1	
11	U123	北野牧西遺跡	畑地	縄文・平安	1	
12	U124	北野牧狐萱遺跡	道路	縄文・平安	14	昭和63年松井田町教育委員会
13	U121	入山若宮芦田谷遺跡	畑地	縄文	1	
14	U115	入山片地遺跡	畑地	縄文	1	
15	U116	入山飯米場遺跡	畑地	古墳・江戸	1	
16	U117	入山仁田遺跡	保存地域	縄文・平安	13	昭和47年松井田町教育委員会
17	U118	入山暮井遺跡	畑地	縄文・平安・中世	13	昭和47年松井田町教育委員会
18	U119	入山前畑遺跡	畑地	縄文	1	
19	U120	入山疣石遺跡	山林	縄文・古墳	1	
20	0052	初鳥屋遺跡	畑地・原野	縄文	16・6	
21	0001	矢塚遺跡	畑地	縄文	1	
22	U0186	横川の茶屋本陣	保存地域	近世	※	
23	U0184	碓氷関所跡	保存地域	近世	※	
24	U136	横川大林遺跡	道路	縄文	6	平成元年～3年松井田町教育委員会
25	U135	横川萩の反遺跡	道路	平安	6	平成元年～2年松井田町教育委員会
26	U113	原遺跡	保存地域	奈良、平安	6	昭和63年～平成元年松井田町教育委員会
27	U0005	小根山A遺跡	道路	縄文	1	
28	U0015	小根山B遺跡	道路	縄文	1	
29	U174	坂本北裏遺跡	保存地域	縄文・弥生・江戸	17	平成9・15年松井田町教育委員会
30	U112	坂本堰下遺跡	鉄道施設	縄文・弥生・江戸	1	平成9・15年松井田町教育委員会
31	U112	芭蕉句碑	道路		1	
32	U1508	堂峰番所	山林	中世・戦国	1	
33	U1509	碓氷城	山林	中世・戦国	1・20	愛宕山城
34	U1510	虚空蔵の砦	山林	中世・戦国	1	
35	U1511	城峰城	山林	中世・戦国	1・20	坂本城
36	U1514	碓氷坂の関跡	畑	古代～戦国	12・18	
37	U1507	勿石茶屋跡	山林	近世か	1	
38	U1506	大道寺堀切	山林	戦国	1	
39	U1505	山中茶屋	山林	近世か	1	
40	U1504	笹沢施行所	山林	近世か	1	
41	U1503	峠の見晴台		中世～近世	1	
42		碓氷第3橋梁(めがね橋)	保存地域	近代	1	

A 碓氷峠 中山道 B 入山峠 東山道 C 和美峠 東山道脇道 D 富岡道から和美峠に抜ける道 E 千駄木越

文献

- 安中市教育委員会 2011 『安中市遺跡分布地図－市内遺跡詳細分布調査報告書－』
- 松井田町教育委員会 1974 『千駄木岩陰遺跡発掘調査概報』
- 能登 健「10－15 千駄木遺跡」『日本考古学年報26 (1973年版)』日本考古学協会
- 能登 健 1975 「浅間山大焼・榛名山爆裂 考古学に見る北関東の火山災害」『季刊どるめん'78 特集火山灰と考古学』1978
- 中 隆之 1979 「千駄木遺跡」『考古学ジャーナルNo.157 3月増大号 特集・火山灰堆積物と遺跡』
- 日本道路公団 群馬県教育委員会 松井田町遺跡調査会 1997 『関越自動車道(上信越)地域埋蔵文化財発掘調査報告書「横川大林遺跡・横川萩の反遺跡・原遺跡・西野牧小山平遺跡」』
- 山崎義男 1958 「上信国境入山峠祭祀遺跡について(附官道「東山道碓氷峠の検討」)『考古学雑誌四三巻一号』日本考古学会
- 長野県教育委員会 1969 「入山峠および軽井沢地区」『国鉄複線化等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書－昭和43年－』
- 軽井沢町教育委員会 1983 『入山峠』
- 松井田町教育委員会 1986 松井田町文化財調査報告書第1集『入山峠東京電力鉄塔改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 須田茂 「入山峠祭祀遺跡と東山道碓氷峠 山崎義男氏発掘調査の再検討」『群馬文化198号』群馬県地域文化研究協議会
- 群馬県教育委員会 1983 『一群馬県歴史の道調査報告書第十六集－東山道』
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書 1990 『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第109集 仁田遺跡・暮井遺跡』
- 松井田町教育委員会 1991 『松井田町文化財調査報告書第7集五料山岸遺跡』
- 松井田町誌編さん委員会 1985 『松井田町誌』
- 秋池 武 1940 「下仁田町初鳥屋遺跡の石器」『若木考古』第74集 国学院考古学研究会
- 松井田町教育委員会 1999 『松井田町埋蔵文化財調査報告書<10>坂本北裏遺跡』
- 上原富次 1985 「東山道と碓氷坂の関」『松井田町誌』
- 山崎 一 1988 『群馬県古城墓址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会
- 群馬県文化事業振興会 1983 『上野国郡村誌』8 甘楽郡(1)

第5章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の概要

第1項 発掘調査の概要

発掘調査の経過については第2章で、発掘調査の方法は第3章で述べたので、ここでは遺物包含層の具体的な発掘調査方法について記しておく。

当該遺跡は、遺跡の形成が岩陰部及び周辺であるため、「岩陰遺跡」としての調査方針で発掘調査を実施した。

発掘調査は、遺物の出土位置を記録する目的とし、調査対象部分に2mグリッドを設定し、グリッド調査により着手した(グリッドの設定方法については第3章中で述べたので参照されたい)。また、岩陰遺跡の調査方法として一般的な手法、層序毎の発掘を調査の方針の一つとして実施し、開発対象範囲を地山層の露呈を方針とした。

調査は、まず遺跡の土層を確認する目的と、遺跡の内容を確認する目的でB-3グリッドから着手した。そして、このグリッドの北面で確認された土層を基本土層として認定したが、出土遺物が少量であったため、層位と遺物との関係に明確さを欠いた。この層位と遺物との関係については、調査の進展による所見で補完を目指し発掘調査を続行した。

調査区内の土層の把握は、各グリッド単位にセクションベルトで行ったが、調査進行上の便宜を図り、図化部分以外は除去し所見を記録した。

しかし、発掘調査の進展により、遺跡の形成状況が明らかになるにつれ、以下の問題点が見出された。

1. 長年にわたり岩陰部分が利用され、上層は攪乱が多い事。
2. 岩陰部は、西側から東側に向かい傾斜し、堆積土が斜面部の様相を呈し、同一層序内でも変化が顕著である。
3. 岩陰部の幅員が狭く暗いことと、季節風に因る砂埃が土層観察面を汚すため、土層の観察に困難が伴ったこと。
4. 包含層中には、巨岩の崩壊・崩落した礫が多く、掘り下げ調査の障害になり、更に土層観察の障害に

もなったこと。

これらの問題点から、調査着手段階で決定した調査方針の一つ、「層序毎の発掘」は実質的に全うできなかった。

調査方針の変更を余儀なくされたため、遺物出土状態の記録保存として、遺物の平面位置と水平位を可能な限り記録保存として勤め、遺物・図面の整理段階で、土層等との調査所見を総合し、遺物の出土実態が復元できる様に整えた。また、土層断面B-B'部分は、セクションベルトの撤去時に、遺物を層位毎にも記録して収納した。

第2項 岩陰部の概要

調査の主体をなす岩陰部の部分は、東西8m、北1.7mで13.6m²程の面積である。調査着手以前は、東側道路から沢沿いに通行できる程度の道が通っていた。この道は地形なりに千駄木川上流方向に向かい緩やかに登る状態(勾配率2.8%)であったが、岩陰を抜けると勾配は緩くなっており、岩陰の西側、千駄木川沿いの平坦部分につながっていた。

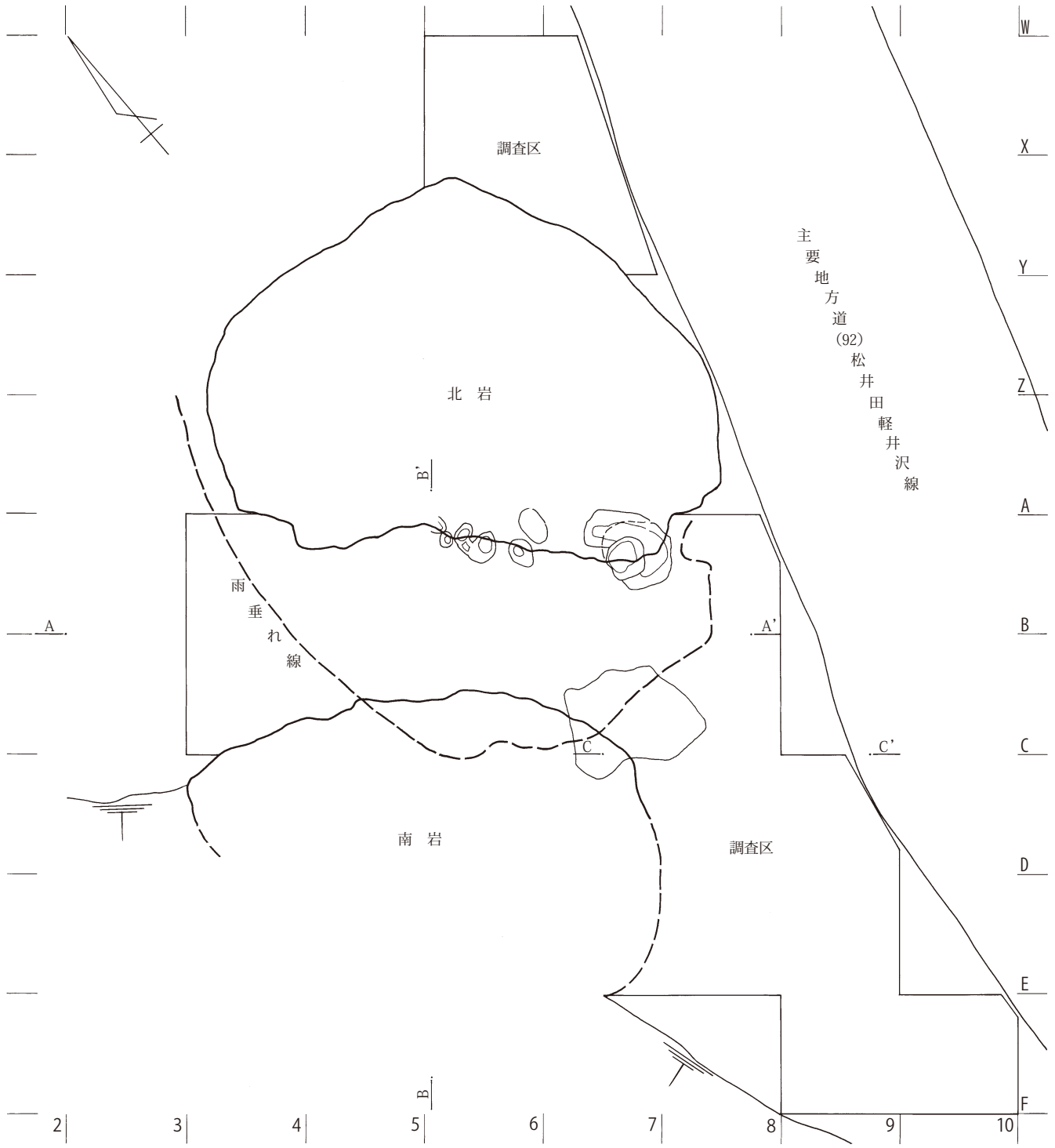
この勾配状態は、遺跡が形成される以前の自然地形であることが土層断面(A-A')から観察される。この岩陰部での調査の結果、表土層から近現代陶器片・砥石、Ⅱ層は無遺物層、Ⅲ層から縄文土器(前期～晩期)・石器、弥生土器(中期後半～後期)・石器、土師器(4世紀～10世紀)・須恵器(8世紀～10世紀)が出土している。また、自然遺物も多く、獣歯骨・貝類がⅢ層土を掘り込む土坑の中から出土している。

遺構としては、土坑・集石・ピットが発見されている。また、多量の灰や焼土なども出土している。

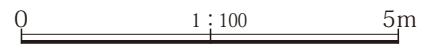
第3項 岩陰外部の概要

岩陰外部は、岩陰の延長部分と巨岩の縁辺部寄りの2者に分かれる。前者は岩陰部分から道路に向かう側の部分で、後者は北側巨岩の北東部分に当たる。

双方共にⅠ層・Ⅲ層土の堆積が確出来、出土遺物には縄文土器が主体で少量の石器、前者では岩陰寄りの部分で土師器が少量出土している。後者では、前期の土器類が主体を成している。



本図中の岩の外郭線は、調査着手段階の状態である。
調査で露呈された岩の下端範囲は記未録である。



第9図 調査区全体図(1:100)

第6章 発見された遺構・遺物

第1節 遺構・遺物の概要

第1項 遺構の概要

発見された遺構は非常に少ない。以下に時代毎に記しておく。また、当該報告書の編集に伴い、遺構名称等の改変は第3表に一覧化させた。

平安時代

平安時代の遺構は、土層断面A-A'・B-B'面の調査段階では攪乱と思われた落ち込みがある。この落ち込みの立ち上がりの上端の直上位には(A-A')、As-B軽石の堆積が確認できる。このことから、当該の落ち込みが平安時代以前の所産に因ることが判断できた。また、土層断面からは、数度に及ぶ切り合い、若しくは掘り返しが認められる。恐らくは、3基・3回にわたっている。整理所見としてこの落ち込みを第1号土坑と認定した。

縄文時代

縄文時代の遺構は、調査段階で3基の集石とピット6基である。この内、集石とした第1号集石・第3号集石の2基は、確認段階で付けられた遺構名称であり、調査の結果集石部分の直下から土坑が発見されている。整理所見としてこの2基の集石を土坑と名称を改め、第2号土坑～第4号土坑とし、第2号集石と呼称された遺構を第1号集石と改めた。

ピットは岩陰部の北岩に沿う状態で地山面から6基が発見されている。調査段階では遺構名称が付与されなかったため、整理作業段階で西側から順次第5～10号土坑の名称を付与した。

また、B-B'の土層断面にピット状の掘り込みが認め

第3表 遺構名称改変一覧表

調査時の名称	報告での名称
無明土坑	第1号土坑
第1号集石	第2・3号土坑
第2号集石	第1号集石
第3号集石	第4号土坑
無明ピット	第5号土坑
無明ピット	第6号土坑
無明ピット	第7号土坑
無明ピット	第8号土坑
無明ピット	第9号土坑
無明ピット	第10号土坑

られたが、これについては遺構名称の付与は行わなかった。

第2項 遺物の概要

発掘調査では、記録保存の一環として、出土遺物にはグリッド単位で個別に通番を付与してある遺物と、グリッド単位と調査区内一括で収納された遺物があった。

グリッド単位で個別に通番が付与された遺物は総数4,947点で、グリッド単位と調査区内一括で収納された遺物は770点があり、双方合わせて合計5,717点の遺物が収納されている。以下、時代毎に収納遺物の概要を記しておく。

近現代

施釉陶器が1点のみ出土している。

江戸時代

いわゆる近世陶磁器類であるが、磁気類は未発見である。施釉陶器2点のみが収納されている。

奈良・平安時代

土師器環1点、土師器甕83点、須恵器環5点、須恵器甕1点、須恵器瓶1点、須恵器羽釜2点が出土している。

古墳時代

古墳時代に該当する遺物は多いが、甕・壺類の判別は困難である。特徴的な個体については数量把握ができるものの、判別困難も含まれるため、古墳時代の土器類として一括しておく。また、甕・壺類に大形の製品は認められない。破片の状態から、概ね器高が30cm程度までの個体と判断される。種別の数量は以下のとおりである。

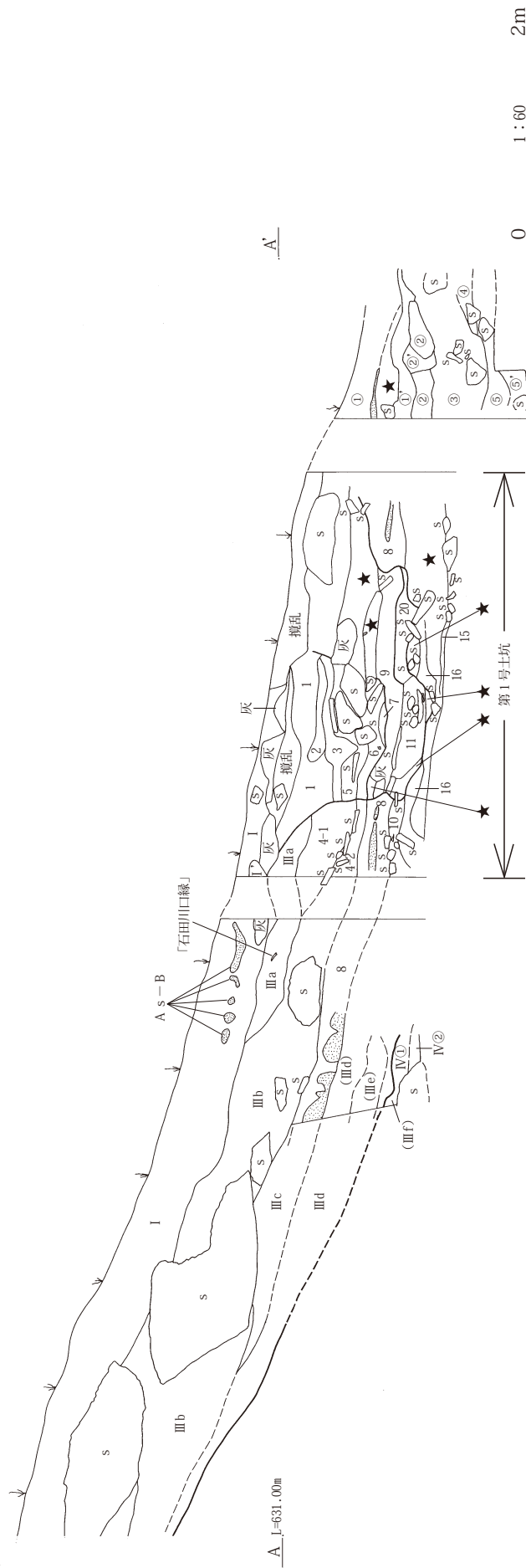
土師器環22点、土師器埴49点、小型赤色塗彩埴3点、土師器高環10点、土師器S字状口縁甕29点、甕・壺類300点が発見されている。合計505点を数える

弥生時代

弥生土器は甕・壺の判別困難なものが多い。このため、双方を一括して挙げる。また、土師器同様に大形個体は無い。甕・壺85点、高環4点、台付甕1点。合計90点が出土している。

縄文時代

縄文土器は出土量が最も多く、総数4,475点、石器75点、剥片類110点が出土している。土器は、早期1点、前期48点、中期が2,639点、後期846点、晩期45点である。



A-A'・B-B'層序(基準線標高値630.00m・631.00m)
 (★=層序分類無く未注記・※=整理時追記)

I層：表土層。腐植土層、黒色を呈する。
 小礫片を含み、ガリガリするがソフトである。
 表面は道の為、Hardになり、スコップが通らない。
 中間にパミラス層を断続的に含み、それより下部は、やや褐色がかるが、明瞭な境界は引けない。
 なお、B-5区においては、本土層からの出土遺物はほとんど無いが、C-5区においては、本土層下部から多量の土師器が出土している。なお本土層上武道路下部の境界は、パミラス下部にあると思われる。本土層内にある灰層は、B-5区東壁に多く広がる灰層の末端である。
 II層：黄褐色土。砂質であり、粒子は比較的細かい。
 D-8の西壁Sectionでは、途中でII層が途切れている。部に到っては、III層の影響で多少黒味を帯びる。粘性あまり無し。
 III a層：第I層よりやや褐色がかかっており、III b層よりも黒い。明瞭にIII a層を認知することができる。土層内の砂礫は径1 cm程度である。II層とほぼ含有物は同じ石田川式土器片有り。基本的に黒色土層のカテゴリに入る。

III b層：褐色土層。I層・III層に比して、10cm以上の礫が多くなり、ロツクの流れ込みも見られる。粘着性に富む。細文晩期及び後期の遺物包含層と思われる。
 III c層：I層パミラスの層である。上部は黒褐色を帯び、III b層とmixingされているか、自然的な管力による攪乱と思われる。
 2層Asco(※分析ではA s-D)とほぼ同じ状態であるが、多量にパミラスを含み、パミラスの粒子も比較的全体的にみて細かい。
 III d層：腐植土層。黒色土層。小砂礫と共に径6 cm前後の礫を含むようになる。ガリガリしていて非常に掘りにくい。土質は粒子も細かく、粘性に富みソフトなものである。ほぼ、B列全面にわたって確認され、加曽利E式土器を包含する土層である。B-5がその西端になると思われるが、B-4に到っては、落盤が入る為調査不可能。なお、B-3の本層確認はあるが無遺物層となる。
 III e層：土層内の砂礫含有状態はIII d層とほぼ同じであるが、礫は若干大きくなる。色調は褐色味を帯び、明らかに認知される。無遺物層である。

III f層：色調は黒色を基調にした黒褐色土層。
 土質はIII e層に酷似。含有物もIII d・III e層にほぼ同様であるが、やや礫は少なくなる。
 中期(加曽利E)の包含層である。
 ☆第III d層から第III f層は、加曽利E式の包含層であり、その量も他に比べて多い。第III e層が、間層として入るが、第III d層と第III f層との関係は、のちに土器形式の追求と共に進む。また、第III b層下部において、加曽利E式が出土したと思われるが、詳細は後日に回す。
 IV層①：いわゆる山砂であろう。黄褐色を呈し、砂質に富む。薄く全面にわたる。一応Sandy Loamとする。無遺物層。
 IV層②：地山。(無遺物層)
 A-1層：④-2とほぼ同じ含有物。褐色土層。
 A-2層：④-2とほぼ同じ含有物。黒褐色土層。
 A-3層：④-2とほぼ同じ含有物。褐色土層。
 B層：褐色土層落石部側のみに堆積しており、砂礫等を含まず、粘性の強い土層である。大形河原石・Rock等を多く含む。無遺物の。

第10図 岩陰部東西土層断面実測図(1:60)



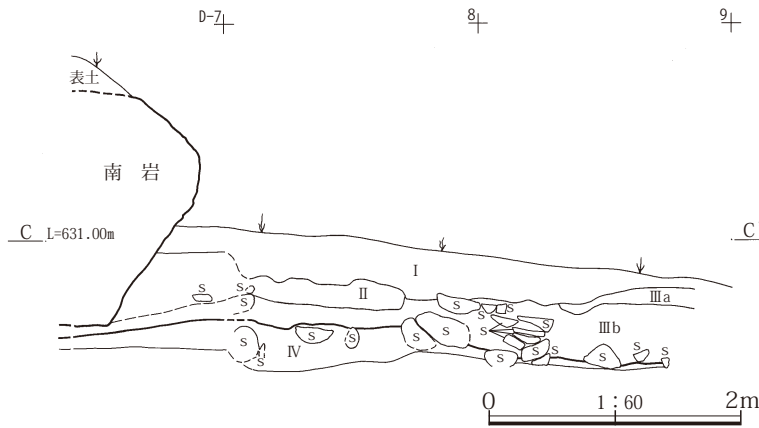
A-A'・B-B'層序(基準線標高値630.00m・631.00m)
(★=層序分類無く未注記・※=整理時追記)

- 1層：黒褐色土層。灰を含む為か灰色がかかるが、第Ⅲ a層とは明瞭に区別できる。含有物は、第Ⅲ aとほぼ同じである。第Ⅲ a層と同一時期のものであると思われる。樽式の包含層？
- 2層：1層の範疇に入ると思われる。黒褐色味は1層に比べて強く、粘性に富み、砂礫の混入は少ない。
- 3層：灰層。2層の範疇に入るのか？砂礫の混入は少ない。樽式土器の包含層か
- 4層：第Ⅲ b層に対比できるものと思われる。C-5区において、本土層の上部に氷の包含層がある。B-5では、褐色土層であったが、本区では、黒褐色土層に漸次変化する。
- 4-1層：未注記。※土師器を包含する。
- 4-2層：未注記。
- 5層：4層の範疇と思われ、礫も比較的大形となり、大形礫が他層比して圧倒的に多い。4層とは色調によって明確に区別され、本層は灰を含み、灰色がかった黒褐色土層である。縄文後期の土器を包含する。
- 6層：灰を主体にした層。黒褐色土(5層)が混入されたものと思われる。含有物は小砂礫があるが、それほど多くない。縄文中期および後期の遺物が包含される。
- 7層：純粋な灰層。6層の残存と思われる。
- 8層：第Ⅲ c層に対比される。第Ⅲ c層は1層-？が、上下関係で入っていたが、本区では、1層にサンドウィッチにされた形で？がある。無遺物層である。(※A s-D)
- 9層：8層に対比される。純粋なパミスは見られず、1層も黒褐色土層の混入でちらばっている。色調は灰黒色に変化、砂礫の含有少ない。無遺物層。
- 10層：第Ⅲ f層に対比されよう？
- 11層：9層から漸移的に変化する。色調もにるが、若干灰がかかる。加Eの包含層、小砂礫を含む。

- 12層：灰層に黒褐色土層が混入したもの。含有物が少なくソフト加E包含層
 - 13層：14とほぼ同じであるが11層に影響されて黒みがかった。一般的に無遺物層であるが、岩陰部に近づくにしたがって⑩同様加曾利Eの包含層となる。
 - 14層：⑭・⑮と同じ性格のものであるが、砂も荒くなり、小砂礫も多く、ガラガラしている。落石側に多く、部分的堆積である。無遺物層。
 - 15層：IV①層と同じ。※
 - 16層：14層と同じであるが赤味が強い。
 - 17層：未注記。
 - 18層：未注記。
 - 19層：未注記。
- ※B-5グリッドでのA-A'とB-B'の交点部分の分層線は不一致。

- B-8'グリッド(A-A'内)
- ①層：表土層。黒褐色を呈し、しまり無し。土質は弱若ハード。パミス層の下はやや黒味が強くなる。上部と土質の点では大差ない。
 - ①'層：黒褐色土層。①層よりなお黒味が強くなる。しまりは①層よりあり。全体的に炭化物を多量に含む。この層中に2か所ほど赤色の焼土らしきものが断面に見られる。
 - ②層黄色砂質土層。砂質性あり。しまり無し。粒子も比較的大きい。部分的に小砂礫がブロック状になっている。その小砂礫は径1~2mm前後。削るとボロボロして落ちる感じである。
 - ②'土質は②と大差ない。②層同様砂質性あり。色調は黄褐色を呈する。Mixされた土層と思われる。
 - ③層：中期初頭の包含層。黒色を呈する。粘性、しまりともあまりなし。
 - ④層：色調は褐色味を帯び、小砂礫を含有、粘性あり。水分も他の層に比して多い。⑤層の範疇に入るものか。

第11図 岩陰部南北土層断面実測図(1:60)



⑤層：砂層 土質・色調とも全体的に均一性がある。若干ザラザラした感じである。
 ⑤'層：砂層。水分が⑤層より多いためか、粘性も大である。⑤層のようなザラザラした感じである。⑤よりも黄色味がやや強い感じである。この層には、径30cm前後の礫が詰まっている。基盤だと思われる。E-8、D-8などに見られた大きな石とともに小砂礫(②層で局部的に見られたものと同様のもの)はサブレでみた限りでは含有されない。もう少し下位に存在する可能性もある。

C-C'層序(基準線標高値629.00m)
 I層：表土攪乱層。腐植土層。道路工事の時にI層の上のパミスが盛土されたが、その下にこのI層土があったためか、かなりよくしまっており、ガチガチした感じである。
 II層：未注記。(※基本土層II層に準拠か。)
 III a層：黒色土。腐植土層。I層より土質はソフト。粒子はあまり密ではない。また、若干IV層土パミスの小粒子を含有。この層からは中期の遺物出土をみる。III a層は、このSectionでは、途中で途切れている。土質は大局的にはフカフカといった感じである。
 III b層：褐色土。土質の点から見れば、いわゆるIII b層はII層に近似した土層と思われる。このSectionでみるIII b層は、III a層の影響で部分的に黒味があったところが見られる。比較的ソフト。この土層にも径20～30cmの石を多く含む。
 IV層：砂礫層。小砂礫を全体的に含むと同時に、径30cm前後の石も多く含む。土質は移植で削ると崩れ落ちる位締りが無い。このIV層が地山である。

第12図 岩陰外部土層断面実測図(1:60)

第2節 遺構の内容

第1項 縄文時代以降の遺構

第1号土坑(第10・13・25図、第9表、PL. 7)

当該土坑は概要でも記したように整理段階で名称を付与した土坑である。以下当該土坑について詳述しておく。

土層断面図A-A'(第10図)の中央部分から東側にかけての部分と、B-B'(第11図)の北側の部分には、表土層直下に数次にわたる掘り込みが認められる。この掘り込みの範囲は、北岩沿いにB-6・B-7グリッドを中心に東西3m、南北2mが計測される。そして、土層断面図からは深さ1.48mで3時期以上の掘り込みが推定される。

この掘り込みの立ち上がり部分は、As-B軽石を被覆する土層の直下に当たっているが、As-B軽石の残存がA-A'の断面図中でもB-5グリッドの東半分に限られた範囲であり、この掘り込みの立ち上がり部分で途切れる状態でもある。この掘り込みの立ち上がり部分では灰が堆積しており、この灰がセクションベルトを隔てて延長上にも認められ、As-B軽石の下位部分に堆積する状態である。また、B-B'側の土層断面ではAs-B軽石の堆積は確認されないが、掘り込みは攪乱とI層に被覆された状態で認められる。これらの点を勘案すると、土層断面中の掘り込みはAs-B軽石の降下・堆積

時期を大きく遡ることはなく、古代の遺構の可能性が高い。

第13図には双方の土層断面に認められる掘り込みの範囲を平面図上に示した。また、この掘り込みの範囲は後述する貝類と獣歯骨が集中して出土する平面範囲と垂直分布とが重複している。これらの中には、第21・52図に図示した骨角器の牙鏃(475)・貝製垂飾具(477)・貝輪(478)、保存状態の非常に良好なアワビ(SH15・38)や殻皮の遺存するカワシンジュガイ(SH16・33・75・121)が含まれている。出土状況からみて、貝類・獣歯骨は、この掘り込みに伴う遺物として判断される。

出土遺物は、弥生土器・古墳時代の土師器なども出土しているが、前述したAs-B軽石の堆積状態と立ち上がり部分の状況と第19図の遺物の平面分布図・垂直分布から、第24図47・48・56・60・61に掲載した「コ」の字状口縁の土師器甕2点、須恵器坏底部1点、羽釜2点が該当する。これらの遺物が示す年代は9世紀後半から10世紀前半頃であるが、これらは全て細片化しているため確実性を欠いている。また、同様に細片でC-7グリッド出土の10世紀後半の土釜(第25図51)が、この掘り込みの年代を示唆していると考えられる。そして、前述のAs-Bの堆積状態をして、この掘り込みの上限年代とするならば、As-Bの降下時期に近い年代を当てられよう。

第2項 縄文時代の遺構

第2号土坑(第14・28図107～109、第15表、PL. 8・9・

29)

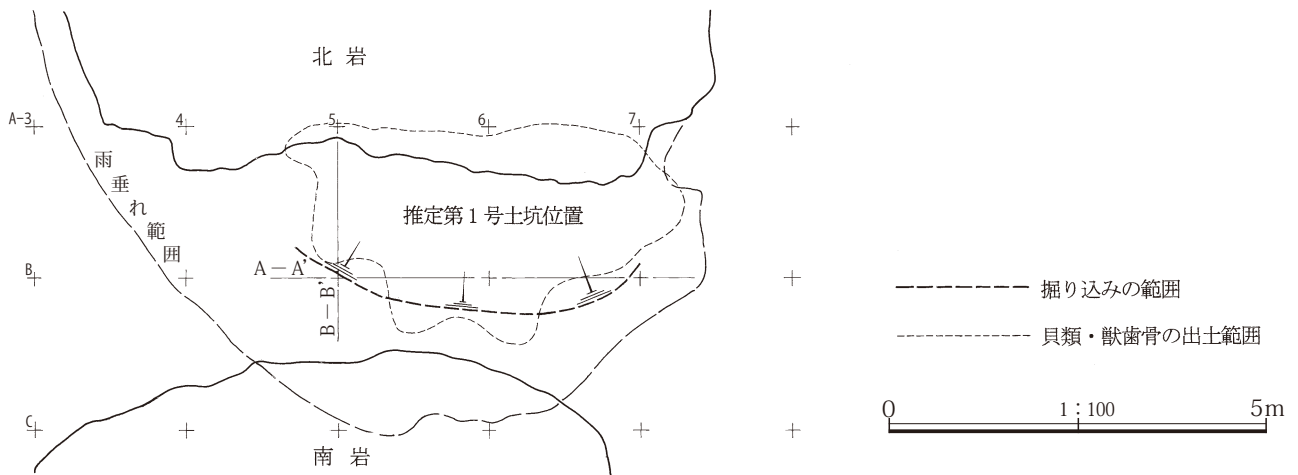
当該土坑は、A・B-7グリッドに位置するが、主体をなす部分は、B-7グリッドの北東隅部側に当たっている。この部分は、岩陰の東側開口部分に当たる位置である。

調査段階では「第1号集石」として名称された遺構である。重複関係は、第3号土坑を切り構築されている。

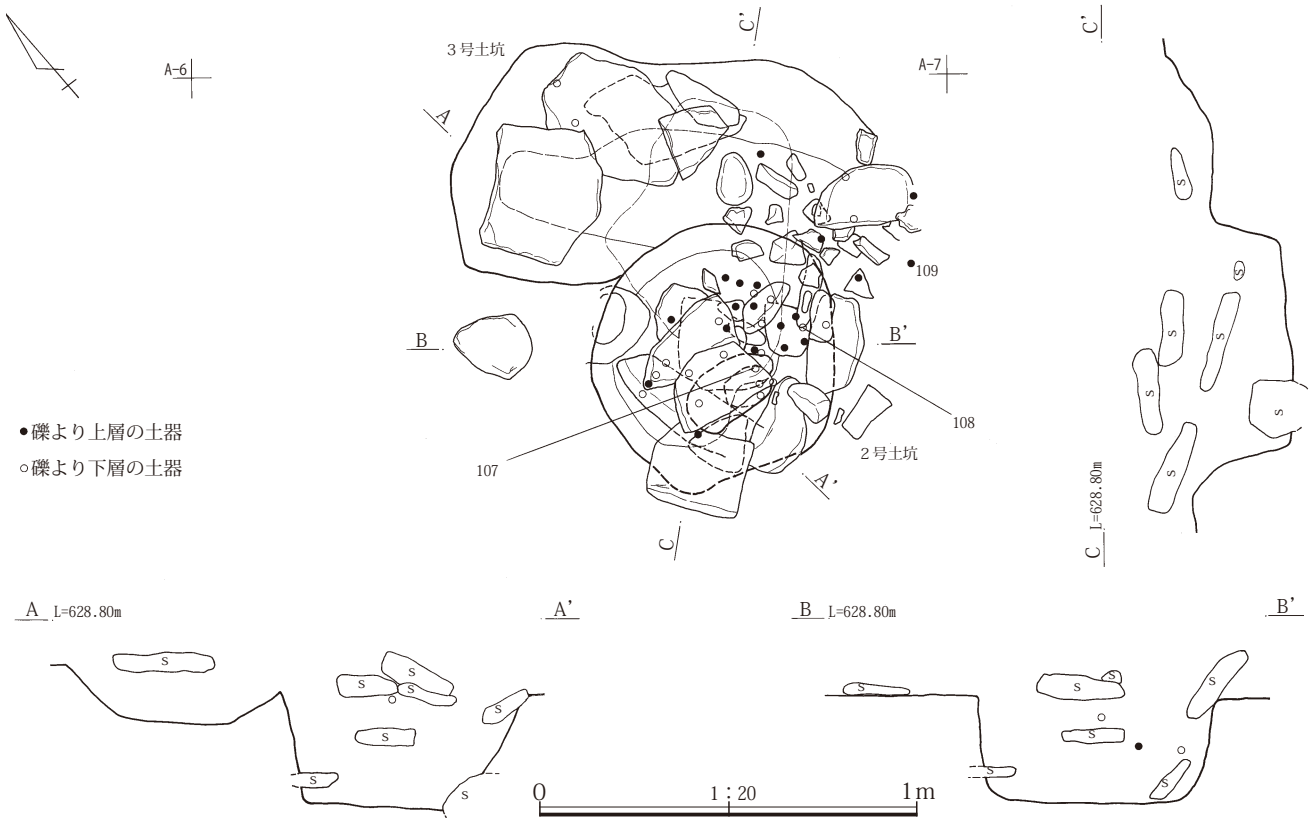
土坑は円形状を呈し、規模は径0.65m、深さ0.43m程で、覆土内の状態は、詳細な記録がないため不明であるが垂角礫が扁平面を水平にする状態で出土している。

調査時に集石としたのは、この双方の土坑内に廃棄された礫として捉えてのことであるが、礫の出土量が多いため、人為的に埋設されたことが考えられる。また、この礫の確認面では、当土坑と後述の第3号土坑とに跨って灰層が65cm×45cmの範囲で不整形に被覆した状態で出土している。この灰(岩の風化により生じた凝灰岩粉か)の性格は不詳である。

当該遺構の発見面も不詳であるが、標高で見ると628.60m～628.40mである。これを岩陰部の縦断土層



第13図 第1号土坑推定図(1:100)



第14図 第2・3号土坑実測図(1:20)

断面(A-A')に対比させた場合、上記標高値と同位の部分は、15層土中に当たり、8層土(A s-D軽石層)の直下となる。このことから、時期は縄文時代中期頃の所産を推定できる。

出土遺物は、加曽利E 3(第28図107～109)式の土器片と共に五領ケ台式の出土も多い。石器類の出土は無い。また、灰の確認面でカワシンジュガイ(S H82)が出土している。

第3号土坑(第14図、PL. 9)

第3号土坑は、岩陰部の入り口部付近、北岩に寄った部分で発見されている。位置はA・B-7グリッド内、重複関係は、前述第2号土坑に切られている。形状は長方形を呈すると考えられる。長軸を東西に採り、長軸1.12+αm、幅0.65m、深さ0.17m程である。覆土は記録がないため不明である。

坑内から30cm×30cm・30cm×50cmを計る礫が出土しているが、写真・断面図から第2号土坑と同様扁平な垂角礫と判断される。

当該土坑は、調査段階に「第1号集石」とした遺構の一部に該当する。調査段階では、前述した第2号土坑と連接する状態にあり、発見状況は同様である。

出土遺物は少量あるが、第2号土坑と共に一括取り上げられているため、双方の分離はできない。時期は第2号土坑と同時期か、第2号土坑との切り合い関係から、

加曽利E 3式以前の時期が考えられる。

第4号土坑(第15・28図110～113、第15表、PL. 8・22)

調査段階では「第3号集石」とされた遺構であるが、集石直下に土坑と判断される掘り込みの存在から第4号土坑とした。

当該土坑は、第2号土坑の直下で発見されている。このため発見場所、位置は第2号土坑と同じである。

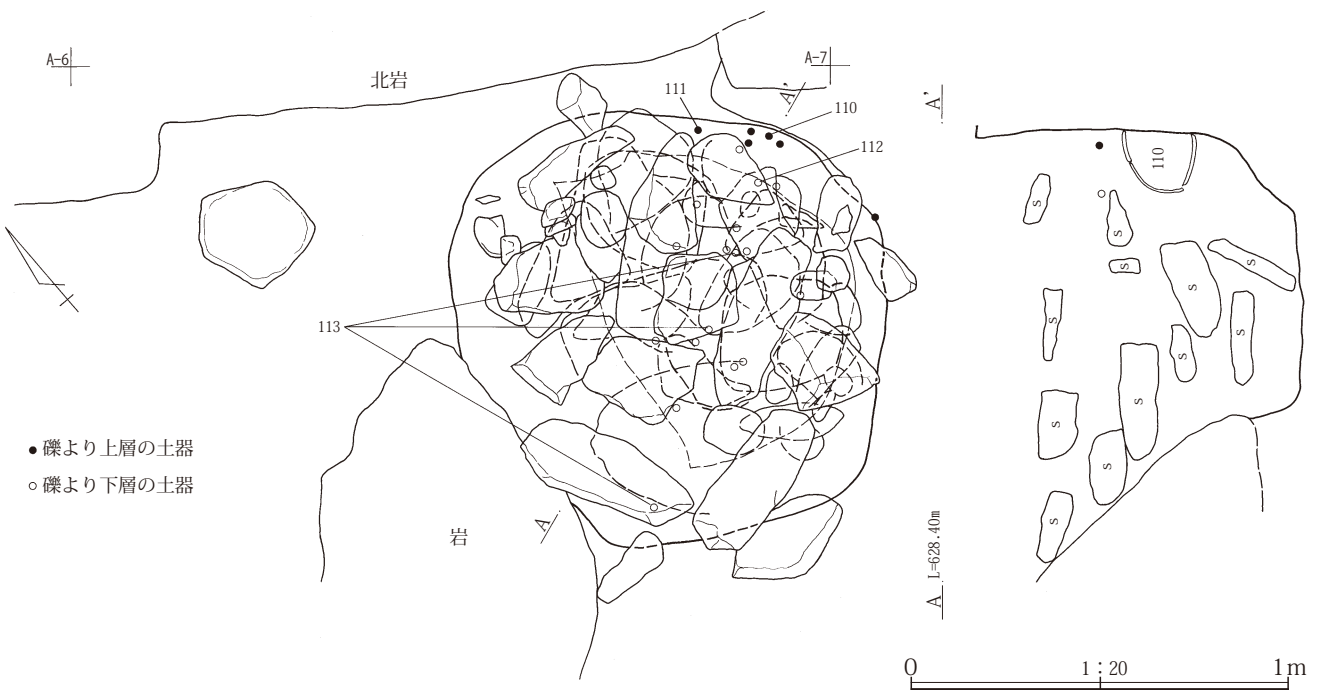
当該土坑は、前述第2号土坑に完全に重複する状態であること、覆土内の状況の同じであることから、双方は同一遺構の可能性が考慮される。

形状は、不整形円形を呈する。規模は、長径1.27m、短径1.08m、深さ0.87mを計る。覆土内には垂角礫が充満した状態である。断面図では礫が混んだ状態には見られないが、記録写真には充満した状況が看取され、人為に因る所産と判断される。

遺物は、覆土に廃棄された礫の間隙から土器類かが出土している。土器類は第28図110～113に示した中期五領ケ台式の土器片が出土しているが、未掲載遺物には4点の土器片がある。時期は出土遺物から、五領ケ台式と判断される。

第5～10号土坑(第16図、PL.12)

第5～10号土坑は岩陰部内北岩の岩壁沿いで、いずれもB-6グリッド内で発見されている。発見面はIV層土上面(標高628.292m程)である。覆土の記録は無い。



第15図 第4号土坑実測図(1:20)

第6章 発見された遺構・遺物

また、これらの土坑の中で、第4号土坑だけは北岩を壁の一部としている。小形の土坑で通有「ピット」と呼称する遺構である。規模は以下のとおりである。

出土遺物は、第7号土坑から土器細片1点(形式判断不能)と獣骨(B90イノシシ?)が出土している。

- 第5号土坑：長0.60m・幅0.40m・深さ0.16m
- 第6号土坑：長0.50m・幅0.40m・深さ0.26m
- 第7号土坑：長0.53m・幅0.38m・深さ0.30m
- 第8号土坑：長0.38m・幅0.20m・深さ0.28m

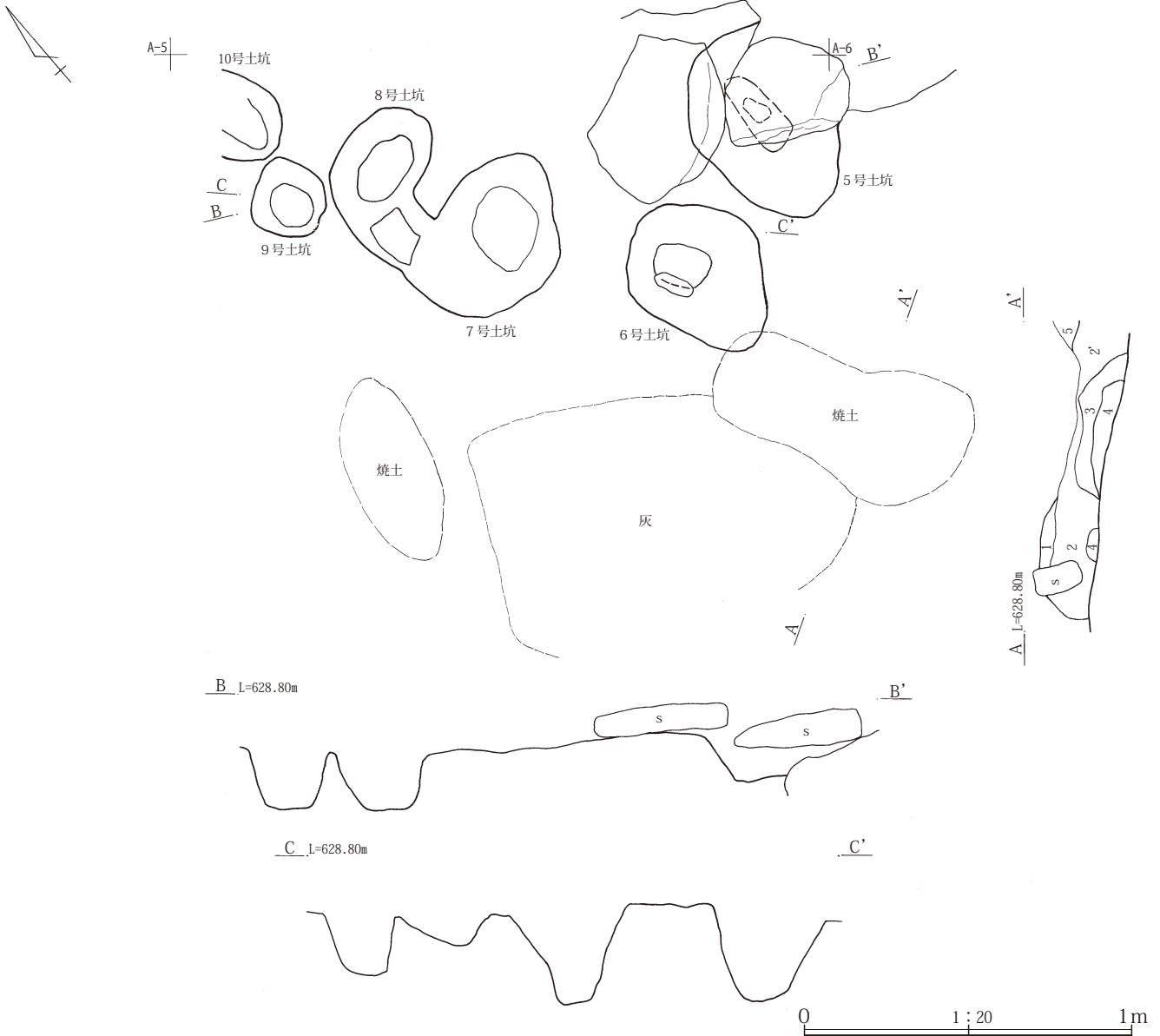
第9号土坑：長0.25m・幅0.24m・深さ0.18m

第10号土坑：長0.21m + α ・幅0.25m・深さ0.25m

第1号集石(第17・29図、第15表、PL. 8・22)

当該集石は岩陰部の入り口部の左側、C・D-7・8グリッドで発見されている。

土坑などの掘り込みは認められず、長さ10～40cm程の大小さまざまな亜角礫が平面的に積み上げられている。集石の構造は3層の構造におり、初層は楕円形状に広がり、長軸(東西) 2.32m、短軸(南北) 1.70mの範囲



層序(基準線標高628.80m)

- 1：灰まじりの焼土。よく焼けており、上部に灰が混ざっている。この焼土全体の厚さはそれほどではなく、この部分が一番多い。
- 2：砂質茶褐色土層 しまり粘性ともなく、さらさらしている。遺物はまるで含有せず、部分によっては下部灰層の下にも在る。
- 2'：2層と同じものだが、上部の5層の影響により黒味がかっている。
- 3：黄褐色土層(砂層) しまり粘性とも無いが、2層よりは若干ある。下部4層の砂質黄色土に近似するが、火を受けているためかやや赤っ

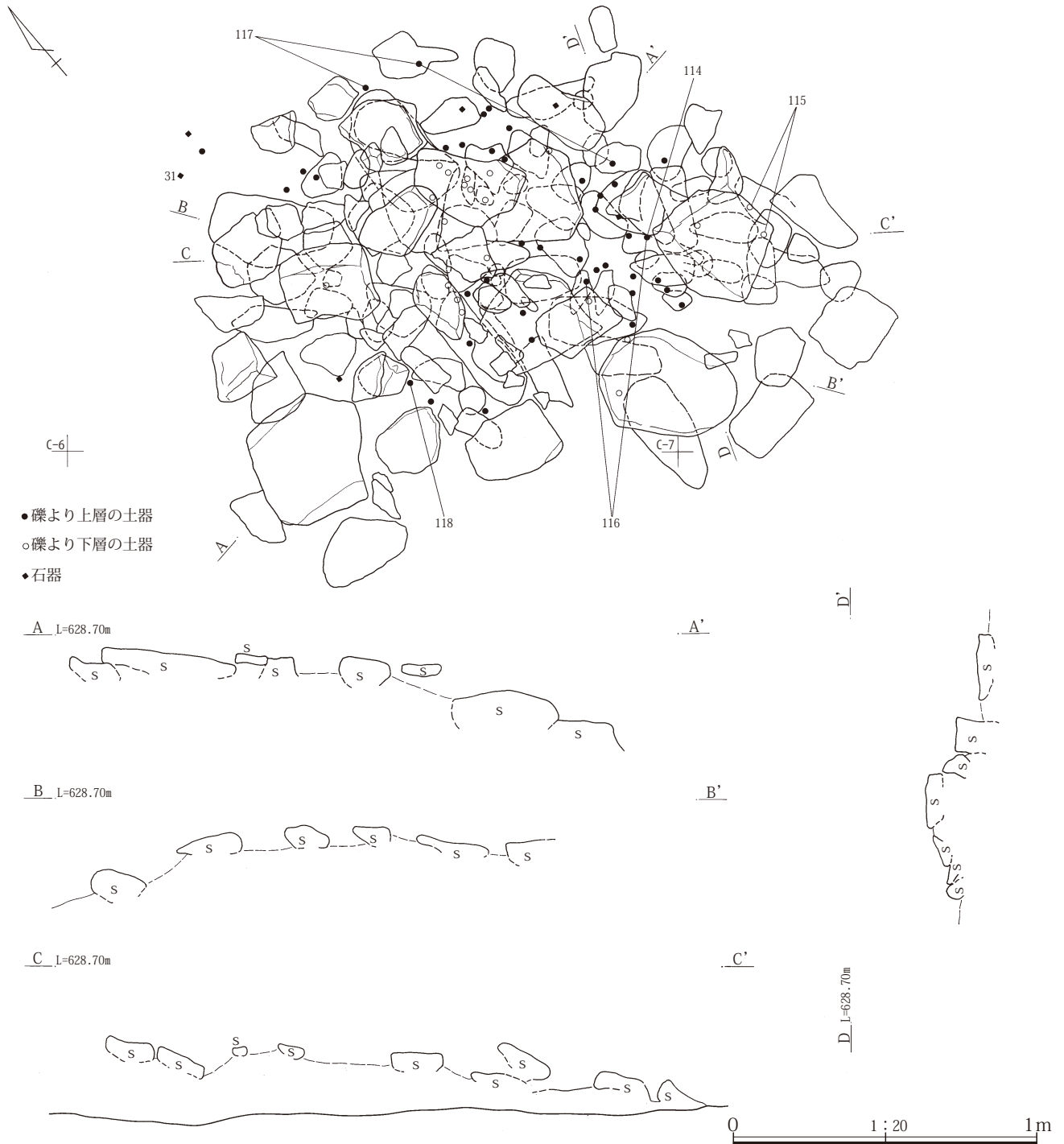
- ぼい。この層は、4層面において、B-6・B-7 南側半分に分布している。
- 4：砂質黄色土層 しまりは無し、粘性は2層・3層寄りも強い。全くの無遺物層である。標準層位のIV層にあたる。
- 5：黒色土層。 灰層と2層の間であり、その堆積は、B-7区の南側に部分的にあるのみである。しかし、C-7でどのようにのびているかさだかではない。しまり粘性とも無くさらさらしている。

第16図 第5～10号土坑実測図(1:20)

に広がる。2層目はやはり楕円形状で長軸(東西)1.72m、短軸(南北)1.32mの範囲に重なり、3層目の最上層は類円形状の楕円形状で、長軸(東西)1.05m、短軸(南北)0.88mに重ねられている。集石を構成する礫は、垂角礫を主体に円礫が混じる状態である。被熱酸化反応等の有無については不明である。この初層面の下面は、当該集石の初層の下面は、構築時の生活面に当たるが、土層断面(A-A')で対比させると16層中に当たる。この16層は、前述第1号土坑の底面直下に当たっている。この第

1号土坑の攪乱により、部分的な破壊が及んでいるのか不明である。底面の相当する16層は縄文時代の包含層であることから、集石が形成された時期の生活面と判断される。なお、第17図に掲載した断面図は、調査段階で各面毎に作成された断面図であり、3層の構造を図化したものではない。

出土遺物は、礫の間隙から土器片78点が出土している。これらの中から7点(第29図114～120)掲載した。時期は、五領ケ台式期と考えられる。



第17図 第1号集石実測図(1:20)

第3節 遺物の内容

第1項 出土遺物層位の所見

千駄木遺跡の発掘調査により多くの遺物が出土している。本節では、出土遺物の層位的所見を記す。

基本土層は、I層は表土層。II層土は無遺物でありB-3グリッドでの部分的に確認された土層である。III層土は縄文時代から平安時代までの包含層である。IV層土は地山土である。

これらの中のIII層はIII a～III f層に分層されている。この中のIII c層はA s-D軽石層である。III a・III b・III d層そして、土層断面中のアラビア数字での各分層が含まれる(8層もA s-D軽石層)。

後述する遺物種毎での包含状態から、III a層は古墳時代～平安時代であり、III b層は確実ではないが古墳時代・弥生時代の包含層の可能性があり、III d層は縄文時代の包含層である。そして、9～19層の細分された層がIII d層に対比される土層である。また、土層断面A-A'東端部分の②～⑤層は細分されたIII層との対比ができなかった。

1～3・5～7層は第1号土坑内の層位に付与された層序である。

第2項 遺物の出土状況の傾向

出土遺物の概要については本章第1節第2項で記したが、本項では出土位置・層位の特徴に就いて記す。また、第4表には、出土位置が判明している遺物をグリッド単位に数表化した。

陶器(第21図)

陶器は図示した3点が収納されている全てである。この3点内1・2の2点は未注記であり、出土層位は不明である。3は表面採集により収納されている。このため、出土層位との関連を記述することは出来ないが、土層断面A-A'及びB-B'では、表土層中でも表土層下でも掘り込み等が見られず、遺構の痕跡が確認出来ない。これらの事から、陶器類に伴う出土状況等は調査時の地表面に限りなく近い部分であったと考えられる。

土師器・須恵器・鉄滓(第18・19・22～24図、第4・7～11表、PL.28)

土師器は544点の出土遺物が収納されている。整理業務を実施する中、土師器を含め、須恵器・弥生土器の3者の出土量(700点)が多いこと判明した。そして、当該遺跡が岩陰遺跡であることから、この3者がこれ程の量と、遺存状態が良好な個体もあることから、これらの遺物の

第4表 グリッド別土師器・須恵器・弥生土器・貝類・獣歯骨出土量一覧表

土器種	グリッド 器種	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	C-3	C-4	C-5	C-6	C-7	C-8	D-8	E-8	S B	不明	計	
		土師器	埴	0	1	0	2	0	2	0	1	4	7	1	1	0	0	0	0
小形赤色	0		0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
高坏	0		0	1	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	4	1	10
S字甕	0		0	2	10	0	0	0	6	3	4	1	0	0	1	1	0	1	29
刷毛甕	0		0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	9
刷毛壺	0		0	0	1	0	0	0	6	5	0	0	0	0	0	0	2	0	14
甕・壺	1		1	7	31	27	0	1	44	75	63	1	0	0	3	0	5	18	277
奈良・平安甕	0		0	1	2	11	3	0	9	37	8	1	0	0	1	0	7	1	81
コの字甕	0		0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
須恵器	坏	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	甕	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	羽釜	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計		1	3	13	53	54	10	1	71	145	89	4	1	0	5	1	22	32	505
弥生土器	甕	0	0	2	4	1	3	0	3	16	2	2	0	0	0	0	1	0	34
	壺	0	1	1	6	2	2	0	7	22	6	0	0	0	0	0	1	3	51
	高坏	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	4
	台付甕	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
計		0	1	3	11	3	5	0	11	39	9	2	0	0	0	0	2	4	90
動物遺存体	貝類	0	0	7	30	74	0	0	0	0	10	3	0	0	0	0	0	4	128
	獣歯骨類	0	0	119	130	109	1	0	0	0	20	10	0	0	0	0	0	86	475

※ S B = セクションベルト(C5・B5グリッド)

出土傾向を探る為、第18～20図の分布図を作成した。

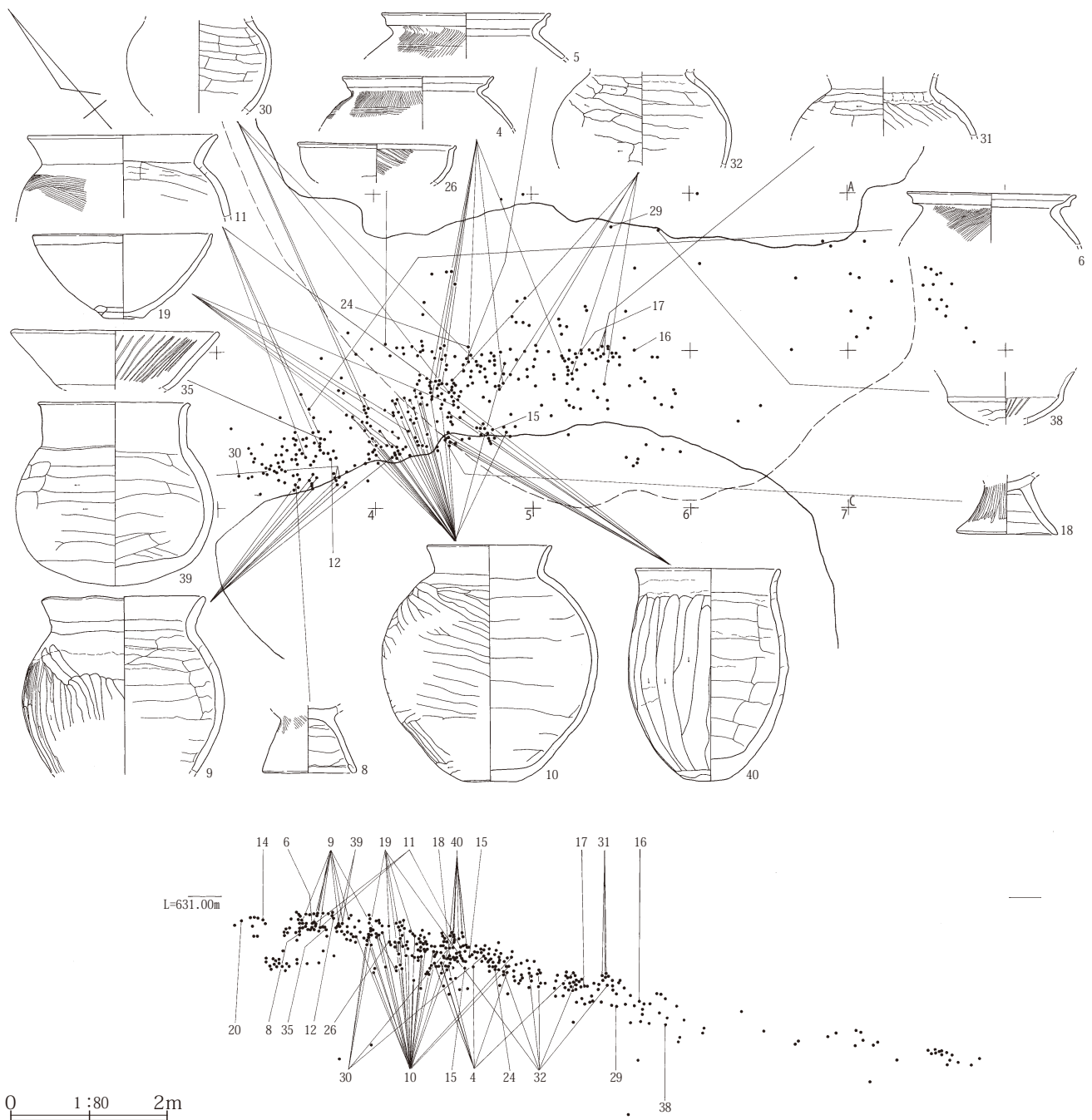
土師器の分布図は第18・19図である。両図は時期的傾向を明瞭にさせるために作成した。第18図は、古墳時代の土師器の中で、図化掲載した出土位置が明確な18個体を合わせて示し、第19図には、7世紀後半以降の遺物図を合わせて示してある。

しかし、古墳時代の土師器甕類は特定種、特徴的な器形を判断出来る個体以外は時期別に分別することが困難であった。

この分布状態の傾向は、岩陰部西側で北岩に沿う状態

で集中している。第18図の垂直分布での傾向として、古墳時代の土師器は、分布の下半側にやや集中する傾向が看取される。

一方、この垂直分布を土層断面A-A'に投影すると、Ⅲa層・Ⅲb・4-1層に達する範囲になり、Ⅲa・Ⅲb層に相当する範囲に集中する傾向がある。だが、平面分布状態で土層断面部に達するのはC-5グリッド部分であり、Ⅲb層に相当する部分は土層断面から離れた南岩に寄った部分である事から、Ⅲb層との直接的な分布は認められない。土層断面と分布が重複するⅢaは確実に



第18図 遺物分布図1(土師器)

な包含層として判断される。そして、4-1層も古墳時代の包含層である可能性が指摘出来る。また、土層断面記録保存図のⅢ a層中には、「石田川口縁」と書きされた土器片が図化されている。これらの事から、Ⅲ a層が主たる古墳時代の遺物包含層であることが確認できる。この点は調査時の所見に一致している。

7世紀後半以降の土師器・須恵器の分布傾向は、垂直分布で上層部分に集中する傾向が看取されることから、前代より時間の経過による層位的矛盾は無い。

この中で、北岩の東端側では9世紀後半から10世紀前半にかけての土器類(第24図47・48・56・60・61)がやや多く出土する部分がある。この部分は、前述した第1号土坑に重複する位置に当たる。この第1号土坑に重複する部分として、B-5~7グリッド、B-8グリッドの

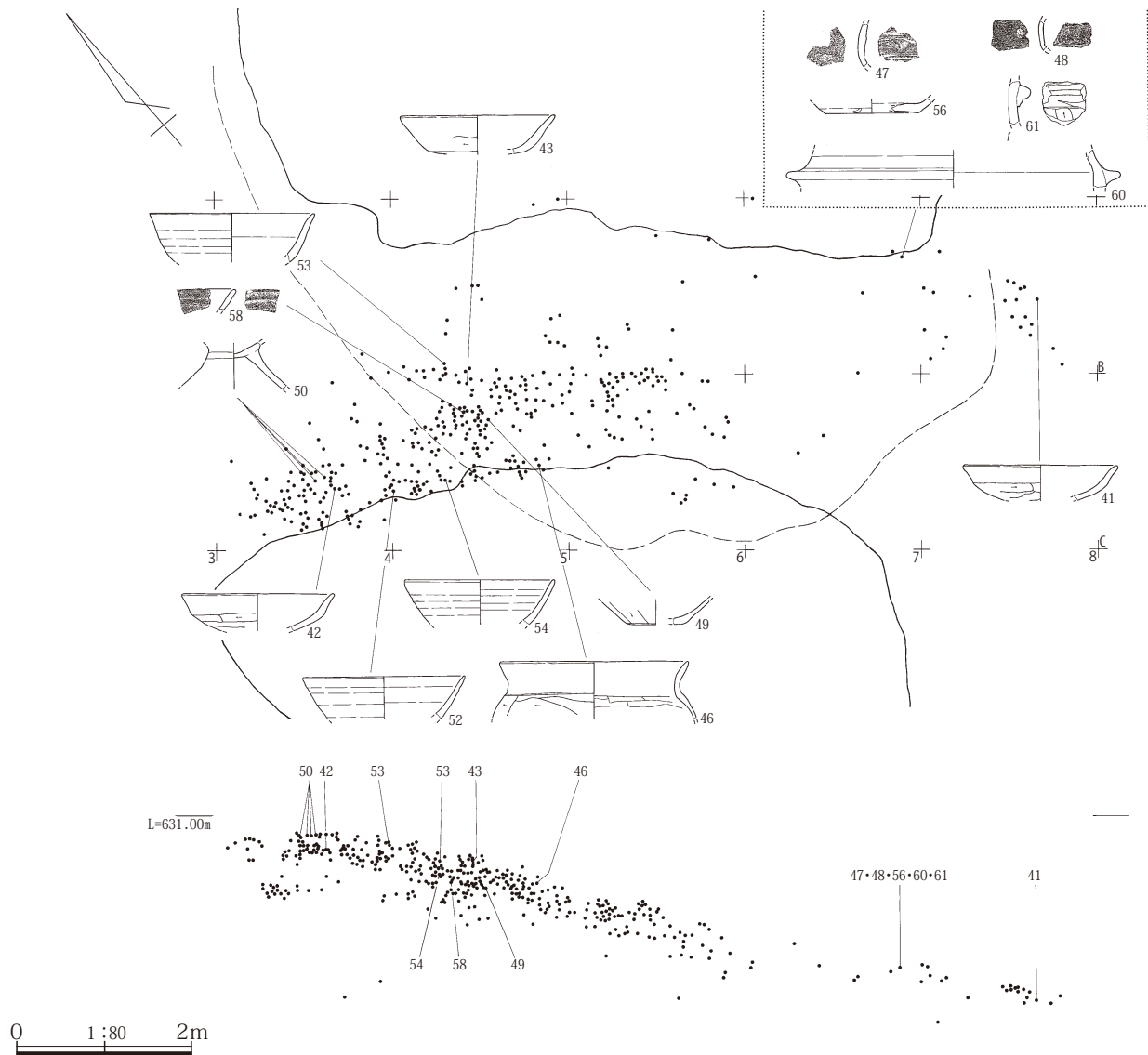
西端側に分布する遺物が該当する。いずれも細片化している。これら土師器・須恵器等の出土状況は、何らかの掘り込み、古い時期に攪乱を受けた痕跡として捉えられる。

弥生土器(第20・26・27図、第4・12・13表、PL.28)

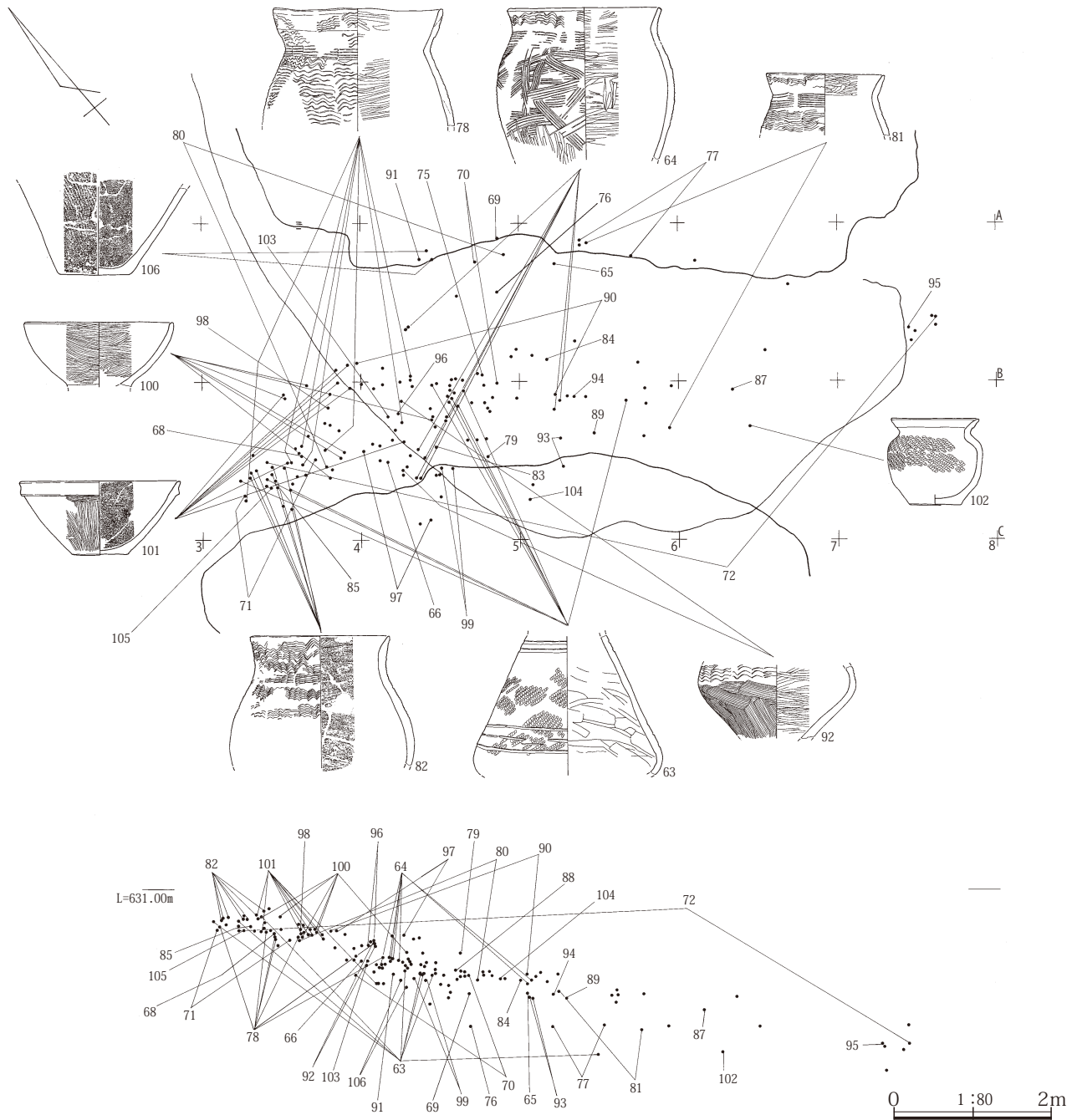
弥生土器は119点出土している。これらは、細片化した破片と接合率の高い破片であり、小形品(第27図102)は類完形である。

この弥生土器の分布状況(第20図)は土師器・須恵器の出土分布域に重複し、垂直分布では、土師器・須恵器の分布域の下半部に重複する状態である。このことは、土師器・須恵器の出土状況に重複することでもある。

これら3者の出土状況が重複することは、この分布域に限り、何らかの遺構の存在を推測させる。当該部は調査段階以前から、長年通路として利用されていたことか



第19図 遺物分布図2(土師器2・須恵器)



第20図 遺物分布図3(弥生土器)

ら、弥生～平安時代も通路的な機能も考慮されよう。

縄文時代(第28～47・49～51図、第5・15～25表、PL.29～39)

縄文時代の遺物は土器類4,469点、石器類260点、骨角器類3点が出土している。これらの中で、グリッド別に収納番号が付与されている遺物は4,631点(土器類4,524点、石器類107点)ある。これらの殆どが岩陰部出土であり、分布図を作成したが、量の多さから個物の出土位置が判断できないほどの密集状態になってしまった。このため、第5表にグリッド別、岩陰部内外別の出土数を数

表化して示した。

これらの遺物は、表土層からⅢ層土中と、第1号土坑の覆土内から出土している。特に、第1号土坑の位置するB-6・7グリッド内からの出土量が突出している。しかし、第1号土坑は上限が10世紀前半ごろの遺構であることから、この双方のグリッド出土遺物は攪乱され混入した遺物であることが推定できる。次いでC-5、C-7、C-6、B-8、E-9、B-5、の順で多く出土している。

これらは、出土層位を詳細に分離出来ないが、土層断



第21図 遺物分布図4(貝類・獣歯骨)

面A-A' 註の8層(A s-D)を上下する層位で出土が多い。この事は、基本土層での所見と合致している。

また、岩陰外部出土遺物では、北岩の北東側の部分(X・Y-6・7グリッド)では、対応する土層は不明であるが、前期の土器片の出土が目立っている。同様に南岩のC-7・D-7グリッド区界部分では、最下層に前期の土器片の出土が目立っている。

前期の土器片は、上記2か所が主体的な出土部位である。中期は、全体に散在する傾向だが、五領ケ台式土器に限れば、全体傾向としてⅢ層下層での出土が多く、やや大形の破片が目立っている。後期は岩陰部内で、晩期は岩陰部でもⅢ層上層程に相当する部位で出土が目立っ

ている。

動物遺存体(第21図、PL.41～44)

動物依存体には、貝類と獣歯骨がある。貝類は128点、獣歯骨478点(内1点は地元の方の寄贈品)、合計605点を数え、土師器・須恵器・弥生土器の出土総数を超える量に達している。

これら605点の平面分布と垂直分布を第21図に図示した。この平面分布域での大半は、前述第1号土坑の範囲の中に当たっており、垂直分布も同様である。

この状況は、動物依存体が第1号土坑に伴う遺物として解される。

また、第1号土坑の推定域から外れる部分に、カワシ

第5表 縄文土器グリッド別出土量

上段は岩陰部出土数量		グリッド														計	
下段は岩陰外部出土数量		土器数量														計	
※S Bはセクションベルト(B-B')		石器														47	
		剥片等														135	
グリッド	X-6	X-7	Y-6	Y-7	B-8	C-8	D-7	D-8	D-9	E-7	E-8	E-9	F-9	F-10	不明	計	
土器数量	45	40	3	5	298	197	91	106	82	30	14	252	4	2		1169	
石器	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	12	15	合計
剥片等	2	3	1	2	5	8	3	8	0	1	2	0	0	0	28	63	4946

ンジュガイ、獣歯骨の分布が認められることから、第1号土坑の攪乱に起因して第1号土坑内に混入した可能性が濃厚でもある。

この貝類の中には貝輪が1点、垂飾1点(第52図)がある。通有、貝輪は縄文時代に代表される遺物種でもある。しかし、この貝輪はタマキガイを使用しており、通有例ではベンケイガイが殆どである。また、質的遺存状態が良好なため新鮮に見える。

第4節 出土遺物

第1項 陶器(第22図)

陶器は前述したように3点の出土で、第22図1～3を図化した。

1は、小形の土瓶の蓋である。近現代の益子か笠間産と思われる。2は、18世紀前半から中頃の播鉢である。産地の特定は不能であった。3は内面に柿釉、器外面に黒色鉄釉を施している。産地は1同様である。

陶器類の出土量の少なさは、当該遺跡の地が、生活範囲の中に含まれていなかったことが最大の要因と考えられ、少ないながらも出土があったことは、何らかの理由でこの岩陰が使われたことを物語っている。

第2項 土師器・須恵器・鉄滓

土師器・須恵器(第23～25図、PL.28)

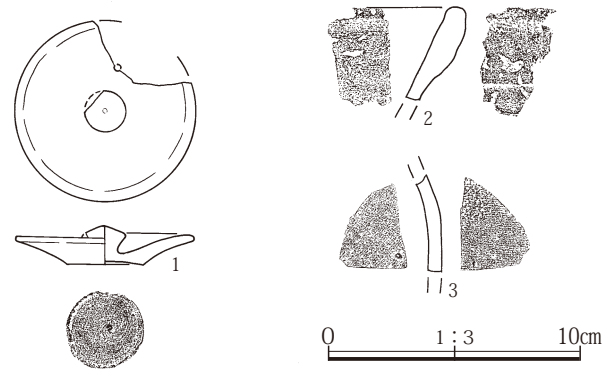
土師器は、S字状口縁甕(4～6)に代表される4世紀前半の一群(4～7・19)、4世紀後半代の土器(11・12・14・18・21・37の6点)、5世紀前半の土器(9・10・15・16・20・29・34・35・36)9点、5世紀後半～末(20・22・23～28・31・33)、6世紀中頃～後半(30・32・38～40)5点、7世紀後半(41・42)2点、9世紀前

半(43～45・52～53・56・57)7点、9世紀中頃(46)1点、9世紀後半(47・48)2点、10世紀前半(60・61)、10世紀後半(51・55)、他9世紀代(49・50・54・58・59)5点などがある。これらは、全て小形～中形規模の土器で、図化を除外した土器類を含めても大形の土器は認められない。4世紀～9世紀の出土土器の特徴として、この大形器種が認められないことが挙げられる。

土器の推定される産地の傾向として、6世紀台までは古代多胡・甘楽郡産が多く、9世紀台は碓氷郡(秋間産)の製品が目立っている。また、利根郡(月夜野)に代表される「月夜野型羽釜」、多胡郡に代表される「吉井形羽釜」が認められる。土師器甕11は、細片の7ため苦慮したが、9世紀後半の「秋間型甕」の可能性もあることを付記しておく。

鉄滓(第25図)

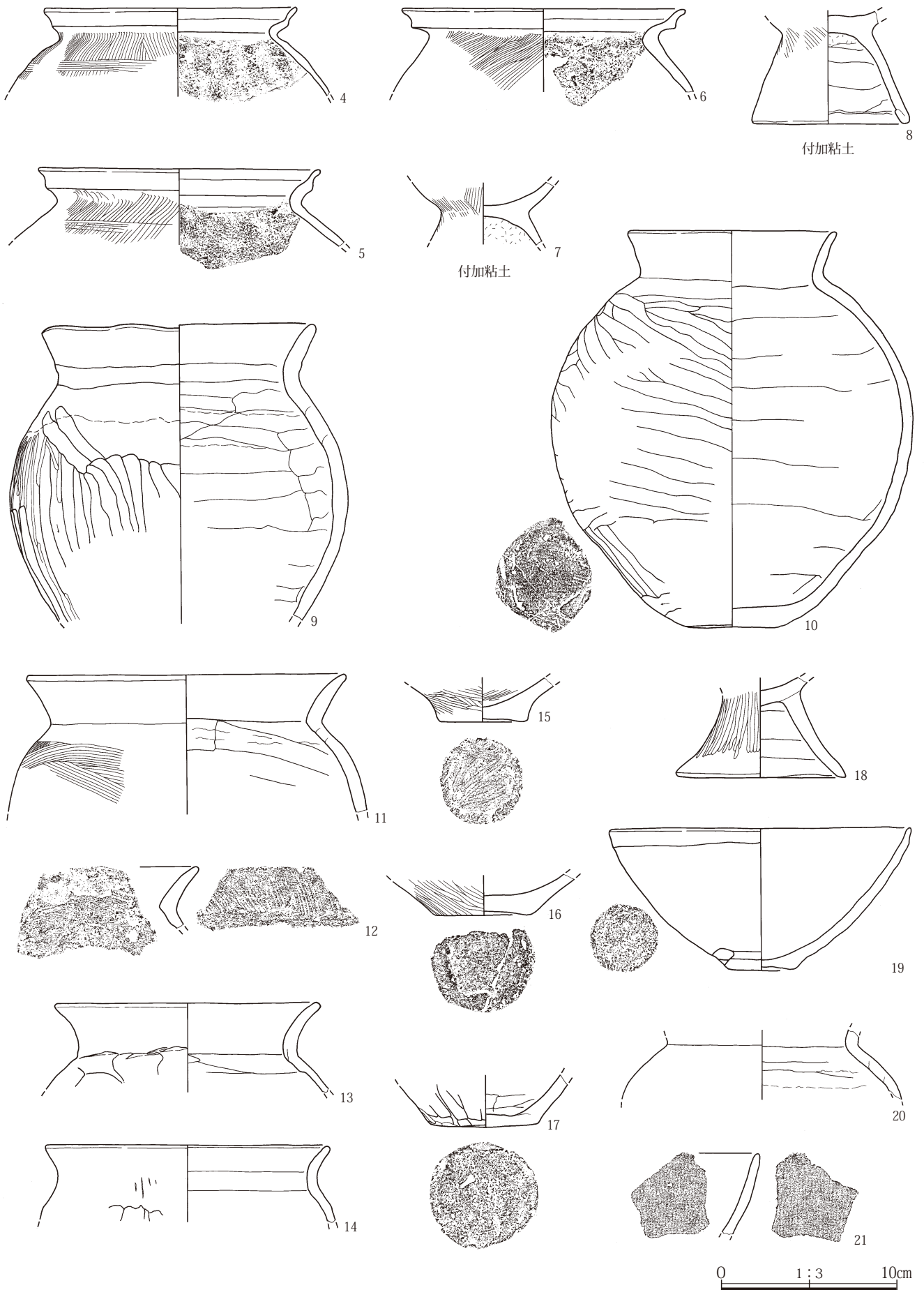
滓は小形の碗状滓に類するものが1点出土している。出土位置はC-4グリッドであり、土師器・須恵器の分布域での出土である。調査段階では、小鍛冶等の鉄器製作を推測させる状況は無かった。しかし、単に鉄滓が搬入されたことは考え難いので、鉄器等の何らかの製作が行われていたことを示唆していると考えられる。しかし、時期の特定は困難である。



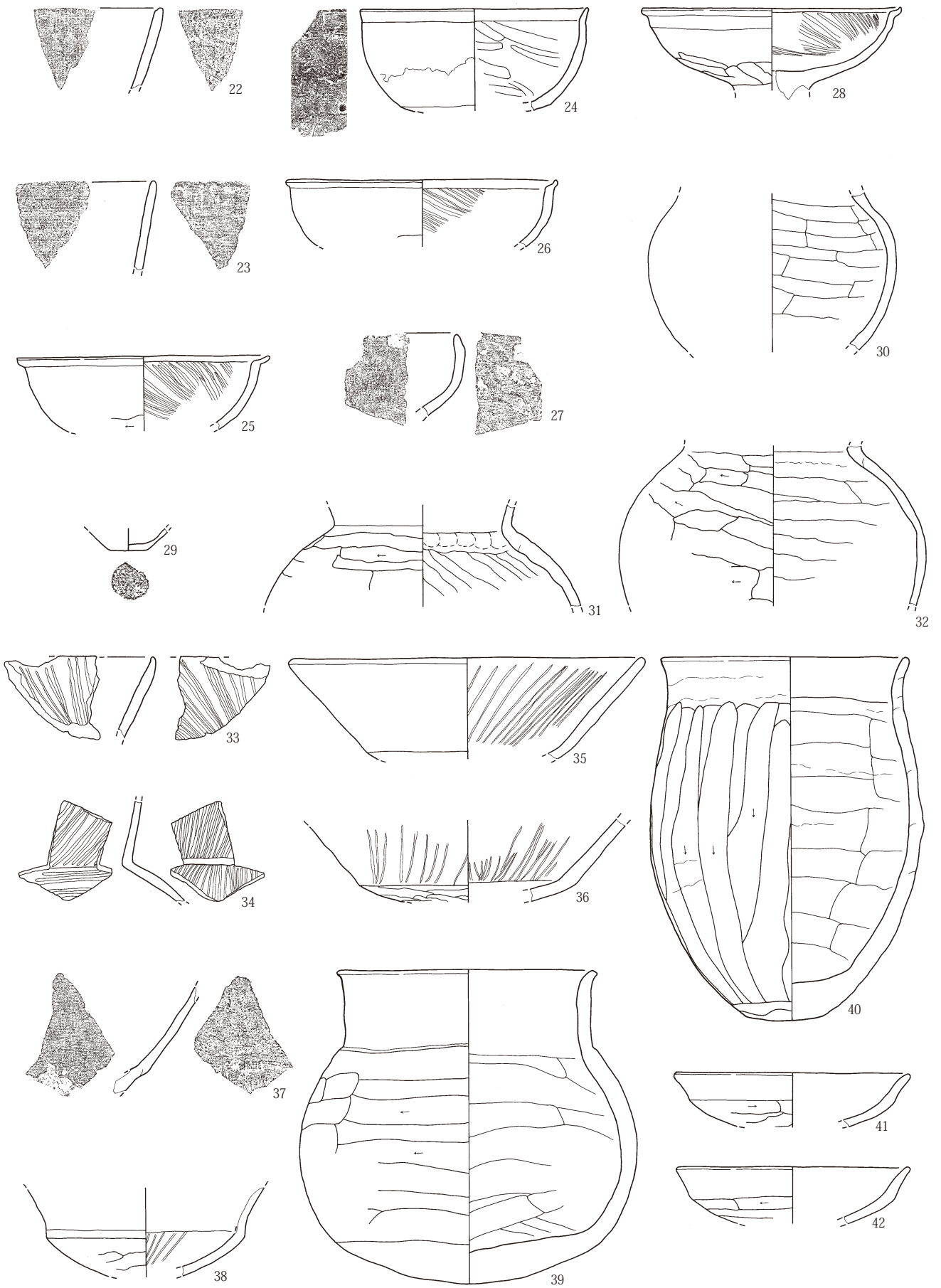
第22図 出土遺物実測図(1)(陶器)

第6表 陶磁器観察表

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
00001	22	蓋	未注記	径7.0 底3.0 高1.4	80%	微細粒白色石英・ガラス化	還・締	灰	上面に灰釉。細かい貫入が入る。摘み付近に小円孔。小形土瓶の蓋か。益子・笠間産か。	近現代。
00002	22	すり鉢	未注記	厚0.6	2%	ガラス化	還・締	浅黄	口縁部は外方に折り返すように肥厚。	18世紀前半～中頃
00003	22	甕	表採	厚0.5	2%	細粒白色石英	還・締	黒～鈍赤褐	内外面に柿釉。頸部外面に黒色の鉄釉を流す。益子・笠間産か。	近現代。

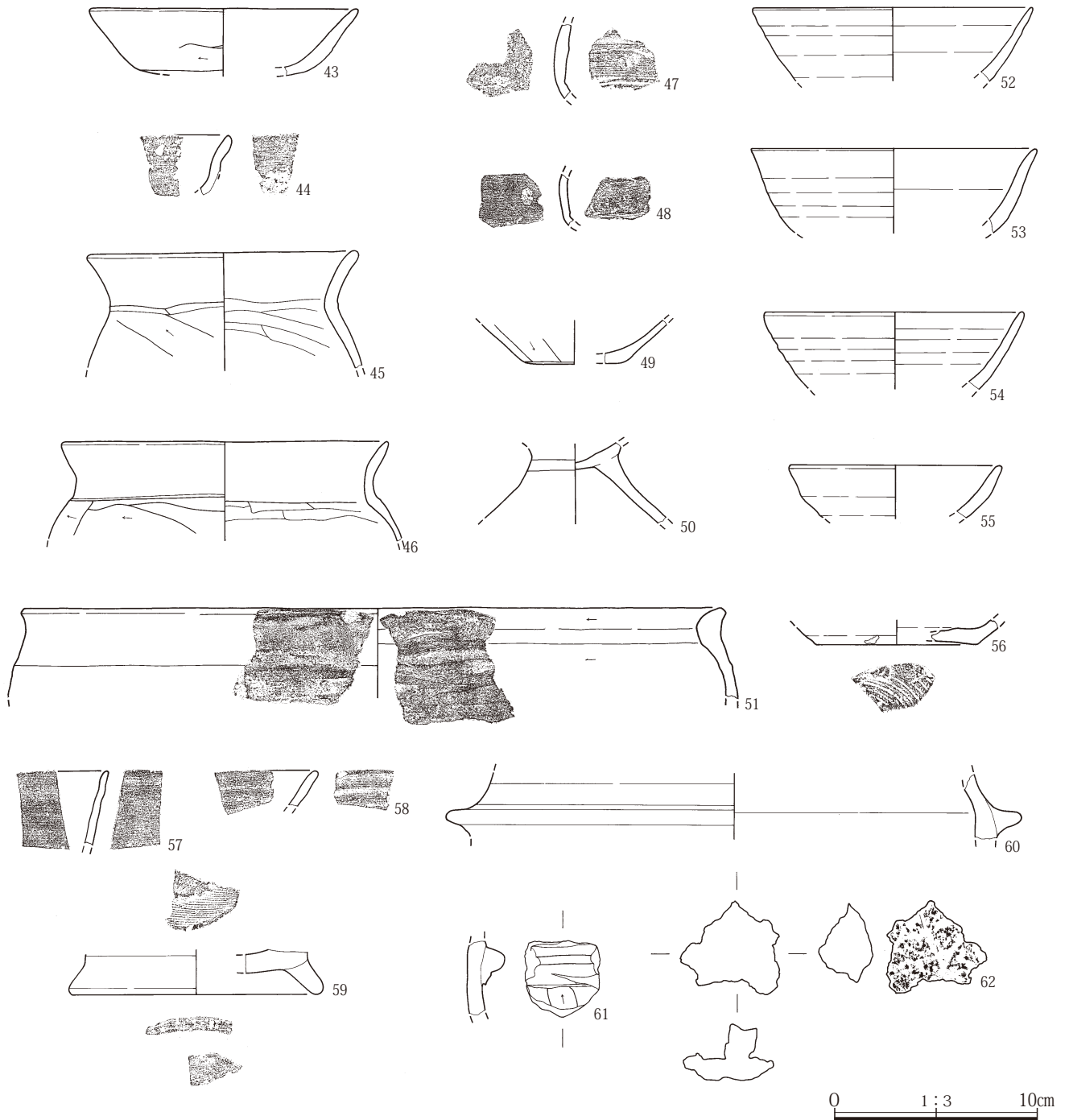


第23図 出土遺物実測図(2) (土師器1)



第24図 出土遺物実測図(3) (土師器2)

0 1:3 10cm



第25図 出土遺物実測図(4) (土師器3・須恵器)

第7表 土師器観察表(1)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存率	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
4	23 21	S字甗	C-5・ C-6	口14.1	口 8%	A類 生地多・雲母石英	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位ハケ目(5本)後1段の横位ハケ目。内面胴部はナデ。	吉井・甘楽産か
5	23	S字甗	C-5・ C-7	口15.8	口 3%	A類 雲母・石英	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位ハケ目(7~8本)。内面胴部はナデ。	吉井・甘楽産か
6	23	S字甗	C-4	口15.8	口 3%	A類 雲母・石英	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位ハケ目(5~6本)後3段の横位ハケ目。内面胴部はナデ。	吉井・甘楽産か
7	23	S字甗	B-5	基4.8	胴下 3%	A類 雲母・石英	酸・並	黄橙	胴部から脚部はハケ目(7~8本)。内外残存面付加粘土。	吉井・甘楽産か
8	23 21	S字甗	C-4	底8.7	脚 8%	B類か 黒色鉍物粒子	酸・並	鈍黄橙	胴部から脚部上位にハケ目(7本)、中位から下位はナデ。内面はヘラナデ。	産地不詳

第8表 土師器観察表(2)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存率	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
9	23 21	甗	C-5	口15.0 胴19.3	口~胴 30%	A類 白色石英	酸・並	灰黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は上位がナデ、中位はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	器外面煤付着。 吉井・甘楽産
10	23 21	甗	C-4 C-5	口11.4 底5.4 高22.4	全 60%	二次堆積粘土 微 粒雲母・白色石英	酸・並	灰黄褐	口縁部から頸部下は横ナデ、胴部は下位上半までヘラナデ、下位下半から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。器外面煤付着。	吉井・甘楽産か
11	23 21	甗	C-4 C-5	口17.8 頸15.4	口~胴 3%	B類 夾雑物微	酸・軟	鈍橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部下は横ナデ、胴部はハケ目(7本)。内面胴部はヘラナデ。	内外面煤け 産地不詳
12	23	甗	C-4	厚0.7	口 3%	B類か 黑色鉍物 粒子	酸・並	鈍黄橙	内外面ともハケ目(6本)、内面は器面磨滅のため単位不鮮明。	産地不詳
13	23	甗	C-5	口14.7 頸11.5	口~胴 3%	A類 雲母・石英	酸・並	黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	吉井・甘楽産か
14	23	甗	C-4	口15.8 頸14.7	口~胴 4%	A類 雲母・石英	酸・並	鈍黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	器外面煤け 吉井・甘楽産か
15	23	壺	C-5	底4.8	底 5%	B類か 黑色鉍物 粒子	酸・並	浅黄橙	底部・胴部ともヘラ磨き、内面もヘラ磨き。	産地不詳
16	23	壺	C-6	底5.4	底 6%	A類 石英雲母片 岩	酸・並	灰黄褐	底部・胴部ともヘラ磨き、内面もヘラナデ。	吉井・甘楽産か
17	23	甗	C-6	底6.0	底 7%	B類か 黑色鉍物 粒子	酸・並	鈍黄橙	底部・胴部はヘラ削り、胴部の一部はヘラ磨き。内面はヘラナデ。	器外面煤け 産地不詳
18	23 21	甗 脚台	C-5	底9.4	底 10%	B類か 黑色鉍物 粒子	酸・並	鈍黄橙	脚部はヘラ磨き、裾部は横ナデ。内面はヘラナデ。甗部内面煤ける。脚器内面焼成時の吸炭。	産地不詳
19	23 21	鉢	C-5	口16.8 底4.0 高8.0	全 60%	A類 細粒角粒鉍 物多	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削りか、器面剥離のため単位不明。	吉井・藤岡産
20	23	壺	C-4	頸10.8	頸~肩 8%	B類 微細黑色鉍 物粒子	酸・並	灰黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部はヘラ磨き。内面は頸部が横ナデ、胴部はヘラナデ。器外面燻る。	産地不詳
21	23	埴	B-7	厚0.5	口 3%	A類 石英・黑色 鉍物粒子	酸・硬	鈍黄橙	内外面横位のヘラナデ。	産地不詳
22	24	埴	B-6	厚0.6	口 5%	A類 角粒微細鉍 物	酸・並	鈍黄橙	外面はヘラ削り後ヘラ磨きか、内面は横位の磨き後放射状ヘラ磨き。	産地不詳
23	24	埴	Ⅲ a層	厚0.5	口 5%	A類 角粒微細鉍 物多	酸・硬	鈍橙	外面は横位のヘラ磨きご斜放射状ヘラ磨き、内面は横位のヘラ磨き。	太田産か
24	24	坏	C-5	口12.8	底~口 10%	B類 石英片岩	酸・並	橙	型作。内外器面は撫で整形。器外面には撫で整形により生じた余りの粘土を均した状態。	甘楽地域か
25	24	坏	C-6	口13.9	口~体 12%	B 3類 夾雑物微	酸・硬	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、体部は上半が型膚、下半はヘラ削り。内面は体部に斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
26	24	坏	C-5	口14.6	口 5%	B類 夾雑物微	酸・並	橙	口縁部は横ナデ、体部は上半が型膚、下半はヘラ削り。内面は体部に斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
27	24	坏	B-7	厚0.5	口~体 8%	B 3類 夾雑物微	酸・硬	鈍赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
28	24	高坏	C-6	口14.2	坏部 20%	B類 夾雑物微	酸・硬	橙	脚部とはホゾ状差込みで接合。口縁部横ナデ、体部上半型膚、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面はナデ整形後体部は斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
29	24	埴	B-6	底2.0	底 3%	A類 夾雑物微	酸・硬	灰黄褐	底部から胴部はヘラ磨き。	産地不詳
30	24	埴	C-4 C-5	胴13.8	肩~胴 20%	B類 黑色鉍物粒 子	酸・並	鈍黄橙	外面はヘラ削り後ヘラ磨き、器面磨滅のため単位不鮮明。内面はヘラナデ。器外面体部下半燻り。	産地不詳
31	24	埴	C-6	頸9.9	頸~肩 10%	A類 微細雲母・ 白色石英	酸・並	鈍黄橙	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は頸部下に指頭痕が残る、胴部はナデ。	吉井・甘楽産か
32	24	埴	C-5 C-6	頸9.9 胴17.1	頸~同 20%	A類 石英・チャ ート	酸・並	鈍黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。	吉井・甘楽産か
33	24	埴	C-6	厚0.5	口 3%	B 3類 夾雑物微	酸・硬	明赤褐	外面は斜放射状ヘラ磨き、内面は放射状ヘラ磨き。	産地不詳
34	24	埴	B-7	厚0.4	口~肩 5%	C類 夾雑物無	酸・並	橙	口縁部と胴部は放射状ヘラ磨き。内面は口縁部が斜放射状、胴部は横位のヘラ磨き。	産地不詳
35	24	高坏	C-4	口19.4	坏身 口5%	B類 黑色鉍物粒 子	酸・並	橙	外面は器面磨滅のため不明、内面は斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
36	24	高坏	表採	厚0.7	坏身 口5%	B類 黑色鉍物粒 子	酸・並	橙	杯身部口縁部は斜放射状ヘラ磨き、底部はヘラナデ。内面口縁部も斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳

第6章 発見された遺構・遺物

第9表 土師器観察表(3)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存率	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
37	24	高坏	B-6	厚0.5	坏身 口5%	A類 黑色鉍物粒子	酸・硬	鈍黄橙	内外面ともヘラ磨き。	産地不詳
38	24	坏	B-6	厚0.5	口～底 8%	C2類 微細雲母多	酸・硬	鈍黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から口縁部に放射状ヘラ磨きか。	吉井・藤岡産か
39	24 21	壺	C-4	口13.8 高17.4	全 65%	B類 βQt・黒色粒子	酸・並	鈍黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。器外面煤付着。	産地不詳
40	24 21	小形甗	C-5	口13.4 底4.4 高20.1	全 70%	B類 軽石・透明鉍物粒子	酸・並	鈍黄橙	内外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	産地不詳
41	24	坏	B-8	口13.0	口～体 5%	C類 夾雑物微・微細雲母	酸・並	橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	吉井・藤岡産
42	24	坏	C-4	口12.8	口～体 10%	C類 夾雑物微・微細雲母	酸・並	橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	吉井・藤岡産
43	24	坏	C-5	口12.8 底8.5	口～体 7%	C類 夾雑物微・微細雲母	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。口縁内外面煤ける。	吉井・藤岡産
44	24	坏	未注記	厚0.5	口～体 2%	B3類 夾雑物微細	酸・硬	明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はヨコナデ。内面体部に斜放射状ヘラ磨き。	産地不詳
45	24	甗	B-5	口13.0 頸11.2	口～肩 5%	A類 微細角粒鉍物多	酸・硬	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	産地不詳
46	24 21	甗	C-5	口15.8 頸14.6	口～肩 7%	A類 微細角粒鉍物多	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。全体に煤ける。	吉井・藤岡産
47	25	甗	B-7	厚0.5	頸 1%	B類 微細鉍物多	酸・並	鈍橙	「コ」の字状口縁。頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。	吉井・藤岡産
48	25	甗	B-7	厚0.4	頸 1%	A類 細粒夾雑物多	酸・並	橙	「コ」の字状口縁の頸部。内面は丁寧な撫で整形。器外面撫で整形。	吉井・藤岡産
49	25	甗	C-5	底5.0	底 1%	A類 微細角粒鉍物多	酸・並	鈍黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	吉井・藤岡産
50	25	台付甗	C-4	底4.4	脚部 15%	A類 微細角粒鉍物多	酸・並	明赤褐	脚部は胴部に貼付か。脚部は内外面とも横ナデ。	吉井・藤岡産
51	25	土釜	C-7	口34.0	1%	B類 黑色鉍物	酸・並	鈍黄橙	紐作り。口縁部内外面・器内面は横撫で。胴部は横位の篋削りを施す。	産不詳

第10表 須恵器観察表

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存率	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
52	25 21	坏	C-4	口13.8	口～体 12%	微細角粒鉍物	中・軟	鈍黄橙	ロクロ整形、回転右回り。	秋間産
53	25	坏	B-5	口14.0	口～体 5%	微細角粒鉍物	中～酸・軟	鈍黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。	秋間産か
54	25	坏	C-5	口12.5	口～体 7%	微細角粒鉍物	還・硬	灰	ロクロ整形、回転右回りか。	秋間産
55	25	坏	B-6	口10.2	口～体 5%	夾雑物無	中～酸・硬	灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。	秋間産か
56	25	坏	B-7	底8.0	底 8%	白色粒子 軽い	還・軟	灰	轆轤右回転成・整形。内面は燻んだ発色。	秋間産か
57	25	坏	表採	厚0.3	口 2%	焼締で夾雑物不詳	還・締	黒灰	轆轤右回転成・整形。焼成時の燻が強く全体に黒味を帯びた発色。器厚は薄い。	乗附産か
58	25	坏	C-5	厚0.4	口 2%	黒色粒子	還・硬	灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	吉井・甘楽産か
59	25	長頸瓶	未注記	底12.6	底 1%	黒色粒子	還・硬	灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部はナデ、内面側に回転糸切痕が残る。	秋間産
60	25	羽釜	B-7	鏝28.4	鏝 2%	βQt多	還・硬	灰白	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	月夜野産か
61	25	羽釜	B-7	厚0.7	鏝 1%	βQt多		灰白	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付、胴部は底部から口縁部に向けてのヘラ削り。	月夜野産

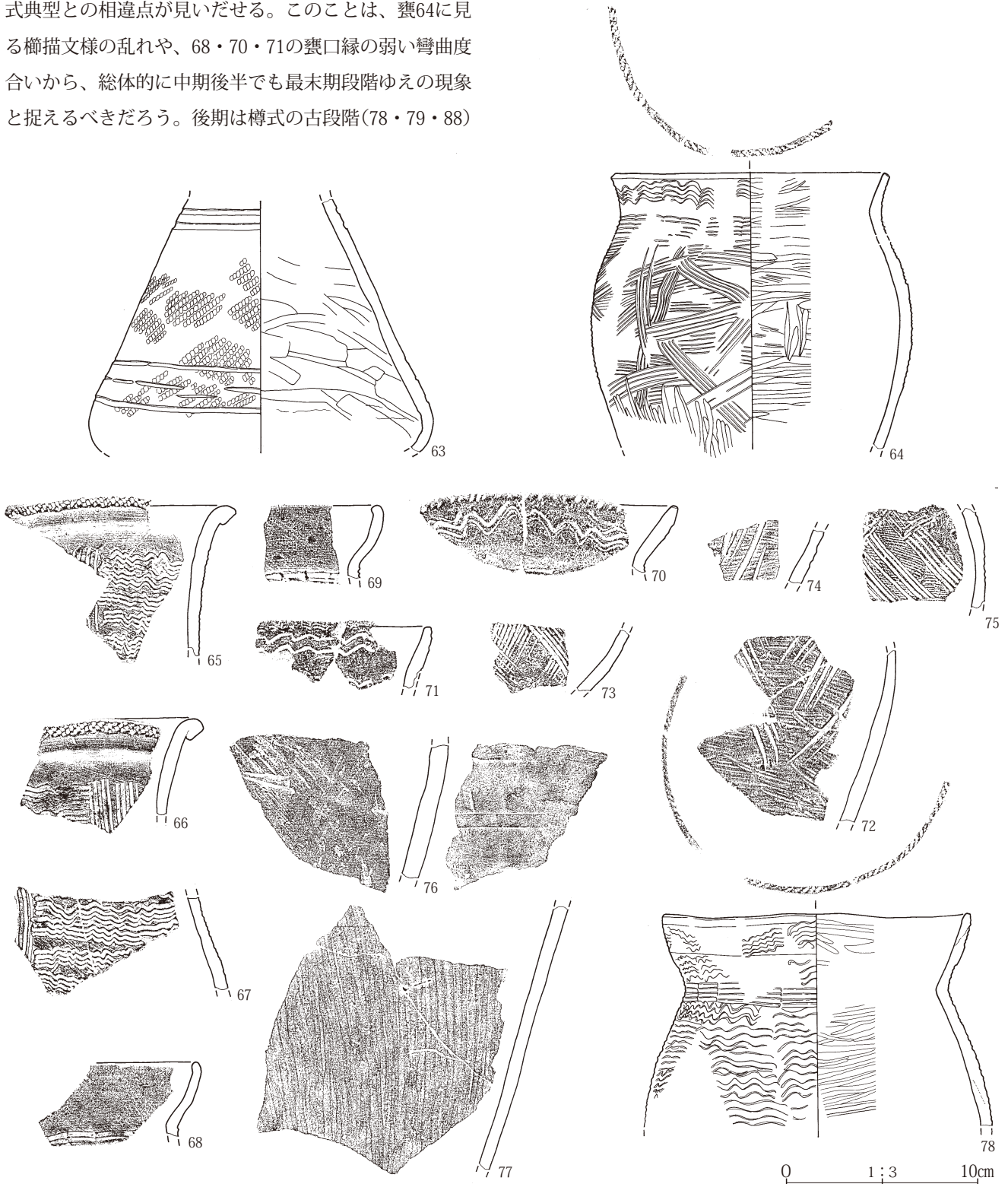
第11表 鉄滓観察表

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存率	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
62	25	小碗滓	C-4	幅5.1 厚2.7	全 95%	—	—	—	小形の碗状滓。磁着力は弱い。調査後の一部欠損がある。	

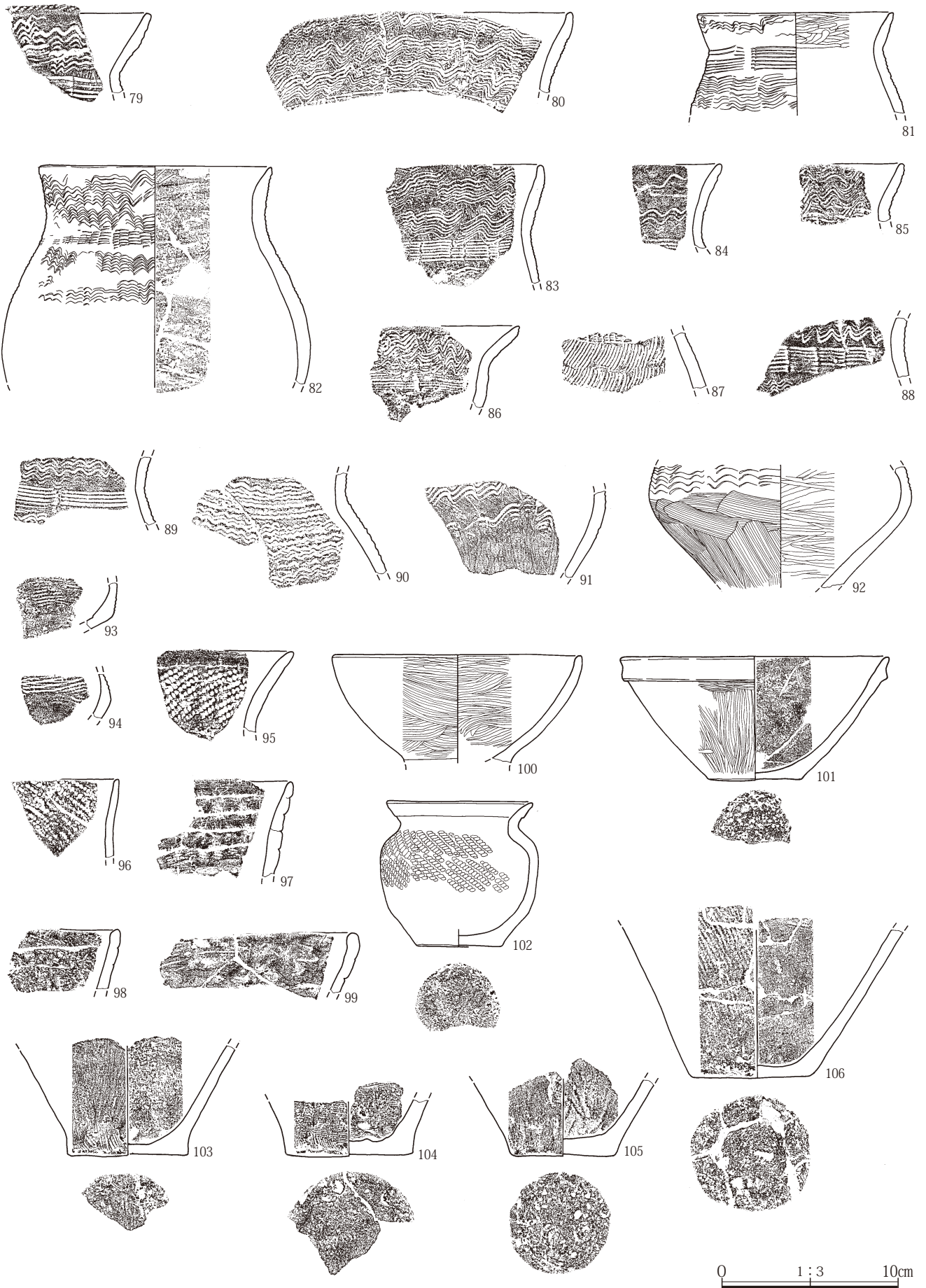
第3項 弥生土器

弥生土器として分類・掲載した44点について概要を記す。中期後半の栗林式系(63～72)のうち、壺は63のみで他は甕である。63は帯縄文でなく簡素な文様構成、65・66は口縁への太い粘土帯付加といった特徴に、栗林式典型との相違点が見いだせる。このことは、甕64に見る櫛描文様の乱れや、68・70・71の甕口縁の弱い彎曲度合いから、総体的に中期後半でも最末期段階ゆへの現象と捉えるべきだろう。後期は樽式の古段階(78・79・88)

から新段階(81・82・86・87・90など)まで見られる。掲載中、壺は1点(87)のみで他は甕類、鉢(100・101)である。完形赤彩鉢(101)の存在は墓副葬を示唆する。95～98・102は吉ヶ谷式系の甕と小壺で、古墳時代前期に及ぶか。99は縄文晩期～弥生中期前半の粗製深鉢の可能性はある。103～106は栗林式系の甕と推定される。



第26図 出土遺物実測図(5) (弥生土器1)



第27図 出土遺物実測図(6) (弥生土器2)

第12表 弥生土器観察表(1)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
63	26	壺	C-4 ~6	最大 17.1	胴~頸 17%	B類 夾雑物多	酸・軟	浅黄橙	地紋に単節Lを施文し、肩・頸・横線3状施文。器内面頸・細かい刷毛撫で。肩・篋撫で。	全体に磨滅
64	26 28	甗	B-5 C-5 ・6	口14.5	口~胴 下 15%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍黄橙	口縁は短い。口唇部に単節1を施文。口・6本1単位1段の波状文。頸・6本1単位の簾状文。胴・細かい刷毛撫で後、6本1単位の櫛描文を縦横施文。	
65・ 67	26 28	甗	B-6 ・7	厚0.7	口 1%	B類 夾雑物多	酸・硬	灰黄褐	複合口唇・端部に単節L横転。口・4本1単位5段の波状文・スリット文。器内面・撫で整形。	
66	26	甗	C-5	厚0.65	口 1%	B類 夾雑物多	酸・硬	灰黄褐	複合口唇・端部に単節L横転。口・4本1単位2段+ α の波状文・スリット文。器内面・撫で整形。	
68	26	甗	C-4	厚0.6	口 1%	B類 夾雑物多	酸・軟	鈍黄橙	内湾口縁。頸3+ α 本1単位の簾状文。器内面・横位の篋撫で。	
69	26	甗	B-5	厚0.55	口縁 1%	A類 夾雑物少	酸・硬	黒褐	内湾口縁。口唇部は内面側に肥厚。頸・2+ α 本1単位の簾状文。内外面は強い横撫。	
70	26	甗	B-5 ・S B	厚0.7	口縁 2%	B類 夾雑物多	酸・並	黒茶褐	内湾口縁。口唇部に単節1を施文。口・6本1単位1段の波状文。頸・2+ α 本1単位の簾状文。	
71	26	甗	C-4	厚0.7	口 1%	B類 夾雑物並	酸・硬	白灰	内湾口縁。口唇部に波状文を施文。2本1単位の波状文。器内面横位の撫で。	
72	26	甗	B-8 C-4	厚0.8	胴 3%	A類 夾雑物少	酸・硬	鈍橙	外面・横位の篋撫後、4本1単位の櫛描文を綾杉施文。内面・横位の篋撫後縦位の研磨。	
73	26	甗	B-6	厚0.6	胴 1%	B類 夾雑物少	酸・硬	灰白	5本1単位の櫛描文を綾杉施文。器内面・縦位の研磨。	
74	26	甗	B-7	厚0.65	胴 1%	A類 夾雑物少	酸・硬	鈍橙	斜位の篋撫で後、斜位の刷毛撫で。器内面・横位の篋撫で。器面に風化凝灰岩が付着。	
75	26	甗	C-5	厚0.65	胴 1%	B類 夾雑物少	酸・硬	鈍黄橙	刷毛撫でを施し、綾杉状に5本1単位の櫛描文を施文。	
76	26	甗	B-5	厚1.0	胴下 1%	B類 β Q t 多	酸・硬	鈍黄橙	器内面・横位の篋撫。器外面・斜位の篋撫で後、雑は研磨。	
77	26	甗	B-6	厚0.7	胴 8%	B類 夾雑物多	酸・硬	鈍橙	内外面・縦位の研磨。	
78	26 28	甗	C-4	口16.0	胴~口 17%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍黄橙	受口状口縁。口唇部に単節1を施文。口・6本1単位2段の波状文。頸・6本1単位の簾状文。胴・6本1単位5段の波状文。器内面横位の研磨。	
79	27	甗	C-5	厚0.6	口 1%	B類 細粒夾雑物少	酸・並	灰白	口縁部は内湾。口4+ α 本1単位2段の波状文。頸・4本1単位の簾状文。	
80	27	壺	C-4 S B	厚0.65	口縁 3%	A類 夾雑物多	酸・硬	内・黒 褐・黄 橙	口・7本1単位3段の波状文。頸・2+ α 本1単位の簾状文。器面に風化凝灰岩が付着。	生地土を主体的に使用する。
81	27 28	甗	B-6 C-6	口11.0	胴上~ 口 15%	B類 夾雑物多	酸・並	鈍黄橙	胴・7本1単位の波状文。頸・7本1単位の簾状文。口・7本1単位の波状文。	
82	27	甗	C-4	口13.0	胴~口 18%	B類 夾雑物並	酸・軟	鈍黄橙	口・6本1単位3段の波状文。頸・6本1単位の簾状文。肩・7本1単位3段の波状文。内面篋撫で。	
83	27 28	甗	C-5	厚0.7	口 4%	B類 夾雑物少	酸・硬	外・明 褐灰 内・黒 褐	口縁部はやや内湾気味。口・7本1単位2段の波状文。頸・7本1単位の簾状文。肩・3+ α 本1単位の波状文。器内面横位の研磨。	
84	27	甗	B-6	厚0.6	口 1%	B類 夾雑物多	酸・軟	鈍橙	口・5本1単位2段の波状文。器面風化顕著。	
85	27	甗	C-4	厚0.6	口 1%	B類 夾雑物多	酸・軟	鈍黄橙	口・7本1単位2段の波状文。頸・7本1単位の簾状文。器内面・横位の研磨。	
86	27	甗	B-6	厚0.6	口・頸 2%	B類 白色石英多	酸・硬	鈍黄橙	口・7本1単位2段の波状文。頸・7本1単位の簾状文。器内面・横位の研磨。	
87	27	甗	C-7	厚0.7	肩 1%	B類 夾雑物少	酸・硬	鈍橙	頸・4+ α 本1単位の簾状文。肩・斜位に2段、櫛描文を短く施す。器面に風化凝灰岩が付着。	
88	27	甗	C-5	厚0.75	頸 1%	B類 夾雑物少	酸・並	橙	口・4+ α 本1単位の波状文。頸・7本1単位の簾状文。肩・4+ α 本1単位の波状文。器内面横位の研磨。器面全体・二次被熱酸化反応。	
89	27	甗	C-6	厚0.55	頸 2%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍黄橙	口・2+ α 1単位、2段+ α の波状文。頸・8本1単位の簾状文。肩・6+ α 本1単位の波状文。器内面・横位の研磨。	
90	27	甗	B-4 C-6	厚0.75	胴~頸 6%	B類・夾雑物多	酸・軟	橙	器面・8本1単位の波状文を小刻みに施文。器外面には煤が厚く付着。	

第13表 弥生土器観察表(2)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	度目	残存	胎土	焼成	色調	成・整形の特徴	摘要
91	27	甕	B-5	厚0.7	胴中1%	B類 白色石英多	酸・並	黄橙	胴・細かい刷毛撫で後、7本1単位の波状文。下半・縦位の研磨。	
92 21	27	脚台付	C-5	最大14.7	胴下半20%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍黄橙	肩・6+α本1単位の波状文。胴・縦位の刷毛撫で。器内面・横位の研磨。	
93・ 94	27	甕	C-6	厚0.85	口1%	A類 片岩灰色	酸・軟	鈍黄橙	複合口縁か。置いうの刷毛撫でを施す。器面の風化が顕著。	夾雑物多い
95	27	甕	B-8 C-4	厚0.75	口1%	B類 黑色鉍物粒多	酸・硬	鈍黄橙	器外面・紐作り整形の単位を残し単節Lの横位施文。器内面・横位の丁寧な撫で。	安中産か
96	27	甕	C-5	厚0.55	口1%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍橙	器厚は薄い。単節Rを横転施文。器内面・横位の丁寧な撫で整形。	
97	27	脚台付	C-5	厚0.75	口1%	B類 黑色鉍物粒多	酸・並	鈍黄橙	器外面・紐作り整形の単位を残し鈍撫でを施す。器内面・横位の研磨。	
98	27	甕	C-4	厚0.6	口1%	B類 夾雑物並	酸・硬	鈍橙	器外面・紐作り整形の単位を残し鈍撫でを施す。器内面・横位の研磨。	S B III a層出土と接合
99	27	甕	C-5	厚0.65	口2%	B類 夾雑物少	酸・硬	浅黄橙	口縁部は内湾する。素文。器内面・横位の研磨。	
100	27 28	高坏	C-4 S B 5	口14.0	坏部25%	B類 夾雑物並	酸・硬	鈍橙	外面口・横位の細い研磨。器外面体・斜位の細い研磨。器内面・横位の研磨。内外面・赤色顔料塗彩。	
101	27 28	鉢	B-5 C-4 ・5	口15.2 底5.8 高7.0	全55%	B類 夾雑物多	酸・並	浅黄橙	複合口縁。内外面・赤色顔料を塗彩。口唇部は小単位に欠損。	
102	27 28	甕	C-4	口6.2 底4.8 高8.2	全90%	B類 夾雑物少	酸・並	鈍黄橙	口縁部を小単位に打ち欠く。胴上・多条L横位施文。内外面・横位の撫で整形。器外面底部付近ハゼ欠損有り。	
103	27	甕	C-5	底6.7	底部3%	A類 夾雑物多	酸・硬	鈍黄橙	器内面・撫で整形。器外面縦位の研磨・煤が付着。	赤色チャートを含む
104	27	甕	C-6	底7.2	底部2%	B類 夾雑物少	酸・硬	鈍黄橙	器外面・横位の刷毛撫で。器内面・撫で整形。	
105	27	甕	C-4	底6.0	底部3%	A類 白色石英多	酸・並	鈍黄橙	器内面・撫で整形。器外面縦位の研磨。	2点の接合
106	27	甕	B-5	底6.7	胴下~ 底30%	B類 夾雑物少	酸・並	灰白	11本1単位の櫛描文を縦位に施す。欠損部を疑似口縁に成形。	

第4項 縄文土器

層位別出土縄文土器の概要

本遺跡は岩陰遺跡という性格上、当然のこととして層位的な調査が当初の方針として掲げられたが、前述されているとおり、結果的には層位的な調査は断念せざるを得ず、遺物の出土位置と水平位を記録するにとどまった。その記録をもとに整理段階において遺物の出土状況を復元するはずであったが、調査段階での記録が不明確なものも多く、また調査から整理が着手されるまでに長い空白期間を経てしまっていることなども起因し、調査時の状況を復元することはできなかった。唯一、土層断面観察用に残されていた岩陰部南北セクションベルト(第11図)を掘り下げる際に遺物を層位別に取り上げており、これらを確かなものとして、ここに報告するものである。

層位別の出土状況は第13表のとおりである。

A-1, 2, 3層は晩期水式、後晩期無文土器が主体となって出土している。(後晩期無文土器という呼称は時期区分が広がってしまったが、その多くは後期後葉ないし晩期に帰属する無文土器である。無文であるがゆえ、後期後葉に比定できるのか、あるいは晩期に帰属するのかの区分は困難であり、このような呼称になってしまった。ご容赦願いたい。) A-1層出土の121とA-2層出土の126, 127は水式の胴部破片で同一個体と思われ、2層にまたがって出土している。これらと同一個体と思われるのが包含層遺物に掲載した第38図181の個体でB-4、B-5、C-5グリッドから出土していることから、これらが近い位置でまとまって出土したと想定できる。その下、III a層、B層についても後晩期無文土器が主体となる。前述されているとおり、I層から4-1層にかけては土師器の出土が確認されており、III a層が主たる古墳時代の遺物包含層とされている。そうだとすれば確

実な晩期の包含層はB層のみとなり、それより上層は混入と見做さなければならぬだろう。しかし混入とはいえ、氷式、後晩期無文土器をほぼ純粋に出土していることから、この時期の包含層が存在していたことは確実であろう。4-2層は加曾利E 4式、堀之内2式、氷式、後晩期無文土器が混じる状況である。氷式の良好な破片(133)、堀之内2式の注口土器(134)、加曾利E 4式(135)の3点を掲載した。4-2層の形成時期をもっとも新しい土器で判断すれば氷式期となるが、4-2層は氷式を多く包含するA層の直下にあることから、氷式の破片を混入ととらえ、加曾利E 4式から堀之内2式にかけての所産とすることも可能であろう。8層は後晩期の出土は皆無であり、中期が主体を占める。数量的には加曾利E 2式が7点でもっとも多く、次いで加曾利E 4式が5点と続くが、細片が多いため時期比定に若干不安が残る。いずれにしても中期後葉期の所産であることは間違いないだろう。その下、10層からの出土がもっとも多く、加曾利E 2式を主体に曾利・唐草文系も多く、加曾利E 3、E 4式がわずかに見られる。数量の多さ、また141や149のような大形破片が出土していることから10層は加曾利E 2式期の所産とすることが妥当と思われる。唐草文系も渦巻つなぎ弧文、腕骨文状の懸垂文を施す142や頸部無文帯をもつ146、3条隆帯による懸垂文、整った綾杉文を施す147など、加曾利E 2式併行の段階が主体とみられる。曾利系の151、152は同一個体であり、包含層遺物の第37図176と同一個体である。176は無文帯の口縁部が強く外反、口縁が内湾し、頸部文様帯に斜格子目文を施すもので、曾利古2式あるいは曾利Ⅱ式に比定しうるものである。胴部地文の平行沈線が斜位に施されることと、施文順序が平行沈線→懸垂隆帯文となることで同時期中核地域の曾利式とは若干変容しているが、時期的には唐草文系同様、加曾利E 2式併行に位置づけられるものであろう。10層の下層である13層は加曾利E 2式～E 4式、曾利・唐草文系、焼町、五領ヶ台式が混在する様相を示す。加曾利E 4式の153は4-2層出土の135と同一個体と思われる。唐草文系は157が腕骨文状の懸垂文で縦位区画し、綾杉文を充填することから加曾利E 2式併行、158、159は2条沈線による胴部懸垂文で磨り消し手法が見られることから加曾利E 3式併行であろう。17層は出土遺物が少ないうえ、細片が多く判別が難しい。

16・18層からは勝坂式、大木7b式が1点ずつ出土している。出土遺物から判断すれば勝坂式期となるが、16層中に五領ヶ台式期と考えられる1号集石が検出されていることから、16・18層は五領ヶ台～勝坂式期と判断されよう。19層は五領ヶ台式が主体をなし、勝坂式や大木7b式などをわずかに含む。加曾利E 2式も2点混在しているが、上層の16・18層が五領ヶ台～勝坂式期と判断されることから、19層は五領ヶ台式期と判断してよいだろう。

以上をまとめると、下層のほうから19層が五領ヶ台式期、16・18層が五領ヶ台～勝坂式期、13・10層が加曾利E 2式を中心とした中期後葉期、8層が中期後葉期、4-2層が中期末葉～後期、B層より上層が後期後葉～晩期に大略比定でき、概ね層位的な出土状態を示しているといえるだろう。

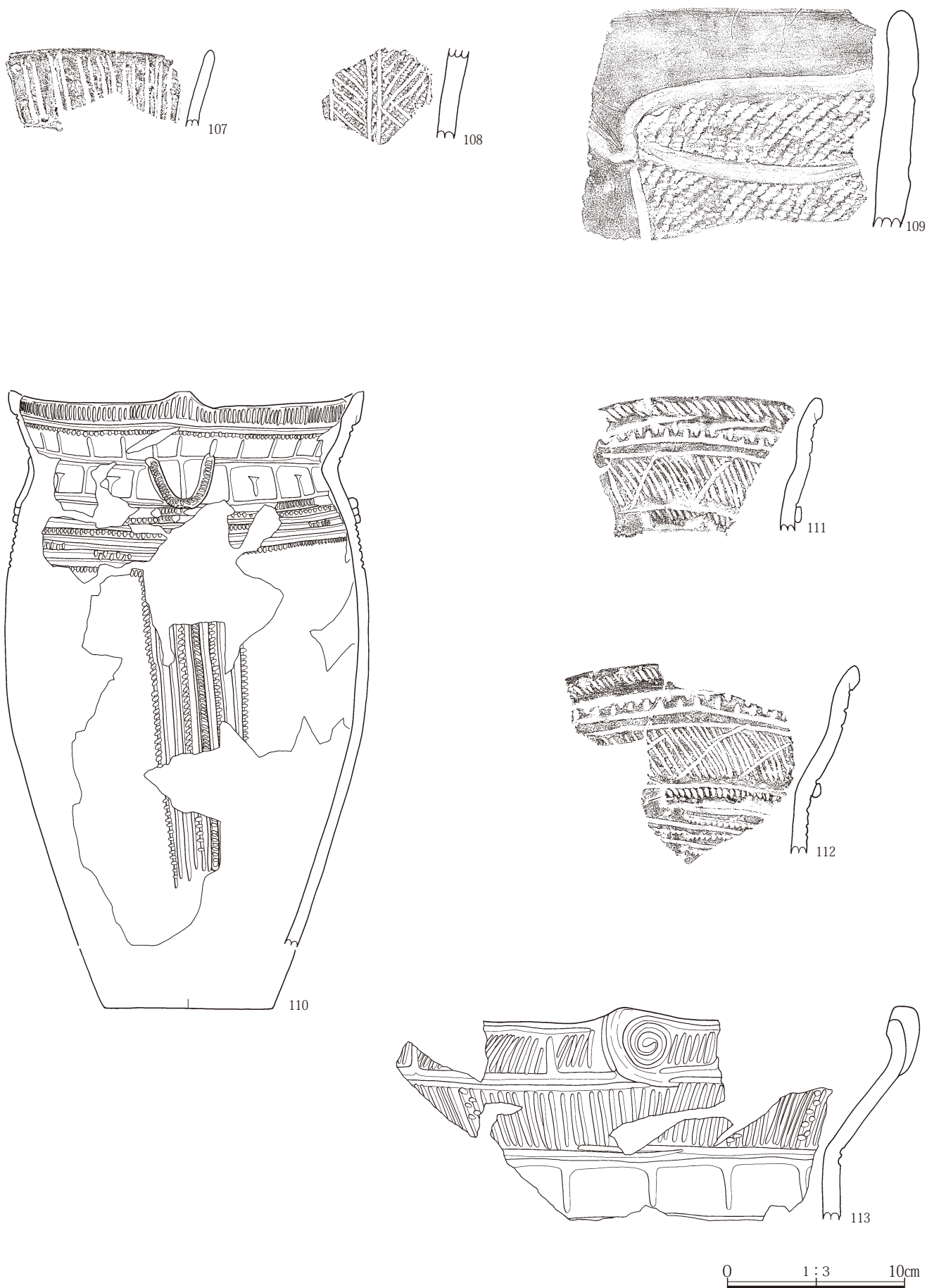
包含層出土縄文土器の概要

上述したとおり、出土遺物の層位復元は不可能であったため、前項の土器以外はすべて包含層出土遺物として一括してここで報告する。

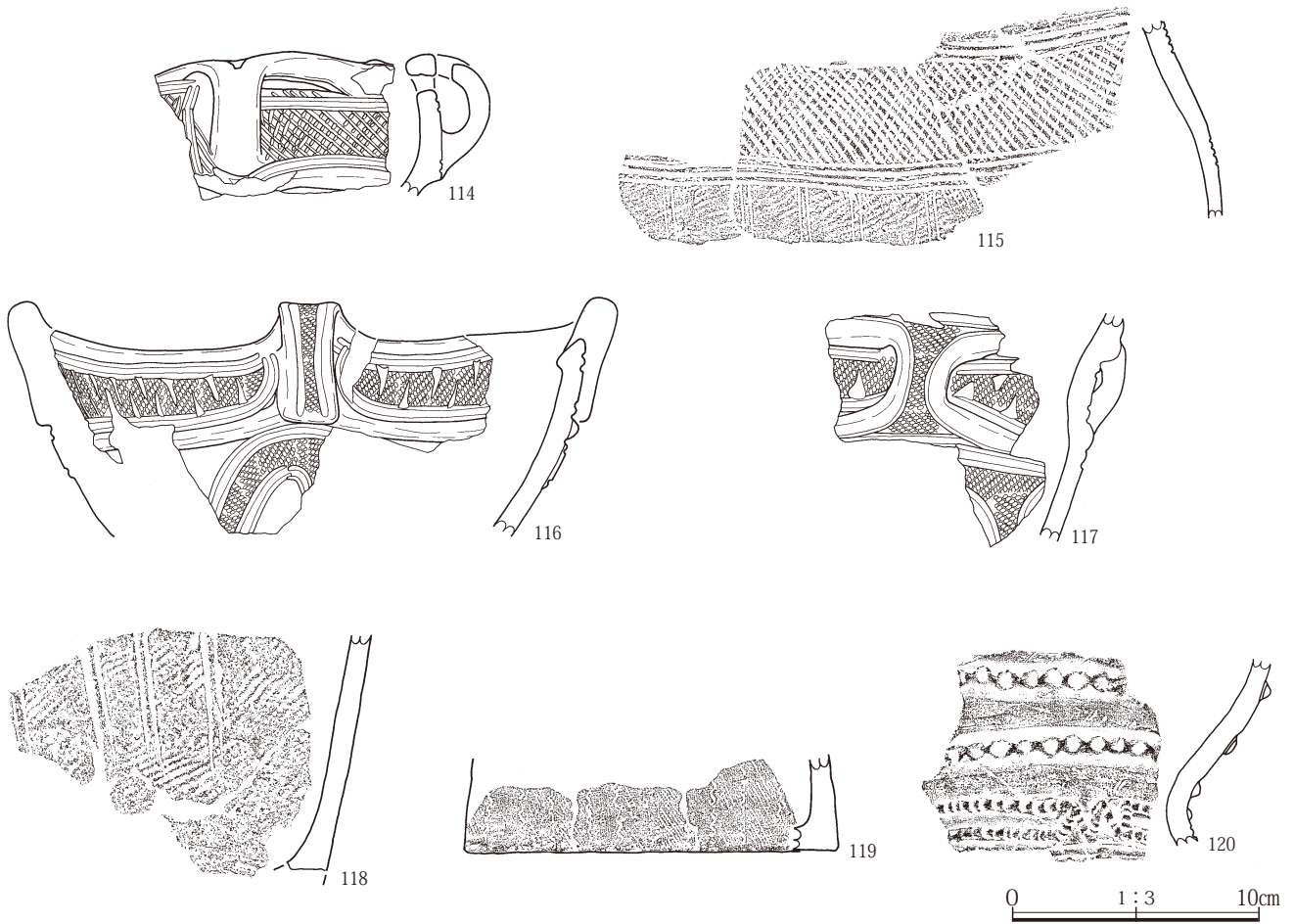
型式別の数量は第13表のとおりである。細片については分類が困難であったため、数量に含めていない。

本遺跡でもっとも古い時期は早期後半であり、鶯ヶ島台式がわずか1点出土したのみである。前期も少なく、黒浜・有尾式、諸磯a、b式、前期末葉がわずかに見られる程度で、早・前期には本格的な岩陰利用の痕跡は認められない。この地が初めて本格的に利用されるのが五領ヶ台式期であり、遺物量も格段に増える。特にⅡ式の時期が目立つようだ。その後はあまり継続せず、中期前半の出土量はまた減っていく。ピークは加曾利E 2式期である。出土点数がもっとも多いうえ、併行すると考えられる信州系の唐草文土器も多く、山梨系の曾利式、西関東系の連弧文土器も少量だが認められ、活発な交流があったことがうかがえる。その後、E 3式、E 4式と徐々に減り、称名寺式、堀之内1式期は全く認められなくなる。堀之内2式期になり、わずかだがまた確認され始め、加曾利B式、後期後葉期へと続く。晩期前半はまた中断し、後半氷式期になってまた利用されている。

出土土器から以上のような変遷がたどれ、縄文時代を通して断続的にこの岩陰が利用されていたことが分かるだろう。



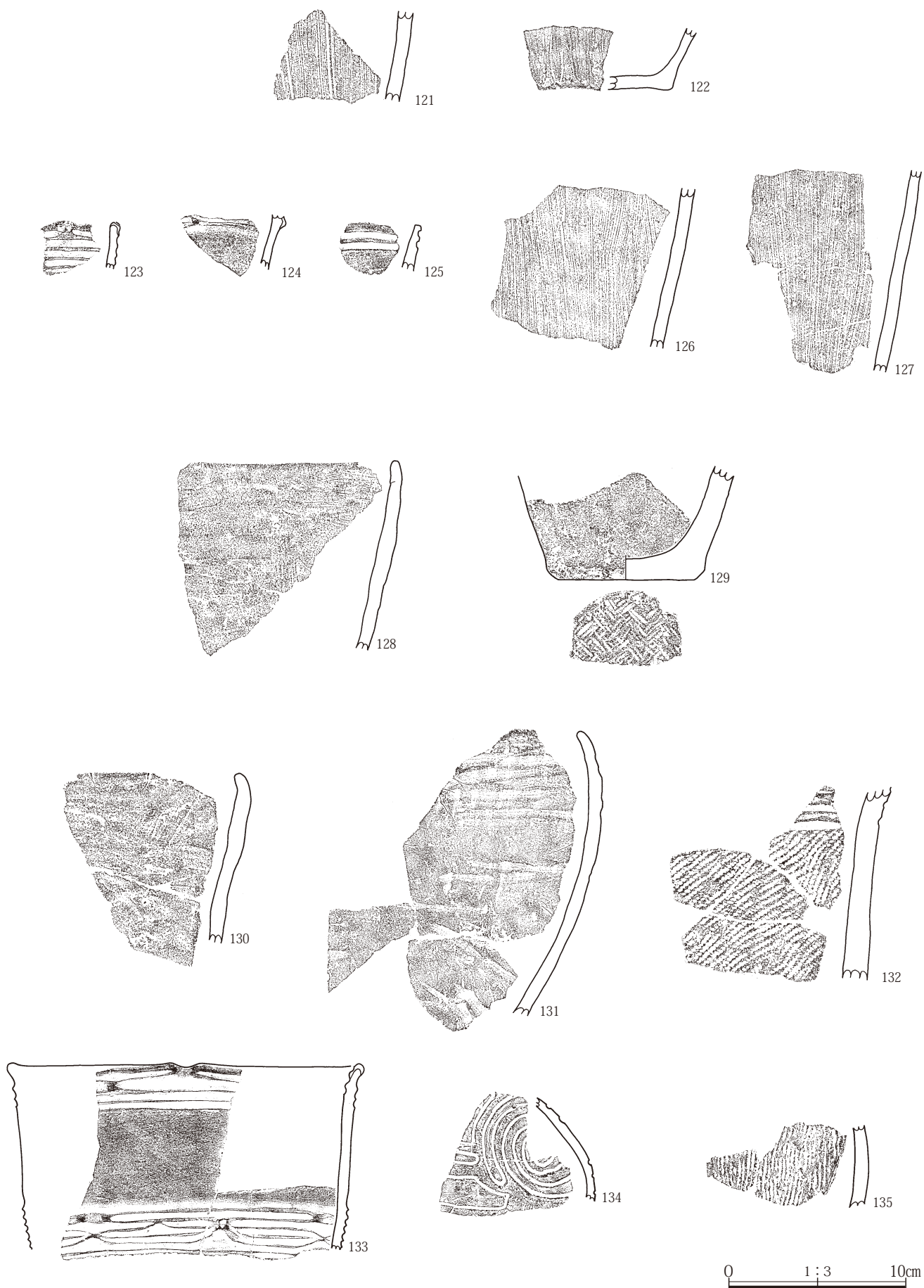
第28図 出土遺物実測図(7) (縄文土器1) (第2号・第3号土坑)



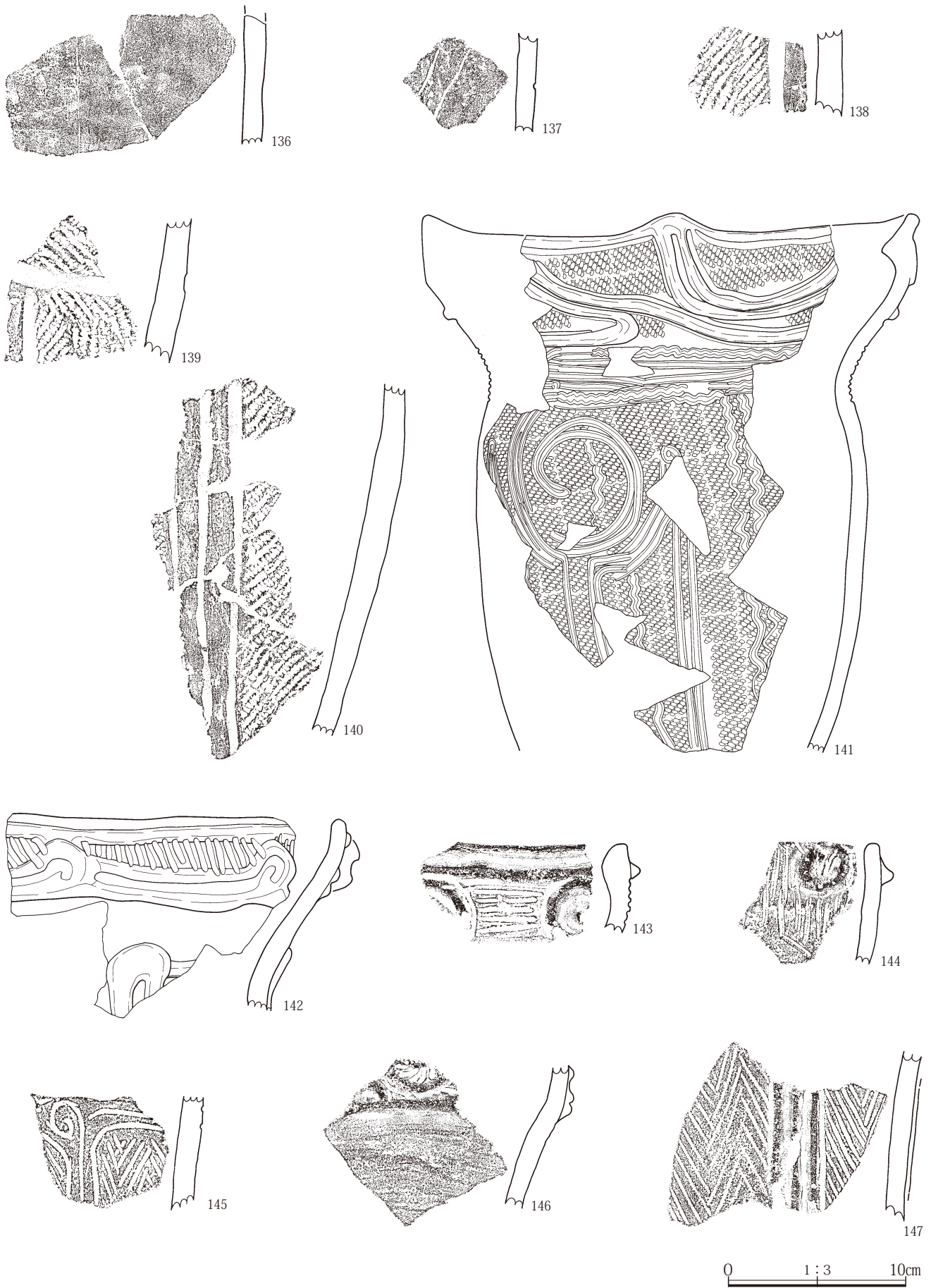
第29図 出土遺物実測図(8) (縄文土器2) (第1号集石)

第14表 出土遺物一覽表

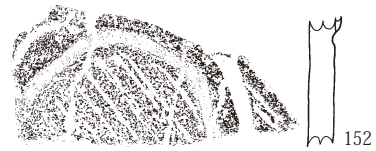
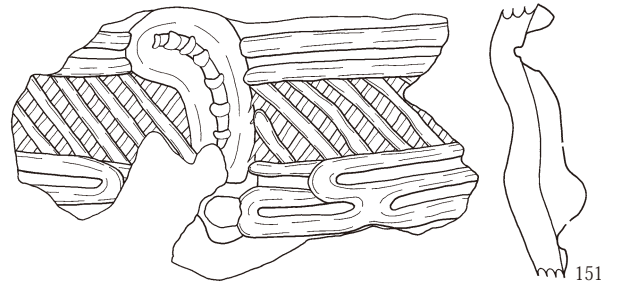
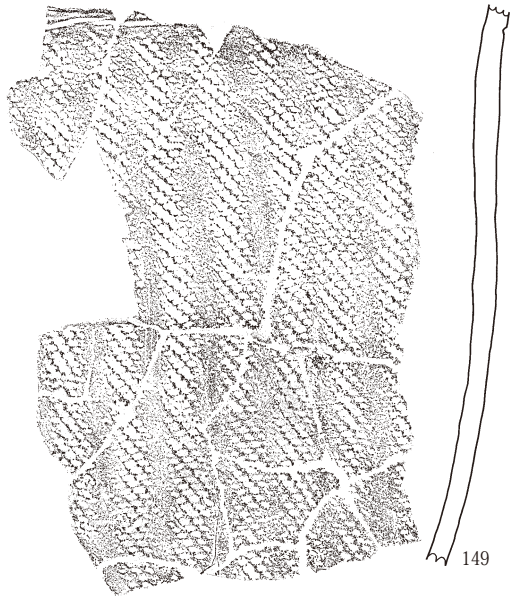
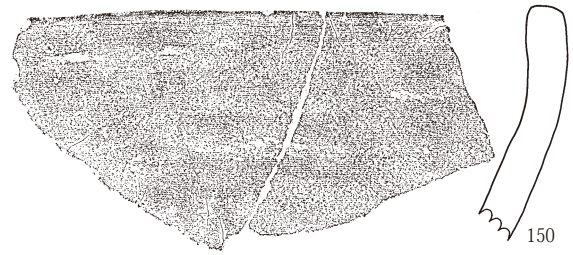
	鶺ヶ島台	黒浜・有尾	諸磯a	諸磯b	前期末葉	前末～中初	五領ヶ台	阿玉台	勝坂	焼町	大木7b	中期中葉	中期中葉	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	曾利・唐草	連弧文	大木8b	中期中葉	中期縄文・無文	堀之内2	加曾利B	高井東	後期中葉	後期後葉	氷式	後晩期無文	小計	
2・4号土坑							11			2		1	11	1		1														27
1号集石					1		77																							78
4号土坑				2			6										1													9
A1層																														1
A2層																												1		1
A3層																											1	4		5
B層																											9			9
Ⅲa層														1														3		4
2層														1			1											6		8
3層																							1					5		6
4-2層																3						1					1	1		6
8層												1		7	1	5	1					1								16
10層							1						2	70	3	5	39													120
13層							2			3				12	9	6	14										1	1		48
15層														2	2															4
17層									1		1																			2
18層							7		1		1	3		2																14
一括	1	18	1	5	16	5	622	5	26	43		24	14	711	206	43	621	6	1	189	698	16	58	2	5	3	37	741	4117	
小計	1	18	1	7	17	5	726	5	28	48	2	28	17	817	222	62	678	6	1	189	699	18	58	2	5	3	50	762	4475	



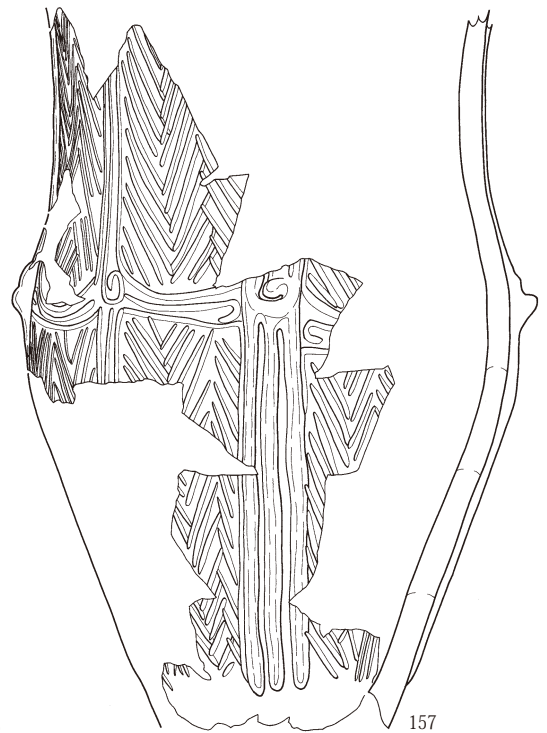
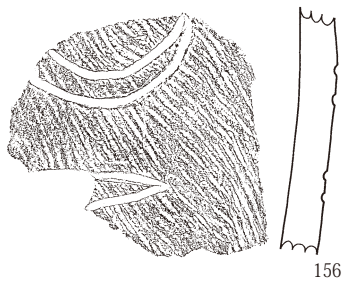
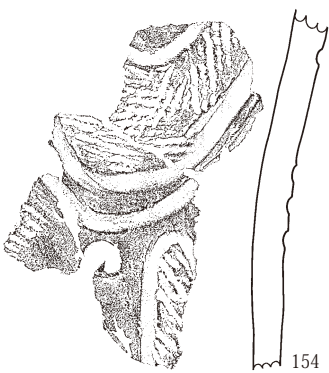
第30図 出土遺物実測図(9) (縄文土器3) (層位別出土遺物1)



第31図 出土遺物実測図(10) (繩文土器4) (層位別出土遺物2)



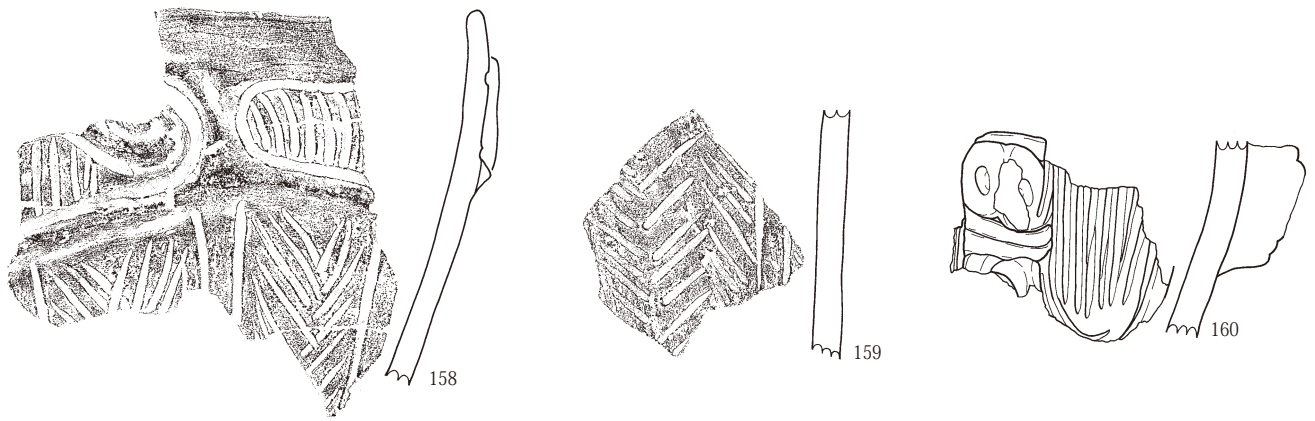
10層



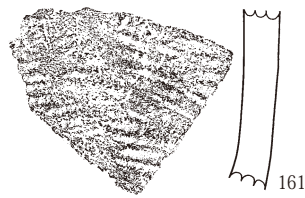
13層

0 1:3 10cm

第32図 出土遺物実測図(11) (縄文土器5) (層位別出土遺物3)



13層



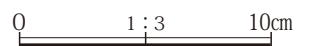
17層



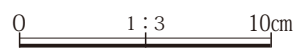
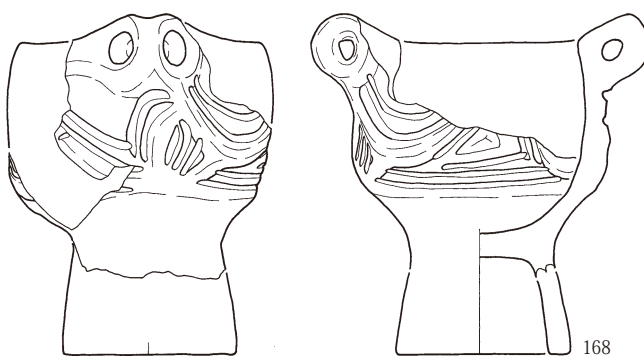
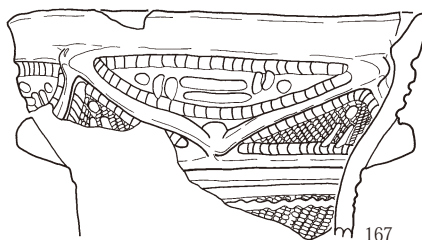
16層・18層



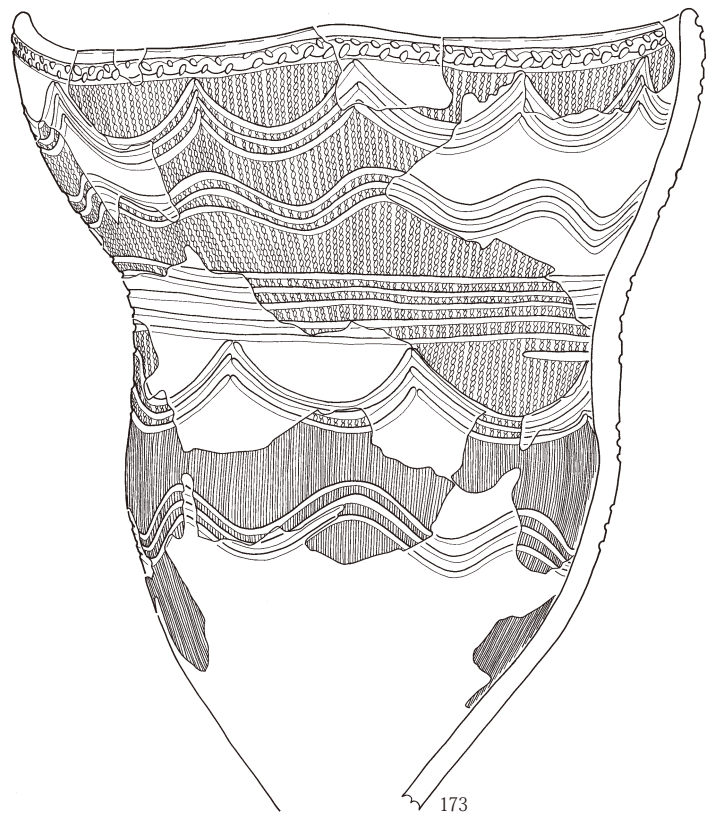
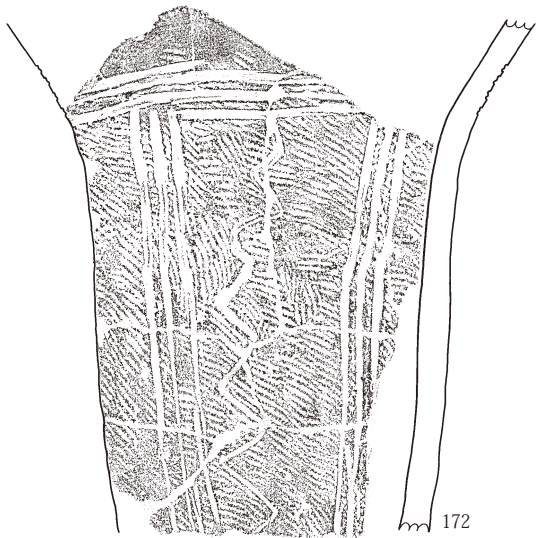
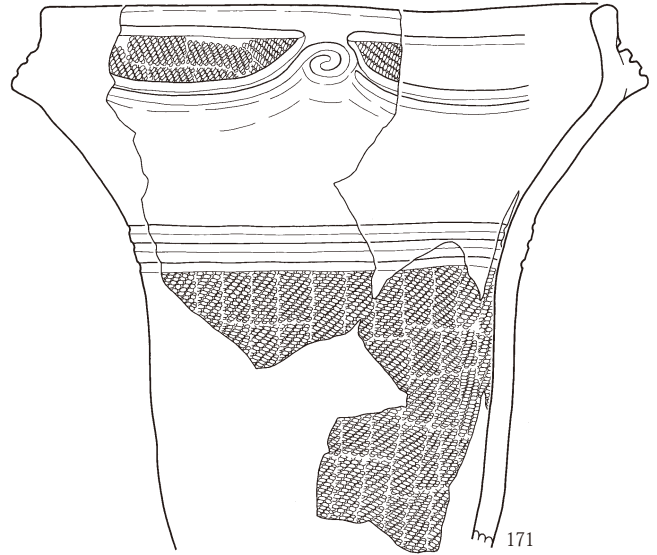
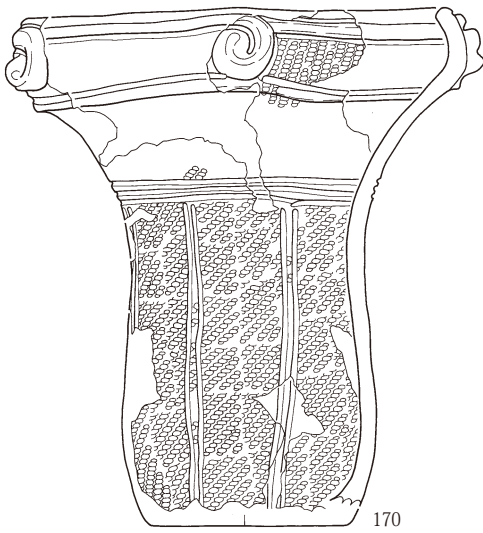
19層



第33図 出土遺物実測図(12) (縄文土器6) (層位別出土遺物4)

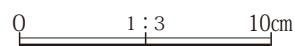
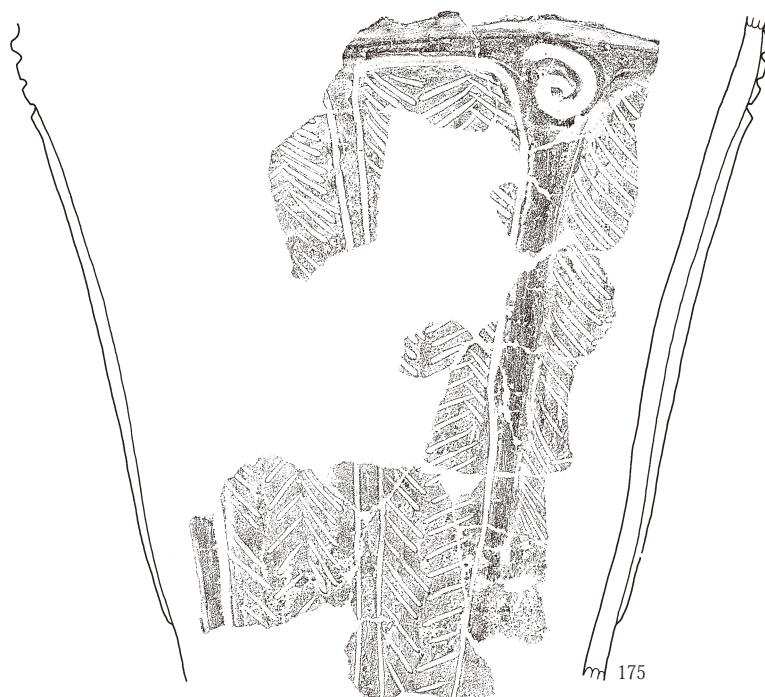
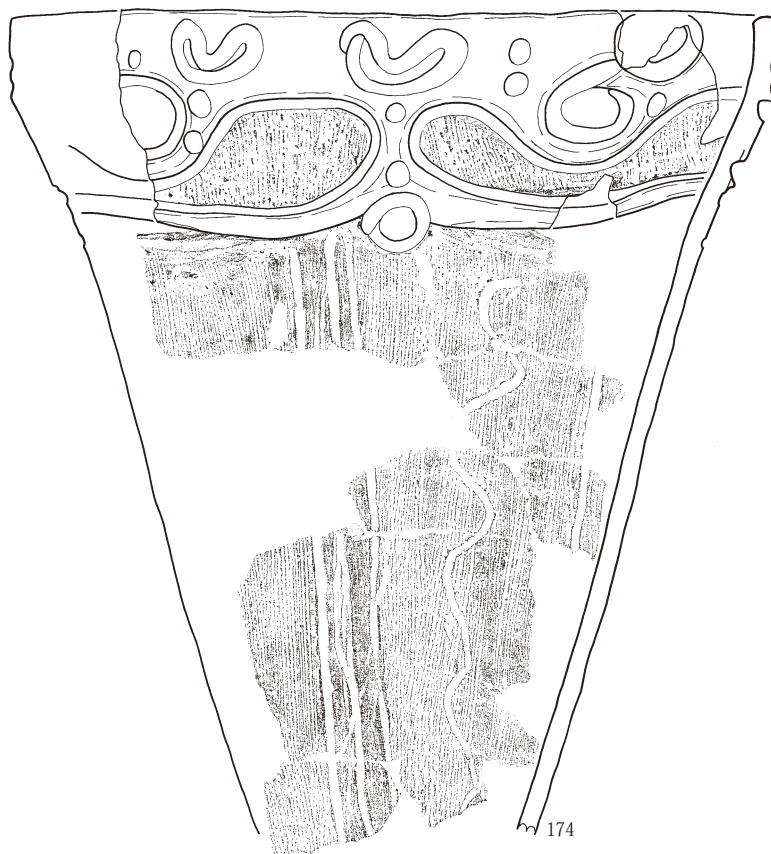


第34図 出土遺物実測図(13) (縄文土器7) (包含層1)

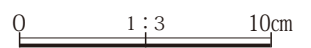
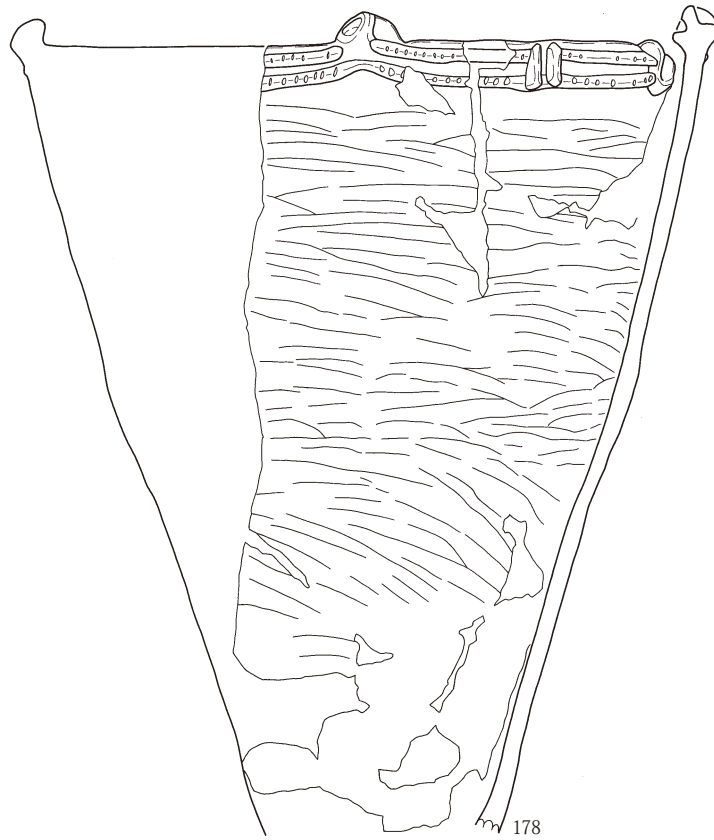
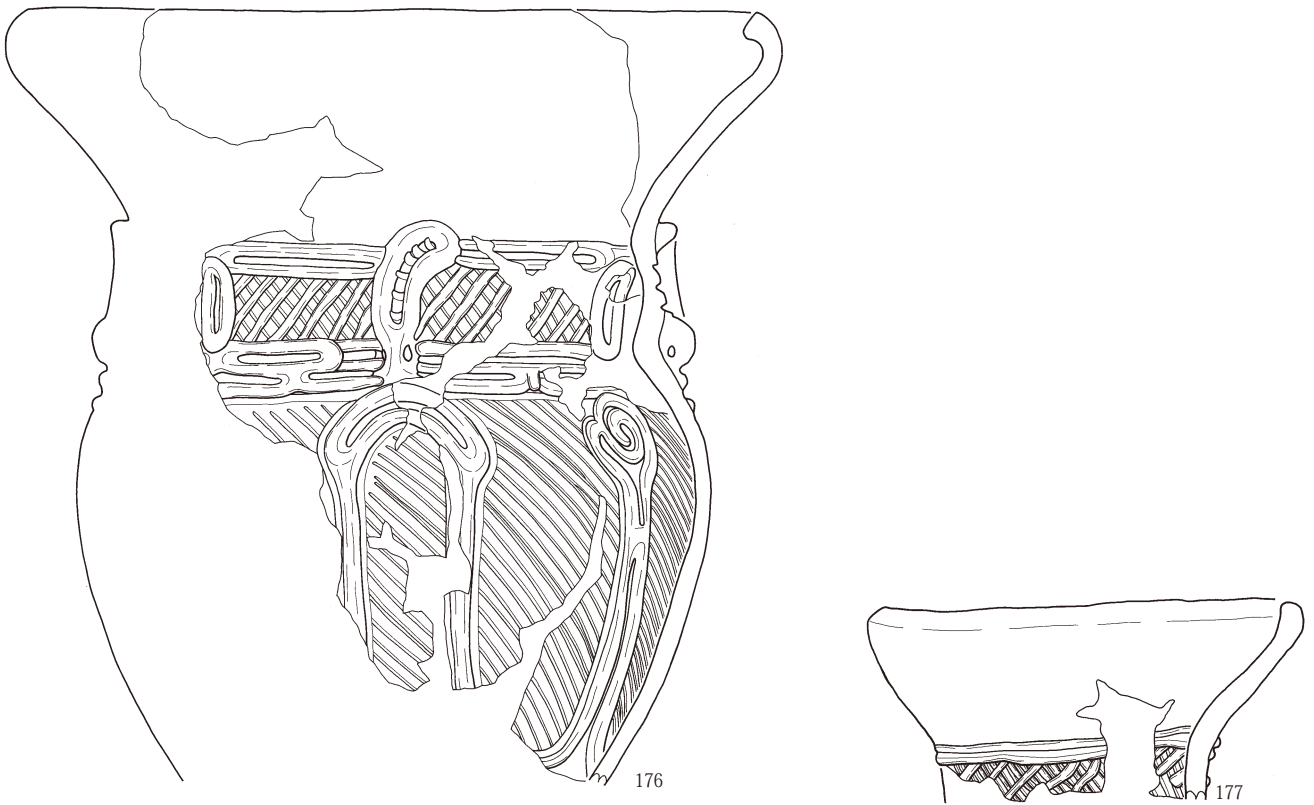


0 1:3 10cm

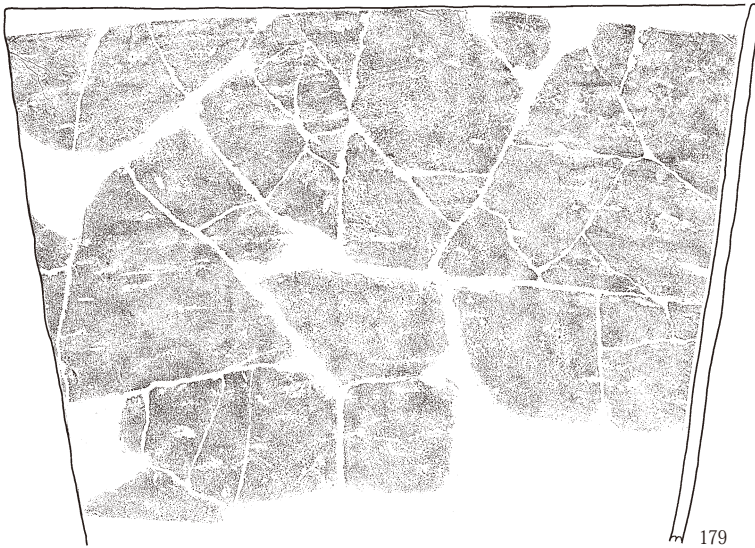
第35図 出土遺物実測図(14) (縄文土器8) (包含層2)



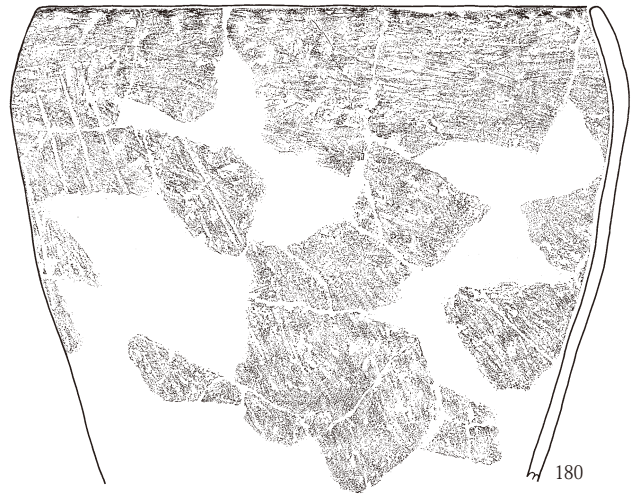
第36図 出土遺物実測図(15) (縄文土器9) (包含層3)



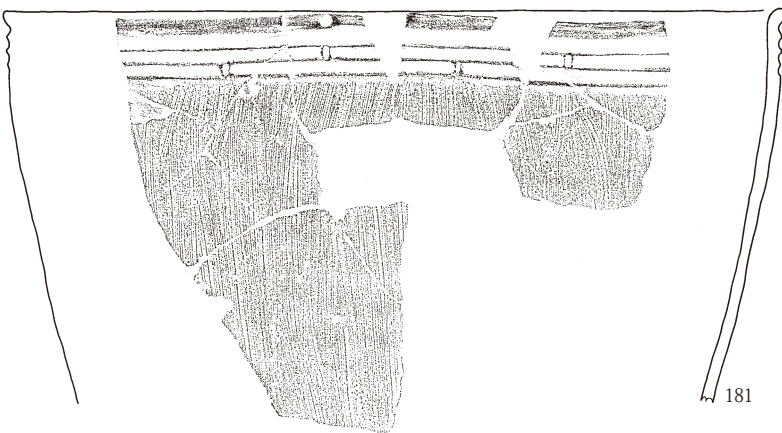
第37図 出土遺物実測図(16) (縄文土器10) (包含層3)



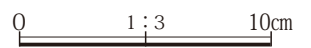
179



180



181



第38図 出土遺物実測図(17) (縄文土器11) (包含層4)



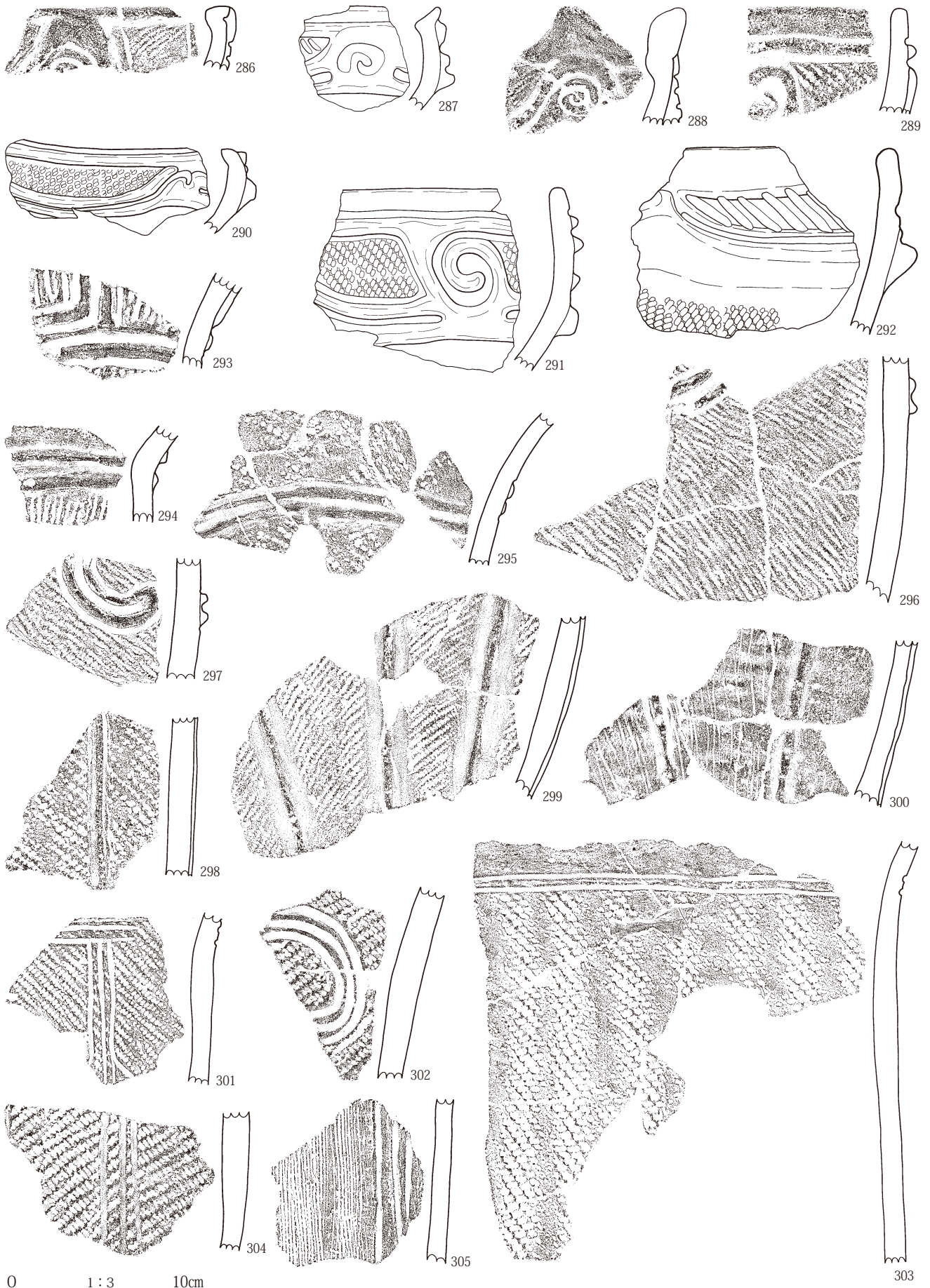
第39図 出土遺物実測図(18) (縄文土器12) (包含層5)



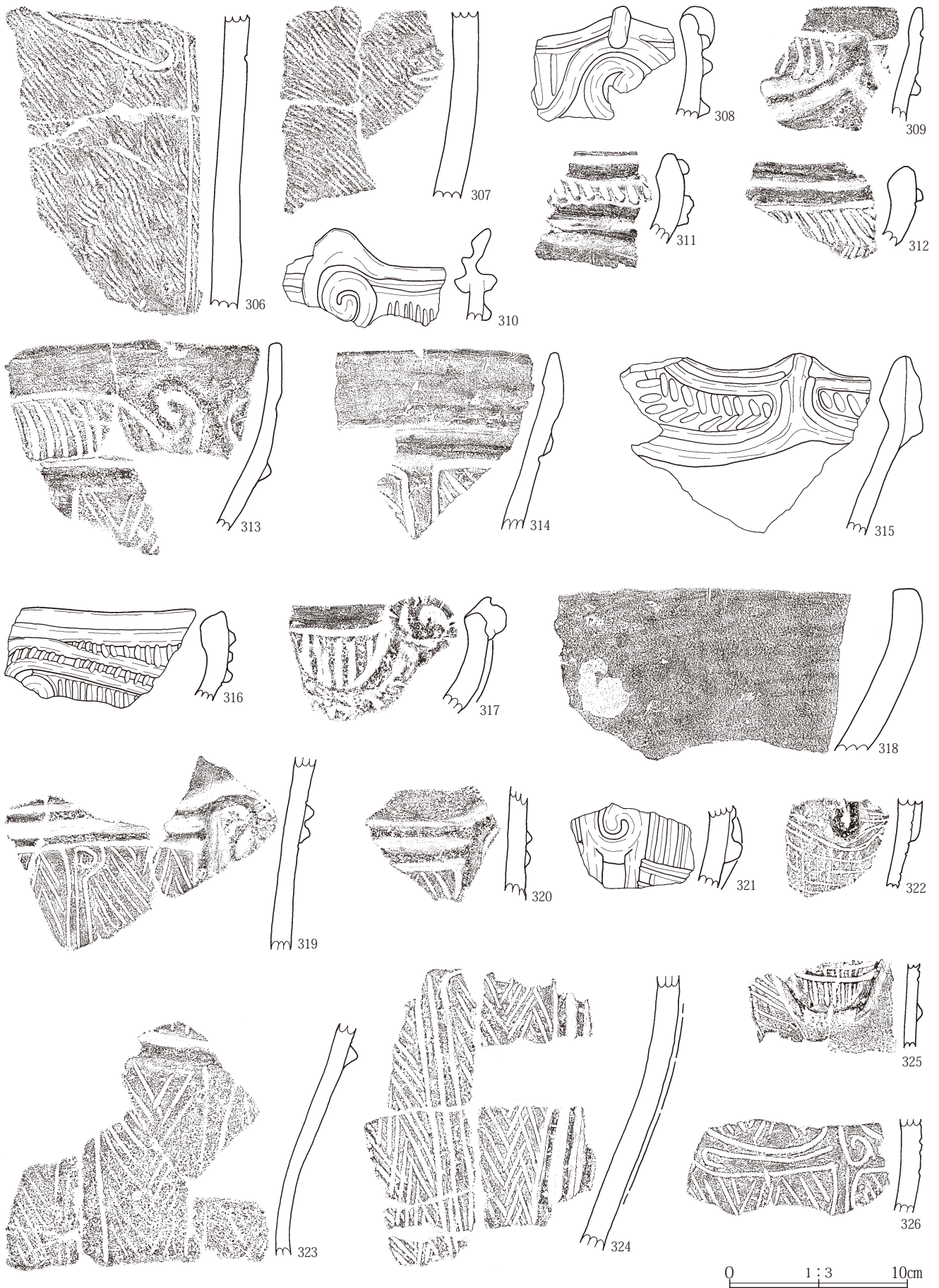
第40図 出土遺物実測図(19) (縄文土器13) (包含層6)



第41圖 出土遺物実測図(20) (縄文土器14) (包含層7)



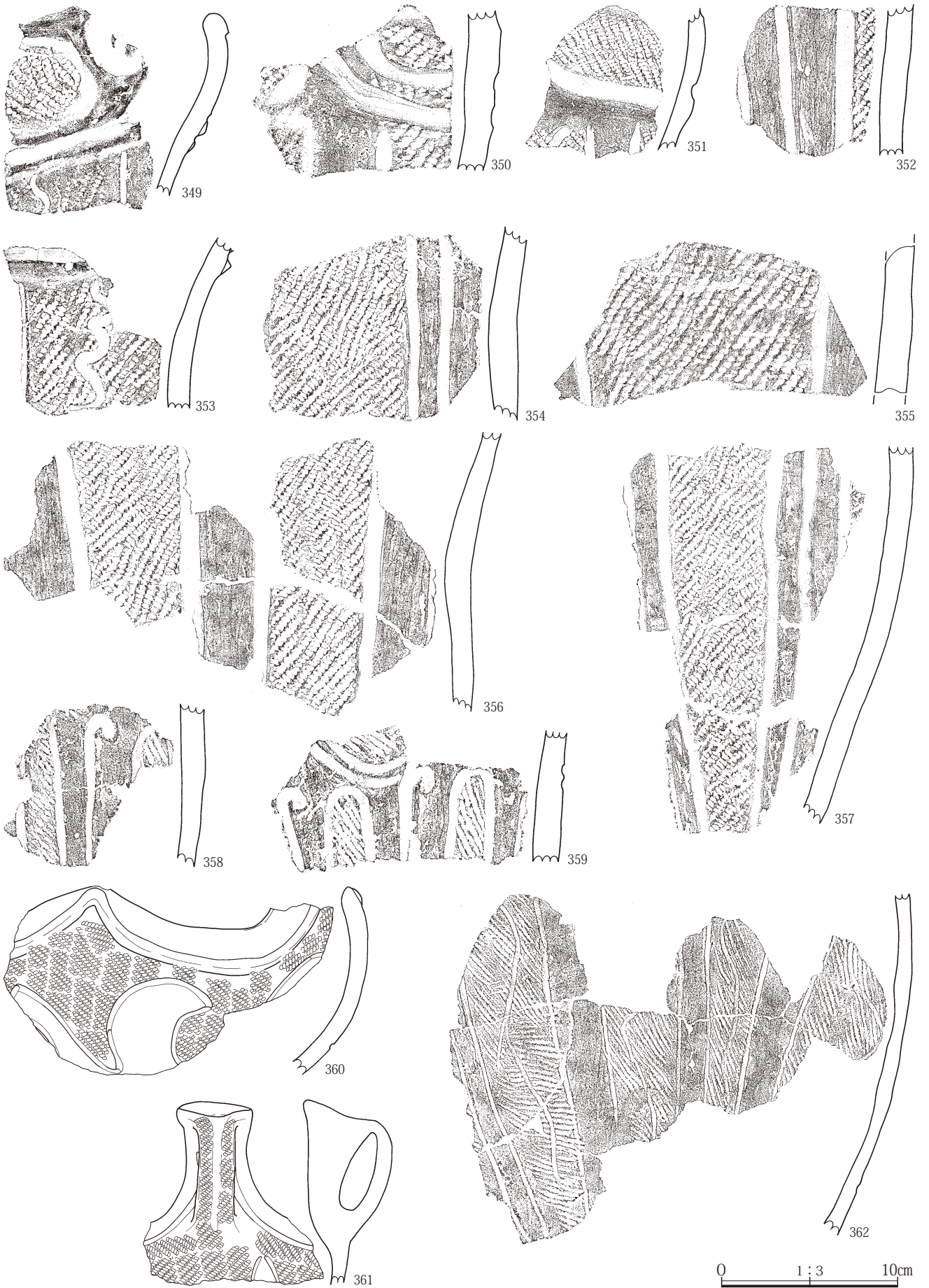
第42図 出土遺物実測図(21) (縄文土器15) (包含層8)



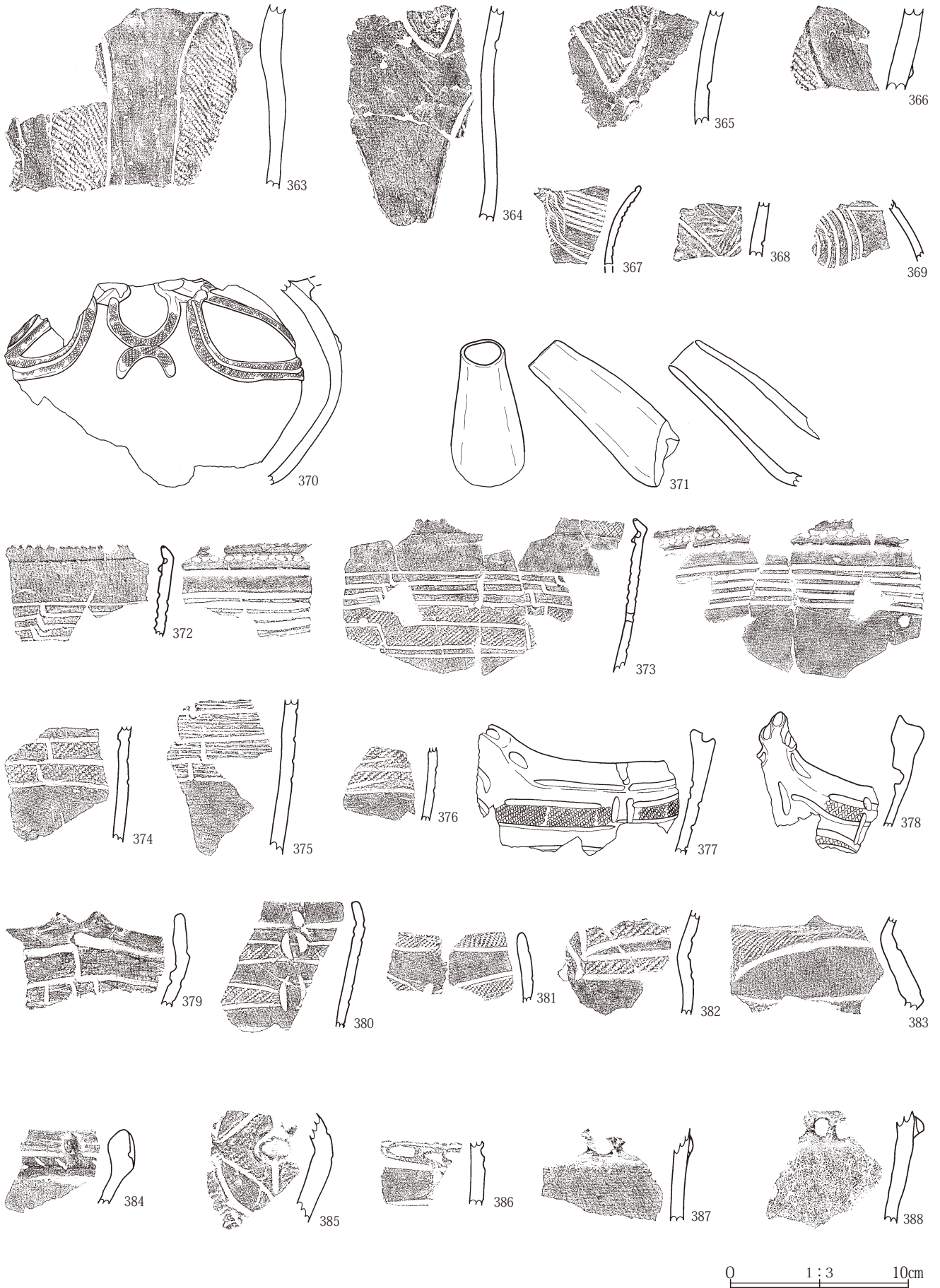
第43図 出土遺物実測図(22) (縄文土器16) (包含層9)



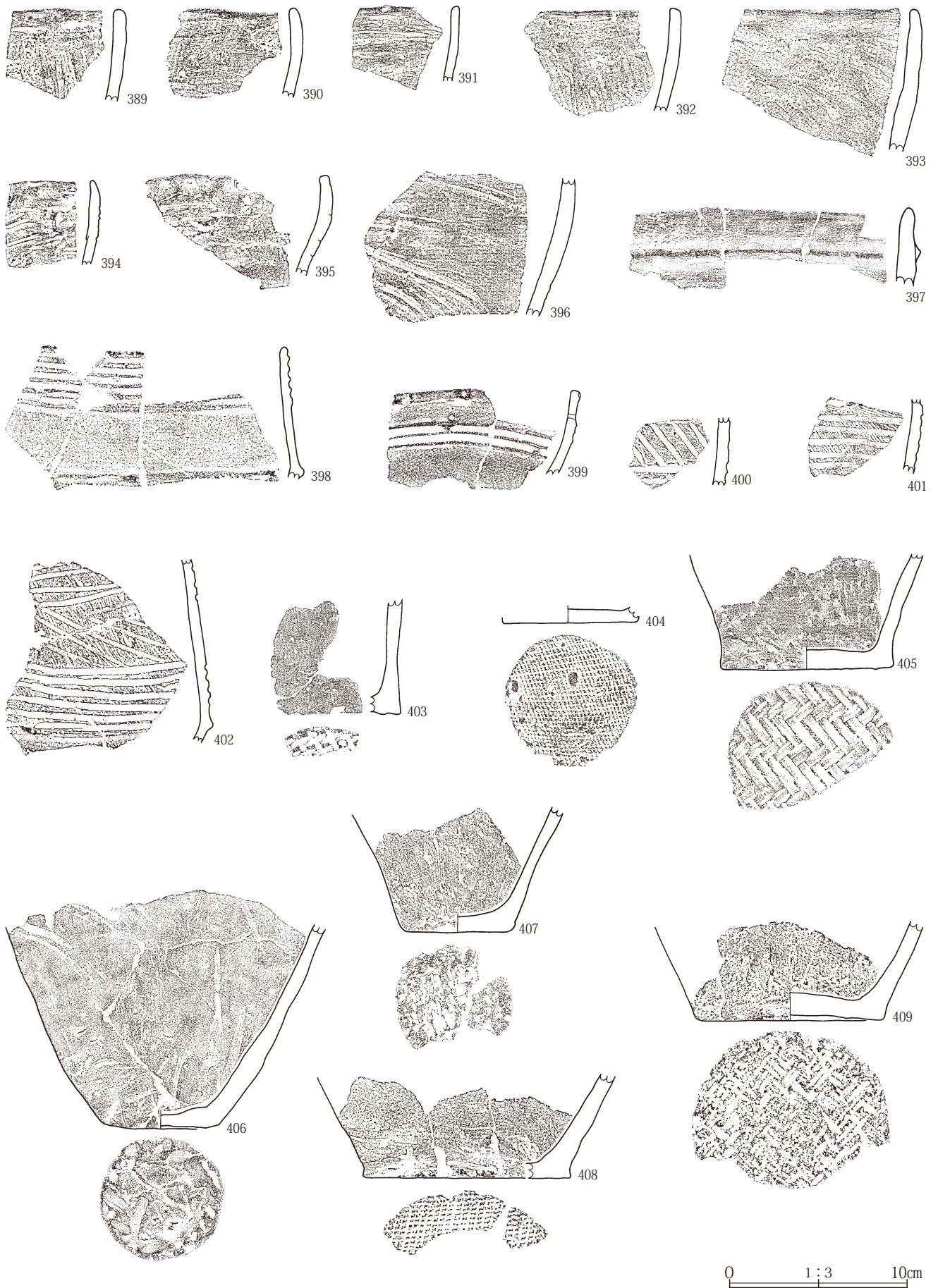
第44図 出土遺物実測図(23) (縄文土器17) (包含層10)



第45図 出土遺物実測図(24) (縄文土器18) (包含層11)



第46図 出土遺物実測図(25) (縄文土器19) (包含層12)



第47図 出土遺物実測図(26) (縄文土器20) (包含層13)

第15表 縄文土器観察表(1)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
107	28 29	深鉢	2坑覆土	口縁部破片	細砂、黒色粒	暗赤褐	良好	口縁部に縦位沈線帯を施す。	五領ケ台式
108	28 29	深鉢	2坑覆土	胴部破片	粗砂、チャート、黒色粒	暗赤褐	良好	2条沈線による懸垂文を施し、鋸歯状文、斜位沈線を充填施文する。地文にRL縦位施文。	五領ケ台式
109	28 29	深鉢	2坑覆土	口縁部破片	細砂、白色粒、黒色粒	にぶい 橙	普通	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
110	28 29	深鉢	4坑覆土	口縁～胴下位	細砂、雲母	明赤褐	良好	推定口径26.4cm。頸部でくの字状に外屈、口縁に小突起を付す。口縁部をやや肥厚させて縦位短沈線帯を作出。頸部下に隆帯をめぐらして口縁部、胴部文様帯を区画、口縁部には横位、縦位の沈線による杵状区画を上下2帯に配し、下段の内部にT字状の短沈線を充填する。区画隆帯に接するように波頂部下にU字状隆帯を貼付する。胴部は波頂部下に隆帯を垂下、隆帯に沿うようにコの字状に沈線、竹管外皮による刺突列を施す。部分的に交互刺突を施す。	五領ケ台式
111	28 29	深鉢	4坑覆土	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	暗赤褐	良好	キャリパー状。頸部に隆帯をめぐらして区画、口縁部に交互刺突、斜格子目文帯、胴部に沈線、竹管外皮による刺突列を施す。口縁を肥厚させ、縦位沈線を充填する。	五領ケ台式
112	28 29	深鉢	4坑覆土	口縁部破片				No.111と同一個体。	五領ケ台式
113	28 29	深鉢	4坑覆土	口縁部破片	粗砂、黒色粒、雲母	にぶい 赤褐	良好	キャリパー状。緩やかな波状口縁で波頂部下にC字状の隆帯を貼付、脇に渦巻文を施す。貼付下端部と頸部に横位沈線をめぐらして2帯の横帯を区画、内部に縦位沈線を充填施文、部分的に交互刺突を施す。頸部下は等間隔に垂下文を施した横位沈線をめぐらす。	五領ケ台式
114	29 29	深鉢	1集石覆土	口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	口縁部に斜格子目沈線帯を施し、平行沈線で画す。橋状把手を付し、頂部に三角透かしを施す。口唇部に刺突を施した貼付文を付す。	五領ケ台式
115	29 29	深鉢	1集石覆土	胴部破片	粗砂、黒色粒、雲母	橙	良好	横位平行沈線により斜格子目沈線帯を区画、以下、平行沈線を垂下させる。地文にRLを縦位施文。	五領ケ台式
116	29 29	深鉢	1集石覆土	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	暗赤褐	良好	推定口径23.3cm。口縁に板状の突起を付す。突起下端から隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、内部にLRを充填施文、三角印刻による交互刺突を施し、平行沈線で縁取る。隆帯下には逆U字状の薄い粘土帯を貼付、LRを施し、平行沈線で縁取る。	五領ケ台式
117	29 29	深鉢	1集石覆土	胴部破片				No.116と同一個体。橋状把手を付す。	五領ケ台式
118	29 29	深鉢	1集石覆土	底部破片	粗砂、雲母	明赤褐	良好	LRを地文とし、平行沈線による懸垂文を施す。	五領ケ台式
119	29 29	深鉢	1集石覆土	底部破片	細砂	赤褐	良好	推定底径15.0cm。結節LRを縦位帯状施文する。	五領ケ台式
120	29 29	深鉢	1集石覆土	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	普通	押捺を伴う2条の隆帯、屈曲部に2条の結節浮線、平行沈線をめぐらす。結節浮線は途中、鋸歯状に連結する。	前期末葉
121	30 29	深鉢	A-1層	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	縦位条線を施す。No.180と同一個体と思われる。	氷式
122	30 29	深鉢	A-1層	底部破片	細砂	橙	良好	残存部は無文。	晩期か
123	30 29	深鉢	A-2層	口縁部破片	細砂	黒褐	良好	口縁に小突起を付す。浮線網状文を施す。	氷式
124	30 29	深鉢	A-2層	胴部破片	細砂	にぶい 褐	良好	文様帯下端の部位。浮線網状文を施す。	氷式
125	30 29	深鉢	A-2層	口縁部破片	細砂	黒	良好	口縁下に2条の沈線をめぐらす。	氷式
126	30 29	深鉢	A-2層	胴部破片	細砂	橙	良好	縦位条線を施す。内面ナデ痕顕著。No.180と同一個体と思われる。	氷式
127	30 29	深鉢	A-2層	胴部破片				No.126と同一個体。	氷式
128	30 29	深鉢	A-3層	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	黒褐	良好	口縁が緩く内湾。無文。内外面調整による凹凸目立つ。外面ハケ状の横位の擦痕が見られる。	晩期か
129	30 29	深鉢	A-3層	底部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	推定底径7.6cm。残存部は無文。底面に網代痕。	後晩期
130	30 30	深鉢	B層	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	にぶい 赤褐	良好	No.128と同一個体と思われる。	晩期か
131	30 30	深鉢	B層	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	黒褐	普通	口縁が緩く内湾。無文。口縁部横線状の調整痕目立つ。部分的に縦磨ぎ。内面ヘラナデ。	晩期か

第16表 縄文土器観察表(2)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
132	30 30	深鉢	B層	胴部破片	細砂	橙	良好	頸部に横位沈線をめぐらし、以下、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 2式
133	30 30	深鉢	4-2層	口縁部破片	細砂	黒	良好	推定口径19.5cm。口縁に2尖の小突起を付す。口縁部、胴上位に浮線網状文を施す。内外面研磨。	水式
134	30 30	注口土器	4-2層	胴部破片	細砂	黒褐	良好	沈線により渦巻文などの幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	堀之内2式
135	30 30	深鉢	4-2層	胴部破片	細砂、石英	浅黄橙	良好	沈線によるU字状モチーフを描き、L Rを充填施文する。	加曾利E 4式
136	31 30	深鉢	8層	胴部破片	細砂、黒色粒	黒褐	良好	無文。	中期か
137	31 30	深鉢	8層	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	斜位の带状沈線を施す。	加曾利E 4式
138	31 30	深鉢	8層	胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい黄橙	普通	沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
139	31 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂	にぶい橙	良好	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、R Lを充填施文する。	加曾利E 3式
140	31 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	3条沈線による懸垂文を施し、R Lを縦位充填施文する。	加曾利E 3式
141	31 30	深鉢	10層	口縁~胴下位	粗砂、黒色粒	赤褐	良好	推定口径36.4cm。緩やかな波状口縁。頸部に平行沈線、コンパス文状の波状文をめぐらして区画、口縁部は隆帯による斜位、弧状のモチーフを施し、胴部は平行沈線による渦巻状、弧状モチーフ、直線、蛇行懸垂文を施す。地文にR Lを施文。	加曾利E 2式
142	31 30	深鉢	10層	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	隆帯による渦巻つなぎ弧文をめぐらして口縁部文様帯を区画、内部に縦位沈線を充填施文する。。胴部は隆帯による腕骨文状の懸垂文を施す。	唐草文系
143	31 30	深鉢	10層	口縁部破片	細砂、黒色粒	にぶい赤褐	良好	横位、渦巻状の隆帯を施し、余白に横位沈線を充填施文する。	唐草文系
144	31 30	深鉢	10層	口縁部破片	細砂、白色粒、黒色粒	にぶい黄橙	良好	口縁下にの字状貼付文を付し、縦位沈線を施す。	唐草文系
145	31 30	深鉢	10層	胴部破片	細砂、黒色粒、石英	明赤褐	良好	沈線による逆U字状、ワラビ手状懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
146	31 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、隆帯による渦巻状モチーフを施し、沈線を充填施文する。頸部無文。	唐草文系
147	31 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂、黒色粒、石英	橙	良好	3条隆帯による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
148	32 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂	橙	普通	沈線を施した隆帯を縦位、渦巻状に施す。地文にL R縦位施文。	加曾利E 2式
149	32 31	深鉢	10層	胴部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位沈線をめぐらし、以下、複節L R Lを縦位施文する。	加曾利E 2式
150	32 30	深鉢	10層	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	口縁の無文部で緩く内湾する。	曾利系
151	32 30	深鉢	10層	胴部破片	粗砂	明赤褐	良好	No.176と同一個体。横位隆帯をめぐらして区画、平行沈線と隆帯により斜格子目文を施す。逆J字状の隆帯を貼付し、内部に半截竹管による刺突を施す。	曾利系
152	32 30	深鉢	10層	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	No.151と同一個体。U字状の隆帯を施す。地文に斜位の平行沈線を施文。	曾利系
153	32 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂	橙	普通	No.135と同一個体と思われる。沈線による弧状モチーフを描き、L Rを充填施文する。	加曾利E 4式
154	32 31	深鉢	13層	胴部破片				沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、無節L rを充填施文。無文部にワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E 3式
155	32 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂、黒色粒	暗赤褐	良好	No.154と同一個体。	加曾利E 3式
156	32 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂、黒色粒	赤褐	良好	L R縦位施文を地文とし、沈線による曲線モチーフを描く。	加曾利E 2式
157	32 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	橙	良好	腕骨文状の3条隆帯を垂下、さらに内部を腕骨文状の3条沈線により十字状に区画し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
158	33 31	深鉢	13層	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	隆帯により口縁部文様帯を区画、隆帯による渦巻文、沈線による楕円状区画を施し、縦位沈線を充填施文する。胴部は2条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
159	33 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	普通	2条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系

第17表 縄文土器観察表(3)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
160	33 31	深鉢	13層	胴部破片	細砂	にぶい 橙	良好	環状貼付、曲隆線を施し、平行沈線を充填施文する。	焼町土器
161	33 31	深鉢	17層	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	L Rを縦位施文する。	加曾利 E 2 式
162	32 31	深鉢	16・18 層	口縁部破片	細砂、黒色粒	赤褐	良好	口縁が緩く内湾。口縁部に隆帯による楕円状の杵状文を施し、内部に押引文を沿わせる。杵状文の下に1条の押引文をめぐらし、連弧文をめぐらす。間隙に三角印刻を施す。頸部と思われる部位に押引文を沿わせた鉤の手状の隆帯を施す。地文にL Rを縦位施文。	大木 7 b 式
163	33 31	深鉢	18層	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	キャリパー状。押引文を沿わせたクランク状の隆帯を施して区画、押引文による対向する渦巻文、連弧文を施す。地文にR L横位施文。	勝坂式
164	33 31	深鉢	18層	胴部破片	細砂、黒色粒、石 英	暗赤褐	良好	No.153と同一個体。押引文を沿わせた隆帯を垂下させる。	大木 7 b 式
165	33 31	深鉢	18層	胴部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	頸部でくの字状に外屈。R Lを地文とし、沈線による三角文を重層させる。中心に縦位沈線を充填。	五領ヶ台式
166	34 31	深鉢	未注記	口縁～底部 3/4	粗砂、片岩	明赤褐	良好	口径21.4cm、底径13.8cm、器高30.4cm。円筒状の器形。ほぼ全面無文だが、ほんの一部にL Rを縦位帯状施文する。	五領ヶ台式
167	34 31	深鉢	C-6	口縁部破片	細砂、黒色粒、石英、 雲母	明赤褐	良好	推定口径16.3cm。口縁部に隆帯による三角区画文を施し、竹管外皮による押引文で縁取り、短沈線、刺突を充填する。頸部に横位2条と波状沈線をめぐらす。地文にR Lを施文。	勝坂式
168	34 31	台付鉢	E-8	口縁～台上位 2/3	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	推定口径9.5cm。おそらく対になると思われる環状把手を口縁に付す。横位隆帯をめぐらして区画、弧状の隆帯、沈線、印刻を施す。	焼町土器
169	34 32	深鉢	不詳	胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	曲隆線を施し、沈線を充填施文する。環状突起を付す。	焼町土器
170	35 31	深鉢	B-6	口縁～底部 2/3	粗砂、チャート細 礫	暗赤褐	良好	口径22.0cm。隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、4単位の隆帯による渦巻文を配す。3条沈線をめぐらして頸部無文帯を区画し、胴部は2条沈線による懸垂文を施す。地文にR Lを施文。	加曾利 E 2 式
171	35 32	深鉢	B-6 C-4 C-6	口縁～胴中位	細砂、黒色粒	橙	良好	推定口径29.5cm。隆帯による渦巻つなぎ弧文をめぐらして口縁部文様帯を区画、内部にR Lを充填施文する。3条沈線をめぐらして頸部無文帯を区画し、沈線下にR Lを縦位充填施文する。	加曾利 E 2 式
172	35 31	深鉢	B-7 C-5	頸部～胴下位	粗砂、細礫、黒色 粒	赤褐	良好	4条の沈線をめぐらして頸部無文帯を区画、胴部はL Rを地文とし、3条沈線による懸垂文、蛇行懸垂文を施す。横位の区画沈線および3条懸垂文の上部は半截竹管内皮、懸垂文下部、蛇行懸垂文は外皮を用いている。	加曾利 E 2 式
173	35 32	深鉢	B-6 他	口縁～胴下位	細砂、黒色粒	にぶい 橙	良好	推定口径35.7cm。緩やかな波状口縁。口縁部に交互刺突、屈曲部に5条の沈線をめぐらして区画、3条沈線による連弧文、波状文を上下2帯にそれぞれ施す。地文に上半は撚糸文L、下半は縦位条線を施文。	連弧文系
174	36 32	深鉢	B-6 ～8	口縁～胴下位	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	推定口径40.0cm。隆帯による口縁部楕円状区画、3条沈線による胴部懸垂文を施し、縦位条線を充填施文、胴部条線帯に蛇行懸垂文を施す。口縁下に沈線によるハート状モチーフ、円形刺突、楕円状区画の接点下に凹文を施す。	加曾利 E 3 式
175	36 33	深鉢	B-5 ～7	胴部破片	細砂、黒色粒	赤褐	良好	横位隆帯をめぐらして区画、さらに垂下させ、交点に沈線による渦巻文を施す。胴部区画内は逆U字状懸垂文を2帯施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
176	37 33	深鉢	B-1 C-5 S B	口縁～胴下位	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	推定口径38.7cm。口縁部無文帯が強く外反、口縁が内湾する。頸部に隆帯をめぐらして区画、平行沈線、隆帯により斜格子目文帯を作出、逆J字状、楕円状隆帯を貼付する。逆J字状隆帯の内部は半截竹管による刺突を充填し、下位は橋状把手となる。胴部はU字状の隆帯を横位に連続させる。上端の接点には逆U字状、渦巻文を配す。地文に斜位の平行沈線を充填施文。	曾利系
177	37 32	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	推定口径15.8cm。頸部でくの字状に外屈して口縁が開く。頸部より上位は無文帯とし、頸部下に沈線を伴う隆帯をめぐらして区画、斜位沈線、斜格子目隆帯を充填施文する。	曾利系
178	37 33	深鉢	C-6	口縁～胴下位	粗砂、黒色粒	橙	良好	推定口径34.6cm。口縁に小突起を付す。口縁下に刻みを付した隆帯を2条めぐらし、突起と突起の中間に縦位2条の隆帯を貼付して連結させる。隆帯下は横位、斜位のナゲ痕を顕著に残している。	後期後葉

第18表 縄文土器観察表(4)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
179	38 33	深鉢	C-4 C-5	口縁～胴中位	粗砂、黒色粒	橙	良好	口径39.5cm。口縁がまっすぐ立ち上がる円筒状の器形。無文。	後期後葉か
180	38 34	深鉢	B-6 C-5	口縁～胴部	細砂、白色粒、黒色粒	にぶい 黄橙	普通	推定口径29.2cm。口縁が緩く内湾。無文。口縁部横位、胴部斜位、内面横位のナデ痕顕著。	後期後葉か
181	38 33	深鉢	B-4 他	口縁～胴部	細砂	にぶい 赤褐	良好	推定口径41.0cm。口縁部に浮線網状文を施し、以下、縦位条線を施す。	氷式
182	39 34	深鉢	B-7	胴部破片	粗砂、繊維	橙	普通	くの字状に内屈。沈線によるモチーフ、充填沈線、円形刺突を施す。	鶴ヶ島台式
183	39 34	深鉢	C-6	胴部破片	細砂、繊維	暗赤褐	普通	くの字状に緩く外屈。横位平行沈線を施す。	有尾式
184	39 34	深鉢	Y-6 Y-7	口縁部破片	細砂、繊維	にぶい 橙	普通	R Lを横位施文する。	黒浜式
185	39 34	深鉢	Y-6 Y-7	口縁部破片	細砂、繊維	にぶい 橙	普通	R Lを横位施文する。	黒浜式
186	39 34	深鉢	Y-6 Y-7	胴部破片	細砂、繊維	にぶい 黄褐	普通	L Rを横位施文する。	黒浜式
187	39 34	深鉢	B-7	胴部破片	細砂、繊維	橙	普通	R Lを横位施文する。	黒浜式
188	39 34	深鉢	Y-6 Y-7	胴部破片	細砂	橙	良好	条線による波状文を横位多段に施す。	諸磯 a 式
189	39 34	深鉢	D-9	口縁部破片	粗砂、細礫	にぶい 赤褐	良好	口縁に小突起を付す。集合沈線による横帯構成で、横帯間に斜位の集合沈線を充填施文する。口唇部に刻みを付す。	諸磯 b 式
190	39 34	深鉢	B-7	胴部破片	粗砂	暗赤褐	良好	集合沈線による横帯構成。横帯間に矢羽根状集合沈線を充填施文する。	諸磯 b 式
191	39 34	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	弧状、斜位の集合沈線を施し、余白に印刻を施す。	前期末葉
192	39 34	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位集合沈線により区画、区画内に渦巻状の集合沈線を施し、余白に印刻を施す。	前期末葉
193	39 34	深鉢	B-7	口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	口縁が緩く内湾。口縁下に横位2条の結節浮線をめぐらし、3条の結節浮線による連弧状モチーフを施す。地文に R L 横位施文。	前期末葉
194	39 34	深鉢	B-7	胴部破片				No.193と同一個体。	前期末葉
195	39 34	深鉢	注記不詳	口縁部破片	細砂	明赤褐	良好	口縁下に素浮線を1条、刻みを付した浮線を2条めぐらす。地文に L R 横位施文。	前期末葉
196	39 34	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	刻みを付した浮線を3条めぐらす。一部地文に L R 横位施文。	前期末葉
197	39 34	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	赤褐	良好	口縁が緩く内湾。3条の結節浮線、1条の素浮線をめぐらす。	前期末葉
198	39 34	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	頸部で外屈し、口縁が緩く内湾する器形。頸部に弧状の結節浮線を貼付、口縁部に斜位の集合沈線を施す。	前期末葉
199	39 34	深鉢	C-7	口縁部破片	細砂	明赤褐	良好	波頂部に C 字状の隆帯を貼付。横位平行沈線をめぐらして区画、矢羽根状集合沈線を施す。	前期末～中期初頭
200	39 34	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	にぶい 赤褐	良好	口縁外面肥厚。斜位の集合沈線を施し、平行沈線で区画する。	前期末～中期初頭
201	39 34	深鉢	B-6	口縁部破片	粗砂	にぶい 黄橙	良好	矢羽根状集合沈線を施し、口縁下に1条の平行沈線をめぐらす。	前期末～中期初頭
202	39 34	深鉢	C-7	胴部破片	細砂	赤褐	良好	球胴形。矢羽根状集合沈線を施す。地文に R L 横位施文。	前期末～中期初頭
203	39 34	深鉢	C-7	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	くの字状に外屈。横位平行沈線をめぐらして区画、上位は羽状の集合沈線、下位は R L を施し、平行沈線による鋸歯文をめぐらす。	前期末～中期初頭
204	39 34	深鉢	C-7	口縁部破片	細砂、黒色粒、石英	にぶい 黄橙	良好	波状口縁。斜格子目沈線を施し、横位平行沈線で区画する。口唇部に擦糸文 R を施文。	五領ヶ台式
205	39 34	深鉢	C-7	口縁部破片	細砂	明赤褐	良好	口縁が強く外反。斜格子目沈線を施し、横位平行沈線で区画する。口唇部に擦糸文 L を施文。	五領ヶ台式
206	39 34	深鉢	D-8	口縁部破片	細砂、雲母	暗赤褐	良好	口縁がくの字状に強く内折。斜格子目沈線を施し、横位平行沈線で上下を区画する。	五領ヶ台式
207	39 34	深鉢	C-7	口縁部破片	粗砂、石英、雲母	暗赤褐	良好	波状口縁で波頂部下に円孔を穿つ。円孔を囲むようにこの字状に平行沈線を施し、以下、斜格子目沈線を施す。	五領ヶ台式

第19表 縄文土器観察表(5)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
208	39 34	深鉢	B-7 D-8	口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	口縁内外面肥厚。横位平行沈線をめぐらして文様帯を区画、口縁部には縦位沈線を充填施文して鋸歯状文で縁取り、弧状の貼付文を付す。胴部はRLを地文とし、平行沈線による逆U字状の懸垂文を施す。補修孔あり。	五領ケ台式
209	39 34	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	黒褐	良好	左右非対称の波状口縁で、波頂部下に円錐状の貼付を付す。隆帯による楕円状区画を施し、斜位沈線を充填施文、平行沈線により縁取る。	五領ケ台式
210	39 34	深鉢	D-9	口縁部破片	細砂、雲母	明赤褐	良好	口縁がくの字状に内折。内折部に平行沈線、三角刺突を施した環状把手を付し、斜格子目沈線を充填施文。屈曲部下は結節LRを施文し、平行沈線による懸垂文を施す。	五領ケ台式
211	39 34	深鉢	D-9	胴部破片	粗砂、黒色粒、雲母	橙	良好	No.115と同一個体と思われる。横位平行沈線により斜格子目沈線帯を区画、以下、平行沈線を垂下させる。	五領ケ台式
212	39 34	深鉢	E-8	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	斜格子目沈線を施し、横位平行沈線で上下を区画する。	五領ケ台式
213	39 34	深鉢	C-7	胴部破片	粗砂、雲母	橙	良好	くの字状に緩く外屈。斜格子目沈線を施し、横位平行沈線で上下を区画する。	五領ケ台式
214	39 34	深鉢	C-7	胴部破片	細砂、チャート	にぶい 赤褐	良好	横位平行沈線をめぐらして区画、以下、平行沈線による懸垂文を施す。地文にRL横位施文。	五領ケ台式
215	39 34	深鉢	D-7	胴部破片	粗砂、細礫	明赤褐	良好	多載竹管内皮による沈線を横位にめぐらし、区画内に斜格子目沈線を充填施文する。	五領ケ台式
216	39 34	深鉢	B-6	胴部破片	細砂	黒褐	良好	横位平行沈線をめぐらして区画、RLを施し、平行沈線による対向する連弧文を施す。	五領ケ台式
217	39 34	深鉢	注記不詳	胴部破片	粗砂、雲母	明赤褐	良好	2条沈線による懸垂文を施し、斜位沈線を充填施文する。	五領ケ台式
218	39 34	深鉢	B-6 他	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	RL横位施文を地文とし、平行沈線による懸垂文を施す。	五領ケ台式
219	39 34	深鉢	C-8	口縁部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	口縁が内屈。口縁部に斜格子目沈線を充填施文し、平行沈線で雲形状に区画、余白に印刻を施す。胴部は平行沈線による懸垂文を施す。	五領ケ台式
220	39 34	深鉢	C-7	胴部破片	粗砂、石英、雲母	暗赤褐	良好	横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に斜格子目沈線を施し、さらに平行沈線による幾何学文を施して間隙に印刻を施す。	五領ケ台式
221	39 34	深鉢	C-6	胴部破片				No.220と同一個体。	五領ケ台式
222	39 34	深鉢	D-8	口縁部破片	細砂、雲母	暗赤褐	良好	横位平行沈線をめぐらして区画、口縁部に平行沈線によるU字状モチーフを描き、間隙に印刻を施す。	五領ケ台式
223	39 34	深鉢	C-6	口縁部破片	細砂、黒色粒	暗赤褐	良好	口縁外面肥厚。弧状隆帯を施し、LRを施文する。肥厚部、隆帯上にもLRを施文。	五領ケ台式
224	39 34	深鉢	D-9	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	推定口径7.6cm。円筒状で口縁が緩く内湾。口縁内面肥厚。口縁下に平行沈線を1条めぐらし、平行沈線によるY字状懸垂文を施す。	五領ケ台式
225	40 34	深鉢	B-8	口縁部破片	細砂	暗赤褐	良好	口縁に突起を付す。横位沈線、隆帯をめぐらして横帯を区画、縦位沈線、鋸歯状素浮線を充填する。口縁内面を肥厚させて口唇部平坦面を作出、沈線をめぐらして縦位沈線を充填施文する。	五領ケ台式
226	40 34	深鉢	B-7 C-8	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	にぶい 赤褐	良好	歯著部に刻みを付した突起を付す。横位沈線を多段にめぐらし、斜位沈線、斜格子目沈線を充填施文する。	五領ケ台式
227	40 34	深鉢	C-7	口縁部破片	粗砂	暗赤褐	良好	波状口縁で口縁がくの字状に緩く外屈。口縁下、頸部に隆帯をめぐらして区画、文様帯内に横位沈線をめぐらし、縦位沈線を充填施文、三角印刻をめぐらす。隆帯上にも縦位沈線を施文。	五領ケ台式
228	40 34	深鉢	C-7	胴部破片	細砂	にぶい 赤褐	良好	沈線による渦巻文などの幾何学モチーフを描き、三角印刻を施す。余白に浅い斜位の沈線を充填施文。	五領ケ台式
229	40 34	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、黒色粒、石英	明赤褐	良好	口縁が緩く内屈。横位沈線、平行沈線を施し、刺突を沿わせる。	五領ケ台式
230	40 34	深鉢	C-7	口縁部破片	粗砂	暗赤褐	良好	口縁肥厚。横位沈線を多段にめぐらし、交互刺突、半截竹管内皮、外皮による刺突を施す。	五領ケ台式
231	40 34	深鉢	B-9	口縁部破片	粗砂、チャート細礫	明赤褐	良好	波状口縁で口縁がくの字状に外屈。平行沈線を施し、内部に交互刺突を施す。	五領ケ台式
232	40 34	深鉢	D-9	口縁部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位沈線を多段にめぐらし、沈線間に交互刺突を施す。	五領ケ台式
233	40 34	深鉢	D-8	口縁部破片	細砂、黒色粒、石英	にぶい 赤褐	良好	RLを地文とし、沈線による弧状、三角形など幾何学モチーフを描き、交互刺突、三叉文を施す。	五領ケ台式
234	40 34	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、黒色粒、雲母	暗赤褐	良好	口縁内面肥厚。横位沈線、交互刺突、竹管外皮による刺突を施す。	五領ケ台式

第20表 縄文土器観察表(6)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
235	40 34	深鉢	C-9	口縁部破片	細砂、白色粒、黒色粒	にぶい 黄橙	良好	口縁肥厚。口縁下に縦位の短沈線を2段めぐらす。口縁内外端に刻みを付す。	五領ケ台式
236	40 34	深鉢	E-8 Ⅲ層	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	波状口縁。隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、隆帯による楕円状区画、を施し、斜位沈線を充填施文する。隆帯上には櫛歯状工具による斜位の刻みを施す。波頂部下には逆V字状の隆帯を貼付し、交互刺突を施す。	五領ケ台式
237	40 34	深鉢	B-8	口縁部破片	粗砂、黒色粒、石英	にぶい 赤褐	良好	波状口縁で波頂部から隆帯を左右に下ろしてめぐらし、また垂下、縦位平行沈線を充填施文する。	五領ケ台式
238	40 35	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	にぶい 橙	良好	口縁が緩く内湾。刻みを付した逆U字状の隆帯を貼付し、弧状沈線を充填施文、口縁下に沈線をめぐらして画す。	五領ケ台式
239	40 35	深鉢	B-6	胴部破片	細砂	橙	良好	刻みを付した2条の隆帯を垂下、隆帯間に細沈線によるフラビ手状、鋸歯状モチーフを施す。文様帯には横位、斜位の沈線を施す。	五領ケ台式
240	40 35	深鉢	C-6	胴部破片				No.239と同一個体。	五領ケ台式
241	40 35	深鉢	B-6 他	胴部破片	粗砂、細礫、黒色粒	暗赤褐	良好	沈線による半円状モチーフを描き、刺突を沿わせる。中心に円形刺突を施す。	五領ケ台式
242	40 35	深鉢	B-7	胴部破片	粗砂、チャート	明赤褐	良好	沈線による渦巻文を描く。	五領ケ台式
243	40 35	深鉢	B-7 E-7	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	暗赤褐	良好	刻みを付した隆帯を2条垂下。沈線による幾何学モチーフを描き、交互刺突、充填沈線を施す。	五領ケ台式
244	40 35	深鉢	D-7	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	にぶい 赤褐	良好	隆帯による弧状懸垂文、平行沈線による横位区画、懸垂文、幾何学モチーフを描く。隆帯上に刻みを施し、一部沈線に竹管外皮による刺突を沿わせる。	五領ケ台式
245	40 35	深鉢	E-7	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	暗赤褐	良好	No.116と同一個体。半截竹管内皮による押引きを施したアーチ状の突起を付す。	五領ケ台式
246	40 35	深鉢	B-7 C-7	胴部破片				No.245と同一個体。	五領ケ台式
247	40 35	深鉢	C-8	胴部破片				No.245と同一個体。	五領ケ台式
248	40 35	深鉢	B-8	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	集合沈線による懸垂文を施し、余白に渦巻文を施文、接点に刺突を施す。	五領ケ台式
249	40 35	深鉢	B-7	胴部破片	粗砂、チャート、黒色粒	明赤褐	良好	縦位長方形の一端を連弧にしたモチーフを対称に並列させる。	五領ケ台式
250	40 35	深鉢	C-4・5	胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 橙	良好	R Lを縦位帯状施文する。	五領ケ台式
251	40 35	深鉢	C-7	胴部破片	粗砂、チャート細礫、石英	にぶい 赤褐	良好	半截竹管によるC字状刺突を挟んだ平行沈線をめぐらし、以下、端部結節のR L、L R結束羽状縄文を縦位施文する。	五領ケ台式
252	40 35	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、チャート細礫	にぶい 赤褐	良好	端部結節R L、L Rの結束羽状縄文を縦位帯状施文する。	五領ケ台式
253	40 35	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、チャート細礫、雲母	明赤褐	良好	端部結節のR L、L R結束羽状縄文を縦位施文する。	五領ケ台式
254	40 35	深鉢	C-8	底部破片	細砂、黒色粒	暗赤褐	良好	結節L Rを縦位帯状施文する。	五領ケ台式
255	40 35	深鉢	B-6 C-7	底部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	推定底径14.0cm。結節L Rを縦位帯状施文する。	五領ケ台式
256	41 35	深鉢	C-7	底部破片	粗砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	R L縦位施文を地文とし、平行沈線による懸垂文を施す。	五領ケ台式
257	41 35	深鉢	E-7	胴部破片	細砂、石英、雲母	赤褐	良好	無節L rを横位、斜位施文し、4条の沈線を垂下させる。左の沈線間に竹管外皮による刺突を施す。	五領ケ台式
258	41 35	深鉢	E-7	胴部破片	細砂、黒色粒、石英	赤褐	良好	3条沈線による懸垂文を施す。地文に無節L rを施文。	五領ケ台式
259	41 35	深鉢	D-7	胴部破片	粗砂、石英、雲母	橙	良好	3条沈線による懸垂文を施す。右側の沈線に竹管外皮による刺突を沿わせる。	五領ケ台式
260	41 35	深鉢	C-7 D-7	胴部破片	細砂、石英、雲母	にぶい 赤褐	良好	横位集合沈線を施し、さらに集合沈線を垂下させる。下端、左端に竹管外皮による刺突を沿わせる。	五領ケ台式
261	41 35	深鉢	C-6	底部破片	粗砂、チャート	赤褐	良好	推定底径12.6cm。半截竹管内皮、外皮による刺突を沿わせた沈線による懸垂文を施す。底部際に竹管外皮による刺突列、3条の沈線、縦位短沈線帯を施して区画する。	五領ケ台式
262	41 35	深鉢	B-8 C-7	胴部破片	粗砂、雲母	赤褐	良好	横位、波状の角押文を施す。	阿玉台式
263	41 35	深鉢	C-7	胴部破片				No.262と同一個体。1条の隆帯をめぐらし、上位に波状角押文、下位にヒダ状文を施す。	阿玉台式

第21表 縄文土器観察表(7)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
264	41 35	深鉢	B-8 C-7	口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒	明赤褐	良好	斜位の隆帯を貼付し、爪形刺突、沈線を沿わせる。	勝坂式
265	41 35	深鉢	E-8	口縁部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	刻みを付した隆帯を逆S字状の貼付し、爪形刺突を沿わせる。	勝坂式
266	41 35	深鉢	E-7	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位隆帯、2条沈線による弧状モチーフを施し、爪形刺突を沿わせる。	勝坂式
267	41 35	深鉢	E-7	胴部破片				No.266と同一個体。	勝坂式
268	41 35	深鉢	未注記	胴部破片	細砂、チャート細礫、	明赤褐	良好	2条沈線による楕円状モチーフを描き、三角押文を沿わせる。内部は鋸歯状に施す部分がある。	勝坂式
269	41 35	深鉢	B-4 他	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	逆L字状の隆帯を貼付し、平行沈線を沿わせ、波状文を充填する。	勝坂式
270	41 35	深鉢	E-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	赤褐	良好	円状の隆帯を縦位に配し、沈線、角押文を沿わせる。地文にRL縦位施文。	新巻土器
271	41 35	深鉢	E-8	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	口縁下に8の字突起を付す。曲隆線、沈線を施す。	焼町土器
272	41 35	深鉢	注記不詳	口縁部破片	粗砂、石英	橙	良好	波頂部の環状突起。頂部に刻みを付す。	焼町土器
273	41 35	深鉢	B-6	胴部破片	細砂	にぶい 橙	良好	No.161と同一個体。環状貼付、曲隆線を施し、平行沈線を充填施文する。	焼町土器
274	41 35	深鉢	E-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	曲隆線を施し、沈線、刺突を充填施文する。	焼町土器
275	41 35	深鉢	E-8	胴部破片	粗砂、雲母	橙	良好	曲隆線文を施す。区画内に刺突を充填施文。	焼町土器
276	41 35	深鉢	E-8	胴部破片				No.275と同一個体。	焼町土器
277	41 35	深鉢	E-8	胴部破片				No.275と同一個体。	焼町土器
278	41 35	深鉢	B-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	環状貼付、曲隆線を施す。	焼町土器
279	41 35	深鉢	B-8	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	にぶい 赤褐	良好	口縁が緩く外反。半隆起線を横位多段にめぐらす。口唇部に刻みを付す。	中期前葉
280	41 35	深鉢	C-5	胴部破片	粗砂、黒色粒、石英	にぶい 褐	良好	隆帯、半隆起線による曲線モチーフを施す。	中期前葉
281	41 36	深鉢	B-7	胴部破片				No.280と同一個体。	中期前葉
282	41 36	深鉢	表面採集	胴部破片				No.280と同一個体。	中期前葉
283	41 35	深鉢	B-8	胴部破片	細砂、石英	橙	良好	隆帯による懸垂文を施し、縦位の半隆起線を充填施文する。一部に矢羽根状の刺突を加える。	中期前葉
284	41 36	深鉢	C-7 D-7	胴部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	くの字状に外屈。半截竹管による半隆起線、押引文を横位多段に施す。	中期中葉
285	41 36	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	RL縦位施文を地文とし、縦位、渦巻状などの隆帯を貼付する。	中期中葉
286	42 36	深鉢	注記不詳	口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	沈線による渦巻文を施した幅広の隆帯を貼付して区画、区画内にLR、縦位沈線を施す。	加曾利E2式
287	42 36	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、黒色粒、石英	明赤褐	良好	隆帯による口縁部区画、沈線による渦巻文を施す。	加曾利E2式
288	42 36	深鉢	注記不詳	口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 褐	普通	左右非対称の波状口縁。波頂部下に沈線による渦巻文を施した幅広の隆帯を貼付して区画、区画内にLRを充填施文する。口唇肥厚部に沈線を施す。	加曾利E2式
289	42 36	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、チャート	にぶい 橙	普通	横位隆帯、隆帯による渦巻文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E2式
290	42 36	深鉢	B-5 ~7	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	隆帯による口縁部楕円状区画を施し、複節LRLを充填施文する。頸部無文。	加曾利E2式
291	42 36	深鉢	B-7	口縁部破片	粗砂、片岩	にぶい 黄橙	良好	隆帯による渦巻文、口縁部区画を施し、RLを横位充填施文する。頸部無文。	加曾利E2式
292	42 36	深鉢	B-5 ~7	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	弧状隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、斜位沈線を充填施文する。隆帯下はRLを施文。	加曾利E2式
293	42 36	深鉢	B-8 C-7	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	縦位、横位の隆帯を施す。地文に撚糸文Lを縦位施文。	加曾利E2式
294	42 36	深鉢	B-8	胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒	明赤褐	良好	くの字状に外屈。屈曲部に2条の隆帯をめぐらし、隆帯下に撚糸文Lを縦位施文する。	加曾利E2式

第22表 縄文土器観察表(8)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
295	42 36	深鉢	B-5	胴部破片	細砂、チャート、 黒色粒	橙	良好	頸部に2条の隆帯をめぐらし、以下、隆帯による懸垂文を施す。地文に複節LRLを縦位施文。	加曾利E2式
296	42 36	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	LRL縦位施文を地文とし、沈線を施した隆帯を弧状に施す。	加曾利E2式
297	42 36	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	普通	LRL縦位施文を地文とし、沈線を施した隆帯を渦巻状に施す。	加曾利E2式
298	42 36	深鉢	B-5	胴部破片	細砂、白色粒	橙	良好	複節LRL縦位施文を地文とし、隆帯による懸垂文を施す。	加曾利E2式
299	42 36	深鉢	B-7 B-8	胴部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	隆帯による懸垂文を施す。地文にRLを縦位充填施文。	加曾利E2式
300	42 36	深鉢	B-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	隆帯による懸垂文を施し、縦位条線を充填施文する。	加曾利E2式
301	42 36	深鉢	注記不詳	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	LRL縦位施文を地文とし、横位、縦位の沈線を施す。	加曾利E2式
302	42 36	深鉢	E-9	胴部破片	粗砂、黒色粒、石 英	橙	普通	RL縦位施文を地文とし、3条沈線による曲線モチーフを描く。	加曾利E2式
303	42 36	深鉢	C-5	胴部破片	粗砂	赤褐	良好	2条沈線をめぐらして頸部無文帯を区画、沈線下に複節LRLを縦位充填施文する。	加曾利E2式
304	42 36	深鉢	注記不詳	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	RL縦位施文を地文とし、3条沈線による懸垂文を施す。	加曾利E2式
305	42 36	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、細礫、黒色 粒	橙	良好	縦位条線を地文とし、3条沈線による懸垂文を施す。	加曾利E2式
306	43 36	深鉢	C-5	胴部破片	粗砂、黒色粒、石 英	赤褐	良好	LRL縦位施文を地文とし、沈線による懸垂文、ワラビ手文を施す。	加曾利E2式
307	43 36	深鉢	E-8	胴部破片				No.306と同一個体。	加曾利E2式
308	43 36	深鉢	B-5	口縁部破片	粗砂	にぶい 赤褐	良好	緩やかな波状口縁で、波頂部下に隆帯による渦巻文を配す。余白に縦位沈線を施文。	唐草文系
309	43 36	深鉢	E-9	口縁部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	連弧状隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、区画内に縦位沈線を充填施文する。	唐草文系
310	43 36	深鉢	C-6	口縁部破片	細砂、石英、雲母	赤褐	良好	波頂部下に隆帯による渦巻文を配す。余白に縦位沈線を充填施文。内面にも横位隆帯、渦巻文を施す。	唐草文系
311	43 36	深鉢	B-5	口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	横位隆帯をめぐらして区画、隆帯間に縦位沈線を充填施文する。	唐草文系
312	43 36	深鉢	C-5	口縁部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	横位隆帯をめぐらして区画、区画内に矢羽根状沈線を充填施文する。	唐草文系
313	43 37	深鉢	C-6	口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	横位隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、隆帯による渦巻文、楕円状区画を施し、縦位沈線を充填施文する。隆帯下は沈線による懸垂文を施し、矢羽根状沈線を充填施文する。	唐草文系
314	43 37	深鉢	B-6	口縁部破片	細砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	横位隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線による逆U字状懸垂文を施し、矢羽根状沈線を充填施文する。	唐草文系
315	43 37	深鉢	B-5	口縁部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	波状口縁。沈線を伴う隆帯による口縁部楕円状区画を施し、矢羽根状沈線を充填施文する。頸部無文。	唐草文系
316	43 37	深鉢	C-5	口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	横位、渦巻状の隆帯を施し、縦位沈線を充填施文する。	唐草文系
317	43 37	深鉢	C-5	口縁部破片	粗砂、黒色粒	暗赤褐	良好	口縁に渦巻状の突起を付す。連弧状隆帯をめぐらして口縁部文様帯を区画、区画内に縦位沈線を充填施文する。	唐草文系
318	43 37	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂、黒色粒	暗赤褐	良好	口縁の無文帯で緩く内湾する。	曾利系
319	43 37	深鉢	B-7 C-7	胴部破片	粗砂、黒色粒、雲 母	にぶい 赤褐	良好	横位2条の隆帯をめぐらして区画、隆帯による腕骨文状懸垂文を施し、さらに沈線による腕骨文状懸垂文で縦位区画、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
320	43 37	深鉢	B-8	胴部破片	粗砂、黒色粒、雲 母	橙	良好	横位2条の隆帯をめぐらして区画、隆帯による腕骨文状懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
321	43 37	深鉢	B-8	胴部破片	細砂	橙	良好	隆帯による腕骨文状懸垂文を施し、縦位、横位沈線を充填施文する。	唐草文系
322	43 37	深鉢	C-5	胴部破片	細砂	橙	良好	逆の字状隆帯を貼付、貼付文を囲むように弧状の細沈線を複数条施し、さらに縦位沈線を垂下させて格子目状にする。	唐草文系
323	43 37	深鉢	C-8	胴部破片	粗砂、細礫	橙	良好	隆帯による口縁部楕円状区画、沈線による胴部懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
324	43 37	深鉢	B・C -5	胴部破片	細砂、黒色粒、石 英	明赤褐	良好	3条隆帯、3条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系

第23表 縄文土器観察表(9)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
325	43 37	深鉢	B-7	胴部破片	細砂	にぶい赤褐	良好	U字状隆帯を貼付し、内部に格子目沈線を充填、脇に斜位の沈線を施す。	唐草文系
326	43 37	深鉢	C-5	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	腕骨文状沈線により十字状に区画し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
327	44 37	深鉢	C-5	胴部破片				No.326と同一個体。3条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
328	44 37	深鉢	B-5	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	3条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
329	44 37	深鉢	B-5	胴部破片	粗砂	赤褐	良好	綾杉文を充填施文する。	唐草文系
330	44 37	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	3条沈線による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
331	44 37	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒	にぶい赤褐	良好	渦巻状、斜行する隆帯を施し、斜位沈線を充填施文する。	唐草文系
332	44 37	深鉢	B-5	胴部破片	粗砂	明赤褐	良好	隆帯による逆U字状懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
333	44 37	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、黒色粒	明赤褐	良好	横位、弧状の隆帯を施し、斜位沈線を充填施文する。	唐草文系
334	44 37	深鉢	E-9	胴部破片	粗砂	にぶい赤褐	良好	弧状隆帯を施し、弧状沈線を充填施文する。	唐草文系
335	44 37	深鉢	E-9	胴部破片	細砂、黒色粒	にぶい赤褐	良好	隆帯による渦巻文を付し、横位隆帯と連結、渦巻文下に2条隆帯による懸垂文を施す。隆帯上に半截竹管によるC字状刺突を施す。	曾利系
336	44 37	深鉢	C-8	胴部破片	細砂	赤褐	良好	2条隆帯による懸垂文、縦位集合沈線を施す。隆帯には半截竹管内皮によるC字状刺突を施す。	曾利系
337	44 37	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	横位、ワラビ手沈線を伴う横位隆帯をめぐらして垂下、縦位沈線を充填施文する。側線沈線。	曾利系
338	44 37	深鉢	B-8 C-7	胴部破片	細砂	明赤褐	良好	2条隆帯による懸垂文、縦位集合沈線を施す。	曾利系
339	44 37	深鉢	未注記	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	断面三角形の隆帯をめぐらし、渦巻文を施した貼付。その下に半截竹管内皮による刺突を施した隆帯を垂下させ、平行沈線を縦位充填施文する。	曾利系
340	44 37	深鉢	B-7	胴部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	縦位の集合半隆起線を施す。一部刺突を加えている。	曾利系
341	44 37	深鉢	B-8 C-7	胴部破片	細砂、石英	橙	良好	横位、縦位の隆帯を施し、縦位、斜位の沈線を充填施文、隆帯による曲線モチーフを施す。	中期前葉
342	44 37	深鉢	C-8	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	口縁下に交互刺突を施した2条沈線をめぐらし、3条沈線による連弧文を施す。地文に撚糸文Lを縦位施文。	連弧文系
343	44 37	深鉢	B-8	口縁部破片	粗砂、黒色粒	橙	良好	くの字状に外屈。口縁下に交互刺突を施した2条沈線をめぐらし、3条沈線による連弧文、横位楕円文を施す。楕円文内に蛇行懸垂文を充填する。地文にRLを横位施文。口縁内面肥厚。	連弧文系
344	44 37	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂、黒色粒	橙	良好	波頂部の橋状突起。沈線、無節Lrを施す。	大木8b式
345	44 37	深鉢	注記不詳	底部破片	粗砂、チャート、黒色粒	明赤褐	良好	推定底径8.4cm。撚糸文Lを縦位施文する。	加曾利E2式
346	44 37	深鉢	C-8	底部破片	粗砂	橙	良好	底径11.8cm。隆帯による懸垂文を施し、綾杉文を充填施文する。	唐草文系
347	44 37	深鉢	B-7	底部破片	細砂、黒色粒、雲母	明赤褐	良好	底径14.7cm。残存部は無文。	中期
348	44 38	深鉢	B-6 B-7	口縁部破片	細砂	にぶい黄橙	良好	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを充填施文する。胴部無文部にワラビ手状懸垂文を施す。	加曾利E3式
349	45 38	深鉢	C-8	口縁部破片	粗砂、チャート細礫	明赤褐	良好	波状口縁。隆帯による口縁部楕円状区画、渦巻文、沈線による胴部懸垂文を施し、RLを充填施文、胴部に蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
350	45 38	深鉢	B-7	胴部破片	細砂、チャート細礫、	にぶい橙	普通	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
351	45 38	深鉢	B-7	胴部破片	細砂、黒色粒、石英	にぶい褐	良好	沈線による口縁部楕円状区画、胴部懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。胴部縄文部に蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式
352	45 38	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、細礫、黒色粒	明赤褐	良好	3条沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
353	45 38	深鉢	C-7 D-7	胴部破片	粗砂、チャート細礫	明赤褐	良好	頸部に隆帯をめぐらし、以下、沈線による懸垂文を施してRLを充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E3式

第24表 縄文土器観察表(10)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
354	45 38	深鉢	B-5	胴部破片	粗砂、黒色粒	明黄褐	普通	3条沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
355	45 38	深鉢	B-8	胴部破片	粗砂、黒色粒	にぶい 橙	普通	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
356	45 38	深鉢	B-6 B-7	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
357	45 38	深鉢	B-6 他	胴部破片	粗砂、黒色粒	橙	普通	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
358	45 38	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒		暗赤褐	沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、無節LRを充填施文。無文部にワラビ手状懸垂文を施す。36と同一個体と思われる。	加曾利E3式
359	45 38	深鉢	B-6 B-7	胴部破片				No.358と同一個体。	加曾利E3式
360	45 38	深鉢	B-6	口縁部破片	細砂、黒色粒	黒褐	良好	波状口縁で口縁が強く内湾。隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、沈線による逆U字状、J字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加曾利E4式
361	45 38	深鉢	未注記	口縁部破片	細砂、黒色粒、雲母	にぶい 橙	良好	波頂部の突起で橋状把手を付す。沈線による逆U字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加曾利E4式
362	45 38	深鉢	B-6 B-7	胴部破片	細砂、黒色粒	赤褐	良好	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文、縄文部に蛇行懸垂文を施す。	加曾利E4式
363	46 38	深鉢	B-6 B-7	胴部破片	細砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	沈線による逆U字状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
364	46 38	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、白色粒	にぶい 黄橙	良好	沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
365	46 38	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、白色粒	にぶい 黄橙	良好	沈線によるU字状、逆U字状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。No.364と同一個体と思われる。	加曾利E4式
366	46 38	深鉢	C7- 108	胴部破片	細砂、黒色粒	赤褐	良好	隆帯による弧状モチーフを施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
367	46 38	深鉢	B-6	口縁部破片	細砂	黒褐	良好	波状口縁で口縁が外反。波頂部下にS字を連ねた弧状の帯縄文を垂下させ、それを基点に左右に斜行する帯縄文LRを6帯施す。内外面研磨。	堀之内2式
368	46 38	深鉢	C-7 D-7	胴部破片	細砂	にぶい 黄橙	良好	带状沈線によるV字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
369	46 38	注口土器	B-6	胴部破片	細砂	黒褐	良好	No.134と同一個体。沈線により渦巻文などの幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	堀之内2式
370	46 39	注口土器	C-6	胴部破片	粗砂、細礫	にぶい 黄橙	普通	弧状、斜行する扁平な隆帯を貼付し、LR、沈線を施す。把手の下位の隆帯には沈線は施されない。	堀之内2式
371	46 38	注口土器	C-6	注口部破片	細砂	黒褐	良好	筒状のみで貼付等はない。基部の下側が丸くなる。	後期中葉
372	46 39	深鉢	B-6 B-7	口縁部破片	細砂	にぶい 黄橙	良好	口縁が短く内折。横線文、区切り縦線文を施す。口縁端部に刻みを付す。内面に1条の隆帯、5条の沈線、屈曲部に円形刺突をめぐらす。内外面よく研磨され、光沢をもつ。	加曾利B1式
373	46 39	深鉢	B-6 B-7	口縁部破片	細砂	黒	良好	口縁が短く内折。横線文、帯縄文LR、区切り縦線文を施す。口縁内折部に部分的に斜格子目文を描き、口縁端部に刻みを付す。内面に1条の隆帯、5条の沈線、屈曲部に円形刺突をめぐらす。内外面よく研磨され、光沢をもつ。補修孔あり。	加曾利B1式
374	46 39	深鉢	C-7	胴部破片	細砂	橙	良好	帯縄文LR、区切り縦線文を施す。	加曾利B1式
375	46 39	深鉢	B-6	胴部破片	細砂、黒色粒	黒	良好	帯条線文、区切り縦線文を施す。	加曾利B1式
376	46 39	深鉢	C-6	胴部破片	細砂	にぶい 橙	良好	帯縄文LRを施し、横帯内に斜位の沈線を施す。	加曾利B1式
377	46 39	深鉢	B-6 B-7 C-7	口縁部破片	細砂	にぶい 黄橙	良好	波状口縁で口縁が緩く内折。帯縄文LR、区切り縦線文、波頂部下に弧線文を施す。波頂部脇に刺突を施す。内面2条の沈線をめぐらす。内外面研磨。内面黒色。	加曾利B2式
378	46 39	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	黒	良好	口縁が緩く内折。波状口縁で波頂部に突起を付す。帯縄文LR、区切り縦線文、円形刺突を施す。波頂部脇、内面波頂部下に刺突を施す。内外面研磨。	加曾利B2式
379	46 39	深鉢	C-7	口縁部破片	細砂、細礫	橙	良好	口縁に2尖の突起を付す。横位沈線、区切り縦線文、波頂部下に窩文を施す。内面2条の沈線をめぐらす。内外面研磨。	加曾利B2式
380	46 39	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	黒	良好	口縁が短く内折。帯縄文LR、対弧文を施す。内面2条の沈線をめぐらす。内外面よく研磨され、光沢をもつ。	加曾利B2式

第6章 発見された遺構・遺物

第25表 縄文土器観察表(11)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	出土位置	残存	胎土	焼成	色調	文様の特徴等	摘要
381	46 39	鉢	B-6 C-7	口縁部破片	細砂	黒褐	普通	帯縄文LR、区切り縦線を施す。内外面研磨。	加曾利B2式
382	46 39	深鉢	B-7	胴部破片	細砂	黒褐	良好	胴下位が膨らみ、くの字状に緩く外屈する。帯縄文LR、弧状区切り文を施す。	加曾利B2式
383	46 39	深鉢	B-7	胴部破片	細砂	黒	良好	算盤玉状の器形。弧状の沈線を施し、LRを充填施文する。外面研磨。	加曾利B2式
384	46 39	深鉢	未注記	口縁部破片	細砂	黒褐	良好	口縁が短く内折。内折部に横位、斜位の沈線を施し、貼付文を付す。	高井東式
385	46 39	深鉢	未注記	胴部破片	細砂	黒	普通	くの字状に内屈。沈線により円文、菱形などの幾何学モチーフを描く。地文にLRを施文。	後期後葉
386	46 39	深鉢	未注記	胴部破片	細砂、黒色粒	にぶい 黄橙	普通	列点を充填した横位帯状沈線を施す。	後期後葉
387	46 39	深鉢	未注記	胴部破片	細砂、黒色粒	黒	良好	紐線文をめぐらす。	後期中葉
388	46 39	深鉢	B-7	胴部破片	細砂	にぶい 黄橙	普通	紐線文をめぐらす。	後期中葉
389	47 39	深鉢	C-7	口縁部破片	粗砂	黒褐	良好	口縁が緩く内湾。無文。外面縦位、内面横位の調整痕が見られる。	後期後葉か
390	47 39	深鉢	B-7	口縁部破片	粗砂、黒色粒	黒	良好	口縁が緩く内湾。無文。内外面ともに横位の調整痕が見られる。	後期後葉か
391	47 39	深鉢	未注記	口縁部破片	細砂	黒褐	良好	口縁が緩く内湾。無文。内外面ともに横位の調整痕が見られる。	後期後葉か
392	47 39	深鉢	B-6	口縁部破片	粗砂、チャート細礫	橙	良好	口縁が緩く内湾。無文。外面縦位、内面横位の調整痕が見られる。	後期後葉か
393	47 39	深鉢	C-6	口縁部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	口縁が緩く内湾。無文。内外面ともに斜位の調整痕が見られる。	後期後葉か
394	47 39	深鉢	C-7 D-7	口縁部破片	細砂	にぶい 橙	良好	口縁が緩く内湾。無文。器面凹凸目立つ。外面横ケズリ。	晩期か
395	47 39	深鉢	B-7	口縁部破片	細砂	にぶい 橙	普通	口縁が緩く内湾。無文。輪積み痕残す。口縁部指頭痕。外面一部横ケズリ→縦磨き。内面横磨き。	晩期か
396	47 39	深鉢	C-5	胴部破片	細砂、白色粒、黒色粒	にぶい 黄橙	普通	無文。外面横位のナデ→縦磨き。内面ヘラナデ。	後期後葉か
397	47 39	深鉢	C-6	口縁部破片	細砂、白色粒	にぶい 黄橙	普通	口縁下に1条の隆帯をめぐらす。補修孔あり。	後期後葉か
398	47 39	深鉢	C-4 C-5	口縁部破片	粗砂	橙	良好	口縁下と無文帯を空けてもう1帯、浮線網状文を施す。	水式
399	47 39	深鉢	B-5	口縁部破片	細砂、黒色粒	にぶい 赤褐	良好	口縁下に刺突を施した貼付を付す。口縁部に浮線網状文を施し、浮線上位に円孔を穿つ。	水式
400	47 39	深鉢	未注記	胴部破片	細砂、片岩	浅黄橙	普通	横位沈線をめぐらして区画、区画内に斜位沈線を充填施文する。地文横位の擦痕。	水式
401	47 39	深鉢	C-6	胴部破片	粗砂、チャート細礫	明黄褐	良好	横位沈線を多段にめぐらす。地文に撚糸文Rを斜位施文。	水式
402	47 39	深鉢	B-5 B-6	胴部破片	細砂、チャート細礫	にぶい 黄褐	良好	くの字状に緩く内屈。屈曲部に小突起を付す。撚糸文Rを縦位、横位施文して地文とし、複数条の沈線による三角連繫文を施す。	水式
403	47 39	深鉢	B-7	底部破片	粗砂	橙	良好	残存部は無文。外面研磨。底面に網代痕。	後期中葉
404	47 39	深鉢	B-6	底部破片	細砂	にぶい 赤褐	普通	底径7.5cm。底面に網代痕。	後期中葉
405	47 39	深鉢	C-4 C-5	底部破片	細砂、白色粒	にぶい 橙	普通	底径9.5cm。残存部は無文。底面に網代痕。	後晩期
406	47 39	深鉢	C-6	底部破片	細砂、白色粒、黒色粒	橙	普通	底径6.5cm。胴下位縦、横ケズリ→縦磨き。内面ヘラナデ。底面木葉痕。内面煤付着。	後晩期
407	47 39	深鉢	B-5 B-7	底部破片	粗砂	明赤褐	良好	底径6.0cm。残存部は無文。底面に網代痕。	後晩期
408	47 39	深鉢	B-7	底部破片	細砂、黒色粒	明赤褐	良好	推定底径11.5cm。残存部は無文。底面に網代痕。	後晩期
409	47 39	深鉢	B-7	底部破片	細砂	にぶい 橙	普通	底径10.5cm。残存部は無文。外面縦位のヘラナデ。底面に網代痕。	後晩期

第5項 石器

出土石器には剥片系石器64点・礫石器類11点の他、剥片類185点がある。剥片系石器には、打製石斧6点・磨製石斧1点・石鏃11点・石匙1点・石錐2点・削器類31点(加工痕・使用痕ある剥片を含む)などがあり、特定器種に偏る傾向は見られない。礫石器類には磨石類10点・敲石1点があり、磨石とセットになる石皿類は確認されていない。既出文献(巾1979)によれば、層位毎に各型式の土器が出土したとされているが、現状で記録類を見る限り、層位毎に遺物が把握できない状態にあり、レベルも標高類の記載がなく、検証を難しくしている。包含層出土の土器には中期段階を主体に前期から後・晩期まであり、同様に石器も多時期のものが混在しているということになる。

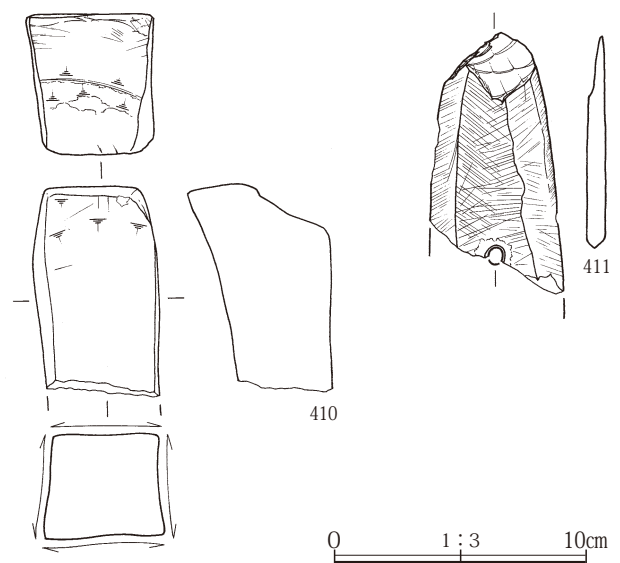
石器石材は、14種が確認されている。石器レベルでは黒曜石製のものが21点と多く、次いで黒色頁岩15点・チャート10点があり、黒色安山岩6点がある。ここで言う黒色頁岩は、赤谷層由来のものでなく、遺跡地周辺域の基盤層に由来するものであり、それは赤谷層同様に微化石を含み区別できないということ(飯島静男氏の指摘)らしい。黒色安山岩については未分析だが、これも遺跡地に近い八風山や荒船山のそれである可能性が高い。礫石器類には粗粒輝石安山岩が多用されるという傾向は県内縄文期遺跡の石材利用形態と同様である。

打製石斧6点には、短冊型5点・分銅型1点がある。短冊型としたものは5点中2点(001・002)が完形品で、3点は破損品である。刃部摩耗は2点にあり、002に弱い摩耗痕が確認されたほか、未掲載の1点に著しい刃部摩耗が見られただけで、全体として使用頻度は高いとは言いがたい。分銅型としたものは1点(005)のみ種出土ただけで、これも未製品である可能性が高い。遺物量からみると、中・後期遺跡としてこのタイプの石斧が1点だけというのは、出土量がすくなくすぎるように思う。磨製石斧は刃部破片として1点(006)が出土したのに止まる。破片資料で形状等については不明瞭だが、図示した状態より刃部角は厚く、大型品であるかもしれない。

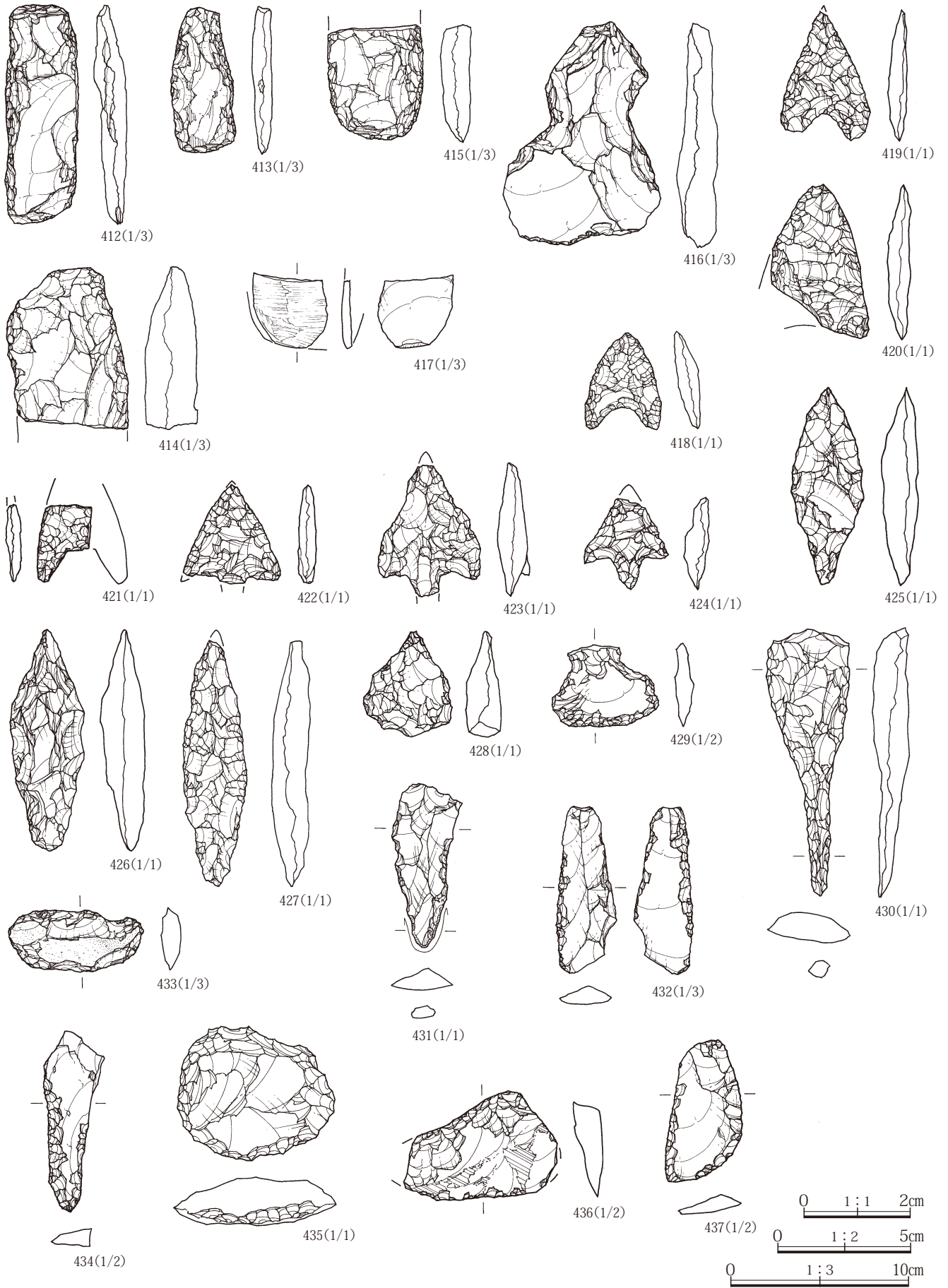
石鏃11点は、凹基無茎鏃4点・有茎鏃3点・尖基鏃3点・不明1点からなる。大半は完成状態にあるようだが、有茎鏃の2点(012・013)は未製品である可能性が高い。尖

基鏃としたもの3点は完成状態としてみたが、全体として加工が粗い、という印象が強い。015については、図示した状態で先端側が厚く、身と装着部の比率、014の基部の作り出し等を見れば上下反転させるべきかもしれない。石匙1点と石錐2点は、チャート製である。石匙(019)は幅広剥片の端部に刃部を作出、刃部摩耗については不明瞭だが、石錐は2点とも使用状態にある。特に、021の先端は摩耗が著しく、エッジが取れて丸味を帯びる。磨石類は11点がある。激しく使い込まれたものが多い。063～065・067等の磨石類がそれで、特に側縁が激しく使い込まれ稜が形成され、礫形状が変わるほどである。これにセットになる石皿の出土がないのが気掛かりである。073については敲石としておいたが、敲く・潰す・擦る等の機能を兼ねた敲打具とすべきものである。上下両端の折断面が主たる機能部と見られ、激しく使い込まれた結果、鞍状に大きく変形している。表裏面に平滑な研磨面を残しているが、これが磨製石斧としての研磨面である。磨製石斧を転用して敲打具とするものは弥生期に多い。このほか、弥生期の石器として磨製石鏃(078)と古墳時代の砥石(002)がある。

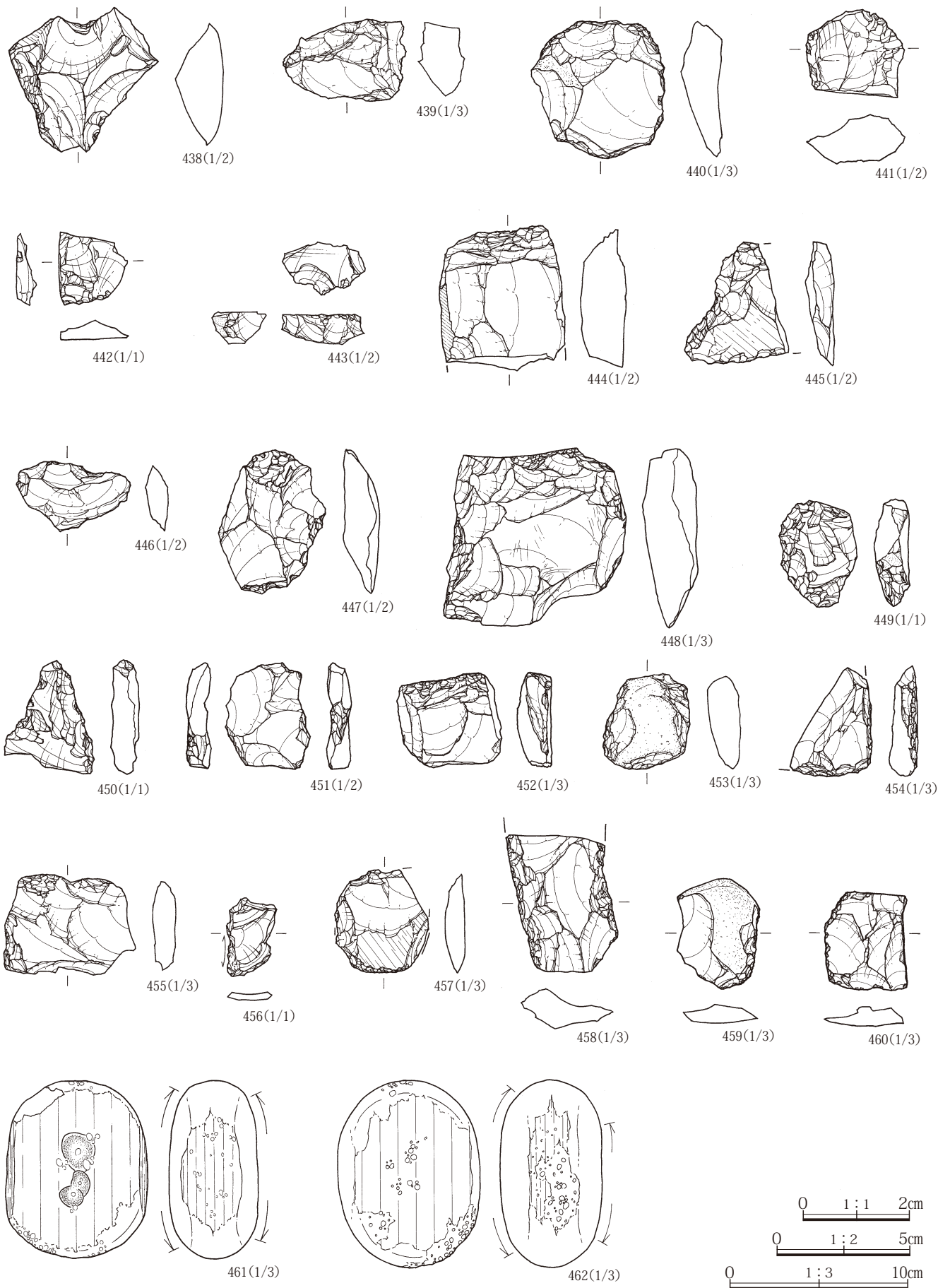
石核には4種の石材があり、黒曜石製のものから小型剥片が、黒色頁岩や黒色安山岩性のものから幅広剥片が剥離されている。これと削器類の石材は対応関係にあり、加工具類の製作については遺跡地で行われただろうことが分かる。



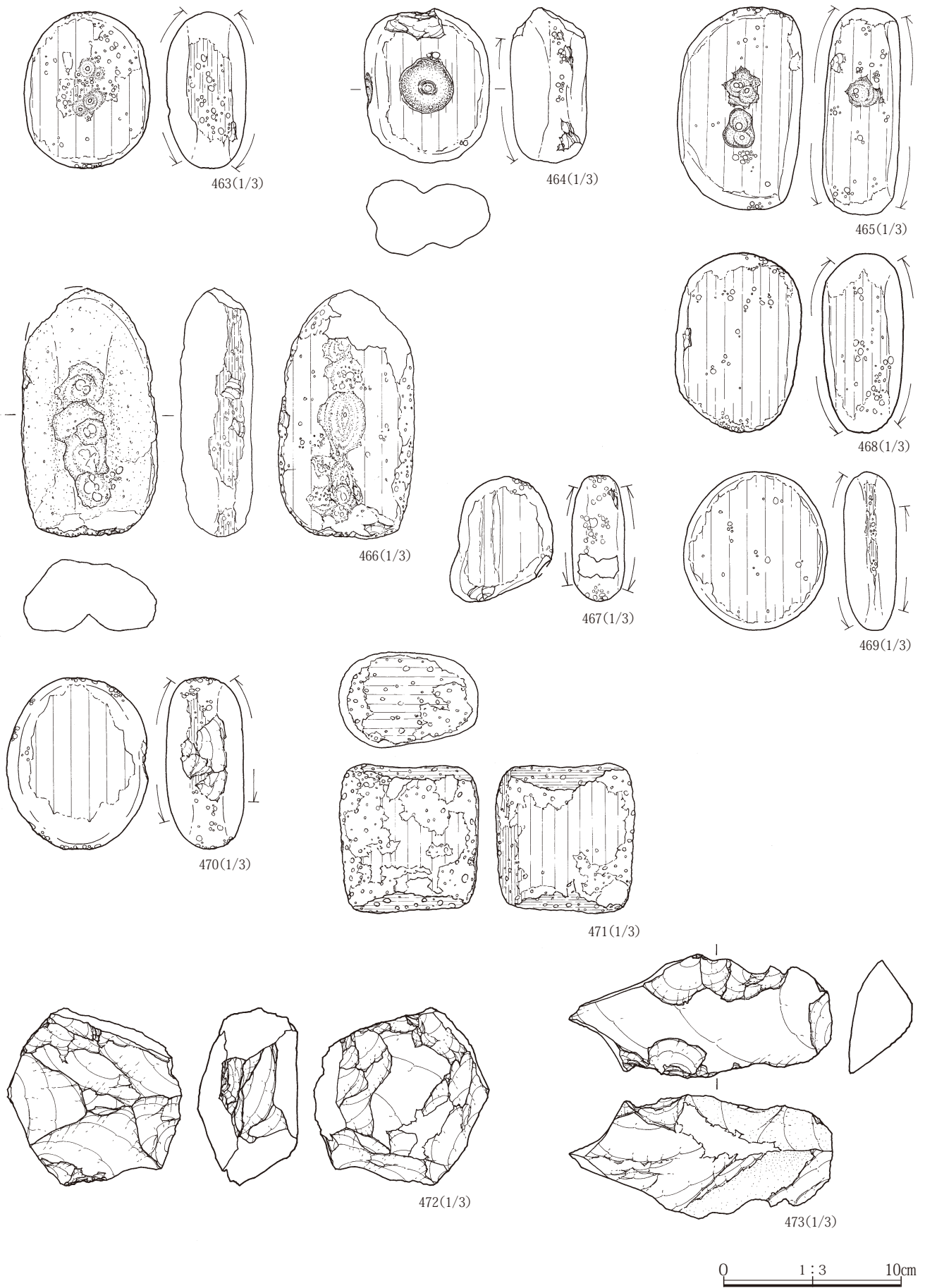
第48図 出土遺物実測図(27) (石製品・石器類1)



第49図 出土遺物実測図(28) (石器2)



第50図 出土遺物実測図(29) (石器3)



第51図 出土遺物実測図(29) (石器4)

以上が、本遺跡から出土した石器類の概要である。総じて、石器類に比べ剥片類の出土量が少なく、必ずしも両者は対応関係にない。これは石器類の生産が限定的であったことを示唆するものであるが、調査地が限られたことによる制約や、遺物サンプリング法等の影響も考慮する必要があるかもしれない。遺跡を石器から評価する際、まず時期別の器種石材構成が明らかにされなければ

ならないが、それが明らかにできない現状では型式別の土器出土量が参考になる。本遺跡では中期土器片が多量にあり、これに続く後期前半の土器片を欠いているが、こうした在り方は遺跡地周辺の集落動向を反映するものと見られ、遺跡地周辺の山間地に小規模中期遺跡が点在していることと無関係ではないだろう。

第26表 石器観察表(1)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	形態・素材	出土位置	度目・量目(g)		石材	製作・使用状況	摘要
410	48 39	砥石	切り砥石	C-5 グリッド	長(8.4) 幅5.0	厚5.5 重295.8	流紋岩	上端小口部を含む五面を使用。裏面側は平坦だが、各面とも弱く研ぎ減る。両側面に線条痕があるほか、上端小口部に横位の刃ならし傷がある。	岩陰部出土
411	48 39	磨製石鏃	有孔長平根五角形状式	B-5 グリッド	長(3.5) 幅(1.8)	厚0.3 重2.1	蛇紋岩	破損後、先端左辺に再調整して再利用。径1.5mmの孔を両側穿孔する。最終的に下端側を破損、廃棄。	岩陰部出土
412	49 39	打製石斧	短冊型	B-6 グリッド	長12.2 幅4.1	厚1.9 重96.9	砂岩	完成状態。両側縁とも平坦面を有し、これより側縁調整を行う。剥離面の稜はシャープで、摩耗痕等は見られない。	岩陰部出土
413	49 39	打製石斧	短冊型	B-7 グリッド	長8.0 幅3.5	厚1.1 重29.9	粗粒輝石 安山岩	完成状態。背面側に弱い摩耗痕が残る。刃部等のエッジが新鮮であることからみて、刃部再生は明らか。	岩陰部出土
414	49 39	打製石斧	短冊型	B-7 グリッド	長(9.1) 幅6.8	厚2.4 重170.5	砂岩	未製品か粗粒石材で断定できないが、エッジは新鮮で側縁も潰れていない。刃部側を欠損する。	岩陰部出土
415	49 39	打製石斧	短冊型	B-7 グリッド	長(6.4) 幅5.3	厚1.8 重59.6	珪質頁岩	完成状態か刃部等のエッジは新鮮で、加工の最終段階で破損した可能性が高い。刃部破片。	岩陰部出土
416	49 40	打製石斧	分銅型	B-7 グリッド	長12.6 幅8.8	厚2.3 重154.9	砂質頁岩	未製品。右側縁は潰れて完成状態にあるように見えるが、裏面側には側縁加工が対辺に抜けた大きな剥離痕があり、これにより未製品と捉えた。	岩陰部出土
417	49 40	磨製石斧	乳房状か	C-6 グリッド	長(2.8) 幅(2.8)	厚(0.3) 重3.7	蛇紋岩	刃部破片。エッジは丸味を帯び、研磨の質は低い。再研磨したのち使用、破損した可能性が高い。	岩陰部出土
418	49 40	石鏃	凹基無茎鏃	C-7 グリッド	長1.6 幅1.5	厚0.5	黒曜石	完成状態。押圧剥離が全面を覆う。先端がリダクションにより変形している可能性が高い。	岩陰部出土
419	49 40	石鏃	凹基無茎鏃	D-9 グリッド	長2.5 幅1.7	厚0.4 重1.0	黒曜石	完成状態。加工は丁寧で、押圧剥離が全面を覆う。	岩陰部東側外部出土
420	49 40	石鏃	凹基無茎鏃	B-5 グリッド	長2.9 幅(0.9)	厚0.5 重1.7	黒曜石	完成状態か表裏面ともやや粗い斜向押圧剥離を施す。優品の部類だが、左辺側に球果があり、この部分を加工する際に左辺側が破損した可能性が高い。	岩陰部出土
421	49 40	石鏃	凹基無茎鏃	C-7 グリッド	長(1.5) 幅(1.1)	厚0.3 重0.3	黒曜石	完成状態。比較的丁寧に押圧剥離を施す。全体形状は不明だが、返し部は長く、装着部はフラットである。	岩陰部出土
422	49 40	石鏃	有茎鏃	D-7 グリッド	長(1.8) 幅1.9	厚0.4 重0.9	黒曜石	完成状態。表裏面とも丁寧に全面を加工。茎を欠損。	岩陰部東側外部出土
423	49 40	石鏃	有茎鏃	B-7 グリッド	長(2.5) 幅1.9	厚0.6 重1.7	黒曜石	未製品。左側縁が抉れ、器軸の内側に入り込む。加工時の事故で変形したように見える。茎は尖り気味で小さい。	岩陰部出土
424	49 40	石鏃	有茎鏃	未注記	長(1.7) 幅1.6	厚0.5 重0.6	黒曜石	未製品かやや肉厚で、弱い返し部が付く。茎は尖り気味で、先端部を破損する。	
425	49 40	石鏃	尖基鏃	B-7 グリッド	長3.7	厚0.7 重2.5	チャート	完成状態か全体に厚味があり、加工は粗雑に見える。茎は厚く、尖り気味である。	岩陰部出土
426	49 40	石鏃	尖基鏃	B-7 グリッド	長4.1 幅1.3	厚0.8 重4.1	チャート	完成状態か全体に厚味があり、加工は粗雑。先端の作出には失敗したようで、先端角は鈍い。茎は厚く、尖り気味。	岩陰部出土
427	49 40	石鏃	尖基鏃	B-6 グリッド	長(4.5) 幅1.2	厚0.7 重3.5	チャート	完成状態か全体に厚く、加工は粗雑に見える。左側縁が内側に入り込んでいることを重視して茎を認定した。	岩陰部出土
428	49 40	石鏃か	不明	E-8 グリッド	長1.9 幅1.7	厚0.6 重1.7	黒曜石	未製品。先端は薄く、石鏃としての要素を備える。基部側の厚味が取れず最終的に製作を放棄したものと見られる。	岩陰部東側外部出土
429	49 40	石匙	横型	未注記	長3.1 幅4.0	厚0.7 重8.5	チャート	剥片端部に長い弧状刃部を作出する。摘み部の作出は不十分だが、石匙として認定。	

第27表 石器観察表(2)

遺物 番号	挿図 P.L.	器種	形態・素材	出土 位置	度目・量目(g)		石材	製作・使用状況	摘要
					長	厚			
430	49 40	石錐	幅広剥片か	B-6 グリッド	長5.0 幅1.6	厚0.7 重 3.9	チャート	石錐としての機能部は長く、その断面形状は菱形状を呈する。先端側右辺のエッジが弱く摩耗する。	岩陰部出土
431	49 40	石錐	小形縦長剥片	B-7 グリッド	長3.1 幅1.2	厚0.4 重1.3	チャート	先端側両側縁が顕著に摩耗、光沢面が広がる。両側縁の加工は形状修正的でなく、加工意図は不明。	岩陰部出土
432	49 40	削器	縦長剥片	B-7 グリッド	長9.3 幅3.4	厚1.0 重30.9	黒色頁岩	両側縁を浅く剥離して刃部を作出する。	岩陰部出土
433	49 40	削器	横長剥片	B-7 グリッド	長7.6 幅3.5	厚1.1 重35.2	黒色安山 岩	裏面側・剥片端部を剥離したのち、背面側を粗く加工して刃部を作出する。エッジはシャープで、未使用に見える。	岩陰部出土
434	49 40	削器	幅広剥片	表面採集	長6.7 幅2.2	厚0.6 重9.4	黒色安山 岩	両側縁を薄く剥離、削器様刃部を作出する。	
435	49 40	削器	幅広剥片	B-6 グリッド	長2.5 幅3.0	厚0.9 重6.8	チャート	やや角度の厚い加工を施し、搔器的刃部を作出する。	岩陰部出土
436	49 40	削器	幅広剥片	B-7 グリッド	長4.1 幅(5.8)	厚1.1 重20.5	チャート	剥片端部に小剥離痕(刃こぼれか)が連続するほか、上端に形状修正的な加工を施し、エッジを整形する。	岩陰部出土
437	49 40	削器	幅広剥片	表面採集	長5.2 幅2.9	厚0.6 重10.7	黒色頁岩	表裏面とも両側縁を浅く剥離する。左辺側エッジは直線的であり、刃部とすることができる。	
438	50 40	石核	板状か	B-7 グリッド	長5.4 幅5.6	厚1.8 重37.8	珪質頁岩	上端・左側縁で小形剥片を剥離する。裏面側剥離面は平坦で部分的であり、節理面が大きく残る。	岩陰部出土
439	50 40	石核	大型剥片か	C-6 グリッド	長4.6 幅6.9	厚2.7 重104.6	黒色安山 岩	表裏面で小型の幅広剥片を剥離する。剥離は剥離面構成を見て行われ多様であり、打面調整は確認できない。	岩陰部出土
440	50 40	石核	大型剥片	C-7 グリッド	長7.6 幅7.4	厚4.3 重138.6	黒色頁岩	上端・左側縁で小形剥片を剥離する。右辺側に小剥離痕があり、削器として転用している可能性がある。	岩陰部出土
441	50 40	石核	柱状か	B-7 グリッド	長3.3 幅3.7	厚1.8 重23.0	黒曜石	上下両端から小形剥片を剥離。下端側に原礫面が残る他、上端・裏面側は風化剥離面となっている。	岩陰部出土
442	50 40	石核	板状か	B-7 グリッド	長2.6 幅2.7	厚0.8 重5.8	黒曜石	背面側で小形剥片を剥離。背面を除き、礫面で覆われる。	岩陰部出土
443	50 40	石核	幅広剥片	C-7 グリッド	長1.2 幅3.1	厚2.0 重5.6	黒曜石	裏面側平坦面を打面に、側縁で小形剥片を剥離する。	岩陰部出土
444	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-7 グリッド	長5.4 幅4.7	厚1.7 重48.6	細粒輝石 安山岩	背面側上端を粗く加工する。加工意図については不明瞭。	岩陰部出土
445	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-7 グリッド	長4.3 幅4.3	厚0.9 重14.4	珪質変質 岩	左側縁・剥片端部を粗く加工、削器様の刃部を作出する。加工途中で剥片中央付近で破損した可能性が高い。	岩陰部出土
446	50 40	加工痕あ る剥片	横長剥片	B-7 グリッド	長2.6 幅4.2	厚0.9 重7.8	黒色安山 岩	剥片裏面・左辺エッジを打撃、粗く加工する。	岩陰部出土
447	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-6 グリッド	長5.4 幅4.0	厚1.4 重24.7	黒色安山 岩	裏面側右側縁を一撃したのち、背面側を粗く加工。削器的だが、剥離は組織的にはみえない。	岩陰部出土
448	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-6 グリッド	長10.0 幅10.2	厚3.1 重266.5	珪質頁岩	左辺側の表裏面を粗く加工するほか、右辺側の裏面を浅く加工する。左辺側加工は打製石斧様だが、右辺側は削器の刃部に近い。	岩陰部出土
449	50 40	加工痕あ る剥片	両極剥片	C-7 グリッド	長2.0 幅1.5	厚1.3 重1.8	黒曜石	左側縁の表裏面に浅い加工が集中する。右側縁は素材が厚く、これが取り切れていない。石鏃製作を意図する。	岩陰部出土
450	50 40	加工痕あ る剥片	小型剥片	C-7 グリッド	長2.4 幅1.7	厚1.1 重1.3	黒曜石	形態的にもサイズのにも石鏃様だが、両側縁を部分的に加工する程度で断定は難しい。	岩陰部出土
451	50 40	加工痕あ る剥片	小型剥片	C-7 グリッド	長3.9 幅3.1	厚0.9 重10.9	チャート	背面側の両側縁を部分的に加工する。加工意図は不明。	岩陰部出土
452	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-6 グリッド	長5.3 幅5.9	厚1.9 重61.9	黒色頁岩	上端側の加工は打面調整様だが、これより新しい加工が右辺側にある。加工意図は明らかだが、裏面は被熱破損しており、詳細は不明。	岩陰部出土
453	50 40	加工痕あ る剥片	大型剥片	C-7 グリッド	長5.3 幅4.8	厚1.9 重57.6	黒色頁岩	両側縁を粗く加工。加工状態は打製石斧に近い。	岩陰部出土
454	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	D-8 グリッド	長(4.5) 幅(6.0)	厚1.1 重31.2	黒色頁岩	剥片端部を厚く加工して刃部を作出。左側縁・裏面側を薄く、背面側を厚く加工する。	岩陰部東側外 部出土
455	50 40	加工痕あ る剥片	幅広剥片	B-5 グリッド	長5.6 幅7.4	厚0.9 重55.6	黒色頁岩	背面側上端・左側縁を加工して、削器様刃部を作出する。	岩陰部出土
456	50 40	加工痕あ る剥片	小型剥片	B-5 グリッド	長3.0 幅1.9	厚0.3 重1.9	黒曜石	左辺側の表裏面を粗く加工して、削器様刃部を作出する。	岩陰部出土

第28表 石器観察表(3)

遺物番号	挿図 P.L.	器種	形態・素材	出土位置	度目・量目(g)		石材	製作・使用状況	摘要
457	50 40	加工痕ある剥片	幅広剥片	表面採集	長5.8 幅5.3	厚1.2 重75.2	黒色頁岩	表裏面を粗く加工したのち、背面側端部に浅く、薄い連続剥離を加え削器様刃部を作出する。	
458	50 40	加工痕ある剥片	石核か	表面採集	長(7.7) 幅(6.1)	厚2.2 重75.2	黒色頁岩	表裏面で幅広剥片を剥離した石核を利用して両側縁を加工。両側縁とも背面側加工が裏面側加工を切る。エッジは潰れず、打製石斧というより削器的。	
459	50 40	加工痕ある剥片	幅広剥片	表面採集	長6.1 幅4.6	厚1.0 重39.3	黒色頁岩	背面側右辺を削器様に加工するほか、裏面側の左辺端部を粗く加工する。	
460	50 40	使用痕ある剥片	幅広剥片	B-7 グリッド	長5.5 幅4.6	厚1.1 重27.9	チャート	エッジが直線的な左辺・剥片端部に小剥離痕が連続。	岩陰部出土
461	50 40	凹石	楕円礫	B-6 グリッド	長10.0 幅8.0	厚5.1 重624.5	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも激しく摩耗、アバタ状の集合打痕がある。側面は激しく使い込まれ、平坦化している。	岩陰部出土
462	50 40	凹石	楕円礫	B-6 グリッド	長10.5 幅7.9	厚5.7 重740.2	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも激しく摩耗して光沢面を形成。上端側小口部に打痕が集中する。	岩陰部出土
463	51 40	凹石	扁平楕円礫	C-7 グリッド	長8.8 幅7.1	厚5.7 重368.6	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも摩耗して光沢面を形成する。側縁は敲打痕が著しい。表裏面の摩耗面には凹穴2が伴う。	岩陰部出土
464	51 40	凹石	扁平楕円礫	C-6 グリッド	長8.7 幅7.0	厚4.3 重320.5	粗粒輝石 安山岩	背面側が摩耗するほか、右側面を除く各面に漏斗状の凹穴がある。上端側は敲打され、衝撃剥離している。	岩陰部出土
465	51 40	凹石	扁平楕円礫	C-6 グリッド	長11.4 幅6.9	厚4.2 重588.6	粗粒輝石 安山岩	表裏面・両側面に摩耗痕、小口部に敲打痕がある。激しく使い込まれた結果、側面に稜が生じている。摩耗面には漏斗状の凹穴が伴う。	岩陰部出土
466	51 40	凹石	扁平礫	未注記	長13.9 幅7.7	厚4.1 重5.708	溶結凝灰 岩	表裏面とも漏斗状の凹部が連続、側縁に敲打・摩耗痕がある。このほか、裏面側平坦面が著しく摩耗。	
467	51 40	磨石	扁平礫	未注記	長7.0 幅5.8	厚2.9 重159.1	デイサイ ト	表裏面とも摩耗するほか、側縁・小口部に敲打痕がある。	
468	51 40	磨石	扁平楕円礫	B-6 グリッド	長10.0 幅7.0	厚4.6 重453.8	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打・摩耗痕。激しく使い込まれ、側面の両端には稜が生じている。	岩陰部出土
469	51 40	磨石	扁平円礫	未注記	長8.8 幅8.0	厚3.0 重322.2	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも摩耗するほか、側縁に敲打・摩耗痕。	
470	51 40	磨石	扁平楕円礫	未注記	長9.6 幅7.9	厚4.3 重403.5	粗粒輝石 安山岩	表裏面とも摩耗するほか、両側縁に敲打・摩耗痕がある。部分的にヒビ割れ、被熱している可能性がある。	
471	51 40	敲石	磨製石斧か	B-6 グリッド	長8.4 幅7.8	厚5.4 重721.8	変玄武 岩	全面が敲打痕に覆われているが、上・下面では敲打後の研磨が著しい。表裏面に石斧研磨面が大きく残る。	岩陰部出土
472	51	石核	分割礫	表面採集	長5.6 幅9.9	厚9.8 重514.3	黒色頁岩	打面と作業面を頻りに移動させ、幅広剥片を剥離する。	県立歴史博物館所蔵
473	51	石核	大型剥片	表面採集	長6.9 幅14.8	厚3.6 重277.7	黒色頁岩	上下両端で小形幅広剥片を剥離する。	県立歴史博物館所蔵

第6項 骨角器

骨角器は4点確認が出来た。内訳は骨製品1点、角製品(未製品か)1点、貝製品2点である。この内、角製品は、調査段階で地元の方からの寄贈品である。他3点は何れも岩陰部出土であるが、出土層位は、土層断面に認められた落ち込み部分の範囲の中にある。この落ち込みの範囲の中には、出土した獣歯骨・貝類の殆どが該当している。

牙鏃(第52図、第29表、PL.34)

牙鏃は1点出土している。エナメル質状の半透明な部分、不透明な象牙質状な部分の、質的な自然風化は認め

られず、遺存状態は良好である。形状は、両面加工の両丸造にあたり、茎を備えない平根鏃で、両丸造無茎平根三角形式に該当する。成・整形は、丸みのある骨の一部を平らに成形している。篋被ぎ部分は平らに磨き、刃部から袂部分は鋳造りに成るが、袂部分の鋳筋は緩い。大きさは、全長2.0cm、幅1.6cm、重ね0.3cmである。

角製品(第52図、第29表、PL.34)

截断されたシカの角の先端部分。切断痕は石器により幾度も削られ切られた痕跡ではなく、比較的鋭利な刃物により迷いなく切られた切断痕が残り、根本側は截断された破断面はギザギザである。先端は、剥離面が3面認められる。この剥離面は緩やかに力が掛けられた剥離面

とは異なり、衝撃等による急激に力が掛けられた状態に因り生じた剥離面である。大きさは全長7.2cm、最大幅1.6cmを計り、切断面は4面認められる。

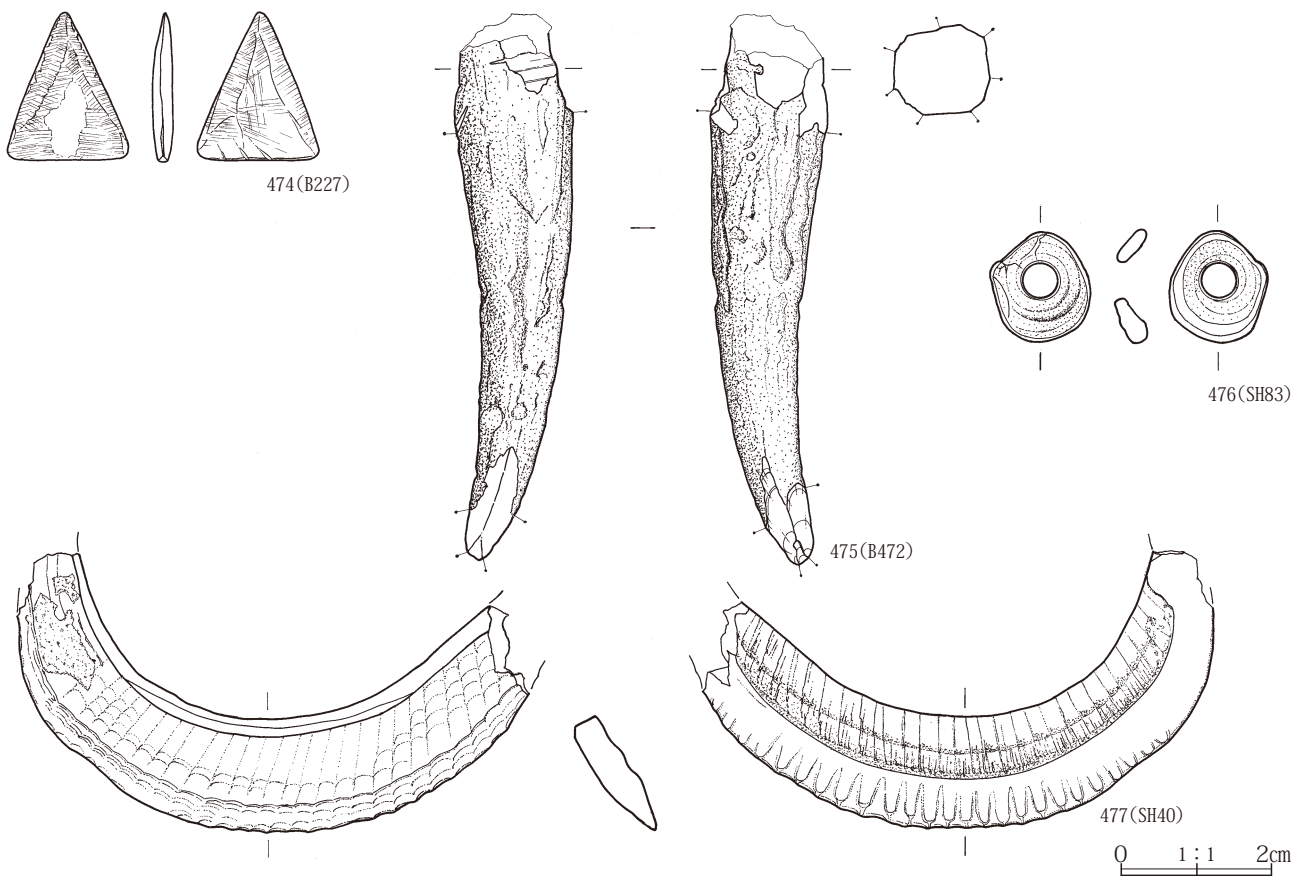
垂飾(第52図、第29表、PL.34)

巻貝の上下両端と内面を削り磨き整形により加工している。上端側の頂部に孔を穿ち紐通しとしている。孔の部分と裾の部分の縁断面は丸く、器面には削痕等が殆ど認められない。全体的に白いが、自然風化は顕著でなく質的な遺存状態は良好である。大きさは長さ1.45cm、幅1.3cm、高さ0.4cm、厚さは0.17cm～0.3cmである。

貝輪(第52図、第29表、PL.34)

タマキガイの丸みを利用して作られている。貝輪の両端は欠損している。貝の表面は、殻皮は認められないが、茶褐色の生息時の色調を残している。自然風化による変質は殆ど認められず、質的遺存状態は良好である。成形は、上半分を切断し、整形は、全体に磨き仕上げで、上縁の加工は角を残す状態である。下端縁は丸みを帯び磨き整形により仕上げられている。大きさは、残存横巾6.8cm、幅1.5cm、厚さ0.48cmである。

群馬県内では初例の遺物である。



第52図 出土遺物実測図(30) (骨角器類)

第29表 骨角器遺観察表

遺物番号	挿図 P L.	器種	出土位置	度目	残存	成・整形の特徴	摘要
474 B 227	図52 PL.41 口絵2	鏃	B-6 グリッド	長2.0 幅1.6	100%	イノシシ下顎歯牙の一部を使った鏃。骨の丸みを削り基部を作り、背面側にエナメル質の表面が残る。刃部は両面共に削り出し、筋筋を出している。	無茎平根三角形式
475 B 472	図52 PL.41	不明	表面採集	長(7.2) 幅1.6	100%か	角の先端部分。根本側が欠損する。浅い切断痕が4面認められる。欠損部は同部分で切断の痕跡の可能性もある。全体に磨り減り、先端部に剥離が認められる。	小林栄樹氏寄贈品
476 S H83	図52 PL.41 口絵3	垂飾か	B-7 グリッド	長6.8 幅1.3	100%	巻貝製。貝の上下両端と内面を削り、磨きにより整形されている。この磨き成形の削痕は見られない。全体的に磨かれ模様は痕跡程度である。	高0.4・厚0.17～0.3
477 S H40	図52 PL.41 口絵4	貝輪	B-7 グリッド	幅厚	45%	貝の縁辺りを移用している。全体的に磨かれ、上縁はシャープに削られている。下端側は滑らかに仕上げられている。	タマキガイ

第7章 理科学分析

第1節 分析の目的と結果

第1項 千駄木遺跡出土供試料遺物

千駄木遺跡出土遺物のうち、土器・石器・骨角器については前章で報告したが、動物依存体(貝類・獣歯骨)、火山灰、貝輪年代測定等の分析については本章で記す。

上記3者は外部に委託したが、この委託業務の受託者については例言を参照されたい。

第2項 貝類の鑑定分析

分析目的

貝類は出土総数128点ある。これらの中の幾つかは通有知見でも海産種であることは判断されるが、多くが専門見識を必要と判断したことにより鑑定分析に供じた。

目的は、貝類の種類、特徴及び特記事項など、供試料から得られる内容の分明化を目的とし、水産遺物の希少性・貴重性をより明確化させるために供じた。

分析結果

分析の結果、128点中112点の87.5%がカワシンジュガイであることが判明している。このカワシンジュガイは淡水低水温の清流域に生息する種類であり、遺跡地近傍での採集が可能であったことが推断されよう。このほか、淡水種のドブガイは沼池等での生息、海産種アワビ・サザエなど、遺跡地近傍での採集不能種が出土しており、搬入された貝であることが判断される。しかし、生体としての搬入は考え難い。

第3項 獣歯骨の鑑定分析

分析目的

獣歯骨は総数478点ある。これらの鑑定分析目的は貝類と同様である。ただ、動物種の相違だけである。

分析結果

分析の結果、478点の中から、カモシカ9頭・イノシシ7頭・ニホンジカ3頭・ツキノワグマ2頭・ニホンザル1頭が確認され、178点に及ぶ焼骨等の鑑定成果が得られた。そして、これらは狩猟行為により当遺跡にもた

らせられたことが推断される。また、カモシカの中には、当遺跡で解体されていることなどが判明した。

第4項 火山灰の鑑定分析

分析目的

「千駄木パミス」と調査時に呼称されたA s - D軽石は、県下で唯一確認できる遺跡として、当遺跡が「群馬県指定史跡」を受ける審議結果の指定理由の一つに当たる。

当遺跡出土の「千駄木パミス」たるA s - Dを科学的根拠に基づき確認することを目的とした。

また、調査区上層で出土した軽石は、調査では「A s - A」と鑑定されていたが、層位的矛盾が生じるため鑑定分析に供じた。

分析結果

「千駄木パミス」と称された軽石は、分析の結果A s - Dと認定された。また、調査段階でA s - A軽石と認定された軽石は、A s - B軽石であることが判明したことにより、層位的矛盾は解消された。

第5項 貝輪の年代測定分析

分析目的

出土遺物した貝輪は、通有縄文時代の遺物種であるが、出土層位が平安時代以降と判断される、第1号土坑内の出土であることと、質的遺存状態が非常に良好であること、使用貝種類が多例ではベンケイガイであるのに対して、使用貝種類がタマキガイであることから、縄文時代あるいは平安時代頃の遺物であるのかの製作年代を特定する一助として、放射性炭同位体分析(AMS加速器分析)に供じた。

分析結果

分析の結果、43875 ~ 43280 B Cという結果を得た。この年代では旧石器時代に該当することから、2回にわたり再計測を行ったが、2回とも同様な結果しか得られなかった。海産によるリザーバー効果の影響もあるのであろうか頭書の目的は果たせなかった。

第2節 理科学分析

第1項 出土貝類の鑑定分析

はじめに

貝類の遺存体の種類と遺存状況(保存状況)を中心に検討した。

その結果を以下に報告します。

貝類の種類構成とその個体数について

個体の総数は128個

確認された種類は以下(第30表)のとおり。

第30表 確認された貝の種類と数量一覧表

	種類	生息環境	個体数
1	カワシンジュガイ	淡水産	112
2	イシガイ	同上	1
3	マルドブガイ(ドブガイ)	同上	5
4	アワビ	海産	4
5	タマキガイ	同上	1
6	巻貝の蓋(サザエ?)A	同上	4
7	巻貝の蓋(?)B	同上	1
総数			128

この表から明らかのように遺存個体の種類構成では淡水産のカワシンジュガイが88%以上を占めていた。そのほか淡水産の貝類ではイシガイが1個体、ドブガイ(マルドブガイ)5個体が認められた。海産種としてはアワビ、タマキガイ、巻貝の蓋(フタ、サザエ)などが認められた。

遺存体の保存状態について

各種個体の保存状態についてみると

- ①全体の88%以上を占めるカワシンジュガイでは完全個体は2個、80%前後の保存状態が20個、その他91個であった。すなわち、断片状の個体がほとんどを占めていた。残存していた殻の大部分は殻頂部とその周辺部が占めていた。これは殻頂部は殻の厚みが大きく、破損に強い性質を持っていたためと思われる。しかし、殻頂部は生息時に淡水環境では外表面が溶蝕されていて殻の外層や内層の一部が失われていた。一方ではこれらの殻の内表面には生息時に形成されたとと思われる内層(真珠層)の補修痕が認められた。これは老成した個体によく見られる現象である。殻の断面の多くは不規則で、直線的な断面で、

角張っていて、力が加わって破壊されたものであろう。溶蝕の痕は見られない。

- ②イシガイはわずか1個体であったが、2ヶの穴が認められた。この穴の周辺には擦痕が見られ、この成因は自然に生じたものではなく、人工的なものを感じさせる。
- ③ドブガイの殻は薄く、殻頂部のみが残っていて外的力(人為的)により破壊されたものと見られる。④アワビの殻は部分的な破損は見られたがほぼ完全形を持っていた。人工的な作用痕は見られなかった。
- ⑤タマキガイの殻は破片であるが、殻の腹縁部の湾曲に沿ってスムーズな断面が残されており、人為的な作用痕が認められた。

⑥巻貝のフタについて

a)巻貝のフタA

これは石灰質で、厚みがありこれほど大きなフタはサザエのような巻貝に見られるものである。表面がざらざらな疎面を呈しており、溶蝕の痕が見られた。美的外観は見られない。

b)巻貝のフタB

これはフタとしたが、確認はできない。この資料の形は小さく、内部は円錐状を呈する。この内表面は薄く、白色の膜状で、自然の殻体の内表面を思わせる。外表面はゆるやかなドーム状で研磨されたようにスムーズな表面を呈する。この形状から殻のどの部位に当たるかを推定することは困難であり、巻き貝のフタと確定することもできず、部位の確定は今のところ不明である。ただし、微小ではあるが中心部に小穴が見られ、この穴は丁寧に研磨された痕が見られ、装飾品の一部を思わせる。

まとめ

以上の動物遺存体(貝類)の観察状況をまとめると以下のようなようになる。

①カワシンジュガイの多産について

カワシンジュガイがこれほど多産することは他に見られないことである。この種は冷温を好み、夏でも10数度の淡水環境に棲む。この遺跡付近で採集されたのであるならばそのような環境が近くにあったことになり、新しい知見となる。本州でのこの種の産出は氷河時代の遺存種と考えられていて、現在は

本州では長野県中、北部の小河川、その他の限られた地域でわずかに生存するのみである。産出量も少なく、これを食料とするには十分なものではない。殻の状態からは装飾品的なものとして使用されたかは疑問が残る。

②その他の淡水産種について

イシガイはただ1個体のみであったが表面の穴に加工痕が見られたが、どのような目的で作られたかは不明である。

ドブガイは、もとは数センチ以上の成体の小さい破片である。どのような意図で持ち来されたかは不明である。両種とも本州には広く産出している。

③海産種について

海産種として認められたものにアワビ、タマキガイ、巻き貝のフタ等であった。

アワビの個体数は数個以内にとどまり、殻は比較的大きいが、殻の厚みは大きさに比して薄く、いずれも若い固体と思われる。内表面の真珠光沢は比較的良好に保存されていた。外表面は自然の状態に加工痕は見られなかった。一方、タマキガイはその形状から明らかに人為的な加工痕が認められた。巻き貝のフタAは形状から特に目的を持った加工痕は見られなかった。巻き貝のフタBはすでに保存状態⑥-bで述べたとおりで、目的を持った加工痕が認められる。

工痕は見られなかった。一方、タマキガイはその形状から明らかに人為的な加工痕が認められた。

巻き貝のフタAは形状から特に目的を持った加工痕は見られなかった。

巻き貝のフタBはすでに保存状態⑥-bで述べたとおりで、目的を持った加工痕が認められる。

④殻の保存状態について

a)角張った大小の殻片について：自然の条件下ではこのような殻の破壊は見られず、多分発掘時あるいは殻の投棄時前後に人為的作用によって生じたものと思われる。

b)研磨痕の見られる殻について：研磨痕が少数の種の殻に見られたが、これらの研磨痕の状況から装飾的あるいはその他の目的で作られたものと見られる。ただし、それらの数が少ないことで、その作業目的について確定できる状況ではない。

c)資料全体について殻の表面の光沢が鮮明で、時代は不明であるが比較的新しいものと思われる。

第31表 貝類一覧表(1)

番号	出土地	状態	種		生息域	長	幅	摘要
SH1	B-5 No. 2	小破片		不明	淡水産			
SH2	B-5 No. 3 A	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH3	B-6 No. 2 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH4	B-6 No. 19	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			腹縁~後端欠(欠損)、殻中央部外層欠、内層表面に小穴状溶蝕あり。
SH5	B-6 No. 20	1/2	カワシンジュガイ	不明	淡水産			外層わずか残る、腹縁側半分欠。
SH6	B-6 No. 21 A	1/2	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH7	B-6 No. 21 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH8	B-6 No. 22	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			後端欠、老成・殻頂部溶蝕強し、殻頂内部補強成長あり。
SH9	B-6 No. 26 A		カワシンジュガイ		淡水産			
SH10	B-6 No. 26 B	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂部のみ(外層なし)。
SH11	B-6 No. 26 C	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH12	B-6 No. 26 D	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH13	B-6 No. 27	完存	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH14	B-6 No. 28	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH15	B-6 No. 40	完形	アワビ	-	海産種	12.45	10.25	別箱にあり(元SH39)真珠光沢、殻は薄い、内面微小凹凸あり、成長線丸み大、水管孔突起明らか、加工痕なし。
SH16	B-6 No. 41	全	カワシンジュガイ	右殻	淡水産	6.95	3.30	保存良好、殻頂溶蝕強し、殻内部補強成長あり。
SH17	B-6 No. 43	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	4.0		後端~腹縁欠
SH18	B-6 No. 45	1/2	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂~前端あり、外表面に複数の微小穴あり。
SH19	B-6 No. 59 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			内層のみ
SH20	B-6 No. 63	完存	イシガイ	右殻	淡水産	4.30	2.35	殻の2ヶ所に小穴あり、径0.5、後端細まる、穴の周辺に人工的擦痕あり。
SH21	B-6 No. 82	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH22	B-6 No. 83		カワシンジュガイ	不明	淡水産			
SH23	B-6 No. 87	中破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂および歯(絞歯)あり。
SH24	B-6 No. 89	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻腹側~後端欠、殻頂部溶蝕。

第7章 理化学分析

第32表 貝類一覧表(2)

番号	出土地	状態	種		生息域	長	幅	摘要
S H25	B-6 No.92	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H26	B-6 No.93	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H27	B-6 No.97	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			腹縁欠損、内層のみ。
S H28	B-6 III層下位	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂部2分裂、外層わずか、外表面の内層に小穴。
S H29	B-6 III層下位	中破片	マルドブガイ	不明	淡水産			殻頂部のみ、外層および内層あり。
S H30	B-6 III層下位	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂のみ。
S H31	B-6 III層下位	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H32	B-6 III層下位	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H33	B-7 No.9	完存	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	6.60	3.12	殻皮わずかあり、溶蝕による小穴あり。
S H34	B-7 No.10	1/2	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H35	B-7 No.15	完存	カワシンジュガイ	右殻	淡水産	4.80	2.50	
S H36	B-7 No.18	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻後端なし、殻皮なし。
S H37	B-7 No.24	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻皮なし、殻頂部を除き外層あり。
S H38	B-7 No.25 A	完存	アワビ		海産種	14.48	10.175	成長線の丸み大、水管孔突起明らか、加工痕見られず。
S H39	欠番(S H15と同一品)							
S H40	B-7 No.27		タマキガイ	不明	海産種		厚3.75	
S H41	B-7 No.39	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂を含む殻前部あり、外層あり。
S H42	B-7 No.40	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			
S H43	B-7 No.41	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	7.0		腹縁欠損、断面よごれ。
S H44	B-7 No.42	中破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻前半のみ、断面よごれ。
S H45	B-7 No.43	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H46	B-7 No.51 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H47	B-7 No.53 B	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	3.5		腹縁端欠。
S H48	B-7 No.54	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			腹縁・後端欠。
S H49	B-7 No.55	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			腹縁～前端欠。
S H50	B-7 No.63	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			前半部残りあり。
S H51	B-7 No.64	破片	ドブガイ	左殻	淡水産			殻頂部及び周辺のみ。
S H52	B-7 No.65	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			
S H53	B-7 No.66	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H54	B-7 No.67	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺のみ、内層の階段状溶蝕。
S H55	B-7 No.68 B	1/2	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂周辺のみ、内層の溶蝕あり。
S H56	B-7 No.68 C	中破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺のみ。
S H57	B-7 No.69	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺のみ。
S H58	B-7 No.70	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺のみ。
S H59	B-7 No.71	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H60	B-7 No.72	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			前端部欠。
S H61	B-7 No.73	破片		不明	淡水産			
S H62	B-7 No.74	部分欠損	カワシンジュガイ	不明	淡水産			前端～腹縁欠、外層剥離。
S H63	B-7 No.75	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			
S H64	B-7 No.77 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H65	B-7 No.79	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			
S H66	B-7 No.81	破片	ドブガイ	不明	淡水産			剥離片、平坦。
S H67	B-7 No.82		カワシンジュガイ	左殻	淡水産			
S H68	B-7 No.83	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺のみ、全体汚れ。
S H69	B-7 No.87	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H70	B-7 No.89	中破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺、剥離多し。
S H71	B-7 No.90	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			破片多数。
S H72	B-7 No.91	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			
S H73	B-7 No.92	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			前腹縁欠、殻皮あり、接着剤の光沢。
S H74	B-7 No.98	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H75	B-7 No.99	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			
S H76	B-7 No.100	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H77	B-7 No.101	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産	5.5		殻頂と周辺のみ。
S H78	B-7 No.103	小破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			

第33表 貝類一覧表(3)

番号	出土地	状態	種		生息域	長	幅	摘要
S H79	B-7 No.104	小破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H80	B-7 No.105	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	5.40	2082	殻頂部外層欠後端わずか欠。
S H81	B-7 No.107	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			前半欠、外層部分的剥離。
S H82	B-7 No.108	ほぼ完形	カワシンジュガイ	右殻	淡水産	3.825	2.00	前端欠。
S H83	B-7 No.109		巻貝(種類不明)の蓋(?)B				厚0.30	丸穴(研磨痕)、穴の内径0.5cm、穴は殻頂部付近を穿孔、外表面は平坦に研磨され、擦痕みられず、膜状内層あり。
S H84	B-7 No.113	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂部。
S H85	B-7 No.114	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂部。
S H86	B-7 No.116	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			小型。
S H87	B-7 No.117B	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂部なし、後背縁のみ。
S H88	B-7 No.117C	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂部なし、後背縁のみ。
S H89	B-7 No.117D	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H90	B-7 No.119	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂部なし、後背縁のみ。
S H91	B-7 No.120	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H92	B-7 No.121	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			後背面のみ。
S H93	B-7 No.122	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂前部。
S H94	B-7 No.123	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂周辺。
S H95	B-7 No.124	1/2	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂部で前後に二分。
S H96	B-7 No.125	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂のみ。
S H97	B-7 No.126	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂のみ。
S H98	B-7 No.129	破片	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂のみ。
S H99	B-7 No.130	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H100	B-7 表土	1/2	ハマグリ	左殻	淡水産			殻頂～前背縁、外表面は溶融疎面。
S H101	B-7 表土	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂～後背縁、外表面溶蝕、貫通した小穴明瞭な擦痕なし。
S H102	B-7 表土	1/2	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			大、小2個体、両者後背縁部の一部。
S H103	B-7 III層	1/2	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			後半部欠、保存状態良好。
S H104	B-7 III層	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂部のもい。
S H105	B-7 III層	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	6.6		腹縁部欠、殻頂部の内層溶蝕。
S H106	B-7 III層	部分欠損	カワシンジュガイ	左殻	淡水産	3.7		前腹縁欠。
S H107	C-6 No. 2	1/2	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂前背縁のみ、保存悪い。
S H108	C-6 No. 4 A	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂のみ。
S H109	C-6 No. 4 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H110	C-6 No. 5	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H111	C-6 No. 6 A	破片	カワシンジュガイ	右殻	淡水産			殻頂～後背縁、殻小型。
S H112	C-6 No. 6 B	破片	ドブガイ?	不明	淡水産			大きな殻片、平坦、外層一部残り。
S H113	C-6 No. 6 C	破片	ドブガイ?	不明	淡水産			殻平坦。
S H114	C-6 No. 8	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H115	C-6 No. 9	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂～前部。
S H116	C-6 No.10	1/2	カワシンジュガイ	左殻	淡水産			殻頂と周辺部、中型。
S H117	C-7 No. 2	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H118	C-7 No. 6 B	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H119	C-7 No. 8	破片	アワビ	不明	淡水産			内面に不規則な小じわ、微小凹凸あり。
S H120	S B No. 8	破片	アワビ	不明	淡水産			
S H121	S B No.10	部分欠損	カワシンジュガイ	右殻	淡水産	6.1		殻皮部分的に付着。
S H122	S B No.11	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H123	S B No.13	破片	カワシンジュガイ	不明	淡水産			
S H124	S B No.15	部分欠損	カワシンジュガイ	不明	淡水産			殻頂～後端欠、溶蝕あり。
S H125		部分欠損	カワシンジュガイ	不明	淡水産	6.6		中腹縁欠、断面新鮮。
S H126		完存	巻貝(サザエ)の蓋A	不明	海産種	4.25	4.10	全円、表面溶蝕で疎面、蓋は石灰質。
S H127		1/2	巻貝(サザエ)の蓋A	不明	海産種	径4.3		全円、表面溶蝕で疎面、蓋は石灰質。
S H128		1/2	巻貝(サザエ)の蓋A	不明	海産種	径3.5		全円、表面溶蝕で疎面、蓋は石灰質。

第2項 出土獣歯骨の鑑定分析

はじめに

千駄木遺跡は群馬県安中市松井田町西野牧字下平にあり、標高630mの地点に位置する岩陰遺跡である。岩陰部分は東西10m、奥行4m程あり、古くから獣骨や土器片が出土することで知られていた。昭和47年(1972)、この遺跡にかかる県道横川・西野牧線の拡幅工事がおこなわれることになり、群馬県教育委員会・松井田町教育委員会により発掘調査が行われた。ここに報告するのはこの時出土した獣歯骨である。

出土した獣骨は出土骨片数の多い順からカモシカ(*Capricornis crispus*)、ニホンジカ(*Cervus nippon*)、イノシシ(*Sus scrofa*)、ツキノワグマ(*Ursus thibetanus*)、ニホンザル(*Macaca fuscata*)である。

本稿を執筆するにあたって、新潟県村上市教育委員会の塩原知人氏から長者岩屋遺跡の発掘報告書を送っていただき、群馬県安中市の五料茶屋本陣では所蔵の千駄木出土の獣骨類を観察させていただいた。石塚久則氏には貴重な情報を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表します。

調査に用いた基準

計測器具はノギスを使用し、計測法は主としてDriesch (1976)に、解剖用語は加藤嘉太郎(1986)に、学名は阿部(2005)に基づいた。年齢推定はニホンカモシカについてはMiura&Yasui (1985)、高橋・小野(1989)、松尾他(1983,1984)を、イノシシについては林ほか(1977)、新美(1991)を、ニホンジカについては大泰司(1975,1979)を参考にした。

鑑定結果

1 カモシカ

1. 出土状況とその問題点

カモシカの骨が特に多く出土しているのは、C-8・B-8区間で、S B区、B-7区では少なく、これ以外の発掘区では確認されていない。なかでもC-8・B-8区間とB5-I層ではそれぞれで脊柱が1部繋がった状態で出土するなど、保存きわめて良好な状態で出土しているのが目立つ。岩陰で風雨から守られ有利な条件にあったとは言っても、この保存のよさを見ると、少なくともカモシカ骨のすべてが原始時代までさかのぼるもの

なのか疑問の持たれるところである。

カモシカでは残存している部位にかなりの偏り傾向がうかがえる。中手骨・中足骨・指骨多いのに対して、それより上位(胴体側)にある前肢の上腕骨、橈尺骨、肩甲骨、後肢の大腿骨、脛骨、寛骨の確実にそれと言えものが検出できてない。

当遺跡出土の大型動物の長骨片はほとんどか細骨片化しているが、数は多く140片前後に達する。ただし、この部位は骨端や関節部分ならばまだしも、骨体部の骨片となるとカモシカ、ニホンジカ、イノシシの区別は至難の技で、多くの場合不可能である。したがって、この長骨片のなかに、カモシカの何個体分含まれているのかを知ることは困難である。しかし、長骨片は骨片数としては多いにしても、量としては比較的少なく、控えめに言ってもカモシカの最少個体数9個体分にははるか及ばないという実感はある。

完存・半完存あるいはそれに近い状態で出土している中手骨や中足骨に対して長骨がすべて破片になり、しかも、その量が少ないとなれば、どんな理由によるのだろうか。長骨が風化に対して中手骨や中足骨比べ特に弱いということはない。だとすれば、考えられるのが、長骨部位ははじめから狩猟地から持ち込まれなかったか、持ち込む量が少なかったか、または持ち込まれてはいたものの一部を打ち割ったりして利用し、残りは自分たちの本拠地の集落へ持ち帰ったか、そのいずれかであったであろう。その際、肉のほとんど付着してない中手骨・中足骨・指骨は岩陰に置き去りにしていったのであろう。

2. 主な獣骨の記載

①中手骨

15個9個体分の中手骨が出土している。

カモシカの中手骨は第3と第4中手骨が癒合したもので、本遺跡出土のものもその癒合部は前側では浅くて細い溝(背側縦溝)として認められ、後側では線状にその痕跡を残して(掌側縦溝)、カモシカの特徴を明瞭にあらわしている。

中手骨のうち滑車の離脱した骨体部が左右1本ずつ計2本、離脱した滑車部が2個あり、少なくとも1個体分は幼獣のものであることが分かる。中手骨遠位骨端部の滑車は生後1年6~7カ月で骨体と癒合する(松尾他、1983,1984)ことにより、この年齢以下の幼獣であること

が分かる。

②中足骨

11個4個体分の中足骨が出土している。

カモシカの中足骨は第3と第4中足骨が癒合したもので、その癒合部は前側では明瞭な溝(背側縦溝)となっていて、後側では線状にその痕跡を残している(掌側縦溝)。本遺跡出土のものも明瞭にこの特徴を持っている。

中足骨のうち滑車の離脱した骨体部が左右1本ずつ計2本、離脱した滑車部が3個あり、少なくとも1個体分は幼獣であることが分かる。中手骨と同様、遠位骨端部の滑車は生後1年6～7カ月で骨体と癒合するとされる(松尾他、1983,1984)ことによる。

正田(1987)によれば、乳用ヤギ(*Capra hircus*)が日本に導入されたのは明治の末であり、大正に入ると長野県佐久地方が日本の乳用ヤギ育種の中心地帯となり、長野県や群馬県の山間部を中心に飼育が盛んにおこなわれるようになった。

もとより、ヤギとカモシカは属のレベルで異なる種であるが、骨の形態は非常によく似ていて、特に西洋産のザーネン種は体格もカモシカに近く、同定には特別な注意を要する。上述のような西洋ヤギ導入の歴史を振り返ると、佐久市に近い山間部にある千駄木遺跡としては、一応は検証しておく必要がある。

そこで中足骨の滑車間切痕に注目してみた。この部分はカモシカでは広いのを特徴とし、滑車の幅を100とした場合、滑車切痕幅の比率がカモシカでは11.8と大きく、ヤギでは8.0と小さい(松尾他、1984)。本遺跡では2個の中足骨でこの部位の計測が可能であり、それぞれ10.4、11.5という比率を得た。いずれもヤギよりはカモシカの方に近い値であり、カモシカ骨であることを支持している。

B6B-S1層出土の中足骨では、近位内側に第2中足骨と思われる瘤状の隆起が認められた。さらに骨体中央掌面内側に第2中足骨遠位端の可能性が考えられる11.3mmほど瘤状の隆起が観察された。

B12B-S1層出土の中足骨では、近位内側端に第2中足骨の痕跡と思われるものが4.5cmにわたって存在する。外側にも2.7cmにわたって隆起が認められる。

3. 性別

カモシカは体型において雌雄差がはなはだ少ない動物

で、雌雄差が認められるのは寛骨のみである(松尾他、1984)。本遺跡では寛骨は検出されず、したがって性別の判定は不可能である。

4. 年令

当遺跡のカモシカの推定年齢は、1.5才以下1-2頭、2才前後1頭、2-3才1頭、3才前後1頭、4.5才1頭、7-8才1頭で、9才前後1頭である。推定最少個体数9頭のうち幼獣が最大で4-5頭を占めている。老獣は見当たらない。当地では若年の個体を主な狩猟対象にしていたといえよう。

5. 新潟県の長者岩屋遺跡(新潟県朝日村教育委員会、1993)との比較

当遺跡は新潟県旧岩船郡朝日村にある。崩落礫を岩陰として利用した遺跡であるという点と出土動物がカモシカを主体とする点で本遺跡と共通する。

出土したカモシカは27から40個体にのぼり、出土部位では下顎骨が最多で40、次に多いのが中手骨・中足骨の26である。これに関節する指骨(基節骨・中節骨・末節骨)も少なくない。一方上腕骨・大腿骨がそれぞれ3本ずつ、橈骨・脛骨がそれぞれ3点といずれも少ない。

この事を執筆者たちは、自然死したものと考えるがたく、ヒトが狩猟・解体したものを一部この岩陰に持ち込んだのだらうと解釈している。また、大腿骨や上腕骨が極めて少ないのは解体現場で廃棄された可能性もあるが、長骨(大腿骨や上腕骨など)の骨片が多量に出土しているから骨器の材料にされた可能性も否定できない。また、結びのなかでは、出土骨は本岩陰に短期滞在した時に消費したものの残滓であると考えられ、未発見の部位は単純化すれば、本村あるいは根拠地集落へ持ち帰ったと想定できるであろうと述べている

カモシカ以外で出土した獣骨類はツキノワグマ、ニホンザルである。

●千駄木遺跡との類似点

- ①出土獣骨はカモシカを主体とする。
- ②カモシカの出土骨のなかでは中手骨・中足骨が多く、上腕骨・大腿骨など長骨が少ない。
- ③長骨は骨片化している。
- ④ツキノワグマ、サルの獣骨も出土している。

●相違点

- ①長者岩屋遺跡では、カモシカの個体数が千駄木遺跡

に比べ圧倒的に多い。

②カモシカの出土部位のなかで最多が下顎骨で40点あるが、千駄木遺跡ではせいぜい2～3点で、しかも破片となっている。

③考古遺跡では最も普遍的にみられるイノシシ、ニホンジカの出土が長者岩屋遺跡ではない。イノシシ、ニホンジカが当時この地域に生息してなかったことに主因があるように思われる。現在も当地がこの両種の生息域でないことによる本稿筆者の推定である。

④焼けた骨が1点のみであるが、千駄木遺跡では178点と圧倒的に多い。

6. カモシカ猟

浜(1977)によれば、カモシカ猟はもっぱら冬に行われた。冬は毛皮が綿毛に覆われて立派であること、肉も臭みがなくて美味であること、一面白一色の雪におおわれているため猟がしやすいことなどが冬猟の理由である。それで冬のカモシカ、春のクマともいわれた。

先述の長者岩屋遺跡の調査では歯のセメント質の観察から、当時のカモシカ猟は晩冬に行われたことが解明されている。千駄木遺跡ではセメント質観察から狩猟季節を推定する調査は実施されてないが、上述のように好条件を持った冬季がカモシカ猟に最適な季節であることには昔も今も変わりないと思われる。だとすれば、千駄木遺跡でも冬季に行われた可能性は十分考えられる。雪原で捕獲したカモシカを積雪のない岩陰までもち運んだあと、時にはたき火で暖をとり、集落へ持ち帰るシシ肉の解体処理をした、こんな情景が浮かんで来る。ただし、出土獣骨には解体痕のあるものは見出されていない。

季節が春に移り変わるころ今度は冬眠から醒めたクマに狩猟対象が移っていったのかも知れない。

2 ニホンジカ

ニホンジカの出土地区はB-6、B-7に集中している。カモシカを多産するB-5、SB、C-8、B-8では全くと言っていいほど出土を見ない。

最少個体数および推定年齢は、1才2カ月程が1頭、3～5才が1頭、老獣が1頭の合計3頭である。性別については、鹿角片があり、オスが含まれていることはわかるが、メスの存在は確認できない。

最基部に切り取られた跡がいく筋か付いた黒く焼けて

先端部の角が一点発見されている。

3 イノシシ

主な出土区はB-5、B-6、B-7、SB区であり、ニホンジカ同様カモシカを多産するB-5、SB、C-8 B-8ではごくわずかしかみない。

最少個体数および推定年齢は、1-2才が1頭、2.5-3.5才が1頭、3才2頭、成獣2頭、老獣が1頭の合計7頭である。性別については、犬歯においてのみ判別が可能であり、メスが2頭確認された。オスは確認されていない。

S B No. 4の下顎骨は第1切歯が左右とも第2切歯よりも小さいというまれな標本である。

4 ツキノワグマ

ツキノワグマのものが5点出土している。B-6区から4点、B-7区から1点である。

出土した左下顎犬歯には咬痕痕がまったく見られず、左上顎第1後臼歯では咬頭にわずかに象牙質が露出し、左上顎第2後臼歯では象牙質の露出はないがエナメル質の咬痕の痕が見られる。ヒグマの例でみると、合田(1979)によれば、永久歯は14-15カ月令で生え揃い、Zavatsky(1976)によれば、犬歯は2才頃には長さが2cmほどになり、4-6才になると後縁が咬痕され始め、成長が完了するのは8年から10年目である。

本遺跡のものはツキノワグマであるが、これに照らして年齢を推定してみる。下顎の犬歯には上顎犬歯との咬痕の痕はなく、歯髓腔はまだ大きく開いているが、歯根の長さはほぼ3cmまで達している。この様子から 才前後と推定してみた。

一方、これとは別に歯冠部を欠く上下左右不明の犬歯が検出されているが、歯根部分がほぼ閉鎖しているように見え、上記犬歯とは別個体のように思われる。おそらく咬痕が始まっている上記の上顎後臼歯と出土地点からしても同一個体なのであろう。4-5才前後の可能性がある。

性別については、上顎の第1後臼歯、第2後臼歯が現生のものに比較してやや小さめなのでメスの可能性の方が高いとみた。オスの存在は確認されてない。

右第4中手骨は高温で焼かれ白色化し、亀裂・歪みが生じている。相伴している第3中手骨も火をうけているようである。

5 ニホンザル

ニホンザルの骨が1点だけ検出された。

右上腕骨の遠位端部で、火を幾分受けているようである。この上腕骨はニホンザルとしてはやや小型であり、メスの可能性の方を考えたい。

6 焼骨について

上述のように千駄木遺跡からは178片の焼骨が出土している。特にB-6、B-7、C-6、C-7の発掘区に集中し、この発掘区から発見されたカモシカ骨はない。

逆に、カモシカ骨の多産するB-5区、C-8・B-8のSection帯内、SB区では焼骨は極端に少ない。保存良好なカモシカ骨を66片も多産するC-8・B-8のSection帯内では焼骨はわずか2点のみ、やはりカモシカ骨を45片も多産するB-5区では焼骨は0、15片のカモシカ骨を産するSB区からは5点のみの焼骨が発見されるだけである。すなわち、カモシカが多産する発掘区では、焼骨が極端に少ないということである。実際、多量に出土したカモシカの獣骨のなかで焼骨はB0区出土の角芯1点のみ、他は全部いわゆる生の骨である。

焼骨は焼かれることで無機質化し、風化に対して強くなり、後世まで長く保存される利点がある一方で、亀裂や歪みが生じて細片化し、種の同定が非常に困難になるという弱点がある。

そのために同定できた骨片に限ってという前提になるが、焼骨の多い順に動物を並べてみるとニホンジカ11点、ツキノワグマ4点、イノシシ2点、カモシカ1点、サル1点の順になる。これは個体数をあらわしたのではなく、あくまで骨片数であることに注意を要するが、なにか示唆するもある。

次に各動物の出土骨片に対する焼骨の割合を見ると、ニホンジカ11/29、カモシカ1/66となり、出土骨片数での比較とはいえ、ニホンジカが最も多く焼かれ、カモシカが焼かれることはめったになかったという傾向はあるように思われる。

B-6区から5点、C-6区から1点、カモシカあるいはシカにしては極端に小さい指骨の焼骨が出土している。小さくても、近位骨端はすでに癒合しているので少なくとも生後1年6カ月～8カ月は過ぎている(松尾他、1983)個体である。

佐久市では同市大井城跡の発掘調査で、そのうちの

部は15～16世紀～中世にまで遡るとされる小型ヤギの獣骨が少なからず出土している。同市の金井城跡からもヤギの中手骨や中節骨が出土している。

佐久市およびその周辺に小型ヤギが飼育されていたとすれば、千駄木遺跡でもその存在の可能性を一応は疑う必要がある。Ubelaker, (1978)によれば、人骨では白色化するまで焼かれると最大で25%縮小する。出土骨も、これに準じて最大の25%縮小しているとすれば、逆算すると元の大きさは、依然小さめながらもカモシカやシカの成獣の大きさに近くなる。そこでは、本稿ではニホンジカまたはカモシカと記録したが、縮小率がどの程度かは実際には不詳のなかで小型ヤギの可能性がまったくないわけではない。

7 咬み痕

食肉動物による咬み痕もしくはその可能性のある円形の凹みを持った骨片が14片ほど検出されている。イヌやオオカミによって付けられた骨表面の咬み痕は、多くの場合、獲物の捕獲現場で付けられたものではなく、棲みか・ねぐらに持ち帰った後、ゆとりのある時に一種の退屈のぎで咬んだ結果生じたとされる(Binford, 1981)。もし咬み痕だとすれば、飼い犬を連れていたか、この岩陰が野イヌ、オオカミの棲みかになったことがあるということになる。

動物種や部位による偏りは特に認められなかったが、咬み痕のある骨片のうち64%が焼骨であった。

まとめ

1. 千駄木遺跡では獣骨類が推定最少個体数として、カモシカ9頭、イノシシ7頭、ニホンジカ3頭、ツキノワグマ2頭、ニホンザル1頭分が出土している。

2. カモシカ出土する発掘区では他の動物の共伴はないか、あってもごくわずかである。

3. カモシカにおいては中手骨・中足骨・指骨に比べて他の長骨の数量が少なく、この部分は、集落へ持ち帰るなど特別な扱いを受けていたことがうかがえる。

4. 焼骨が178片出土しているが、カモシカでは個体数の最も多いにもかかわらず焼骨は角突起(角芯)の1点のみである。

5. カモシカが多産する岩陰遺跡ということで千駄木遺跡に類似する遺跡に新潟県旧朝日村の長者岩屋遺跡がある。後者では出土部位中下顎骨が最多であることや、

ニホンジカ、イノシシの出土がなく、焼骨がわずか1点のみなど、千駄木遺跡との相違点もある。

参考・引用文献

合田克己 (1979) クマ入門。ヒグマ、29。
 阿部 永 (2005) 『日本の哺乳類 - 改訂版』。東海大学出版会。
 Driesch, A. von den, (1976) A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1, pp137, Harvard University, Massachusetts.
 Binford, L.P., (1981) Bones. Academic Press pp320.
 浜 登 (1977) 追われゆくカモシカたち。筑摩書房
 林 良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 (1977) 日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定。日本獣医学雑誌。39 (2)、165-174。
 加藤嘉太郎 (1979)、『家畜比較解剖図説』、上巻、1-201
 松井田町誌編集委員会 (1985) 『松井田町誌』。松井田町誌編集委員会。
 松尾信一・森下芳臣・大島浩二 (1983)。ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) の骨格に関する研究 I 前肢について。信州大学農学部紀要、20, 173-192。
 松尾信一・森下芳臣・大島浩二 (1984)。ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) の骨格に関する研究 II 後肢について。信州大学農学部紀要、21, 59-90。
 森下芳臣・松尾信一・大島浩二 (1984)。ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) の骨格に関する研究 III 胴骨 (脊柱・肋骨・胸骨) について。信州大学農学部紀要、21, 119-148。
 松尾信一・森下芳臣・大島浩二 (1985)。ニホンカモシカ (*Capricornis crispus*) の骨格に関する研究 IV 頭蓋 (頭蓋骨・顔面骨) について。信州大学農学部紀要、22, 99-138。
 松尾信一・菅澤勝巳・大島浩二 (1984)。家畜ヤギの骨格の雌雄差に関する解剖学的研究。信州大学農学部紀要、27, 133-189。
 Miura, S & Yasui, K. (1985). Validity of Tooth Eruption-Wear Pattern as Age Criteria in the Japanese Serow, *Capricornis crispus*. J. Mamm. Soc. Japan. 10 (4) 169-178。
 宮崎重雄 (1988) 大井城出土の獣骨類について 『大井城跡』 51-60、長野県佐久市教育委員会。
 宮崎重雄 (1991) 佐久時金井城跡出土の獣骨類 『金井城跡』 736-742。佐久市教育委員会・昨埋蔵文化財調査センター。
 西本豊弘 (2009) 動物骨格図集 (7) 動物考古学、26、171-180
 小野昭・石原正敏・小熊博史 (1993)。『長者岩屋遺跡 (第1次・第2次調査報告)』。新潟県朝日村教育委員会。
 大泰司紀之 (1975) 切歯の磨滅による奈良公園のシカの年齢推定法 『昭和50年度・天然記念物「奈良のシカ」調査報告』、71-81。春日顕彰会。
 大泰司紀之 (1979)。遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法。考古学と自然科学、13, 51-73。
 大泰司紀之 (1986)。ニホンジカにおける分類・分布・地理的変異の概要。哺乳類科学、53、13-17
 新美倫子 (1991)。愛知県伊川津遺跡出土のニホンイノシシの年齢及び死亡時期査定について。国立民族博物館研究報告、92、123-141。
 正田陽一編著 (1987) 『人間がつくった動物たち - 家畜としての進化』 東京書籍。
 高橋正志・小野昭 (1989)。新潟県長者岩屋遺跡産ニホンカモシカの歯のセメント質による年齢および狩猟季節の推定。地球科学 43 (3)、172-175。
 須川章夫・月瀬 東 (1977) 『牛の解剖図説 - 骨学編 -』。文永堂。
 西本豊弘 (2009) 動物骨格図集 (7)
 大泰司紀之 (1986) ニホンジカにおける分類・分布・地理的変異の概要。哺乳類科学、53、13-17。
 Ubelaker, D.H. (1978) Human skeletal remains. Taraxacum, Washington. pp172
 Zavatsky, B.P. (1976) The use of the skull in age determination of the brown bear. Bears-their biology and management. IUCN Publications new series No.40, 275-279

附

五料の茶屋本陣お西所蔵の獣骨

地元の小学生たちが登下校時に千駄木岩陰遺跡で採集したとされる獣骨が安中市松井田町に五料にある五料の茶屋本陣に保管されている。

鹿角が9点あり、うち2点はそれぞれ別個体の落角で、ともに第1分岐部直上で第一枝、主角が切断されている。他の8点はこの落角の一部なのか否かは不明である。この8点のうち3点は第2又は第3分岐直上で切断され、主角部と合わせるとそれぞれの保存最大長は149.5mm、114.5mm、94.0mmである。その他、基部に切断痕が残る第1枝、切断痕3本が残る焼角小片及び切断痕の認められない角座直上から第2分岐部までが残存する最大保存長208.1mmの角がある。

この他、ニホンジカのものでは遠位部の欠けた左中足骨、仙椎片、頸椎片があり、頸椎の他は現生のものより大きめである。イノシシでは左肩甲骨、右側頭骨、右(?)下顎第1後臼歯があり、現生のものと大きさがあまり変わらない。カモシカでは左下顎第3後臼歯が確認される。



五料の茶屋本陣お西所蔵の獣骨 (1)



五料の茶屋本陣お西所蔵の獣骨 (2)

第34表 獣歯骨一覧表(1)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B1	B-5No.1 A	大型獣	?	肢骨片	30.0+												
B2	B-5No.1 B	大型獣	?	骨片	29.8+												
B3	B-5No.3 A	カモシカ	?	右基節骨	45.4	14.7	18.3			13.8	12.5						
B4	B-5 I層	カモシカ	右	中手骨	136.4	27.7	18.3	18.5	12.8	32.5	18.1						
B5	B-5 I層	カモシカ	左	中手骨	133.4	27.9	18.2	18.2	12.4	31.8	18.6						
B6	B-5 I層	カモシカ	左	中足骨	133.8	26.2	21.4+	17.6	14		17.3+						
B7	B-5 I層	カモシカ	右	中手骨	138	25.3+	16.2+	18.4	13	32.2	18.2						
B8	B-5 I層	カモシカ	右	中足骨	134.9	21.0+	12.0+	16.3	14.5	29.2+	17.4						
B9	B-5 I層	カモシカ	右	中足骨	148	23.4	22.5	17.1	14.2	30.8	18.2						
B10	B-5 I層	カモシカ	左	中手骨	136.8	23.0+	14.6+	17.7	12.6	31.7	18.2						
B11	B-5 I層	カモシカ	左	中手骨	102.1	25.7	17.1	16.7	11.2			幼獣					遠位骨端離脱
B12	B-5 I層	カモシカ	右	中足骨	108.1+	24.9	22.6	15.8	14.7								
B13	B-5 I層	カモシカ		第13胸椎	PL29.0	BFc27.7	BFcd24.0	HFcr19.0	HFcd17.4	高さ53.4							前肋骨窩あり
B14	B-5 I層	カモシカ		第1腰椎	PL31.4	BFcr24.8	BFcd24.8	HFcr17.3	HFcd17.8								
B15	B-5 I層	カモシカ	右	前頭骨眼窩付近	PL29.1	BFcr27.7	BFcd24.0	HFcr19.0	HFcd17.4			2歳前後					
B16	B-5 I層	カモシカ	右	上顎骨	?												
B17	B-5 I層	カモシカ		第2腰椎	32.4	23.9	24.8	19.3	18.3	50.4+							
B18	B-5 I層	カモシカ		第3腰椎	30.6	23.0	23.9	19.0	17	52.4							
B19	B-5 I層	カモシカ	右	中手骨	72.5+												
B20	B-5 I層	カモシカ	左	中手骨	73.4+												
B21	B-5 I層	カモシカ??	左	肩甲骨	55.4+												
B22	B-5 I層	カモシカ	左	中手骨	134.2	SLC17.4					18.3						遠位骨片
B23	B-5 I層	カモシカ	?	上腕骨?	60.2+												
B24	B-5 I層	カモシカ	右	下顎頭付近	67.8+	下顎頭幅16.9						幼獣					
B25	B-5 I層	カモシカ	?	右基節骨	44.2	16.3	16.8			14.4	14.2						
B26	B-5 I層	カモシカ	?	右基節骨	44.2	14.3	16.6			12.5	10.9						
B27	B-5 I層	カモシカ	左	後肢基節骨	46.4	15.5	18.0			13.2	12						
B28	B-5 I層	カモシカ	?	右基節骨	45	15.8	15.6			14.2	14.2						
B29	B-5 I層	カモシカ	?	左基節骨	44	14.4+	14.6+										
B30	B-5 I層	カモシカ	?	左基節骨	46.2	15.9	15.8			13.8	14						
B31	B-5 I層	カモシカ	?	右基節骨	45.5	15.5	15.9			13.9	13.8						
B32	B-5 I層	カモシカ	左	後肢基節骨	45.8	15.8	16.0			13.9	14.4						近位骨端離脱
B33	B-5 I層	カモシカ	左	後肢基節骨	35.1+							幼獣					
B34	B-5 I層	カモシカ	?	右中節骨	30.7	14.4	16.0			11.2	16.0						
B35	B-5 I層	カモシカ	?	左中節骨	30.4	14.3	15.4			10.8	16.3						
B36	B-5 I層	カモシカ	?	左中節骨	31.0	14.0	15.6			11.0	16.4						
B37	B-5 I層	カモシカ	?	左中節骨	30.4	14.4	16.5			10.8	16.8						
B38	B-5 I層	カモシカ	?	右中節骨	31.0	14.5	15.9			11.4	16.3						
B39	B-5 I層	カモシカ	左中節骨	31.0	14.8	15.3	15.3			11.4	15.9						
B40	B-5 I層	カモシカ	?	右中節骨	31.6	14.4	15.2			10.8	16.0						
B41	B-5 I層	カモシカ	?	左中節骨	23.3+					10.0+	14.7+	幼獣					近位骨端離脱
B42	B-5 I層	イノシシ	左中節骨	第5中手骨遠位骨端						11.7	14	成獣					
B43	B-5 I層	カモシカ	左中節骨	中手骨						30.7	17.0	幼獣					離脱消車
B44	B-5 I層	カモシカ	右中節骨	左末節骨	38.6	11.3	22.8										
B45	B-5 I層	カモシカ	左中節骨	右末節骨	39.1	11.5	22.0										

第35表 獣歯骨一覧表(2)

(計測値の単位はmm)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼管	亀裂	歪み	咬痕	備考
B46	B-5 I層	カモシカ	右中節骨	左末節骨	37.4+	12.3	20.4										
B47	B-5 I層	カモシカ	右中節骨	左末節骨	38.0	12.6	22.8										
B48	B-5 I層	カモシカ	左中節骨	右末節骨	39.1	12.6	23.4										
B49	B-5 I層	カモシカ	右中節骨	左末節骨	38.1	10.9+	20.6										
B50	B-5 I層	カモシカ	右中節骨	右末節骨	35.6+	11.2	21.8										
B51	B-5 I層	カモシカ	左中節骨	下顎孔付近?	59.8+												
B52	B-5 I層	カモシカ?	左中節骨	側頭骨・頭頂骨	47.8+												
B53	B-5 I層	カモシカ?	左中節骨	脳頭蓋片	44.8+												
B54	B-5 I層	カモシカ?	左中節骨	長骨	36.9+												
B55	B-5 I層	カモシカ?	右中節骨	長骨	34.4+												
B56	B-5 I層	カモシカ?	左中節骨	肢骨片	48.2+												
B57	B-5 I層	カモシカ?		長骨	36.3+												
B58	B-5 I層	カモシカ?		長骨	26.0+												
B59	B-5 I層	カモシカ?		小骨片	25.8+												
B60	B-5 I層	カモシカ?		骨片	23.8+												
B61	B-5 I層	カモシカ?		頭蓋片	28.0+												
B62	B-5 I層	カモシカ?	左	眼窩部片?	19.7+												
B63	B-5 I層	カモシカ?	右	下顎頭部片	39.5+												
B64	B-5 I層	カモシカorシカ		第8?胸椎右棘突起肋骨窩 付近	18.6+												
B65	B-5 I層	カモシカ?		頭蓋片	19.7+												
B66	B-5 I層	カモシカ?		頭蓋片?	19.4+												
B67	B-5 I層	シカ	左	下顎第1or2後臼歯		M1 (16.2)	M1 (13.3)					1才2カ月					第2後臼歯萌出途上。
B68	B-5 I層	イノシシ	左	下顎第4前臼歯		15.2	10.3	13.0				3歳前後					第3後臼歯が萌出終了
B69	B-5 I層	イノシシ	右	下顎第3前臼歯		13.3	8.0	10.3				3歳前後					
B70	B-5 I層	別標本と接合															
B71	B-6 No. 1	イノシシ	右	尺骨	DP35.4	BPC21.6											かなり大型
B72	B-6 No. 2 A	カモシカorシカ	右	中足骨近位端	40.6+	26.0	28.2										
B73	B-6 No. 3	大型獣	?	脛骨片?	44.2+								○				
B74	B-6 No. 4	イノシシ	右	踵骨	79.0+	最大前後径33.3											かなり大型
B75	B-6 No. 5 A	中型獣		骨片	2.2+												
B76	B-6 No. 5 B	?	?	角突起(角芯)??	23.8+												海綿質。落角?
B77	B-6 No. 5 C	大型獣	?	長骨	20.8+												
B78	B-6 No. 6	サル	右	上腕骨遠位部	46.1+								○				
B79	B-6 No. 7	大型獣	?	長骨	72.6+								○				現生より大
B80	B-6 No. 8	シカ	右	距骨	GL144.4	GLm40.5	Bd26.2	D1 24.0	Dm23.7								
B81	B-6 No. 9	シカ	?	中足骨片	78.8+												
B82	B-6 No. 10 A	シカ	右	脛骨遠位端	Bd36.0	Dd27.8											
B83	B-6 No. 10 B	シカ?	?	長骨	47.0+								○?				
B84	B-6 No. 10 C	シカ?	?	中足骨片	56.2+												
B85	B-6 No. 11	シカ	右	上顎第3前臼歯	下顎頭幅 16.9	(14.6)	(14.0)	S D11.4 (9.0)	DD14.0			成獣 老獣					咬耗進む
B86	B-6 No. 12	シカ?		大腿骨片	64.5+												

第36表 獸歯骨一覽表(3)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	燒骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B87	B-6No.13	シカ	右	脛骨遠位端	44.3+	15.0+	11.4	16.0				4.5~5才	○				
B88	B-6No.14	シカ	右	下顎第2後臼歯									○?				
B89	B-6No.15	大型獸	?	長骨	42.9+								○				
B90	B-6No.16	イノシシ?	左	肩甲骨下縁部	53.7+								○				
B91	B-6No.17	大型獸		肢骨片	17.4+								○				
B92	B-6No.18	大型獸		長骨	46.5+								○				
B93	B-6No.21 C	ヤギ?	?	右基節骨	13.5+								○				
B94	B-6No.23	シカ	右	第2後臼歯		20.0	19.1	16.3				成獣	○				
B95	B-6No.24	大型獸		骨片	22.1+								○				
B96	B-6No.25	カモシカorシカ	?	左中節骨	26.8	10.7	12.2+		9.4	12.7			○				
B97	B-6No.29	?	?	角突起(角芯)?	57.4+	10.2*9.3							○				すべてが海綿質
B98	B-6No.30	イノシシ	右	前頭骨眼窩付近	36.7+								○?				現生より大
B99	B-6No.31	シカ	?	右中節骨	41.4	16.2	21.7										
B100	B-6No.32	カモシカorシカ	左?	後位肋骨近位端片	24.4+								○?				
B101	B-6No.33	カモシカorシカ	?	右基節骨近位半	26.5+	14.6+	19.9+					幼獣					近位骨端離脱
B102	B-6No.34 A	カモシカ	右	下顎第1後臼歯		6.2	8.9	20.0				3才					
B103	B-6No.34 B	カモシカ	右	下顎第3乳前臼歯		16.6	8.1	8.0				3才					
B104	B-6No.35	カモシカorシカ	?	下顎後臼歯片		8.1+		24.3									
B105	B-6No.36 A	ツキノワグマ	?	?犬歯歯根部	38.0+	破断面21.6*10.9						3才前後?					
B106	B-6No.36 B	大型獸	?	長骨	33.6+								○?				
B107	B-6No.39	カモシカorシカ	?	肢骨片	58.4+								○				
B108	B-6No.42	カモシカorシカ	右?	大腿骨?	59.1+								○				
B109	B-6No.46 A	中型~大型獸	?	骨片	18.0+								○				
B110	B-6No.46 B	中型~大型獸	?	骨片	36.2+								○				
B111	B-6No.46 C	中型~大型獸	?	骨片	26.3+								○				
B112	B-6No.46 D	中型~大型獸	?	骨片	30.8+								○				
B113	B-6No.46 E	中型~大型獸	?	骨片	26.2+								○				
B114	B-6No.46 F	中型獸	?	骨片	19.0								○				
B115	B-6No.46 G	カモシカorシカ	?	左末節骨	10.8+	10.8	6.4+						○				
B116	B-6No.47 A	岩石											○				
B117	B-6No.47 B	カモシカorシカ	?	右中節骨	19.0+				9.4	13.4			○				
B118	B-6No.48	カモシカorシカ	左	腰椎後関節突起	28.0+								○				
B119	B-6No.49	ツキノワグマ	右	第3中手骨?	29.1+				10.9	9.9			○?				遠位半
B120	B-6No.50 A	大型獸	?	長骨	55.0+								○				
B121	B-6No.50 B	大型獸	?	長骨	70.8+								○				
B122	B-6No.50 C	大型獸	?	中足骨片	37.6+								○?				
B123	B-6No.51	ツキノワグマ	右	第4中手骨	43.9	7.9	11.4			9.8	8.8		○				
B124	B-6No.52 A	ツキノワグマ?		肢骨片	40.8+								○				
B125	B-6No.52 B	?		骨片	13.2+								○				
B126	B-6No.53	ツキノワグマ	左	上顎第1後臼歯		15.8		12.6	7.7			3才前後					
B126	B-6No.53	ツキノワグマ	左	上顎第2後臼歯		24.2		13.2	6.0			3才前後					線状に象牙質露出
B127	B-6No.54	大型獸	?	長骨	18.6+								○				
B128	B-6No.55	中型~大型獸	?	長骨	18.5+								○				
B129	B-6No.56	シカ	?	中足骨?	38.3+												
B130	B-6No.57	カモシカorシカ	?	中足骨?	31.4+												

第37表 獣歯骨一覧表(4)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼管	亀裂	歪み	咬痕	備考
B131	B-6 No.58 A	カモシカorシカ		頸椎後関節突起	左右幅 53.7+												
B132	B-6 No.58 B	カモシカorシカ		頸椎左後関節突起	33.1+												
B133	B-6 No.58 C	カモシカorシカ		関節突起?	23.0+												
B134	B-6 No.59 A	シカ		岩様骨	28.0+												
B135	B-6 No.60	カモシカorシカ		肋骨近位部	26.4+												
B136	B-6 No.61 A	大型獣		骨片	17.6								○				
B137	B-6 No.61 B	岩石															
B138	B-6 No.61 C	大型獣		骨片	18.0+												
B139	B-6 No.62 A	大型獣		肋骨片	38.6+												
B140	B-6 No.62 B	大型獣		骨片	21.0+												
B141	B-6 No.64	カモシカ?	右	末節骨片	16.0+	9.3	10.0						○				
B142	B-6 No.65	カモシカorシカ	?	中足骨?片	45.7+								○				
B143	B-6 No.66	大型獣		長骨	31.2+								○				
B144	B-6 No.67	大型獣		長骨	38.0+								○				
B145	B-6 No.68 A	大型獣		長骨	22.6+												
B146	B-6 No.68 B	大型獣		長骨	22+								○?				
B147	B-6 No.69	大型獣		長骨	45.4+								○?				
B148	B-6 No.70	シカ	?	左基節骨	52.8	16.0	20.5			15.1	14.6						
B149	B-6 No.71	大型獣		肋骨片	18.7+												
B150	B-6 No.72	カモシカorシカ	?	大腿骨頭	35.0+	前後径29.4						幼獣					離脱骨端
B151	B-6 No.73 A	大型獣		骨片	23.9+								○				
B152	B-6 No.73 B	大型獣		長骨	26.4+								○				
B153	B-6 No.73 C	大型獣		肋骨片	26.7+								○				
B154	B-6 No.74	カモシカorシカ		第4頸椎棘突起基部付近	37.0+												
B155	B-6 No.75	イノシシ??		肩甲骨頸部	25.9+								○				
B156	B-6 No.76 A	大型獣		肋骨片	41.8+								○				
B157	B-6 No.76 B	大型獣		肋骨片	22.9+								○				
B158	B-6 No.76 C	大型獣		肋骨片	21.0+								○?				
B159	B-6 No.77	大型獣		肋骨片	27.0+								○				
B160	B-6 No.78 A	大型獣		肋骨片	30.4+								○				
B161	B-6 No.77 B	イノシシ	?	下顎切歯	22.8+												
B161	B-6 No.78 B	イノシシ	?	臼歯	22.8+												
B162	B-6 No.79 A	大型獣		胸椎椎体	40.0+												両骨端離脱
B163	B-6 No.79 B	カモシカorシカ	?	下顎第1or2後臼歯	17.2		11.2						○				歯根閉鎖
B164	B-6 No.80	岩石															
B165	B-6 No.81	シカ	右	尺骨近位部	55.3+		DPA32.0										
B166	B-6 No.84	シカ	?	中手骨	40.0+												
B167	B-6 No.85	カモシカorシカ	?	中手骨or中足骨	29.4+								○				
B168	B-6 No.86	大型獣	?	肋骨近位部	61.0+								○				
B169	B-6 No.88	大型獣	?	骨片	49.0+								○				
B170	B-6 No.90 A	大型獣		肋骨片	27.2+								○				
B171	B-6 No.90 B	大型獣		肋骨片	19.8+								○				
B172	B-6 No.90 C	中型~大型獣		肋骨片	15.0+								○				

第38表 獣歯骨一覧表(5)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B173	B-6 No. 91	中型獣		肢骨片	19.0+								○				
B174	B-6 No. 94	中型～大型獣		肢骨片	18.4+								○	○			
B175	B-6 No. 95	カモシカorシカ	?	左中節骨	23.6	9.7	11.0		7.4	10.2			○				
B176	B-6 No. 96	大型獣		長骨	46.0+								○				
B177	B-6 No. 98	大型獣		長骨	57.0+								○?				
B178	B-6 No. 99	中型～大型獣		肢骨片	29.0+								○				
B179	B-6 No. 100	シカ?		大腿骨?	41.4+								○				
B180	B-6 P149	シカ	左	肩甲骨	BC32.0+	GLP45.8	LC34.7						○				
B181	B-6 表土	カモシカ	左	後肢基節骨	46.4	14.9	17.7		14.0	12.0			○				
B182	B-6 表土	シカ	?	角突起(角芯)	44.5+								○				
B183	B-6 I層	カモシカ	?	右基節骨	36.0+				12.2	10.8		幼獣	○				骨端離脱
B184	B-6 I層	大型獣		肢骨片	49.0+								○				
B185	B-6 I層	シカ?		中足骨?	46.4+							幼獣	○				○? 近位骨端離脱?
B186	B-6 I層	中型～大型獣		長骨	46.8+								○	○			
B187	B-6 I層	大型獣		長骨	43.5+								○				
B188	B-6 I層	大型獣		大腿骨?	40.5+								○				
B189	B-6 I層	?		骨片	23.6+								○?				
B190	B-6 I層	?		小骨片	13.6+								○				
B191	B-6 I層	大型獣		大腿骨?	61.4+								○				
B192	B-6 III層下部	中型～大型獣		肢骨片	28.7+								○				
B193	B-6 III層下部	大型獣		骨片	29.3+								○				
B194	B-6 III層下部	大型獣		肩甲骨片	56.5+								○				
B195	B-6 III層下位	シカ	?	中足骨片	35.8+								○				
B196	B-6 III層下位	大型獣		長骨	38.2+								○				
B197	B-6 III層下位	大型獣		肢骨片	28.8+								○				
B198	B-6 III層下位	イノシシ	右	第2切歯	29.3+								○				
B199	B-7 No. 1 A	大型獣	?	下顎骨体片	38.4+								○				
B200	B-7 No. 1 B	中型～大型獣	?	肢骨片	25.5+								○				
B201	B-7 No. 2	カモシカorシカ	左	下顎第2前臼歯		9.0	5.0		6.7			幼獣	○				歯根未完成、歯髓腔開放、
B202	B-7 No. 3 A	?		小骨片	18.5+								○				
B203	B-7 No. 3 B	?		小骨片	14.0+								○				
B204	B-7 No. 4	ツキノワグマ	左	下顎犬歯	全長51.0	9.1+	9.0+		25.5			3才前後	○				咬痕なし、歯髓腔開放
B205	B-7 No. 5	?		細骨片													
B206	B-7 No. 6	大型獣		大腿骨?	34.0+								○				
B207	B-7 No. 7	大型獣	左?	下顎枝付近	34.7+								○				
B208	B-7 No. 11	カモシカorシカ		第5?頸椎	PL59.0	GLpa74.0	BPact59.4	BPact59.7	BFcr23.6	Hfcr23.0+							
B209	B-7 No. 12	大型獣		長骨	45.3+												
B210	B-7 No. 13	シカ	右	下顎第1切歯	全長10.2		6.9	11.8				3～5歳?					
B211	B-7 No. 16	?		小骨片	24.3+												
B212	B-7 No. 17	シカ		大腿骨片	?	46.7	64.0					幼獣					離脱遠位端。
B213	B-7 No. 19	大型獣		長骨	45.4+								○?				
B214	B-7 No. 20	カモシカorシカ	?	肋骨片	44.0+								○				
B215	B-7 No. 22	小型～大型獣		小骨片	19.0+												

第39表 獣歯骨一覧表(6)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	咬痕	備考
B216	B-7 No.26	カモシカ?	左?	下顎角付近	56.0+								
B217	B-7 No.28 A	大型獣		小骨片	19.5+								
B218	B-7 No.28 B	大型獣		小骨片	21.0+								
B219	B-7 No.29	カモシカorシカ		中手骨or中足骨	30.2+								第2or第5
B220	B-7 No.30	カモシカorシカ		中足骨片	33.5+								風化著しい
B221	B-7 No.31	カモシカ?	?	右末節骨	28.5+	19.2							
B222	B-7 No.32	カモシカorシカ		胸椎棘突起片	32.4+	最大幅18.2+							
B223	B-7 No.33	中型~大型獣		小肢骨片	23.6+								
B224	B-7 No.34	イノシシ	右	下顎犬歯		3.2	11.0	26.6+					歯冠、歯根未完成
B225	B-7 No.35	カモシカorシカ		軸椎外側関節面	39.8+								
B226	B-7 No.36	大型獣		小骨片	34.9+								
B227	B-7 No.37	イノシシ		下顎犬歯(舌側面歯冠部)	2.0	最大幅1.6	厚0.3						第52図
B228	B-7 No.38	シカ?	?	角突起(角芯)	79.4+	11.2*15.0							
B229	B-7 No.44	大型獣		長骨	35.0+								
B230	B-7 No.45	大型獣		頭蓋片	21.1+								
B231	B-7 No.46	イノシシ	左	下顎第3後臼歯		38.6+	16.6						咬耗第4咬頭まで達せず
B232	B-7 No.47	大型獣		長骨	21.0+								
B233	B-7 No.48	岩石											
B234	B-7 No.49	中型獣		肢骨片	59.7+								
B235	B-7 No.50	中型~大型獣		長骨	39.0+								○?
B236	B-7 No.51 A	大型獣		長骨	52.5+								
B237	B-7 No.53 A	大型獣		長骨	22.1+								
B238	B-7 No.56	大型獣		小骨片	13.8+								
B239	B-7 No.57 A	イノシシ	左	下顎第4乳前臼歯		8.3+	8.2+	6.2					1才余
B240	B-7 No.57 B	イノシシ	左	下顎第3乳前臼歯		10.4	6.0	7.1					1才余
B241	B-7 No.57 C	キツネ?	右	下顎第4前臼歯		9.4	3.0	6.8					幼獣 遠心半に象牙質露出 歯冠・歯根未完成
B242	B-7 No.58	岩石											
B243	B-7 No.59	カモシカorシカ	?	大腿骨	53.7+								
B244	B-7 No.60 A	イノシシ	左	第2切歯		6.0	7.4	23.8					
B245	B-7 No.60 B	大型獣	?	小骨片	30.7+								
B246	B-7 No.61	大型獣	?	小骨片	19.0+								
B247	B-7 No.62	大型獣		長骨	18.6+								○ ○
B248	B-7 No.68 A	大型獣		長骨	20.5+								○ ○
B249	B-7 No.76	大型獣		脛骨?	36.4+								○ ○
B250	B-7 No.77 A	カモシカorシカ	左?	大腿骨片	61.0+								○ ○
B251	B-7 No.78	シカ	右	上顎第2後臼歯		18.9	20.9	9.6					老獣
B252	B-7 No.80	カモシカorシカ	右	踵骨	43.0+								○ ○
B253	B-7 No.84	イノシシ	左	下顎第2切歯?		7.0	10.5	15.0+					老獣 咬耗著しい
B254	B-7 No.85	カモシカorシカ	?	左基節骨近位半	33.7+	17.6	21.2						○ ○
B255	B-7 No.86	大型獣		小骨片	20.4+								
B256	B-7 No.88	イノシシ?	?	肩甲骨頸部付近	32.0+								幼獣
B257	B-7 No.93	大型獣	?	長骨	48.5+								○ ○
B258	B-7 No.94	貝殻		骨片	18.3+								○ ○

第40表 獣歯骨一覧表(7)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B 259	B-7 No. 95	大型獣		長骨	23.8+								○				
B 260	B-7 No. 96	大型獣		長骨	20.2+								○				
B 261	B-7 No. 97	イノシシ	左	大腿骨近位半	111.3+							幼獣					近位骨端離脱
B 262	B-7 No. 102	中型獣		肢骨片	34.4+								○				
B 263	B-7 No. 110	?		骨片3片	10.4+								○				
B 264	B-7 No. 111A	中型~大型獣		肋骨片	46.6+							4.5才前後					
B 265	B-7 No. 111B	カモシカ	右	下顎第4前臼歯									○?				
B 266	B-7 No. 112A	大型獣	?	骨片	33.5+												
B 267	B-7 No. 112B	中型~大型獣	?	肢骨片	26.4+								○?				
B 268	B-7 No. 112C	シカ	?	角突起(角芯)	26.2+								○				
B 269	B-7 No. 117A	岩石											○				
B 270	B-7 No. 118	?		小骨片	27.7+								○				
B 271	B-7 No. 127	大型獣		肢骨片	23.1+								○				
B 272	B-7 表土	カモシカorシカ		中足骨片?	78.3+												
B 273	B-7 表土	カモシカorシカ	右	下顎咬筋付近	46.0+												
B 274	B-7 表土	カモシカ	左?	角突起(角芯)	51.0+	max17.2*15.6						幼獣	○				カモシカの唯一の焼骨
B 275	B-7 表土	大型獣	左	脛骨近位端外側	31.4+								○				
B 276	B-7 表土	中型~大型獣		肢骨片	41.6+								○				
B 277	B-7 表土	シカ	?	中足骨片	27.2+								○				
B 278	B-7 表土	大型獣		長骨	42.8+								○				咬み痕多数
B 279	B-7 表土	大型獣		長骨	32.8+								○				
B 280	B-7 西壁 S	シカ	?	角突起(角芯)	82.0+	14.0*15.0											
B 281	B-7 西壁 S	イノシシ?		肋骨片	60.4+	幅24.6						幼獣					離脱骨端
B 282	B-7 西壁 S	シカ	右	大腿骨大転子									○				
B 283	B-7 西壁 S	大型獣		長骨	43.8+												
B 284	B-7 西壁 S	大型獣		長骨	48.2+								○				
B 285	B-7 西壁 S	大型獣		長骨	34.8+								○				
B 286	B-7 西壁 S	大型獣		長骨	43.9+								○				
B 287	B-7 西壁 S	大型獣		長骨	36.0+								○				
B 288	B-7 西壁 S	シカ	?	中足骨	37.0+								○				
B 289	B-7 西壁 S	中型~大型獣		肢骨片	30.0+								○				
B 290	B-7 西壁 S	大型獣		小骨片	28.0+												
B 291	B-7 西壁 S	大型獣		骨片	28.4+												
B 292	B-7 西壁 S	中型~大型獣		肢骨片	25.4+								○?				
B 293	B-7 西壁 S	大型獣		肢骨片	22.6+								○				
B 294	B-7 西壁 S	中型~大型獣		肢骨片	22.0+												
B 295	B-7 Ⅲ層	大型獣		骨片	44.6+												
B 296	B-7 Ⅲ層	大型獣		長骨	40.2+								○				
B 297	B-7 Ⅲ層	シカ	左	下顎体	34.3+	最大幅14.6							○				歯根閉鎖。
B 298	B-7 Ⅲ層	大型獣		小骨片	38.6+								○				
B 299	B-7 Ⅲ層	?		骨片	27.1+								○				
B 300	B-7 Ⅲ層	カモシカorシカ		中手骨or中足骨	24.1+								○?				
B 301	B-7 Ⅲ層	大型獣		肢骨片	24.9+								○				
B 302	B-7 Ⅲ層	カモシカ	左	下顎第3臼歯片		(16.0)	(9.8+)	(24.6)				2-3才					咬耗なし
B 303	B-7 Ⅲ層	カモシカ	左	下顎第1or2後臼歯		(16.0)	(8.5)	(19.5)				2-3才					

第41表 獣歯骨一覧表(8)

(計測値の単位はmm)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長 (3.7)	近位深 ()内歯冠幅 (6.0)	中央幅 ()内歯冠高 (10.5)	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B304	B-7 III層	イノシシ	左	上顎第2切歯	24.4							成獣	○				やや小型
B305	B-7 P230	シカ		軸椎外側関節面	36.4+								○				
B306	C-6 No. 1	中型～大型獣		肢骨片	20.4+								○				
B307	C-6 No. 3	カモシカorシカ	?	角突起(角芯)	14.5+								○				
B308	C-6 No. 11	大型獣		肢骨片	22.2+								○				
B309	C-6 No. 12	カモシカorシカ		角突起(角芯)?	16.0+								○				
B310	C-6 No. 14	大型獣		肢骨片	19.4+								○				
B311	C-6 No. 18	中型～大型獣		肢骨片	21.1+								○			○?	
B312	C-6 No. 22	カモシカorシカ	?	右中節骨	26.4	13.0			8.0	10.4			○	○			
B313	C-6 No. 23	大型獣		骨片	34.4+								○				
B314	C-6 No. 24	中型～大型獣		肢骨片	22.8+								○				
B315	C-6 No. 25	中型～大型獣		?	28.3+								○?				
B316	C-6 No. 26	中型～大型獣		肢骨片	18.0+								○				
B317	C-6 No. 27	中型～大型獣	?	大腿骨頭部	19.7+								○				
B318	C-6 No. 28A	中型～大型獣		棘突起?	33.3+								○				
B319	C-6 No. 28B	中型～大型獣		肋骨片	12.2+								○				
B320	C-6 No. 29A	中型～大型獣		頭蓋片	17.4+								○	○			
B321	C-6 No. 29B	別標本と接合															
B322	C-6 No. 30	大型獣		頭蓋片	36.2+								○				
B323	C-6 No. 31	大型獣	左	肢骨片	25.5+								○?				
B324	C-6 No. 32	カモシカ?	?	右基節骨	42.2	15.6	16.2		13.4	13.9			?				
B325	C-6 No. 33	大型獣		肢骨片	43.1+								○?				
B326	C-7 No. 3	中型～大型獣		肢骨片	18.1+								○	○			
B327	C-7 No. 4 A	中型～大型獣		肢骨片	23.2+								○				
B328	C-7 No. 4 B	中型～大型獣		小骨片	15.0+								○?				
B329	C-7 No. 6 A	中型～大型獣		小骨片	20.0+								○	○			
B330	C-7 No. 7 A	中型～大型獣		骨片	24.6+								○	○			
B331	C-7 No. 7 B	中型～大型獣		骨片	21.7+								○	○			332・333と同一個体?
B332	C-7 No. 7 C	中型～大型獣		骨片	18.4+								○	○			
B333	C-7 No. 7 D	中型～大型獣		骨片	10.4+								○	○			
B334	C-7 No. 9	カモシカorシカ		角突起(角芯)?	42.4+								○?				
B335	C-7 No. 10	中型～大型獣		骨片	17.4+								○				
B336	S B No. 1A	大型獣		長骨	81.0+												
B337	S B No. 1B	大型獣		長骨	29.2+											○	
B338	S B No. 1C	イノシシ	右	下顎第?切歯													
B339	S B No. 1D	イノシシ	左	下顎第?切歯													
B340	S B No. 2	カモシカ	右	上顎第4前臼歯		(10.6)	(11.6)	(15.4)				9歳前後か					
B341	S B No. 3	大型獣		大腿骨?	34.0+								○?				
B342	S B No. 4	イノシシ		下顎結合部	第1切歯	(4.6)	(5.0)	(12.7)				3歳?					第1切歯<第2切歯。小型のイノシシ
B342	S B No. 4	イノシシ		下顎結合部	第2切歯	(5.4)	(5.0)	(21.0)				3歳?					第1切歯<第2切歯。小型のイノシシ
B343	S B No. 5	大型獣		脛骨片	67.0+								○?				

第42表 獣歯骨一覧表(9)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	焼管	亀裂	歪み	咬痕	備考
B344	S B No. 6	大型獣		長骨	48.0+												
B345	S B No. 7A	カモシカ	?	右基礎節骨		14.9	14.8					幼獣					離脱近位骨端
B346	S B No. 7B	カモシカ?	右	第1後臼歯		(14.3)	(15.0)	(7.8)				老獣		○			歯冠高低い
B347	S B No. 9	大型獣		肢骨片	35.4+								○				
B348	S B No. 12	大型獣		長骨	147.4	24.2	23.2	16.2	15.0	31.4	18.6						遠位骨端離脱
B349	S B No. 14-1	カモシカ	左	中足骨													
B350	S B No. 14-2	カモシカ	左	中足骨													
B351	S B No. 14-3	シカ	?	角突起(角芯)	76.2+												
B352	S B No. 14-4	シカ?	左	大腿骨近位部	53.3+												
B353	S B No. 14-5	カモシカ		脛骨骨体片	67.4+									○			
B354	S B No. 14-6	カモシカ	右?	中足骨遠位部	45.8+			17.8+	12.1	30.9	18.5						
B355	S B No. 14-7	シカ	?	角突起(角芯)	46.0+												
B356	S B No. 14-8	大型獣		長骨	38.4+												
B357	S B No. 14-9	カモシカorシカ	?	右基礎節骨	47.0	13.0+	16.3			11.8+	11.4+						
B358	S B No. 14-10	カモシカ	?	左基礎節骨	43.2	15.8	17.0			14.2	13.4						
B359	S B No. 14-11	カモシカ	?	左中節骨	31.4	14.8	15.8			12.0	16.0						
B360	S B No. 14-12	カモシカ	?	右基礎節骨	29.8+					14.6	13.4						
B361	S B No. 14-13	シカ		角突起(角芯)				8									
B362	S B No. 14-14	カモシカ	?	右基礎節骨	25.0+	16.7	17.9										
B363	S B No. 14-15	イノシシ	右	上顎第1切歯	37.0+	(6.4)	(12.6)	(33.6)				成獣					
B364	S B No. 14-16	カモシカ	?	右基礎節骨	22.2+	17.2	18.6										
B365	S B No. 14-17	大型獣		肢骨片	38.4+												
B366	S B No. 14-18	カモシカ	?	左中節骨	22.4+					8.6	12.7						近位骨端離脱
B367	S B No. 14-19	カモシカ?	?	左末節骨	34.9	9.0+	18.9+										
B368	S B No. 14-20	カモシカ?		長骨	34.2+												
B369	S B No. 14-21	大型獣		肢骨片	32.0+												
B370	S B No. 14-22	大型獣		骨片	28.5+												
B371	S B No. 14-23	カモシカ	?	右基礎節骨	19.0+	14.6	16.3										
B372	S B No. 14-24	カモシカorシカ	左	中心第4足根骨	22.9+												
B373	S B No. 14-25	大型獣	?	長骨	24.0+												
B374	S B No. 14-26	大型獣	?	肢骨片	34.0+												
B375	S B No. 14-27	大型獣	?	長骨	26.4+												
B376	S B No. 14-28	大型獣	?	海綿質骨片	22.0+												
B377	S B No. 14-29	大型獣	?	長骨	22.2+												
B378	S B No. 14-30	岩石			20.0+												
B379	S B No. 14-31	カモシカ	左	第2・第3足根骨	14.6+												
B380	S B No. 14-32	カモシカ	?	右中節骨		11.7	13.4										近位離脱骨端
B381	S B No. 14-33	?		小骨片	12.6+												
B382	S B No. 14-34	大型獣		小骨片	26.2+												
B383	S B No. 14-35	カモシカorシカ		第2～第4腰椎	26.6+												
B384	S B No. 16	大型獣		長骨	26.7												
B385	C-8・B-8間	カモシカ	右	中手骨	135.2	30.0	19.0	18.2	13.6	35.2	19.2						
B386	C-8・B-8間	カモシカ	右	中手骨	103.6+	26.0	17.3	18.4	12.1	29.6+	15.6+	幼獣					遠位骨端離脱
B387	C-8・B-8間	カモシカ	右	中足骨	116.6+	22.4	20.5	14.8?	14.2	27.8+	15.7+	幼獣					遠位骨端離脱
B388	C-8・B-8間	カモシカ	左	中手骨	105.6+	29.4	19.0	18.8	13.2								遠位1/5が欠損

第43表 獣歯骨一覧表(10)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年齢	骨折	歪み	咬痕	備考
B389	C-8・B-8間	カモシカ	左	中手骨	77.2+	28.1+										近位半の前側半分が残存
B390	C-8・B-8間	カモシカ	左	中足骨	72.2+			15.1	13.6	28.4+	17.4					遠位半が残存
B391	C-8・B-8間	カモシカ	左	中手骨	136.3	27.8	18.0	18.4	13.3	32.4	18.6					
B392	C-8・B-8間	カモシカ		第4?腰椎	32.1	22.0	24.6	17.3	16.7							後切痕が深く切れ込む。
B393	C-8・B-8間	カモシカ		第2?腰椎	31.9	21.7	23.2	18.9	16.9							乳頭関節突起がよく発達
B394	C-8・B-8間	カモシカ		第3?腰椎	31.4	21.9	23.5	17.2	17.2							乳頭関節突起がよく発達
B395	C-8・B-8間	カモシカ		第13?胸椎	29.0	23.3	23.2	14.8	15.5							横突起がイボ状に発達
B396	C-8・B-8間	カモシカ		第12?胸椎	27.9	21.3	24.8	16.4	14.4							横突起はぼぼなし
B397	C-8・B-8間	カモシカ		第1?腰椎	30.5	21.4	230	16.6	15.5							横突起が大きく発達。肋骨窩なし
B398	C-8・B-8間	カモシカ		第10?胸椎	26.6	187	22.8+	15.3	180							
B399	C-8・B-8間	カモシカ		第8?胸椎	25.7	18.4	550	16.5	14.7							
B400	C-8・B-8間	カモシカ		棘突起基部付近	42.0+											
B401	C-8・B-8間	カモシカ		第11?胸椎	27.6	20.3	21.0	16.6	14.6							
B402	C-8・B-8間	カモシカ		第9?胸椎	24.6	18.6	23.6 (18.1)	15.9	17.8 (14.4)							
B403	C-8・B-8間	カモシカ	左	下顎骨	保存全長 139.4+							7~8才				
B404	C-8・B-8間	カモシカ?		肋骨近位部	75.3+	最大幅14.2										
B405	C-8・B-8間	ヤギ?	左?	中足骨片	64.6			15.0	13.7							
B406	C-8・B-8間	カモシカ	右	中足骨滑車	癒合部幅 29.2	癒合部径17.2	滑車部幅29.8	滑車部径17.5	4.8-							
B407	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	45.6	17.5	17.5			14.5	13.3					
B408	C-8・B-8間	カモシカ	?	左基節骨	45.7	17.6	18.1			14.8	13.0					
B409	C-8・B-8間	カモシカ	左	後股基節骨	46.0	14.6	17.6			13.9	11.6					
B410	C-8・B-8間	カモシカ	左	後股基節骨	45.9	15.2	16.6			12.8	11.6					
B411	C-8・B-8間	カモシカ	左	後股基節骨	47.0	14.6	16.2			12.0+	11.0					
B412	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	45.8	15.6	16.8+			12.6	11.8					
B413	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	45.8	14.4	17.6			13.2	11.4					
B414	C-8・B-8間	カモシカ	?	左基節骨	36.0+	13.8	15.6			13.0	11.7					近位骨端離脱
B415	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	35.0+	14.0+	15.0+			12.7	11.2+					近位骨端離脱
B416	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	35.2+	12.4	14.9+			11.2	10.2					近位骨端離脱
B417	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨	36.0+					11.6	11.4					近位骨端離脱
B418	C-8・B-8間	カモシカ	?	左中節骨	31.5	14.5	16.4			10.2	13.8					
B419	C-8・B-8間	カモシカ	?	左中節骨	30.8	14.0	15.4			10.2	13.6					
B420	C-8・B-8間	カモシカ	?	右中節骨	29.7	15.0	15.8			12.2	16.2					
B421	C-8・B-8間	カモシカ	?	右中節骨	31.8	13.4	14.8			10.3	13.8					
B422	C-8・B-8間	カモシカ	?	右中節骨	31.5	12.4	14.3			9.5	13.7					
B423	C-8・B-8間	カモシカ	?	右中節骨	31.1	12.3+	14.0			9.5	13.4					
B424	C-8・B-8間	カモシカ	?	左中節骨	30.8	12.9+	13.8+			8.7	13.0					
B425	C-8・B-8間	カモシカ	?	右中節骨	23.3+					8.8	12.5					近位骨端離脱
B426	C-8・B-8間	カモシカ	?	右末節骨	43.8	13.4										
B427	C-8・B-8間	カモシカ	?	左末節骨	37.0	11.4	25.3									
B428	C-8・B-8間	カモシカ	?	右末節骨	34.6	11.2	19.8									

(計測値の単位はmm)

第44表 獣歯骨一覧表(11)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年令	燒骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B429	C-8・B-8間	カモシカ	?	左末節骨	31.5	10.2	19.8					幼獣					
B430	C-8・B-8間	カモシカ	?	右末節骨	31.2	9.2	18.3					幼獣					
B431	C-8・B-8間	カモシカ	?	中手骨	癒合部幅 32.1	癒合部径15.8	滑車部幅31.8	滑車部径17.8	切痕幅 4.0	率12.6							離脱滑車
B432	C-8・B-8間	カモシカ	?	中足骨滑車	癒合部幅 16.3+	癒合部径17.1	滑車部幅13.3+	滑車部径17.8				幼獣					離脱滑車
B433	C-8・B-8間	カモシカ	?	中足骨滑車	癒合部幅 15.2+	癒合部径16.2	滑車部幅12.5+	滑車部径16.9				幼獣					離脱滑車
B434	C-8・B-8間	カモシカ	左	第2・第3手根骨	23.0							幼獣					離脱近位骨端
B435	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨								幼獣					
B436	C-8・B-8間	カモシカ	左	第2・第3手根骨	22.9							幼獣					
B437	C-8・B-8間	カモシカ	?	左基節骨		19.4	16.2					幼獣					近位骨端離脱
B438	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨		13.7	15.4					幼獣					近位骨端離脱
B439	C-8・B-8間	カモシカ	?	左基節骨		13.7	16.6					幼獣					近位骨端離脱
B440	C-8・B-8間	カモシカ	?	左基節骨		14.3	16.8					幼獣					近位骨端離脱
B441	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨		13.2	15.5					幼獣					近位骨端離脱
B442	C-8・B-8間	カモシカ	?	右基節骨		12.0	13.4					幼獣					近位骨端離脱
B443	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	15.0												
B444	C-8・B-8間	カモシカ	左	第2・第3足根骨	10												
B445	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	12.7												
B446	C-8・B-8間	岩石															
B447	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	9.7												
B448	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	12.8	最大幅7.2											
B449	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	10.8												
B450	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	8.5												
B451	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	9.4												
B452	C-8・B-8間	カモシカ		種子骨	10.3												
B453	C-8・B-8間	カモシカ		骨片	14.7												
B454	C-8・B-8間	カモシカ?		棘突起基部	29.4+												
B455	C-8・B-8間	カモシカ?		胸椎棘突起片	33.9+												
B456	C-8・B-8間	カモシカ?		胸椎棘突起片	27.6												
B457	C-8・B-8間	カモシカ?		椎骨?	15.5+												
B458	C-8・B-8間	カモシカ?		骨片	19.0+												
B459	C-8・B-8間	カモシカ?		胸椎棘突起片	17.8+												
B460	C-8・B-8間	カモシカ?		股骨片	18.2+												
B461	C-8・B-8間	カモシカ?		骨片	23.0+												
B462	C-8・B-8間	カモシカ?		第5?中手骨	22.2+	最大径4.8*3.4											
B463	C-8・B-8間	カモシカ?		第5?中手骨	22.0+	最大径4.5*2.5											
B464	C-8・B-8間	カモシカ?		椎骨片?	17.4												
B464	C-8・B-8間	カモシカ?		骨片数片	29.0+												
B465	C-8・B-8間	カモシカ?	?	下顎第1切歯	17.6	(4.4)	(5.3)	(4.4)				老獣					咬耗極度の進み歯冠が低く老獣

第45表 獣歯骨一覧表(12)

番号	出土位置	動物種	左右	部位	最大長	近位幅 ()内歯冠長	近位深 ()内歯冠幅	中央幅 ()内歯冠高	中央深	遠位幅	遠位深	年齢	焼骨	亀裂	歪み	咬痕	備考
B466	C-8・B-8間	カモシカ?	右?	下顎第2?切歯	16.5	(4.2)	(4.4)	(4.0)				老獣					咬耗極度の進み歯冠が低く老獣
B467	C-8・B-8間	カモシカ?	左?	下顎第2?切歯		(4.5)	(4.2)	(4.4)				老獣					咬耗極度の進み歯冠が低く老獣
B468	C-8・B-8間	大型獣		脳頭蓋片	30.2+								○				
B469	B-8 P59	イノシシ	?	下顎角付近	35.4+								○				
B470	B-6 I層	シカ		中足骨片	44.9+								○				
B471	B-6 III層	中型~大型獣		肢骨片	27.6+	最大径14.8*13.8							○				
B472	寄贈品	シカ		角突起(角芯)	72.3+								○				小林栄樹氏寄贈・第52図
B473	B-6・P136	イノシシ?		尺骨肘頭?付近	35.4+							幼獣	○?				骨端離脱
B474	B-7・I層	大型獣		長骨	43.6+								○				
B475	B-7・I層	中型~大型獣		肢骨片	48.8+								○				
B476	B-7・III層	イノシシ?		橈骨?片	19.0+								○				
B477	表採	カモシカorシカ		中手骨or中足骨?	26.0+								○				
B478	表採	中型~大型獣		骨片									○?				

注:①ニホンシシカはシカと省略した。②:大型獣はシカ、カモシカ、イノシシ、中型獣はニホンザル相当 ③:計測記号はDr.iesch(1976)による。

第46表 千駄木遺跡で採集されている五料の茶屋本陣お西収蔵の獣骨

動物	部位	左右	摘要
ニホンシシカ	シカ角	左	落角。第1分岐部直上で切断、保存全長54.7+、角座の径は43.0×50.0である。
ニホンシシカ	シカ角	左	落角。第1分岐部直上で切断、保存全長67.8+、各座の径は35.4×39.0である。
ニホンシシカ	シカ角	左	第2分岐部の上と下部で切断、保存全長は94.0+、下部切断面の径は24.3×34.0
ニホンシシカ	シカ角	右	第2分岐部とその付近、保存全長114.5+、下部切断面の径は24.2×30.8
ニホンシシカ	シカ角	左	角座直上から第2分岐部までの主角と第1枝、保存全長208.1+、下部切断面の径31.4。切断痕現状ではなし。
ニホンシシカ	シカ角	右	上部は第2又は第3分岐部直上で切断。保存全長149.5+。下部切断面の径23.8×27.6
ニホンシシカ	シカ角	?	第1枝。保存全長121.0。
ニホンシシカ	シカ角	?	橈骨。保存全長34.3+。切痕3本あり。径12.5×14.0
ニホンシシカ	シカ角	?	保存全長107。下部切断面短径13.1
ニホンシシカ	シカ中足骨	左	保存全長123.0+、BP29.0、DP31.4、SD19.3、DD28.4
ニホンシシカ	大腿骨	右	保存全長100.7、SD21.4、CD22.5
ニホンシシカ	仙椎		保存全長50.8+、BF c r 43.0*18.2
ニホンシシカ	頸椎		保存全長48.3、BF c r 16.8*24.8
カモシカ	下顎第3白歯	左	歯冠長20.0、歯冠幅9.4、歯冠高16.4
イノシシ	肩甲骨	左	保存全長102.0、SLC23.3、GLP33.2、LC29.8、BC22.6+
イノシシ	下顎第1後白歯	右?	歯冠幅15.1、遠心部半欠損
イノシシ	側頭骨	右	保存全長65.0+

(計測値の単位はmm)

第3項 出土火山灰の鑑定分析

はじめに

関東地方北西部に位置する安中市とその周辺には、浅間火山や八ヶ岳火山列など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方、中国地方、九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物, いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており(町田・新井, 1992, 2003, 早田, 1996など)、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

安中市千駄木遺跡では、発掘調査の際にテフラ粒子が認められて、試料の採取が行われている。そこで、それらのテフラ粒子について重鉱物組成分析を含むテフラ検出分析と、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定を行って、採取されたテフラ粒子の起源を明らかにすることになった。分析測定の対象は、下部軽石と上部軽石の2試料である。

テフラ検出分析

1, 分析試料と分析方法

採取された試料について肉眼で観察後、より新鮮な状態の軽石を採取して分析の対象とした。その後のテフラ検出分析の手順は次の通りである。

- ①軽石試料適量を、乳鉢を用いて軽く粉砕。
- ②超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
- ③80℃で恒温乾燥。
- ④実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。
- ⑤分析篩により、1/4-1/8mmおよび1/8-1/16mmの粒子を篩別。
- ⑥偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察。

2, 分析結果

テフラ検出分析の結果を第47表に示す。下部軽石の試料には、良く発泡した黄色軽石(最大径48mm)が多く含まれている。軽石は風化がやや進んでいる。また、石質岩片(最大径12mm)も少量含まれている。軽石を粉砕してできる火山ガラスは黄白色の軽石型で、スポンジ状や繊維

束状に細かく発泡している。

一方、上部軽石の試料には、比較的良く発泡した灰～黄灰色の軽石(最大径42mm)が多く含まれている。軽石の風化はさほど進んでいない。石質岩片(最大径16mm)も少量含まれている。軽石を粉砕してできる火山ガラスは褐色や淡褐色の軽石型で、スポンジ状に発泡している。なお前者はアメ状の光沢をもつ。

次に重鉱物組成について述べる(第53図, 第48表)。下部軽石には、斑晶として含有率が高い順に斜方輝石(59.6%)、単斜輝石ならびに光沢をもつ不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 各20.0%)が認められる。また、上部軽石には、斑晶として含有率が高い順に斜方輝石(70.8%)、単斜輝石(17.2%)、光沢をもつ不透明鉱物(おもに磁鉄鉱, 11.2%)が認められる。このように、いずれの軽石もいわゆる両輝石型の重鉱物組成をもつ。

屈折率測定

1, 測定方法

テフラ検出分析用の処理の際に得られた1/8-1/16mm粒径の火山ガラスと、実体顕微鏡下でのピックアップの後に軽く粉砕された $>1/4$ mmの斜方輝石について、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000)を用いて屈折率の測定を実施した。測定対象はそれぞれ40粒子である。

2, 測定結果

屈折率測定結果を、岩相から同定が考えられる浅間火山起源の完新世テフラの屈折率特性も合わせ第49表に示す。下部軽石の火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、それぞれ1.512-1.516と1.705-1.709 (modal range: 1.706-1.709程度)である。一方、上部軽石の火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、それぞれ >1.525 と1.707-1.712 (modal rangeは1.708-1.711程度)である。

考察

測定分析の対象となった2試料のうち、下部軽石については、従来明らかにされている浅間火山の代表的な完新世テフラの火山ガラスと斜方輝石の屈折率特性と比較すると、約4,500年前(註1)に浅間火山から噴出した浅間D軽石(A s - D, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 早田, 1990など)にもっともよく似ている。風化が比較的進んでいる岩相も、このことと矛盾しないように思われる。この下部軽石については、本遺跡において、すでに故新井房

夫群馬大学名誉教授により分析測定が行われて A s - D と報告されており(新井,1979)、今回の分析測定結果はそれを支持するものになる。

なお、A s - Dのほかに同定される可能性が考えられた、3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(A s - C, 荒牧,1968,新井,1979,町田・新井,1992,2003,坂口,2010)の分布の主軸は浅間火山から東方に伸びており(新井,1979,早田,1990など)、本遺跡周辺での顕著な堆積はこれまで知られていないようである。その一方で、A s - Dの分布軸は、浅間火山から南東方向にあるように描かれている(新井,1979)。

今後、下部軽石と指標テフラの同定精度をより向上するためには、信頼度の高いエレクトロンプローブX線マイクロアナライザー(EPMA)を用いた火山ガラスや磁鉄鉱などの主成分化学組成分析が有効かも知れない。

一方、上部軽石については、軽石や火山ガラスの岩相、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(A s - B, 荒牧,1968,新井,1979,町田・新井,1992,2003)に同定される。(註2)

まとめ

千駄木遺跡の発掘調査の際に採取され保管された軽石

試料2点について、重鉱物組成分析を合わせたテフラ検出分析と、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定を実施した。その結果、下部軽石は浅間D軽石(A s - D, 約4,500年前(註1)に同定される可能性が高いことが明らかになった。また、上部軽石は浅間Bテフラ(A s - B, 1108年)に同定される。

註および文献

- 註1：放射性炭素(¹⁴C)年代。
- 註2：浅間系テフラについて、テフラ層を構成するユニットごとに屈折率測定を実施した例はほとんどない。本遺跡のように火山に近い遺跡での詳細編年のためには、より基礎的で詳細なテフラ分析が実施されると良い。
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地団研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
- 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落—との関係—。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
- 早田 勉(1990)群馬県の自然と風土。群馬県史編纂室編「群馬県史通史編1 原始古代」, p.35-129.
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.256-267.

第47表 テフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			石質岩片		火山ガラス* 1		
	量	色調	最大径	量	最大径	量	形態	色調
上部軽石	***	灰～黄灰色	42mm	*	16mm		pm (sp)	褐色, 淡褐色
下部軽石	***	黄色	48mm	*	12mm		pm (sp,fb)	黄白色

最大径の単位は, mm. t: 軽く粉砕後に観察。
pm: 軽石型, sp: スポンジ状発泡, fb: 繊維束状発泡。

第48表 重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
上部軽石	0	177	43	0	0	28	2	250
	0	70.8	17.2	0	0	11.2	0.8	100.0
下部軽石	0	149	50	0	0	50	1	250
	0	59.6	20.0	0	0	20.0	0.4	100.0

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物(おもに磁鉄鉱)。
上段: 粒子数, 下段: 含有率(%)。

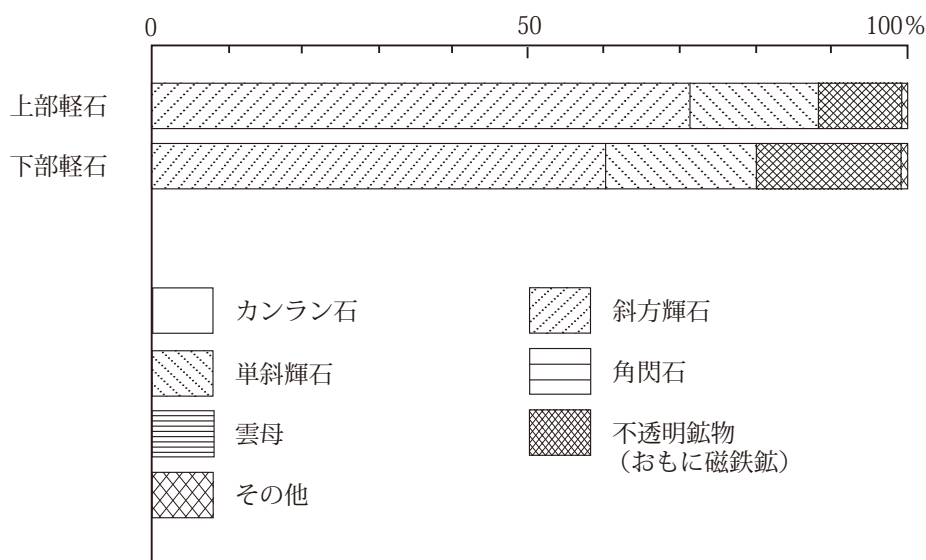
第49表 火山ガラス・斜方輝石屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率(n)	測定点数	屈折率(γ)	測定点数	
千駄木遺跡・上部軽石	>1.525	40	1.707-1.712	40	本報告
千駄木遺跡・下部軽石	1.512-1.516	40	1.705-1.709	40	本報告
〈浅間火山起源の完新世指標テフラ〉					
浅間A (As-A)	1.507-1.512		1.707-1.712		1)
浅間A' (As-A')	1.515-1.521		1.702-1.712		2)
浅間粕川(As-Kk)			1.706-1.710		2)
浅間B (As-B)	1.524-1.532		1.708-1.710		1)
浅間C (As-C)	1.514-1.520		1.706-1.711		1)
浅間D (As-D)	1.513-1.516		1.706-1.708		1)
			1.706-1.708		3)
浅間六合(As-Kn)			1.706-1.708		2)
浅間藤岡(As-Fo)			1.706-1.710		2)

千駄木遺跡における測定は、温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)による。

1)：町田・新井(1992, 2003), 2)：早田(1996), 3)新井(1979)。

1)～3)の測定は、いずれも故新井房夫群馬大学名誉教授による(温度一定型屈折率測定法)。



第53図 千駄木遺跡テフラ試料の重鉱物組成ダイヤグラム

第4項 出土貝輪の年代測定分析

測定対象試料

千駄木遺跡は、群馬県安中市松井田町西野牧(北緯37° 10'18.90308"、東経140° 12'30.24547")に所在する。測定対象試料は、遺物包含層出土貝輪(B00040: IAAA-112223) 1点である(第50・51表)。貝輪の素材はタマキガイと同定されている。

測定の意義

試料とする貝輪は、その特徴から縄文時代の遺物として考えられている。しかし、出土層位は10世紀を上限とするため、10世紀以降の遺物である可能性もある。このため、年代測定により時期を判断するための手がかりを得る。

化学処理工程

1. メス・ピンセットを使い根・土等の付着物を取り除き、超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
2. 試料の表面を1 mol/l (1 M)の塩酸を用いて約30%溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する(Edg)。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。なお、試料が特に少量の場合、塩酸の処理を行わない場合がある(Non)。
3. 試料中の炭酸カルシウム(CaCO_3)を分解し、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。
4. 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
5. 精製した二酸化炭素と鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
6. グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

1. $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である

(第50・51表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

2. ^{14}C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
3. pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第50・51表に、補正していない値を参考値として表2に示した。
4. 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、Marine09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代は特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する年代値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

測定結果

遺物包含層出土貝輪B00040の14C年代は42660±320yrBP、暦年較正年代(1σ)は43875～43280cal BCである。縄文時代若しくは10世紀以降という想定された年代よりも大幅に古い値となっている。貝輪が製作された時点で、現生ではない古い貝が利用された可能性を考慮する必要がある。

試料の炭素含有率は97%と適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion:Reporting of 14C data,Radiocarbon 19 (3),355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1),337-360

Reimer, P.J.et al.2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves,0-50,000 years cal BP,Radiocarbon 51 (4),1111-1150

第50表 測定結果(1)

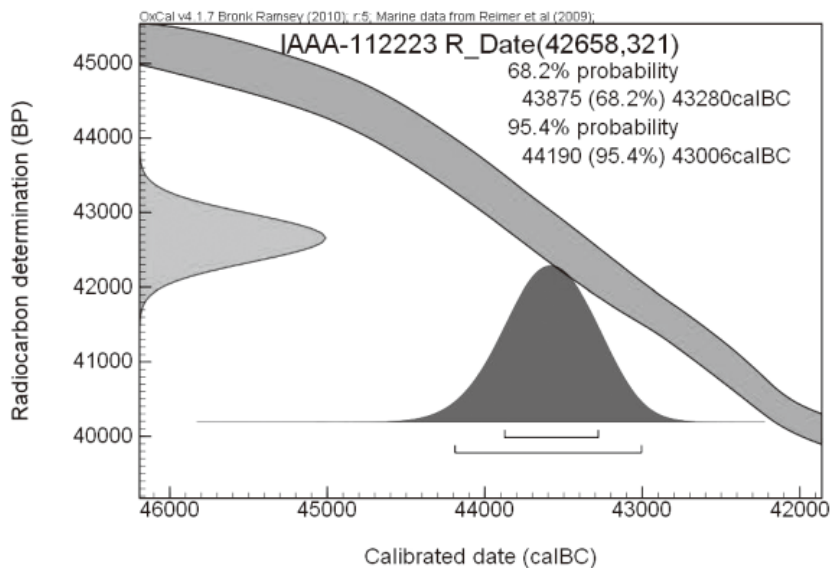
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)			δ 13C 補正あり	
								Libby Age (yrBP)	pMC (%)
LAAAA-112223	SH40	第1号土坑	貝(タマキガイ)	Edg	4.28	±	0.65	42,600±320	0.49±0.02

第51表 測定結果(2)

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
LAAAA-112223	42180±320	0.52±0.02	42,658±321	43875calBC-43280calBC(68.2%) *	44190calBC-43006calBC(95.4%) *

[参考値]

* OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010)にて Marine09 marine curve (Reimer et al 2009)を使用しmarine100%で較正



第54図 (参考)暦年較正年代グラフ

第8章 まとめ

第1節 成果と問題点

第1項 第1号土坑をめぐる遺物群

千駄木遺跡で出土した遺物の中で、第1号土坑の推定位置に集中して出土した遺物群がある。正確な数量把握は出来ないが、密集状態であったことはB-5~7グリッドからの出土量(2,258点)から推測できる。

この第1号土坑は、10世紀前半を上限とする遺構であることは既述したが、出土遺物は縄文土器を主体に、貝類、獣歯骨等の自然遺物も多く含まれている。

この自然遺物中には、質的遺存状態が非常に良好な一群(時間の経過をあまり感じさせない、「新しい時期のものか」思わせるような状態)と、風化(廃棄後の相応する時間経過を感じさせる状態)を受けた2者がある。前者には貝類と獣歯骨のカモシカに多く、後者には獣歯骨のカモシカ(カモシカの全てではない)以外が該当する。このカモシカの遺存体は、PL.19の最下段に2葉の写真を掲載した個体を含め、質的に「新しい」を感じさせている。貝類では、アワビの表面には、緑褐色の表層まで残存しており、「ゴミ穴」からの出土を思わせる程である。カワシンジュガイにはパールラスターも見られ、殻皮が残存する個体も含まれている。貝輪(477・SH40)もタマキガイ特有の黄茶褐色の部分が鮮明に残存している。

一方、獣歯骨類には、原始~古代を思わす相応に風化した状態の遺存体も多い。また、第2号土坑の確認面で出土したカワシンジュガイ(SH82)は、上記前者に該当する遺存状態である。しかし、この確認面は、第1号土坑の底面付近にも該当しており、縄文時代と断定するには不十分でもある。

このように第1号土坑出土の自然遺物は複雑な要素が含まれている。この第1号土坑は、調査段階に「第1・2攪乱」とされた経過もある。しかし、一方では、7世紀以降の遺物が多く含まれているのが当該土坑である。現段階では、土坑の時期は明定出来ないが、古墳時代以降の唯一の岩陰部の利用を示す遺構としておきたい。

第2項 千駄木遺跡における時代・時期別の空間利用について

千駄木岩陰遺跡の推移

本遺跡は平地へ流れ下る千駄木川とそれに交流する谷川の入山川との合流地点に形成された小規模な河岸段丘上に立地していた。この段丘面は両河川による侵食によって三角形の狭い平坦地になっている。そして、この段丘面に接した山側に巨大な転石による岩陰部分が形成されていた。この巨岩は凝灰質の角礫集塊岩で、遺跡より高標高の地点に山体として視認できるものである。周辺にはまだいくつかの崩落した巨大な転石が見られることから、千駄木の巨大な転石もそのうちのひとつとしてこの地にとどまったものであろう。縄文時代にあっては狭いながら平坦地を持ち、その背後に雨露をしのげる岩陰があるという好条件が見て取れる。

縄文時代前期黒浜式期と中期梨久保・五領ヶ台式期・加曽利E式期については、この小規模な段丘平坦面と岩陰の生活空間を駆使したもので、少人数の定住生活には事足りたものであったと思われる。その空間は、いわば開地的な生活空間であった。しかし、加曽利E期には岩陰を構成していた巨岩が二つに割れてそのひとつが前面に崩落している。そのことによって生活空間は狭められ、生活としての利用空間が岩陰部の利用のみに止められることになった。この空間環境の変化はその後も継続し、弥生・古墳・平安時代へと続いている。

岩陰崩壊のプロセス

現在の岩陰部はダルマ形の縦長の岩体の一面が抉れている巾約8メートルの範囲で形作られている。本来の岩陰部は向かって左側(北西側)へ延びた屏風状に形作られていたのであろう。この半分が全面に転がり落ちている。転石は左側半分の大きさであることから、それ以前の岩陰部は約13メートルの幅があったと想定できるだろう。この転石の下には加曽利E式土器が包含されていることから、その崩落時期は同時期にあたと考えられる。その結果、平坦面の生活空間も狭められ、残存した巨岩と崩落した転石の間に残された狭長な範囲のみが生活空間として残されたことになる。

それではこの巨岩の崩壊の原因は何であったのであろうか。その答えが浅間D層の降下にあると考えたい。浅間D層は輝石安山岩の軽石で、千駄木岩陰遺跡での検出時は未確認のテフラであったために1975年の日本考古学年報26号への掲載時までは「千駄木パミス」と仮称していた。その後、1979年になって考古学ジャーナル457号誌上で新井房夫によって正式に「浅間D層」と命名された。降下年代は浅間D層の上下から縄文時代中期加曾利E式土器が出土していることから同時期中と考えられた。ただし、浅間D層の下位からも新期の加曾利E式土器が数片出土していることから、厳密に確定されたとはいえない難いところもある。他遺跡における類例の増加とそれによる追証を待ちたい。

千駄木岩陰遺跡では、As-Dは岩陰部と転石部の間で検出されている。転石の下からはこの軽石層は検出されず、加曾利E式土器と梨久保・五領ヶ台式土器のみが出土している。このことから、転石が元位置から崩壊した時期も浅間D層の降下時期とほぼ同一時期のことと思われる。すなわち、岩陰を形作っていた巨岩の半分が崩れ落ちた原因は、浅間山の噴火に伴う地震などに起因したのと考えたい。その時期に落盤岩片が集中していることもこのことを裏付けていると考えられよう。

岩陰居住形態の観察

ひとつの岩陰を形作っていた巨岩が二つに割れて、その一つが岩陰前面に転がり落ちたことによって遺跡の生活空間が大きく変化した。その変化について考えて見よう。

崩壊以前の生活空間は、小規模な平坦面とそこに接する岩陰部分を利用していた。それを物語るように、縄文時代の前期と中期の遺物は岩陰の雨だれラインを大幅に超えた範囲にも分布していた。転石の下部についての発掘は不可能であったために詳細は不明であるが、確実に遺物包含層は転石の下にまでおよんでいた。これに対して、縄文時代後・晩期および弥生・古墳・平安時代の遺物は残された岩陰部と転石の間の狭い範囲から出土する。この部分はすべて雨だれラインの中にあたる。

この二つの空間の差異を遺物のありかたから見てみると、その利用形態の違いが浮き上がる。

まず、すべての空間を利用できた縄文時代中期の梨久保・五領ヶ台式期と加曾利E式期の土器は出土量が多く、しかも大形の土器が目立っている。食糧の貯蔵目的と思われる大形深鉢土器の存在は、平地での一般的な生活様式を反映してい

るのだろう。千駄木岩陰遺跡の周辺では土器製作の環境が無いために、これらの土器はすべて平地部からの搬入であろう。

これに対して、後期堀之内式期や加曾利B式期の土器は小形土器が多い。晩期の氷式期の土器も同様の様相が看取される。しかも出土量が極めて少ない。これらのありかたは、定住に対して持ち運びの簡易な土器を携帯しての野営的な一時的利用が想定されるだろう。

弥生時代の土器の出土状態についても、縄文時代後・晩期と同じく小形土器のみであり、出土量も極めて少なかった。すべての破片を含めても119点である。これらの様相はいずれも狩猟などの山仕事や通過地点の野営などのキャンプサイトとしての利用を考えたほうがよさそうである。関東甲信越地方の山地に点在する洞窟・岩陰遺跡を瞥見すると、縄文時代の出土土器は平地と同様な生活様式を想定できる機種構成をとっているものも多く見られるが、弥生時代には大形の貯蔵用の土器の出土が極めて少ないことを感じ取ることができ、千駄木岩陰遺跡のありかたが普遍的なことのように見受けられる。これらのことについては改めて別稿で論述したい。

なお、古墳時代・平安時代の遺物出土状態も弥生時代と同様な背景が考えられる。出土土器が図示されているが、四世紀代5点、五世紀代12点、六世紀代3点、七世紀代は2点のみである。また、平安時代でも九世紀代4点、十世紀代は須恵器の羽釜片1点と土釜片1点のみである。祭祀的な遺物の出土はないが、この時期には山間地での祭祀遺跡の議論もあることから、ここでは結論を急がない。

千駄木岩陰遺跡の発掘調査を契機にして、能登および大木紳一郎によって関東地方の洞窟・岩陰遺跡の現地調査および検討をおこなってきた。報告書刊行後に改めて別稿を準備している。

第2節 まとめ

第1項 西野牧小山平遺跡との関係

千駄木遺跡の周辺遺跡の中、至近な遺跡として西野牧小平遺跡・西平下恩賀遺跡・小山平遺跡を上げた。この3つの遺跡は、高岩(大萱山)・大山の緩斜面部に占地する遺跡、日中は日照状態の良好な場所である。

この中で西野牧小山平遺跡は、石棒の製作地として衆目を傾注させる遺跡内容であった。そして、出土遺物の

時期から、当遺跡と重複することが判明している。しかし、居住を示す具体的な遺構の存在は不明で、埋甕1基が逗留・居住に係る唯一の遺構である。担当者は水甕の性格付けを著している。

この西野牧小山平遺跡と千駄木遺跡は、至近で藪沢を共にしている。これらのことから双方は一体的な遺跡であることが推断される。

前項では、既に遺跡の性格をほぼ言及し、岩陰・洞穴遺跡の個別を検討し、千駄木遺跡の総括的な考察を述べる旨記述されているので、結論は両氏の論述を頼みとしたい。

第2項 人の往来と千駄木遺跡

二国に通じる道

逗留地点としての千駄木遺跡は、地勢上、生活(きかつ)の1点としての意義が縄文時代に具備されるが、古墳時代以降幹線道の脇の1点としての性格が備わったかの状況を推測させる(第5・6・7図参照)。

周辺遺跡で記した東山道の史料上の初見は、『日本書紀』景行天皇55年2月壬辰条「(前略)以彦狭嶋王拜東山道十五国都督(後略)」。『日本書紀』天武天皇14年(685)条「(前略)詔曰東山道美濃以東(後略)」、「諸国駅伝馬」(『延喜式』兵部省式)制により諸課が成文された事が窺え、体制を含めた東山道の確立は8世紀には確認出来る。現在、当該地区周辺の山間部に於いても、推定東山道は1条の筋として地図上に引かれている。律令制下での「駅制」は、駅家・駅路の管理体制を規定しているが、道自体を1条とする管理体制の記事は史料上に無く、寧ろ、駅路を1条とする考えを通論とする。

また、信濃国の東端駅家「長倉」は、碓氷(旧)・入山両峠に挟まれる近傍に位置することから、中近世「軽井沢宿」の整備以前は、両峠のどちらからでも経由出来る駅家であった筈である。

翻って近世では、関所を横川に移設し「碓氷関所」とし、追分街道(下仁田-和美峠)に「西牧関所」を完備し、中山道脇往還の管理を行い、この両者に依り碓氷峠・入山峠・和美峠越えの諸道を管理している。

戦国期、松井田城を巡る北国軍との攻防は、前期前記3峠と、内山峠を含める4か所の峠と街道の監視体制が重要な要件の一つであった筈である。

恩賀・下平の集落

和美峠に近い恩賀地区は、古代精神施設の存在を推測させるに十分な地形・景観を備えている。一方、下平地区は、千駄木遺跡に至近であり、急勾配に成る道沿いの「麓の村」であり、双方は二者一体での道に対する機能を付加された集落であったことが推量される。そして、この両者は、推定東山道が入山川沿いから支流の遠入川沿いに分岐した上流部分に当たっている。入山川筋に上れば下平地区・恩賀地区に到達する。

古墳時代以降の千駄木遺跡

千駄木遺跡の出土遺物から、10世紀後半頃までの岩陰部の利用が確認された。

『類聚三代格』昌泰二年(899)太政官符の記事に見られる「蹴馬之党」・「群党」・「凶賊」の現象面は略奪に現れているが、「置関門」の内側、則ち山岳部内に跋扈するに十分な山道の存在なくしては、追捕の発遣を逃れることもままならなかったであろう。

入山峠祭祀遺跡では、石製模造品と少量の土器を物証とし「東山道」の通過地点とし、東山道を唯一1条の経路と考えられている。しかし、古中山道の経路も正応五年在銘梵鐘(熊野神社)が顕現している。

これらの二国を通る道は、遺名として「東山道」・「中山道」を残している。こと近世の街道管理体制の厳重さが、余分な先入観を生ませているのかもしれない。古代の道は、近世よりもっと大らかな筈である。

千駄木遺跡の古墳時代以降の在り方は、幾条もの山道の通過地点に在った、雨水、夜営、避暑など、若しくは、荷駄と切り離された古代軍団・人馬往来用の通過地点に、幾条かの東山道の往来地点であったのかもしれない。

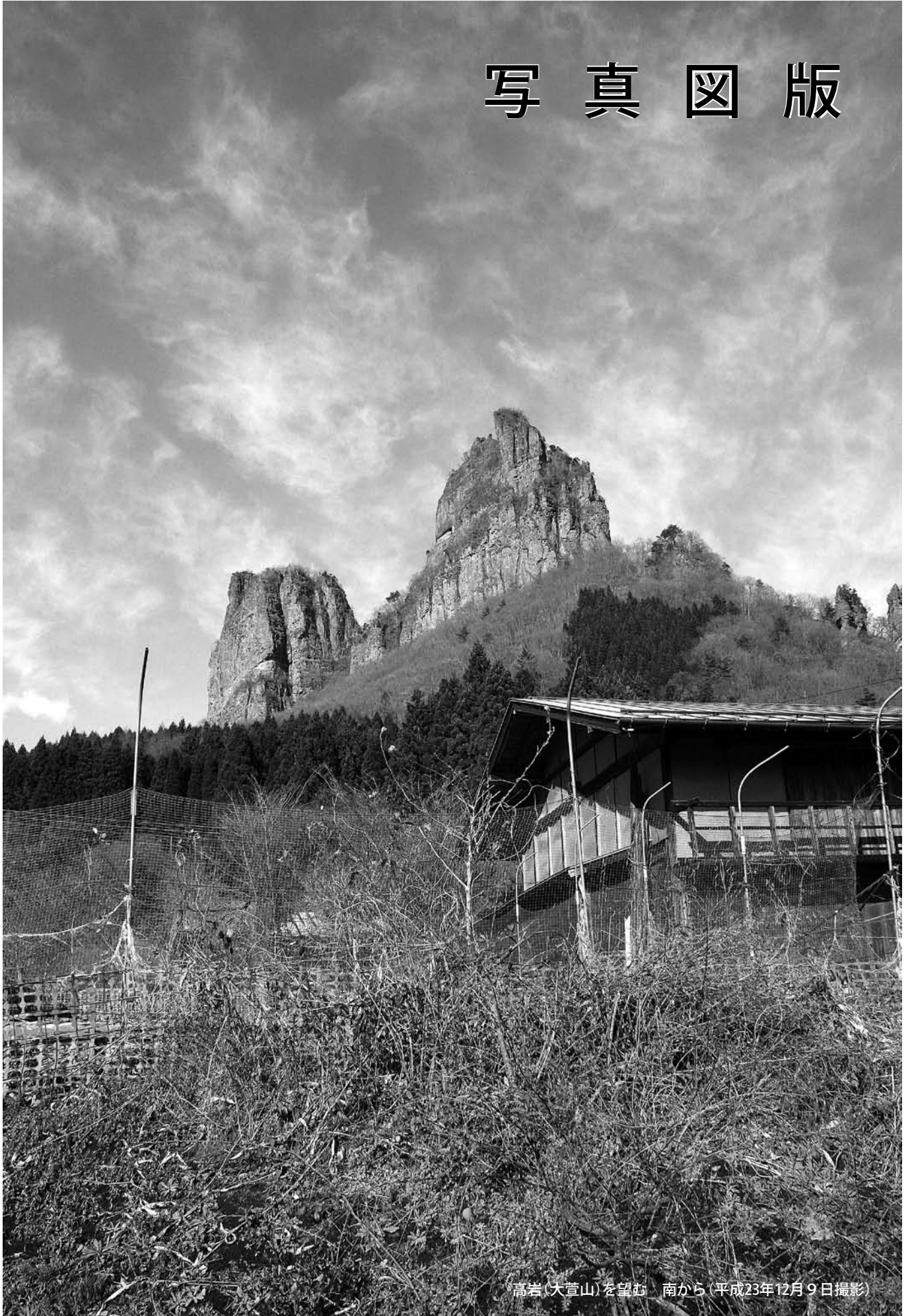
おわりに

千駄木遺跡の発掘調査から実に40年の歳月を経過している。調査の前年12月には『埋蔵文化財白書』が出版された直後でもある。この40年前の埋蔵文化財を取り巻く環境は、現在とは桁外れに異なっていた。その状況下、少予算の中で実施された発掘調査は、当時の関係者の苦労を計るには余りある状況であった筈である。

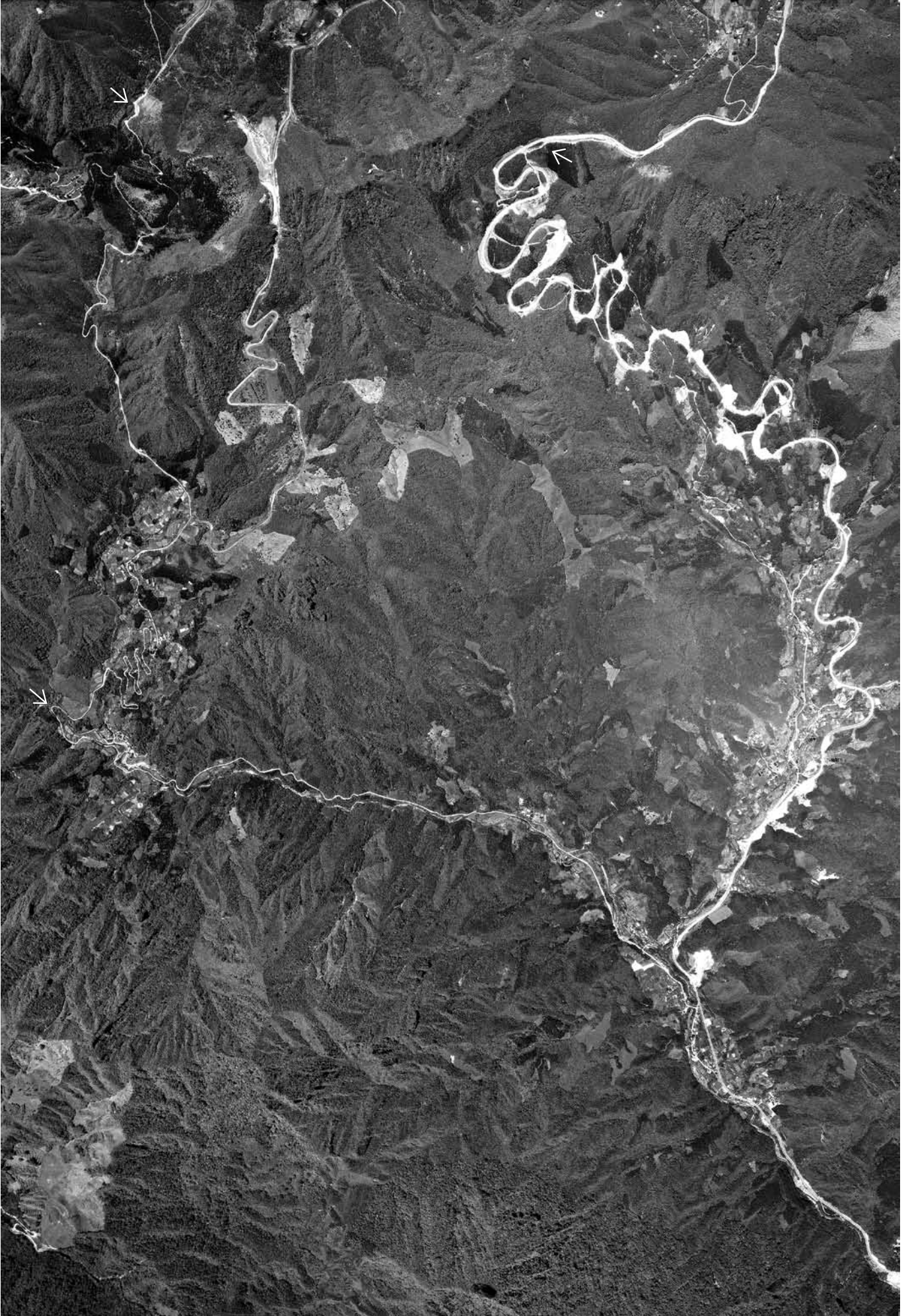
千駄木遺跡の発掘調査で得られた記録保存資料類は、このような状況下で作成されている。

千駄木遺跡、原始時代岩陰遺跡としての在り方、性格付けに就いては前項で述べたように、千駄木遺跡の総括的な考察が準備されているのでそれを頼りとしたい。

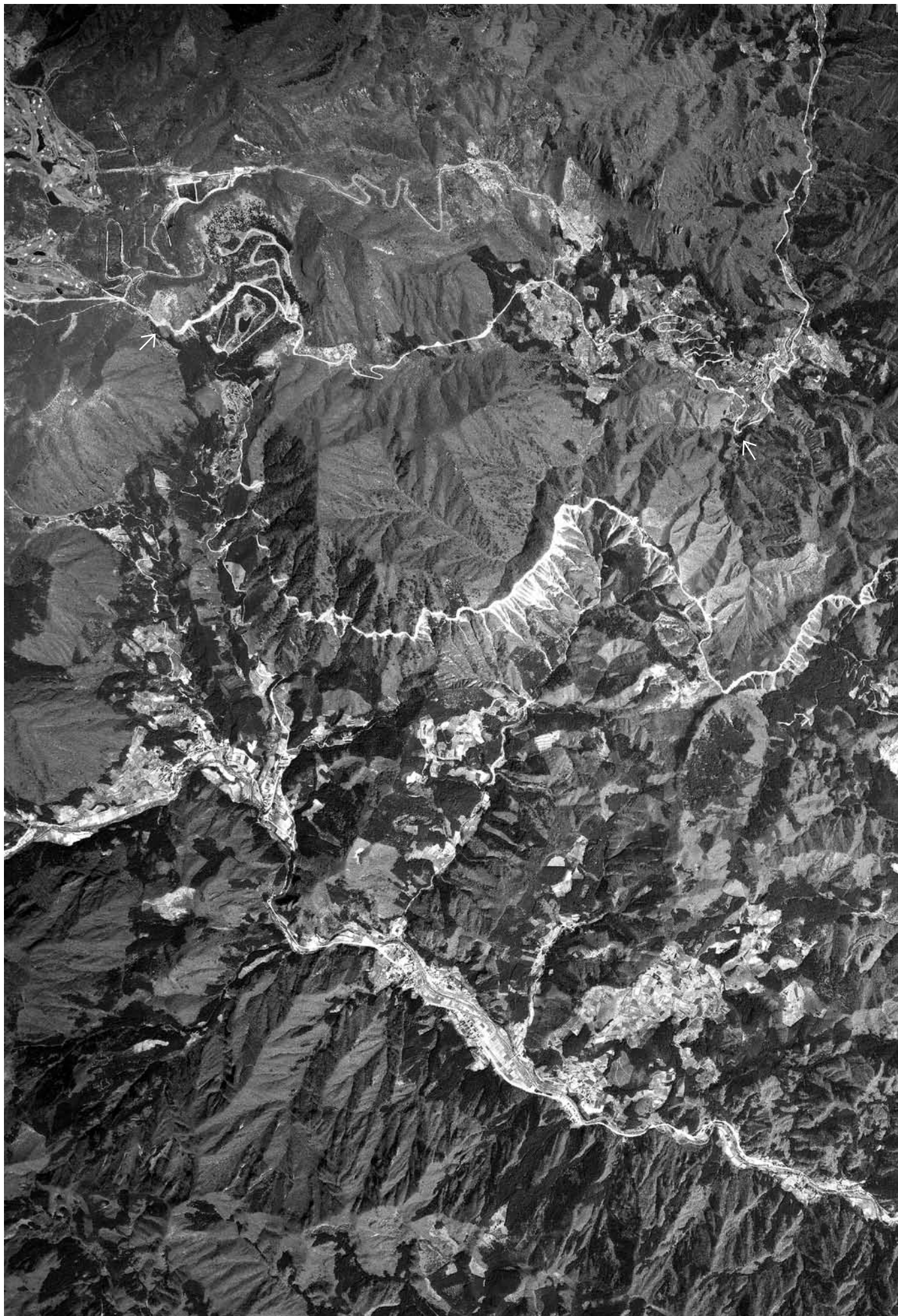
写真図版



高岩(大萱山)を望む 南から(平成23年12月9日撮影)



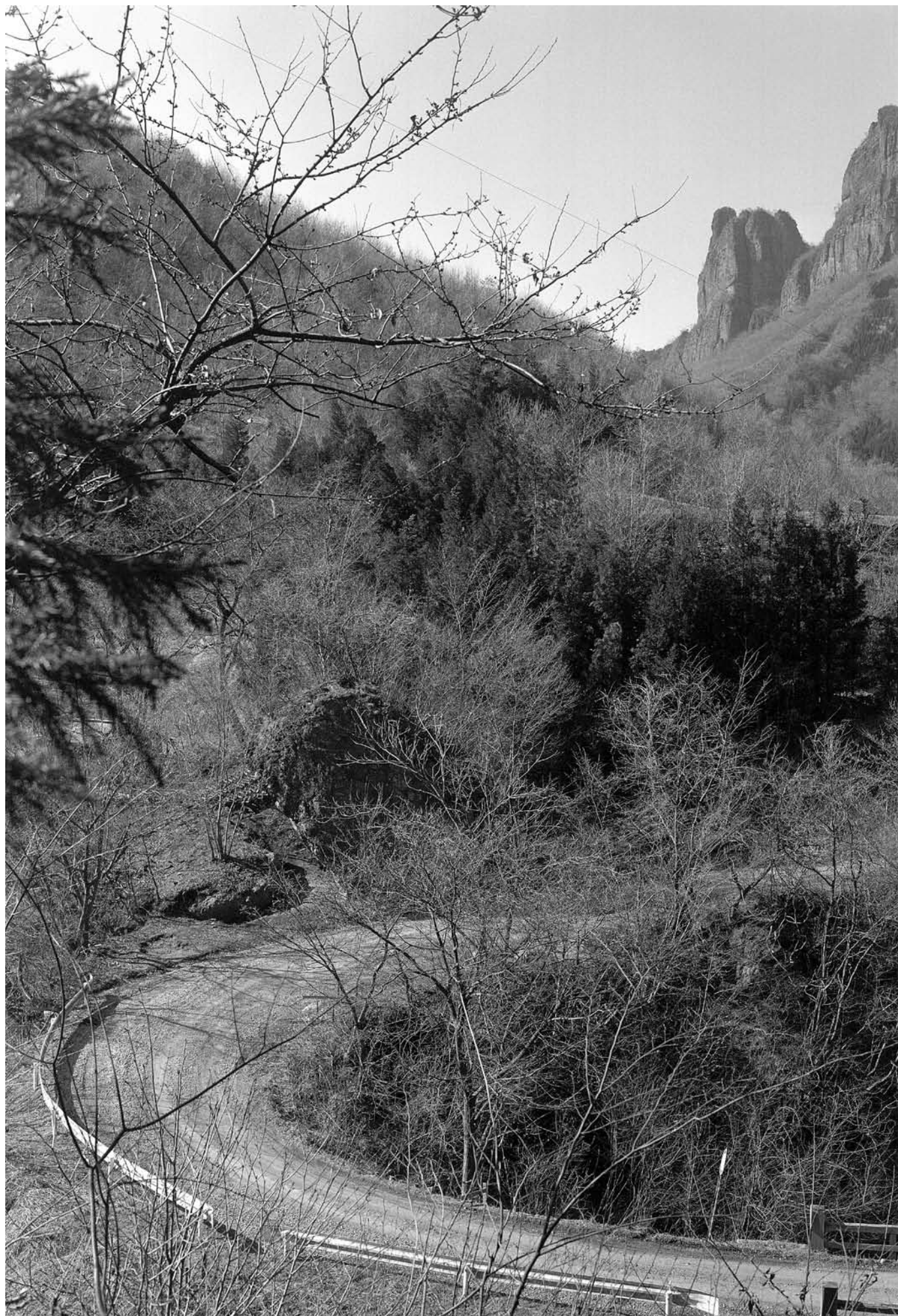
遺跡地周辺航空写真(1) (昭和46年5月26日)矢印一左端千駄木遺跡・左上方和美峠・右上方入山峠



遺跡地周辺航空写真(2) (昭和23年5月3日) 矢印一右上方千駄木遺跡・左上方和美峠



遺跡地周辺航空写真(3) (昭和42年3月25日) 矢印一下端千駄木遺跡



遺跡遠景(中央遺跡地 右奥垂直な崖が高岩(大萱山)) 南東から



遺跡遠景 東から（右奥小山）



遺跡近景 西から（右下千駄木川）



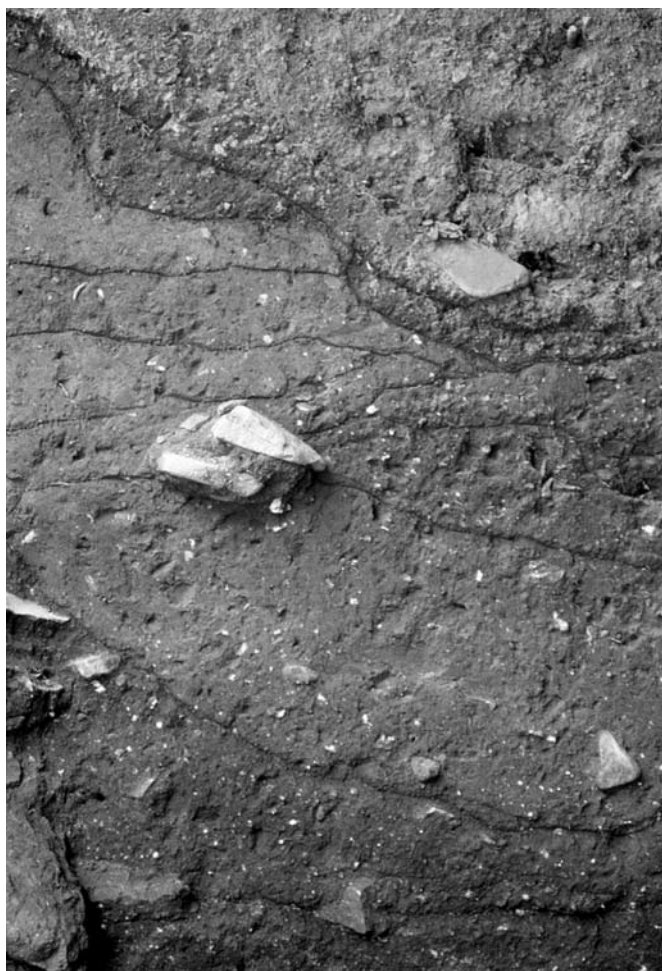
遺跡遠景 南東から



遺跡近景 北から (中央奥千駄木山)



土層断面B-B' 東から



土層断面B-B' 右上部分 東から



土層断面B-B' 中央下半部分 矢印As-D層 東から



第2号土坑確認状況 南から



第2号土坑礎出土状況 西から



第2・3号土坑全景 西から



第4号土坑確認状況 西から



第4号土坑礎出土状況 西から



第4号土坑遺物出土状態 西から



第1号集石確認時状況 北から



第1号集石全景 西から



岩陰部地山面状況 東から



岩陰部地山面礫出土状況 南から



岩陰部地山面土坑出土状況 南から



第5～10号土坑(岩陰部地山面) 東から



岩陰部北側最上層（第1号土坑部分）遺物出土状況 東から



岩陰部北側上層（第1号土坑部分）遺物出土状況 東から



岩陰部南岩側上層遺物出土状況 北から



岩陰部南際部分上層遺物出土状況 北から



岩陰部C-4・5グリッド. 表土下遺物出土状況 西から



岩陰部B-4・5グリッド. 遺物出土状況 西から



岩陰部B-4・5グリッド. 3層遺物出土状況 西から



岩陰部での狭い中での作業状況 西から



岩陰外部X-6グリッド. 遺物出土状況 北から



岩陰外部E-7グリッド. 遺物出土状況 南から



岩陰外部D-9グリッド. 3層遺物出土状況 北から



岩陰外部E-8グリッド. 3層遺物出土状況 北から



岩陰外部(東側部分)全景 西から



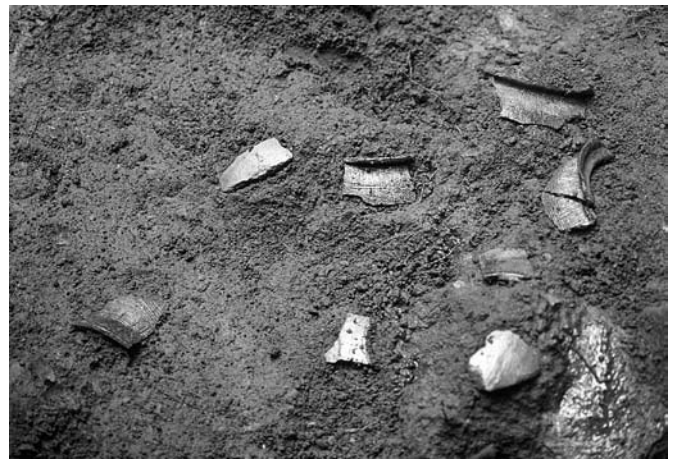
岩陰外部E-8グリッド. 南壁断面 北東から



岩陰外部E-8グリッド. 西壁断面 東から



岩陰外部D-8グリッド. 西壁断面 東から



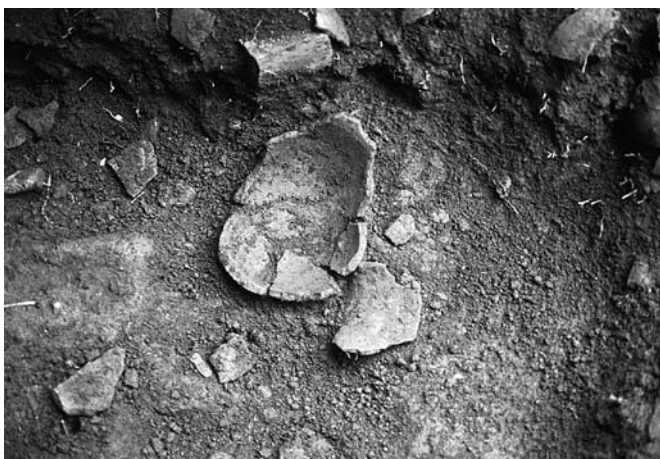
岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(1) 西から



岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(2) 西から



岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(3) 西から



岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(4) 西から



岩陰部C-5グリッド土師器出土状況(5) 西から



岩陰部C-4 グリッド弥生土器出土状況 西から



岩陰部C-5 グリッド縄文土器出土状況(1) 西から



岩陰部B-5 グリッド縄文土器出土状況(2) 西から



岩陰部C-6 グリッド縄文土器出土状況(3) 西から



岩陰部貝輪出土状況 北から



岩陰部アワビ・カワシンジュガイ出土状況 (南から)



岩陰部セクションベルト内獣骨出土状況 西から(カモシカ)



岩陰部セクションベルト内獣骨出土状況 南から(カモシカ)



岩陰部北岩東隅部作業状況 西から



岩陰部記録図作成作業状況 東から



岩陰部北岩際部作業状況 西から



岩陰外部北岩周辺作業状況 東から（現在は立ち姿の人の頭部分まで埋め戻されている）



岩陰部東側外部写真記録撮影準備作業状況 南東から



岩陰部東側外部調査状況 西から



千駄木遺跡近況 東から(平成23年12月9日撮影)



千駄木遺跡の標柱と現況 東から(平成23年11月4日撮影)



北岩の雨垂れ部分 南東下から(西から平成23年12月6日撮影)



遺跡地眼下の千駄木川の状況 東から(平成23年12月6日撮影)



遺跡近況 西から(平成23年12月9日撮影)



遺跡地西側近景 東から(千駄木川左岸の緩斜面部 平成23年12月6日撮影)



高岩(大萱山)の崩落状態 南から(平成23年12月9日撮影)



入山川沿いの転石と高岩(大萱山) 南東から(平成23年12月6日撮影)



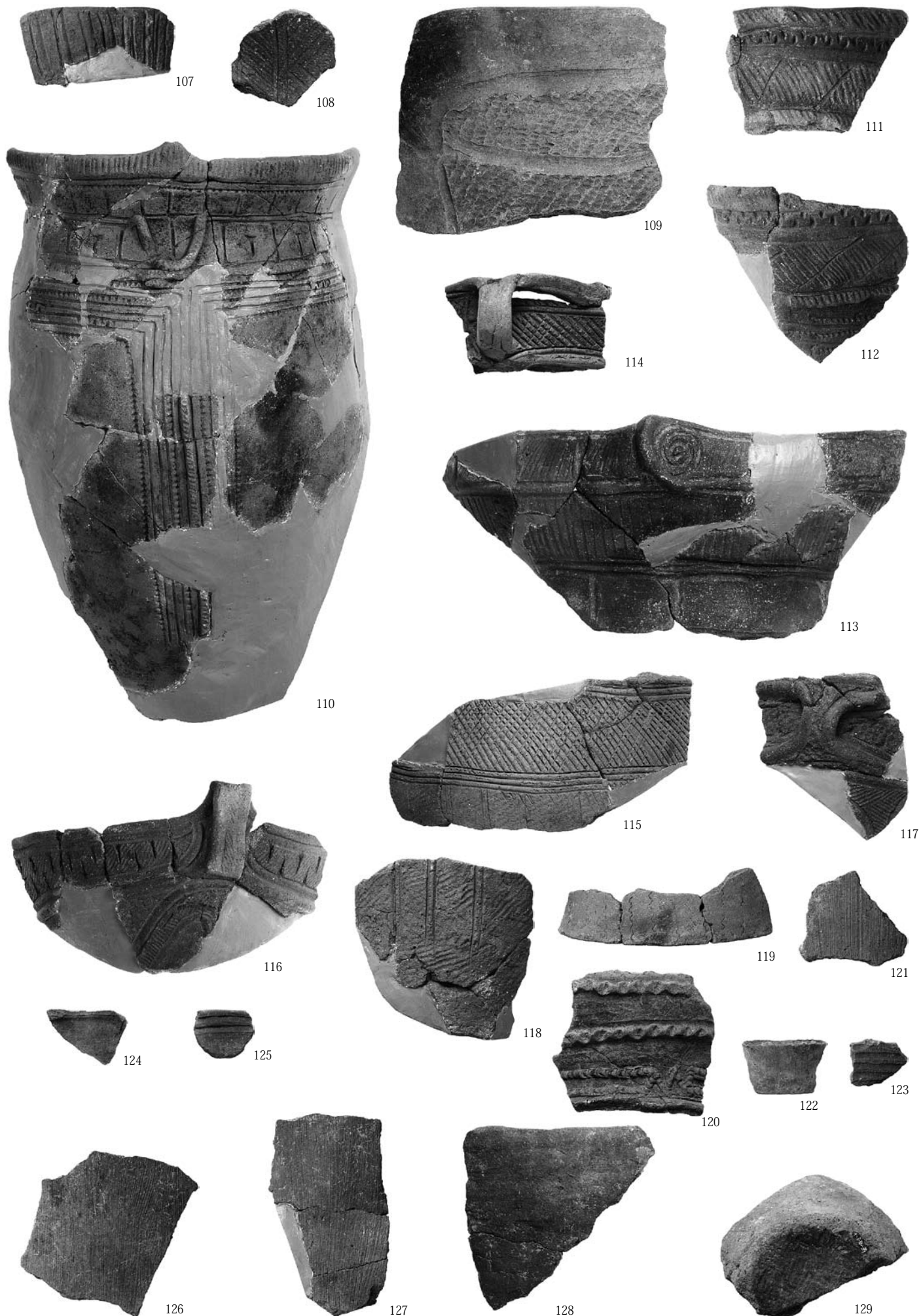
入山川沿い千駄木遺跡より上流域に散在する高岩(大萱山)の転石 東から(平成23年12月9日撮影)



入山川の流路内の高岩(大萱山)の転石 東から(平成23年12月6日撮影)



出土遺物 1 (土師器・須恵器・弥生土器)



出土遺物 2 (縄文土器 1)



130



131



132



133



134



137



138



139



135



136



142



140



141



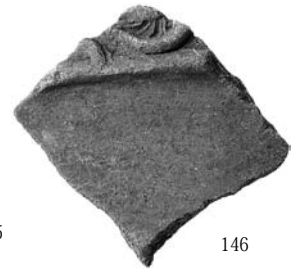
143



144



145



146



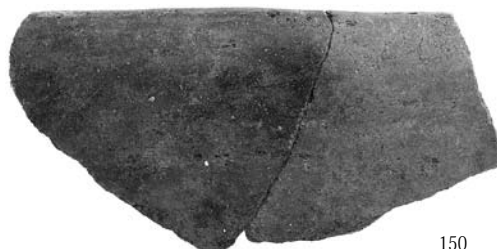
147



151



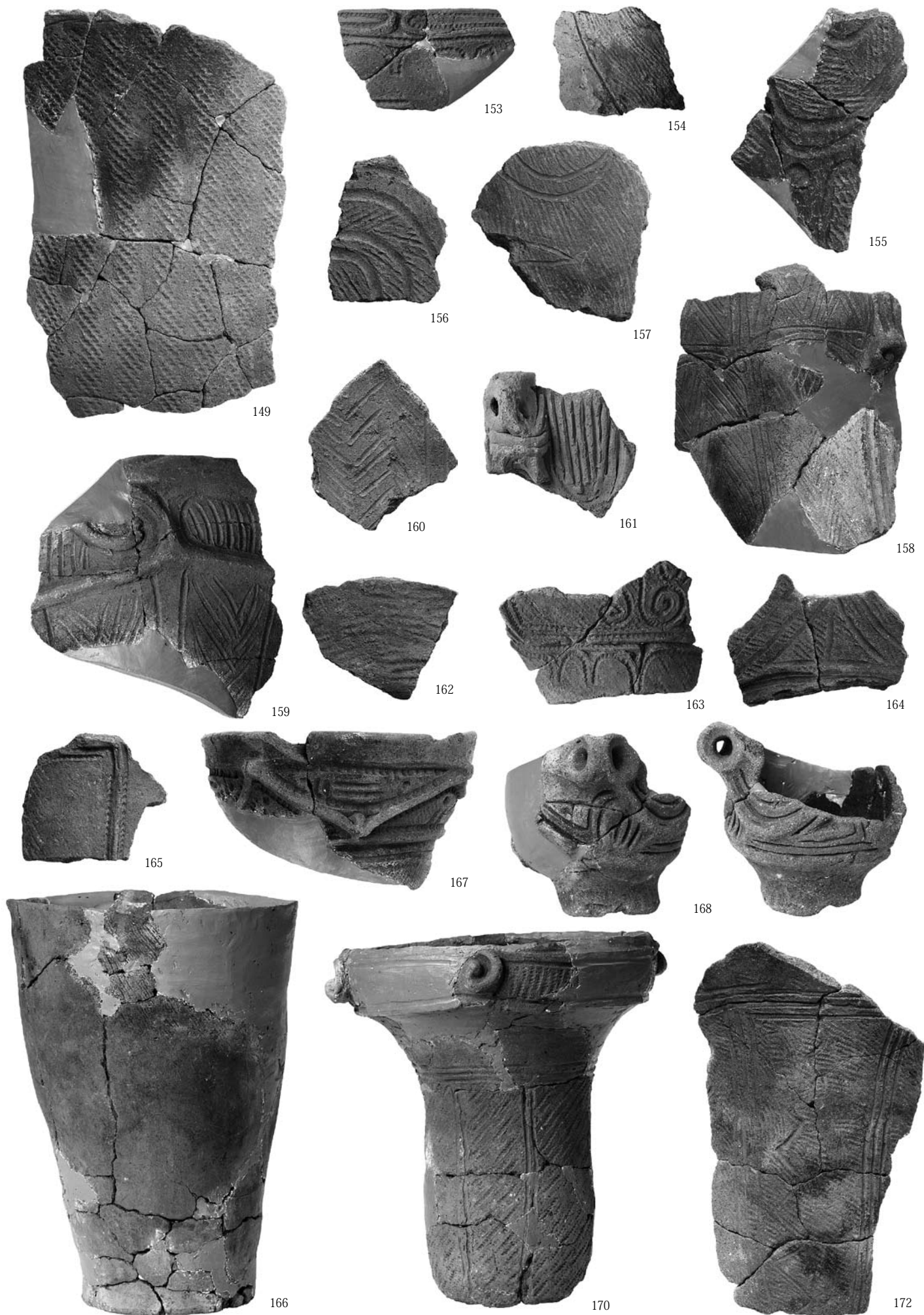
148



150



152



出土遺物 4 (縄文土器 3)



169



173



171



177



174



175



176



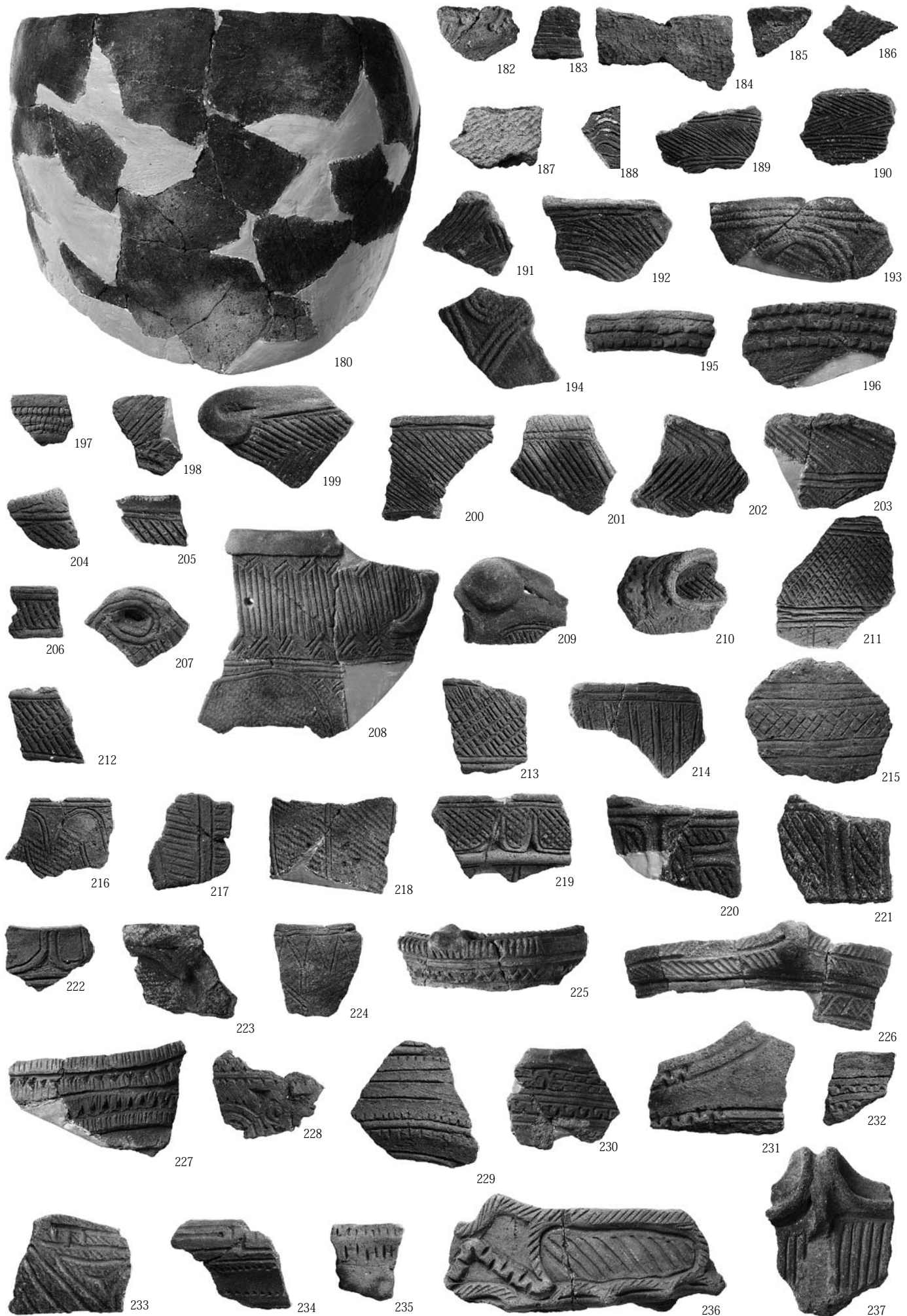
178



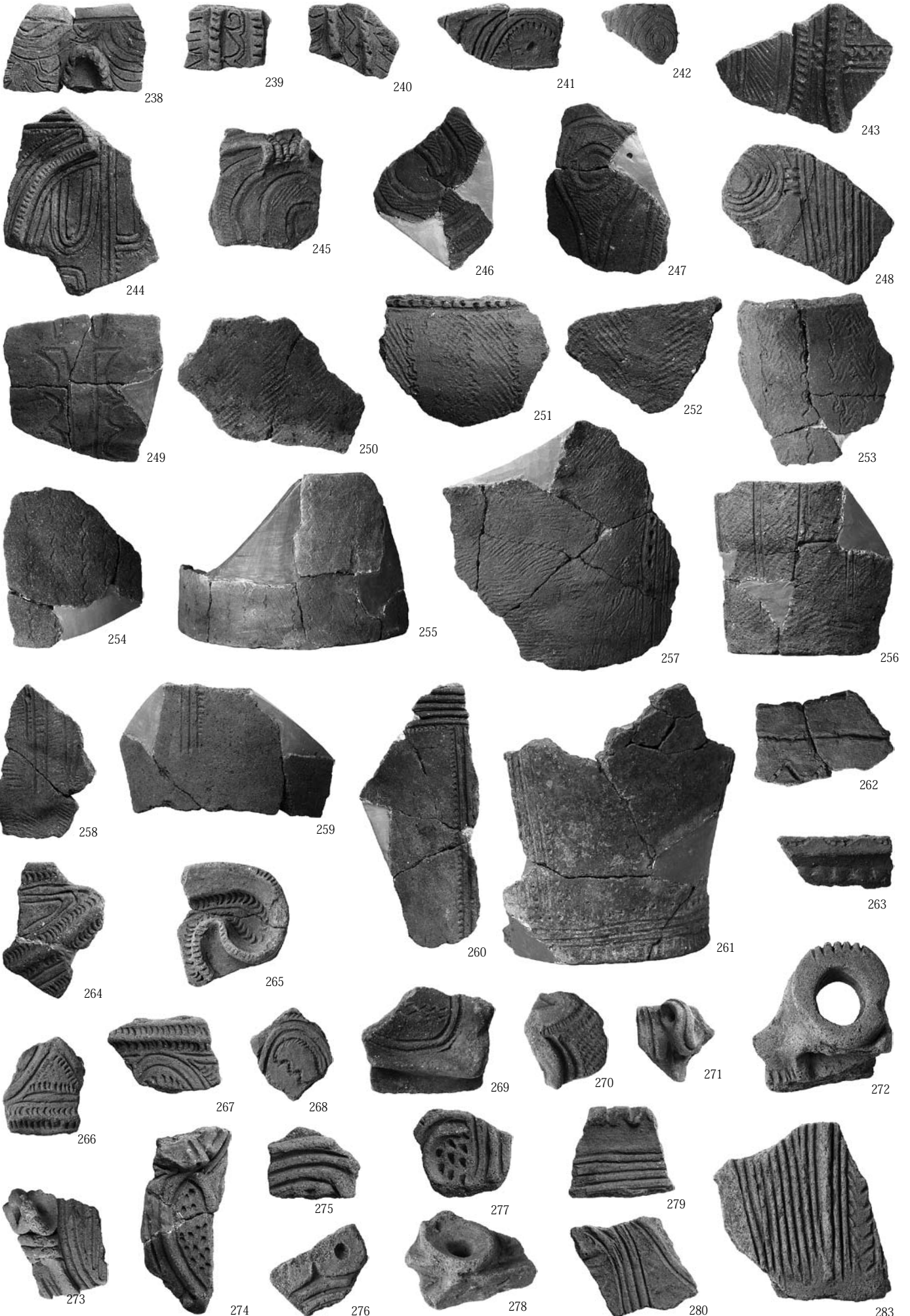
179



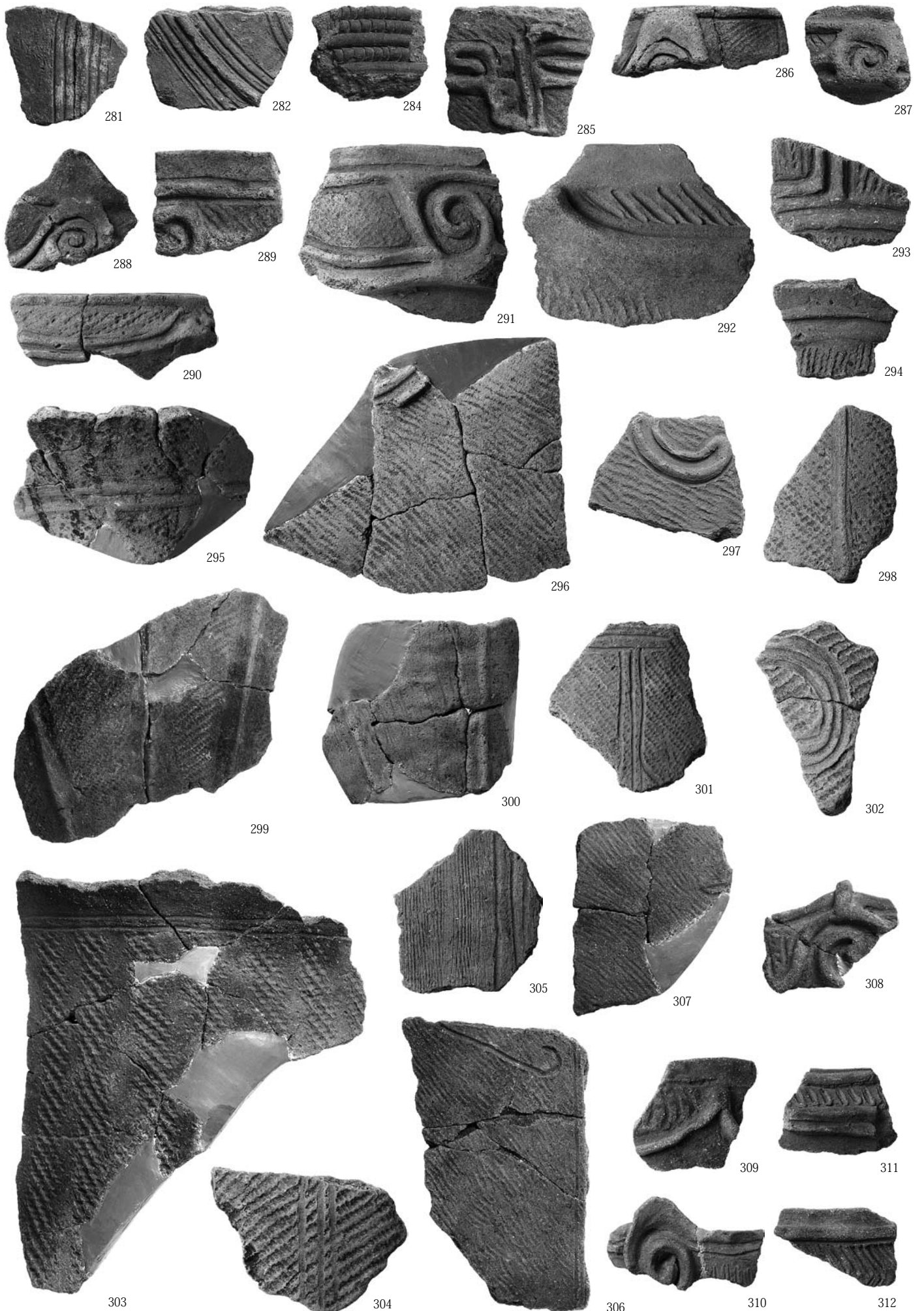
181



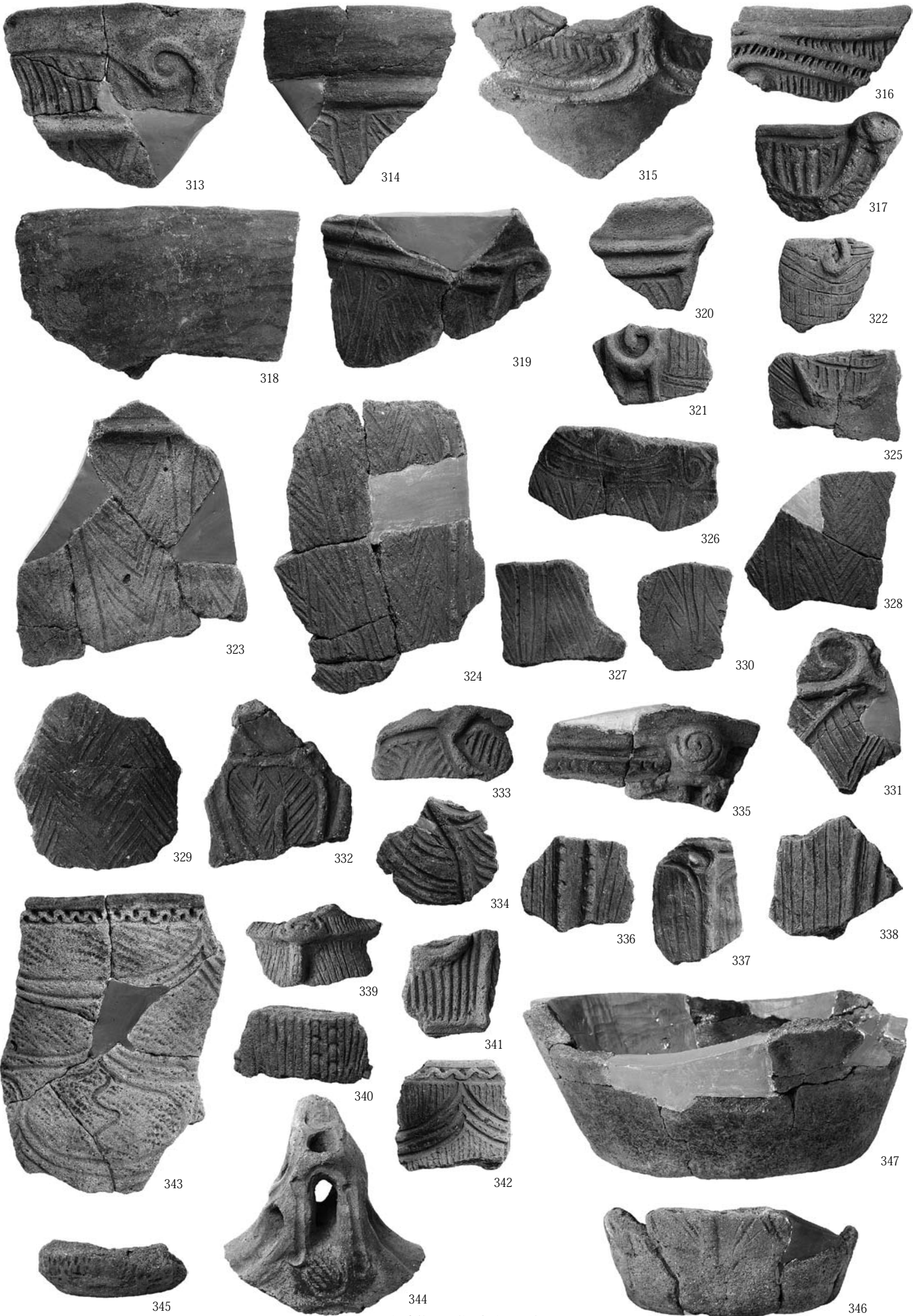
出土遺物 7 (繩文土器 6)



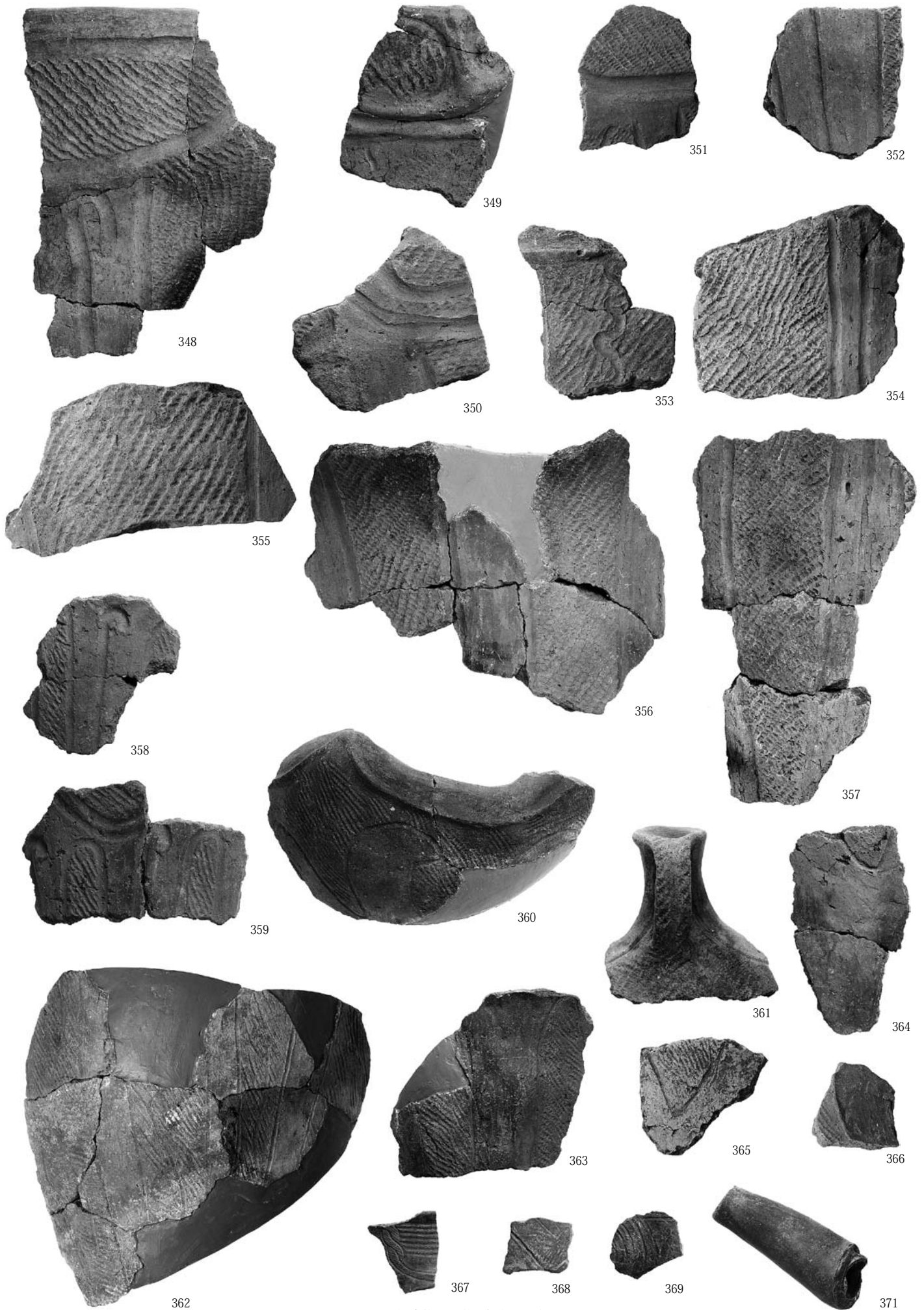
出土遺物 8 (縄文土器 7)



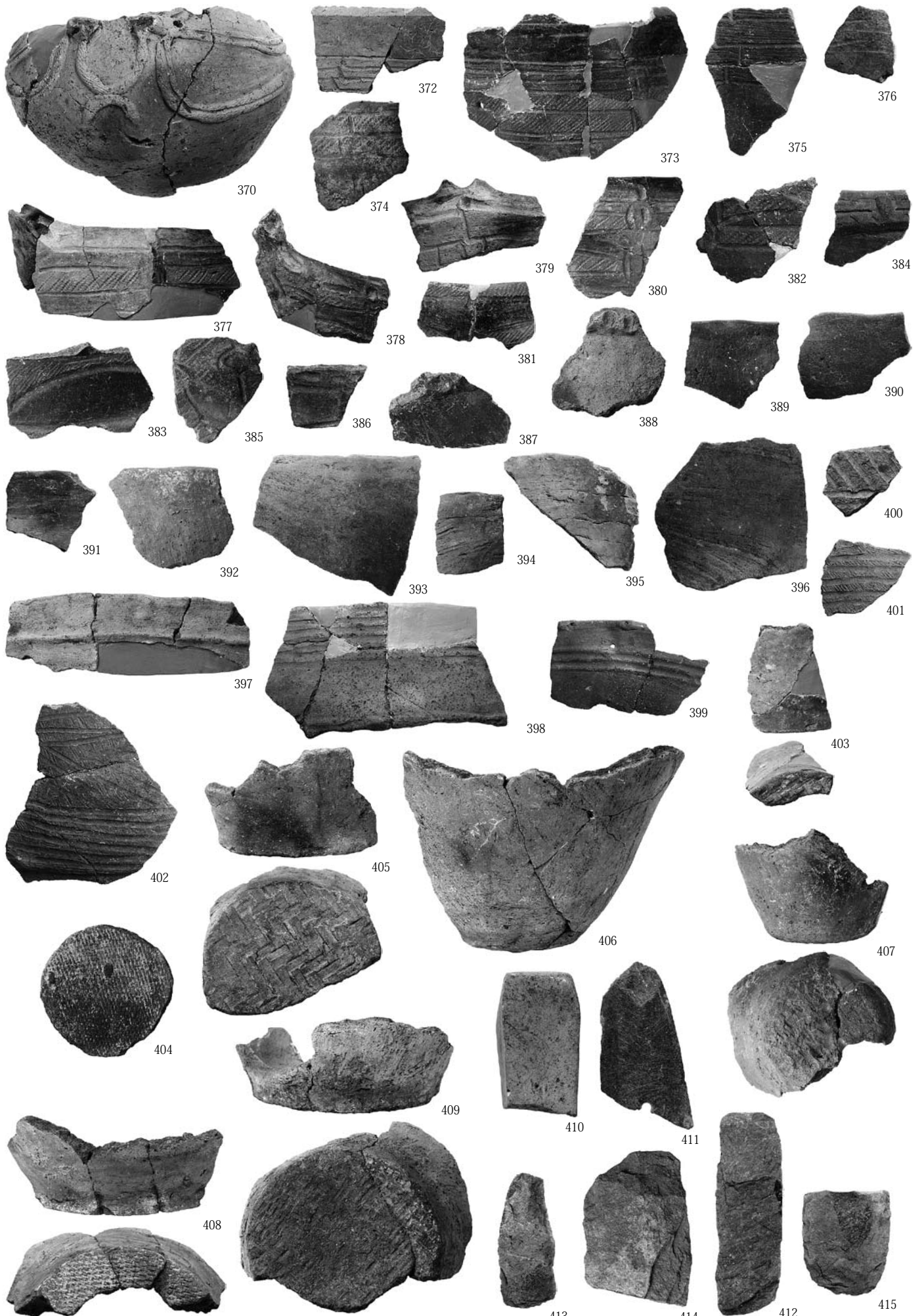
出土遺物 9 (繩文土器 8)



出土遺物10 (縄文土器9)



出土遺物11 (繩文土器10)



出土遺物12 (繩文土器11・石器1)



出土遺物13 (石器2)



474



477



475



476



S H 4



S H 8



S H 27



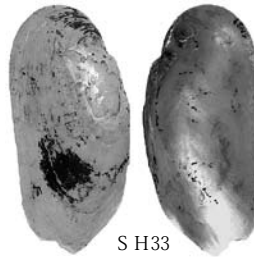
S H 16



S H 20



S H 35



S H 33



S H 37



S H 15



S H 43



S H 62



S H 38



S H 60



S H 77



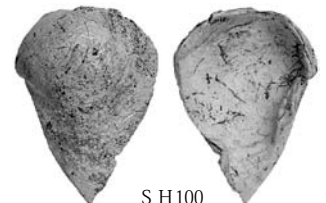
S H 75



S H 80



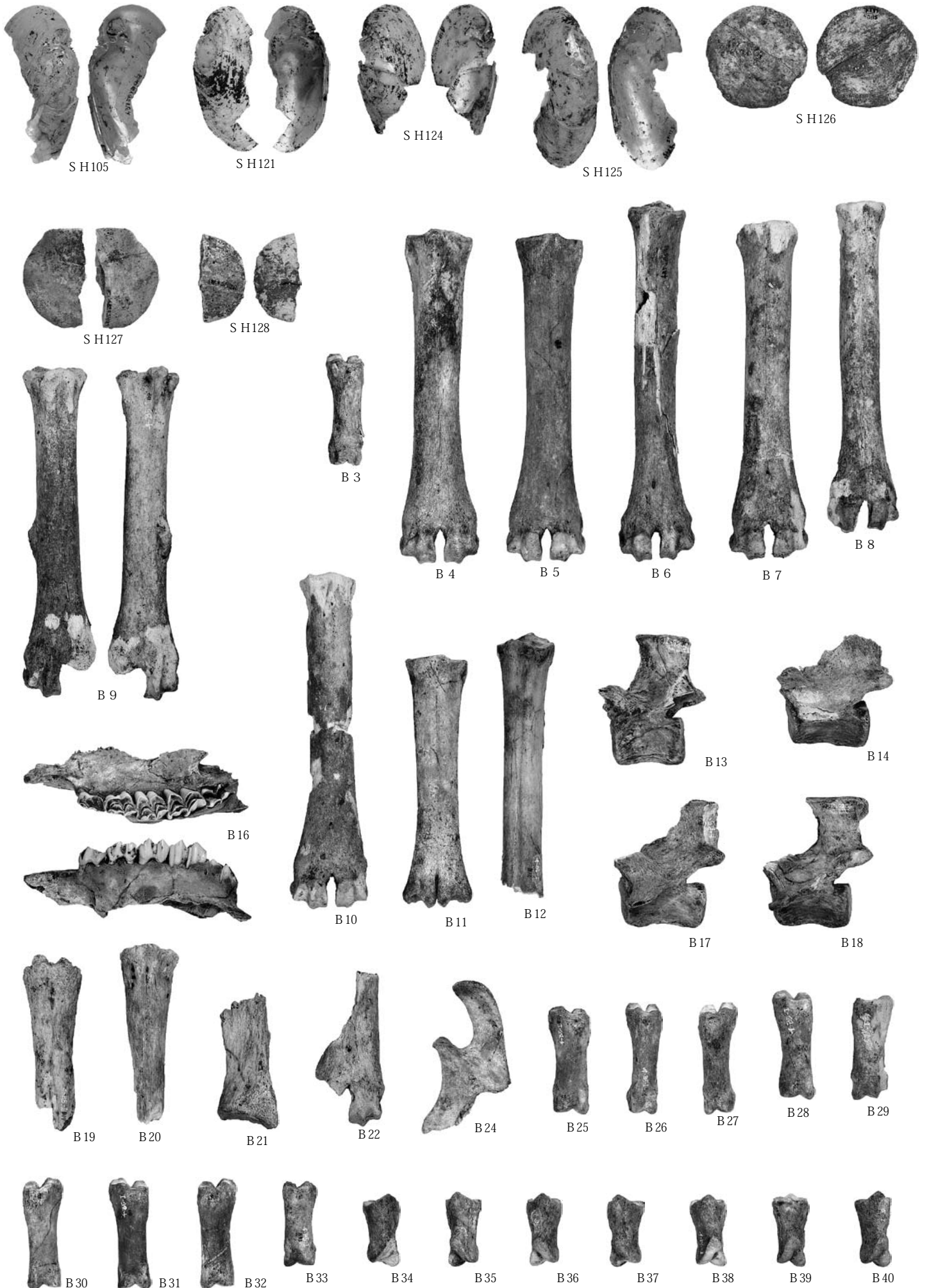
S H 82



S H 100

出土遺物14 (骨角器・貝類 1)

PL.42

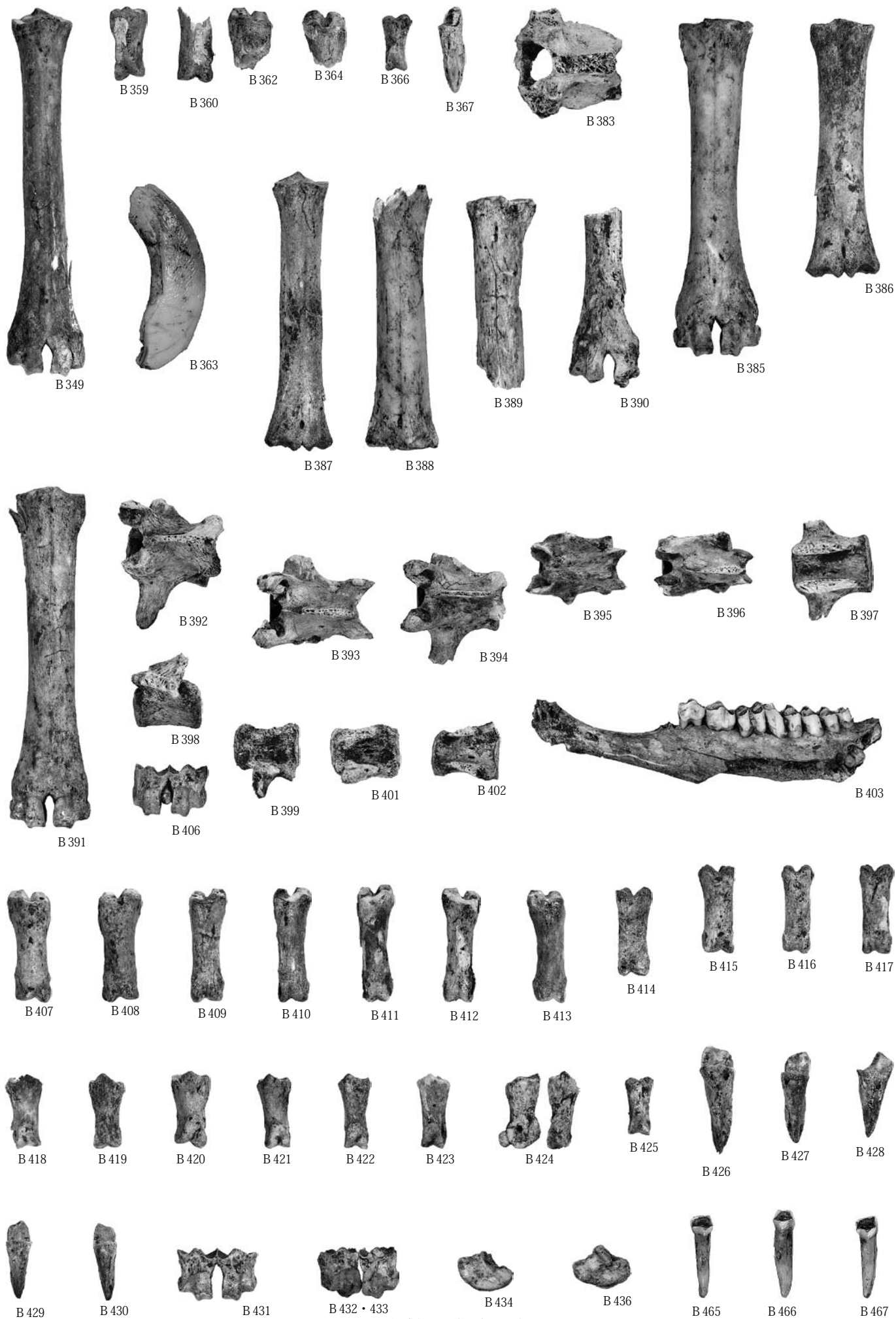


出土遺物15 (貝類2・獸齒骨1)



出土遺物16 (獸齒骨 2)

PL.44



出土遺物17 (獸齒骨 3)

報告書抄録

書名ふりがな	せんだぎいせき
書名	千駄木遺跡
副書名	平成23年度緊急雇用創出基金事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	538
編著者名	木津博明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	せんだぎいせき
遺跡名	千駄木遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあんなかしまついだまちにしのまき
遺跡所在地	群馬県安中市松井田町西野牧16702-1
市町村コード	102113
遺跡番号	U0129
北緯(日本測地系)	36° 17' 19.15004"
東経(日本測地系)	138° 41' 05.61023"
北緯(世界測地系)	36° 17' 30.45630"
東経(世界測地系)	138° 40' 54.25643"
調査期間	19720322-19720525
調査面積	84.5
調査原因	主要地方道(29)松井田軽井沢線改良事業
種別	その他
主な時代	縄文/弥生/古墳/奈良/平安
遺跡概要	縄文/弥生/古墳/奈良/平安包含-縄文+土坑10+集石1-平安以降土坑1
特記事項	高岩(大萱山)の転石を利用した岩陰遺跡。
要約	縄文時代早期末(鶴ヶ島台)～晩期(氷式)、弥生時代中期(栗林式系)・後期(樽式)、古墳時代前期～後期、奈良時代、平安時代にわたる包含層を調査。縄文時代中期(加曽利E式期)頃の浅間山の火山活動により降下した、浅間山D軽石が包含層中に堆積。出土遺物は、縄文時代中期五領ケ台式・加曽利E式などが主体をなす。骨角器類では、貝輪(タマキガイ)・垂飾具・鏃等が出土。遺存状態良好な弥生土器・土師器も出土している。自然遺物では、カワシンジュガイ・アワビ・サザエ等の貝類、カモシカ・ニホンジカ・ツキノワクマ・サル等の獣歯骨が出土している。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第538集

千駄木遺跡

平成23年度緊急雇用創出基金事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年(2011)年3月9日 印刷

平成24年(2011)年3月16日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社 開文社印刷所
